王観堂静安先生　校注本

「長春眞人　西遊記」

訳注

杉山　二郎

謹んでこの拙き訳書を
王観堂静安先生の
御霊に捧ぐ

前　言

わたくしは今マルコ・ポーロの所謂「東方見聞録」をユール、コルディエ校本と、パウティエ校本、更にムール・ペリオ校本の三本を基礎に訳注の業に従って来た。もちろん、厳密な訳注でなく、沙州敦煌辺りから暇にまかせての抄出考注だったが、昨今漸く本文を終り補遺の部分に筆を進めている。東博在勤の頃から玄奘師の「大唐西域記」のわたくしなりの考注に従っているうち、更に五百年後に中央アジアを東進したマルコ・ポーロの旅行記が屡々顔を見せるのみでなく、二十世紀初頭の西域探検者が駱駝の背に携えて行った文献の一つと云うこともあり、その嗜読を出勤前の一仕事として試みたのによっている。歳月は何時か二十余年を越えて考注の業を樂しんできた。マルコ・ポーロの嗜読は当然のことながら、蒙古史元朝史への関心を唆り、多くの内外研究書にも手を伸すに到った。マルコ・ポーロのみならず、カルピニ　リュブルク　オドリコ　クラヴィホら西方遊行者たちの紀行文に親炙し参照しているうち、中国から西域に元朝時代に西進した人たちの居るのが判って来た。耶律楚材湛然居士の「西遊録」劉郁の「西使記」、孫仲端の「北使記」それにこの長春眞人の「西遊記」などがそれである。劉郁の「西使記」は欽定四庫全書提要本を書写して、その語彙の地名物産その他に考注を施してみたのが始まりで、西瓜の中国輸入の経緯その他に興を得たことを鮮かに想い出す。

一方、清朝考證学者王静安觀堂先生には「觀堂集林」所収の「胡服考」以来嗜讀して、先生の全集を架蔵するに到り、第十二冊に「蒙韃備録箋證」「黒韃事略箋證」「聖武親征録校注」「長春眞人西遊記校注」があったので、その考注嗜読のつもりでぽつりぽつり訳述して行ったのがその縁起である。既に岩村忍氏が「長春眞人西遊記」の訳を試みて居られた。昭和二十三年三月筑摩書房刊、一八〇頁がそれであった。その冒頭に解題があってこの

著作の経緯、研究の次第が略述せられていて、便利である。この書册は今日では稀本の部類に入っていて目睹し難い。しかし流布本として「世界ノンフィクション全集」第19（昭和三十六年八月、筑摩書房刊）に岩村氏の訳文がそのまま収載せられているので、容易に入手可能となった。その解説は-地理的知識の發達史-として所収のクック、コロンブス、耶律楚材、長春眞人に広く触れているので、旧著の解題がより詳密と云うことになろう。そこで一部を抄する。

長春眞人西遊記は道教全眞派の祖師長春眞人邱處機が、チンギス汗の命によって山東の海邊を發し、蒙古の北邊を經て中央アジアに至り、遂にヒンドゥクッシュ山脈の附近に於て汗に謁し問に答へた後、歸還した前後三年に及ぶ行途を門人李志常が記述したものである。李志常は長春高足の弟子で、字は浩然　號を通玄大師と稱し、これまた全眞道教史に於て逸すべからざる人である。長春の歿後、宋道安繼ぎ、次で尹子平（此の両人も西遊に随伴してゐる）代り、李志常が更に後を襲った。志常は元の憲宗マング汗の八年（西暦一二五九年）に卒するまで二十有一年の間全眞教門の事を掌った。此の間に有名な道佛の諍があり、佛徒は道士が各地の佛寺四百八十二を占據し、老子化胡經及び八十一化圖等を僞作し佛教を誹謗したと稱して訴へたので、マング汗は少林寺裕長老を首とする佛徒と李志常等道士の輩をカラコルムの萬安閣下に對決せしめるに至った。此の對決に於て李志常等破れ、寺院三十七を佛家に還し、化胡經等を毀っことを命ぜられた。李志常はこれによって忿を發して卒した。右は釋祥邁の至元辨偽録に記すところであるが、遽に信用は出来ない。由來僧徒は自ら看て異端となす者を謗るに醜詆を極むることは、既に我が國及び禹域に於て他に幾多の例が存するからである。（中略）

さて次に西遊録の書誌学的經路について少しく語を費やさなければならない。西遊記の傳本は近年まで頗る稀有であったが、錢大昕が乾隆年間に蘇州の元妙觀で道蔵中にこれを發見し、阮元がこれを抄して秘府に進め、後道光年間に徐昔伯、程春廬・沈子敦等が考訂し、次で連筠簃叢書に収められた。〔郎案「中國叢書綜録2子目、

史部地理類に「長春眞人西遊記、二巻、元李志常撰、道蔵（正統本、景正統本）正乙部、指海（道光本、景道光本）第十三集、連筠簃叢書、皇朝藩屬輿地叢書第三集　道蔵挙要第七類、道蔵精華録第十集、叢書集成初編、史地類」と挙げている〕王國維の校注本が出るに至って始めて此の書は漸く近づき易くなった。（中略）

西洋人は割合早く此の書に注意を拂っている。即ち十九世紀末以來、Palladius, Remusat, Bretschneider, Welay等は各々摘譯がある。但しウェーレーの訳は詩賦のみを省略してゐるので、最も完全に近い。今日我々が此の中央アジア史地学上頗る貴重な書を読み且つ樂み得るのは、上記の銭大昕以来王國維までの禹域の諸先生、パラディウス以下ウェーレーに至る西洋の東洋学の諸先達の賚に外ならない。

我が國では西遊録は専門の東洋学者たちによって案外注意されなかったらしい。最も早くこれに眼を著けられたのは幸田露伴先生で露伴全集を看ると随分早い頃からこれに觸れて居られることがわかる。そして先生の逝去直前に上梓された「音幻論」の序には

「今は烏有になったけれども、小石川の舊書斎の硝子障子の上に、いつの頃したことも覺えないが、墨で、天台畫觀、竹鹽論、八荒箋、夫白侖　音幻　邊中　刄秘　雪兎　長春西遊　アイルラント　元离　祈　善才　天眞一目　香、單、等の文字をしたためて置いた」と見えてゐる。論仙の諸編によって露伴先生の道教に関する造詣の一端は覗はれるが、參同契に関する文を最後として遂に永年調べて居られたらしい長春西遊を始め道教関係についてお考を発表されずに長逝されたことは遺憾此の上もない」（前掲書二～一二頁）

此処に蛇足を加えるなら、露伴先生の晩年の考證随筆を好んで嗜読したわたくしにとって、先生の「龍姿蛇姿」（昭和二年一月改造社刊）の不児罕山以下の戯曲作品が、序文にある様にチンギス汗誕生前後を扱っていたことに、目を瞠ったことがあった。先生は云う、「不児罕山以下、怪傑誕生に至るまでの数編は、元史、元朝秘史、元史譯文證補、聖武記、忙豁侖紐察脱卜察安譯書、土耳古人蒙古史譯書、蒙古遊牧記、朔方備乗、日本陸軍省撰

蒙古圖、及び其他の史籍雑書等に據って大豪傑成吉思汗の誕生に至るまでの事情を幻燈映画的に映出せんと企てたもので、其間に虚妄と作爲とを挿むことを十分に避けたから、極めて少しの趣向を附加へたことはあっても、何折の何地の情景は何の書に本づくかと問はるれば、一々其の出所を答へ得るのである。」と序文で指示されている。この戯曲執筆中に萌したかは明らかでないけれど、長春眞人西遊記に著目研究されたこと当然であったに違いない。さすれば先生の麗筆になる西遊記訳文も腹案にあった筈で、岩村氏の言の如く遺憾この上にないと云わなくてはなるまい。

わたくしは、研究的に取扱って訳述し、王觀堂先生の注記と、ブレットシュナイダー氏の訳注を逐一訳述し、尚ヘンリー・ユール、アンリ・コルディエ氏補注の「マルコ・ポーロ紀行」の注記の繁瑣末梢のスタイルの顰みに倣ったから、多くの識者の自明の事象に拘泥して自ら納得した冗文が多い。これは上梓に当って削除すべきであったかも知れない。こうした作業の余滴が書册になることは、現代においては稀有奇蹟に近い。そこで我儘を許して貰ってその一部を上梓することにした。識者の寛恕を願うと共に魯魚の誤謬の叱正されんことを。

平成辛巳歳　彌生桃の節句の日

杉　山　二　郎

凡　例

一、長春眞人西遊記訳注の順序は、原則として原文、口訳、王静安氏注補を［王観堂先生注］とし、次にブレットシュナイダー氏の訳注［ブレットシュナイダー氏訳注］の順序に王氏の文章節次に従って記述する。

二、王氏補注、ブレットシュナイダー氏の訳注中に［郎案］とするのは杉山二郎の注記である。

三、［郎案］に尚多くの補注訳文を挿入してあるが、行換えによって明瞭ならしめた。

四、長年月に渉る訳注作業故に多少の錯乱があるかも知れぬが、印行に付するに当り体裁を整えた。

五、尚「中國歴代地名要覧」は青山定雄氏篇の再刊本（一九六五年六月大安刊）で、内容は算用数字、例えば12、8、の如きは讀史方輿紀要の巻数を示したものである。

六、尚始め「西遊記」本文と王観堂先生注記の漢文を載せず、直ちに口訳したが途中よりその原漢文を掲げ、四十頁以下、全て記載した、体裁整わないがその蕪雅を許容されんことを。

王観堂静安先生　校注本

「長春眞人　西遊記」

訳注　杉山　二郎

王國維静安先生の序文に曰く。（王觀堂先生全集、冊一二、文華出版公司印行本）

長春真人西遊記二巻は門人真常子、李志常が題して案を述ぶ。志常字は浩然、〔郎案：諸橋漢和に曰く「字、實名の外の呼び名、元服の時名を尊んで字をつける。名と字は表裏している。孔子の名は丘、字は仲尼の類〔儀禮士冠禮〕冠而字之、敬其名也（疏）君父之前稱名、至於他人稱字也、是敬其名也。〕道號は通玄大師、長春が今にも歿しようとする時に門人の宋道安に命じて教門の事を提挙させた。尹志平が、之に副うて資料を加えた。未だいくばくもなくて道安は教門の事を志平に依嘱させた。太宗十年戊戌（A.D.一二三八年南宋嘉熙二年）志平は年寿七十歳になり、李志常を推薦して自らにとって代らせた。憲宗が即位されて後李志常に道教の事を采領させたのである。戊午歳（A.D.一二五八年、蒙古憲宗八年）に卒した。凡そ全眞教を主宰すること二十一年に及んだ。至元の間（世祖、至元元年〔A.D.一二六四〕－至元三十一年〔A.D.一二九四〕）のころに仏教僧の祥邁が辨偽録を撰して志常が全真教を掌握していた時に、各路、〔郎案：諸橋漢和に曰く、「路、行政区画の名、宋代に唐の道を改めて路を通く、太宗は十五路、神宗の時は増して二十四路とし帥、漕、憲、倉の四司からの行政を司った〔正字通〕路、宋、別天下爲四京二十三路〔宋史・地理志〕川峡四路〕〕の寺院四百八十二ヶ所を侵冠占居した由と、

又、令狐璋、史志經らをして「老子化胡成佛經」〔郎案：老子化胡經については諸橋漢和に次の如く曰う「晉の王符撰と伝えられる、もと一巻であったが、次第に増益々され、法華衆經目録等によれば二巻とあり、日本現在書目録によれば十巻とあり、佛祖統記によれば十一巻とある。又經名も明成化胡經、化胡清冰經、老子西昇化胡經、老子化胡玄要録、太上靈寶化胡經、老子開天經等に分る、道家の対佛教論で、老子が流沙を渉り胡王を教へ、浮圖となり、歿後、佛として生れ、斯くして佛教が起るとするもので敦煌出土抄本の老子化胡經第十には老君の十六變を説き、元の祥邁の辨偽録には老子の八十一化を説いている」〕及び八十一化圖などを編集して佛教を謗り訕（ののし）った。そこで少林寺の裕長老は憲宗に評判を知られて、少林寺の裕長老と李志常とが宮廷に召し出されて、和林カラコルムにある萬安閣の下において道佛論諍を催されて、その可否を辨ぜられたのである。志常は仏教を論難反駁してみたが反って詘けられ、敗れたので、遂に憲宗は化胡經その他の道藏を破毀され、また道士の占有していた寺院三十七ヶ所を佛教徒に還付せしめられた。志常はこれによって忿怒し、恚意してその結果死んでしまった。此の辨偽録を考察してみると、元来仏教僧徒のために全眞教を攻撃する目的で編述したことがわかり、長春師の弟子は頗る醜詆をきわめているとする。唯記録するなかに全真教徒が僧寺を占居したとある一節こそまさに事実とみなしてよいだろう。（A.D.一二一四年）より以来、河朔は廃墟となり亘刹（おおでらしょうじゃ）精藍が鞠草の茂るにまかせ、緇衣（ぼうさん）も錫杖も百に一つも存在しなかった。乱が收まる後律宗を革（あらた）めて禅宗となるもの数えあげることが出来ぬ程だ。全眞教徒も亦遂に因って之を葺（かさね）るもので居るに其の人の坐をもってし、寇攘（ひとのものをとる）に過分を免れない。當（さら）に長春晩節（ばんねん）以後であっても、頗（すこぶる）世権（せいけんを）を憑藉（ふりまわし）して其の教を拡張しようとした。尹、李、らも継承して頗る重陽の創教の旨に乖（そむ）き、然して當世の僧徒を視ること楊璉真伽（ヤンレンチェンチャ）〔郎案、「諸橋漢和」に曰う「元の人、世祖の時江南釋教總統を授けられた。趙末の諸陵で錢塘・紹興に在る中の及び其の大臣の塚墓凡を一百所を発掘す」とある無頼の僧の代表者。〕輩（やから）の如く、則ち離反有り。然らば則ち祥邁が辨偽録に記す所も、亦仇敵誣謗（すんぼう）の言

はどうして全て信用できようか。此の記録は長春没後に作られて、前文に孫錫の序があって戊子（A.D.一二二八）秋後二日と署してあるので、正に睿宗拖雷の監国の歳に当り、而して巻末に庚寅（A.D.一二三〇）七月仙師大葬の事が有る。蓋書成るの後加入する所か。全真教が道となるのに本儒教釋教を兼ね重陽より以下丹陽・長春並に詩頌に善で、志常尤も文采が斐然して、その是の記をなすに文章が約で事柄を盡して居る。外典に之を求めると惟釋家の慈恩傳が拮抗できようか。三洞の中に未だ嘗て是うした作品がない程だ。乾隆の季（A.D.一七九四～九五）嘉定の錢竹汀（大昕）先生が道蔵を蘇州元妙觀に讀み始めてこの書を表章した。この爲跋尾を附して阮文達が遂に寫して秘府に上進した。道光間（A.D.一八二一～一八五〇）徐星伯・程春廬、沈子敦の諸先生が迭に考訂あり、霊石楊氏が因て連筠簃叢書に刊入して、是に由って此書は復丙庫之附庸でなくて、道蔵乙部の要籍となった。光緒中（A.D.一八七五～一九〇八）葉呉縣洪文卿侍郎が創めて注記を爲し、嘉興の沈乙庵先生も亦箋記を作られた、而均未だ刊布されていない。国維は乙丑（光緒十五年、A.D.一八八九）夏日に始めて此書を治、時に見る所の疏を書眉し、その中の地理・人物を亦復創獲あれは偶し、一年許積んで若干條を得て、遂に一月の力を盡して補綴して此注を成遂げた。蓋病洪・沈二氏の書注は傳わらず、聊自ら検尋の便を云う爾。因って作者事蹟をその首に弁じて略論すと云う。丙寅（同治五年A.D.一八六六）孟夏　海寧王國維。

長春真人西遊記序　此行據蔵本補

長春真人蓋有道之士中年以来意此老人固已飛昇變化侶雲將而友洪濛久矣恨其不可得而見也己卯之冬流聞師在海上被安車之徵明年春果次於燕駐車玉虚觀始得一識其面尸居而柴立雷動而風行真異人也與之言又知博物洽聞於書無所不讀由是日益敬（蔵本敬下有聞字）其風而願執弟子禮者不可勝計自二三遺老且樂與之游其餘可知也居無何有龍陽之行及使者再至始啓途而西將別道衆請還期語以三載時辛巳夾鐘之月也　迨甲申孟陬師至自西域果如其旨識者歎異之自是月七日入居燕京大天長觀從疏請也噫今人將事行役出門徬徨有離別可憐之色師之是行也崎嶇數萬

里之遠際版圖之所不載雨露之所弗濡雖其所以禮遇之者不爲不厚然勞憊亦甚矣所至輒徜徉容與以樂山水之勝賦詩談笑視死生若寒暑於其胸中曾不芥蔕（蔵本作蔕芥）非有道者而能如是乎門人李志常從行者也掇其所歷而爲之記凡山川道里之險易水土風氣之差殊與夫衣服飲食百果草木禽蟲之別粲然靡不畢載目之日西遊而徵序於僕夫以西海之大萬物之廣耳目未接雖大智猶不能偏知而盡識也況四海之外者乎所可考者傳記而已僕謂是集之行不獨新好事者之聞見又以見至人之出處無可無不可隨時之義云戊子秋後（蔵本作后）二日西溪居士孫錫序

〔口訳〕長春真人西遊記の序　この一行は蔵本によって補う

長春真人は蓋有道の士で、中年になって以来この老人を意ってきた。固已に飛昇変化し雲と侶となり、しかも洪濛を友として久しかった。お逢いして会見できなかったことを恨みに思っていたが、己卯（A.D.一二一九）の冬に師が山東に在って安車徵を被った由を流聞した。明年の春に果して燕京に車を駐たついでに、玉虚観で始めて面識することができた。師が居られて立つと枯木の如く静かで、行動すると雷の如く行くこと風の如き本当に普通の人と異なる方であった。師と言葉を交えると又知ること博物洽聞書物も読まないものがない程だった。これに由って日々益その風格を尊敬して弟子の礼をとることを願うものがとても計きれなかった。二・三人の遺老からして師と一緒に交るのを楽しみしていて、その他のことも分る筈だ。師は暫く何事もなく居られたが、龍陽〔郎案：「中國讀史方輿紀要索引、中國歷代他名要覧」に「龍陽縣（三國呉―宋、南宋―元・明）湖南省（武陵道）漢尋縣・80湖廣常德府龍陽縣」とあり〕に赴かれて、皇帝の使者が再度やって来るに及んで、始めて途を西に旅立たれた。将に道衆と別れる際に帰還するのが何時かと訊ねられて、三年の後に還ると語られた。その時は辛巳（A.D.一二二一年）夾鐘の月であった。甲申（A.D.一二二四年）の孟陬（旧暦正月）に至って師が西域から還ってきたので、果して前に云った如くであり識る者たちはこれを非常に驚歎した。この月の七日より燕京に入り大天長観に居られて、皇帝の招請に従った。

思うに今時の人は將に役所の用事で旅立ち彷徨に当り離別の哀憐の情を示すのに、師のこの西域旅行たるや崎嶇数万里の遠い所で、地図にも載っていない雨露の全く濡れない沙漠地であった。そうした所を礼遇して厚く待遇しないわけではなかったが、然し勞苦困憊の甚しいものであった。師は至る所で輒平然として居られて、山水の勝景を楽しまれ詩を賦し談笑して、生死の境を見ても寒暑に対する様子で、その胸中今だかって滯るものがなかった。有道者でなければ能くこの様にできようか。門人李志常が旅行の從者であった。その閲歴する所を記述して、凡そ山川道里の険易・水土風気の差別、殊に夫々の衣服飲食・百果草木禽虫の別に到る迄、明確に記載しないことはなかった程である。之を標題して西遊記と曰てその序文をわたくしに依嘱した。夫四海の大万物に広い耳目をもって未だ接して居らず、大智の人でも猶偏く知り識り盡すことができぬのに、況や四海の外のことにおいておや尚更である。わたくしの考え及ぶことのできるのは記録を伝えるだけである。わたしくに謂ることは、是の西遊記の刊行が独り好事家の見聞を新にするのみでなく、又その見聞を以て道を悟った人の出処進退が可もなく不可でもなく、時に随って適宜である道理なのだ。

戊子（A.D.一二二八年）秋後二日、西溪居士孫錫序す。

王國維先生校注　長春眞人「西遊記巻上」

父師眞人長春子姓は邱氏、名は處機、字は通密、登州棲霞人、〔郎案：「中國歴代地名要覧」に云う。「棲霞縣（金以後）山東省（膠東道）棲霞縣36山東登州府棲霞縣」とあり〕未だ二十才にならずに出家して重陽真人に師事した。未冠出家師事重陽眞人。

〔王観堂先生注記〕「金の完顔璹の全真教祖碑〔郎案：「諸橋漢和」に曰く「完顔璹、金の人永功の子、本名は璹孫、字は仲實（仲寶）一に子瑜、号は如菴、樗軒居士、博学で密國公に封ぜらる。著に如菴小稿がある〔金史八十五〕全眞教。道教の一派。宋代道士轟が儒教の忠孝の説、佛教の戒律などをとり入れた一派、一名三教平等會

〔三餘贅筆〕全道士王嘉、自號重陽子、居於全負庵、四方之人、凡宗其道者、皆號全真道士〔輟耕録　全眞教〕全眞紀實云、金主亮。貞元元年（A.D.一一五三）、有吏員咸陽人王中孚者、倡全眞教談、馬丘劉和之、其教盛焉。章宗泰和四年（A.D.一二〇四）、元学士作紫微観記、所載詳悉。〔重陽子、王先生名は喆字は知明、咸陽大魏村〔郎案：「中國歴代地名要覧」に曰う。咸陽縣（元以後）陝西省（關中道）咸陽縣・讀史方興紀要、巻五十三、陝西二、咸陽縣として「府の西北五十里、東北至咸陽縣五十里、西北は醴泉縣に至る七十里、秦縣を過く、孝公都を此山の南、水の北に徒す。陽縣と曰った。九嵕諸山の南に在り、渭水の北に在り、山水皆陽であるので咸陽と云った」とある大魏村については記す所がない〕又、登州霞縣に邱哥なる者あり。幼にして父母を亡い未だ嘗て読書せず、先生を聘礼して文翰を掌しめその後より日記千言、亦吟詠を善した。訓して處機と名づけ、長春真人と號した人が是である。陳大任の「磻溪集」序〔郎案：「中國叢書綜録」2子目、集部別集頭「金、磻溪集六巻、（金）丘處機撰、道蔵（正統本、景正統本）太平部」とあり、余が架蔵する「正統道蔵第四十三冊、太平部、反字號計十二巻、長春子磻溪集六巻に、巻頭に「翰林学士中順大夫知制誥兼國子司業輕車都尉禎川縣開國伯食色七百都賜紫金魚袋安東陳大任」の序とある。磻溪集の序には中條山玉峯老人胡光謙の序、次いで昭義大將軍武定軍節度使……漆水郡開國、侯刺霖の序、それに次いで陳大任の序がある。そのなかに東州高士長春子丘公云々の言葉がある〕のなかに次のように記してある、即ち

長春子邱公は世に在る内に棲霞山に登り未冠一年〔二十才の一年前〕に崑崙山に遊歴して重陽子即ち王害風に逢った。一言で道教の眞髄に合致して遂に之に師事した」と云っている。〔郎案：王害風については、幸田霞伴学人の「論仙」中に「活死人王害風」の一篇（霞伴全集第十六巻、史傳二、昭和二十五年四月、岩波書店刊所收、四二三～四九八頁）あり、「王重陽は宗の徽宗の政和二年、即ち女眞の帝を稱して國を立て、金と稱するに至れるに先だつこと三年、徽宗の詔して道經仙記を求むるの前年、十二月二十二日を以て生る。李道謙の七眞年譜の記する所是の如し。蓋

し異説なし。（中略）北平王粹の撰する所の傳に云ふ。全眞祖師王璠、字は知明、重陽子と號す。京兆咸陽の人なり。世々貲産を以て姓著はる。後に終南縣劉蒋村に還る。其母異夢を感じて而して姙む。二十四月に及んで乃ち生る。始の名は中孚、字は允卿と。開府儀同三司上桂國密國公金源璠の撰する所の終南山神仙重陽眞人全眞教祖の碑に曰く、眞人名は嘉、字は知明、咸陽大魏村に應現す、仙母孕むこと二十四月又十八日なり、按ずるに二十四氣、土氣を餘して眞人を成す也と。異夢に感ずるも可、感ぜざるも可、孕む事二十四月も可、二十四月又十八日なるも可、孔子は異夢に感じて生れ、老子は長く胎に在りて誕る、是の如きは世の偉人を傳ふる者の常套の言、深く窮詰するに當らざるなり。劉蒋村と大魏村と、傳ふること同じからずと雖も、一は還るといへるなり、一は現ずるとあるなり、蓋し始は大魏に在り、後は劉蒋に還れるのみ。（中略）道教有縁の地とは何ぞや。重陽の生地咸陽大魏村即ち是なり。西は秦隴より起りて、東は藍田に徹するまで、雍といひ、岐といひ、郿といひ、長安といひ、凡を其距離八百里が間を、連綿蜿蜒として其南に峙ち亙れる者を終南山といふ・泰嶺といへるものは即ち是にして、重陽の詩中に數々地肺といへるものも亦即ち是なり。重陽か生れたるところ長じたるところは、特に終南の主山に近々と接し居りて、明けぬ昏れぬに看るところのもの此山の翠色ならざること無く、雨に晴に望むところのもの此山の雲氣ならざること無し。此山は即ち禹域の名山高峰も數多きが中に、尤も道教に因縁深きものにして、茅山、廬山、華山、嵩山、羅浮山、大和山、峨眉青城龍虎等の山々にも勝りて、人をして古を懐ひ今を感じ、道を思ふの念の油然として起るを遏む万能はざらしむものあるべし。（中略）元好問の重陽眞人碑に、金朝正隆中（A.D.一一五六～一一八九年）に王世雄といふ者あり、三輔の人なり、少うして任俠を以て稱せらる、とあるものは、蓋し重陽が劉蒋村に移れる前後、粟を貸して人に恵み、罪を赦して盗を縱てることなどを指せるなり。好間は文を能くす、任俠を以て稱せらるるの数字、善く重陽の道に入る以前の状を寫す。重陽の詩詞事蹟を考ふるに、實に俠者の風あり、任俠の二字下し得て好しといふべし。世を棄るの當時重陽蓋し悶々濛々

の生活を爲す、（中略）乃ち酒肆に狂飲して膏々として情を忘るるも、又心猿の矯捷にして柱を攀じ窓を窺ふの状あり、（中略）故に自ら高吟して曰く、昔日の龐居士、如今の王害風と。龐應居士は財に富饒にして而も道に精苦せるの人なり。王害風は自ら道ふ。害風は俗語、猶ほ狂客と云ふが如きなり。是に於て鄕里の張三李四の輩、重陽の心内の消息を解すること無くして、たゞ其の行止擧動の常ならざるを見、害風々々と稱す。重陽も亦これに抗せず、害風と呼べば即ち應じて厭はず、正に是れ牛と呼び馬と呼ぶ人の呼ぶに任すものなり。」として重陽即ち王害風の閲歴を精細に叙述して居られる。〕「輟畊録」〔郎案：「中國叢書綜録」2子目、子部、雜学類、元、「輟畊録」三十巻、（元）陶宗儀撰、津逮秘書（汲古閣本、景汲古閣本）第九集、四庫全書、子部小説家類、叢書集成初篇、總類に收む」余が架蔵する和刻本「輟畊録」全三十巻、七冊本、京醒井通魚棚上ル丁、書林、丁子屋庄兵衛刊本、また「和刻本漢籍随筆集2」（昭和四十七年九月、汲古書院刊）のなかに輟畊録、三〇巻、明陶宗儀、承應元年（一六五二）中野是誰覆清刊本、大十六冊が印行されている。その第十巻に丘眞人の項があって次の如く曰う。「太宗の師長春真人、姓は丘氏、名は處機、字は通密、長春子と號す、登州棲霞縣濱都里の人である。祖父は農を業として世々、善門と稱せられた。金の皇統戊辰（八年A.D.一一四八年）正月十九日に生る。生れつき聰敏であって、或る時觀相する者の云うに、當に神仙の宗伯となる筈だ、とあった。大定丙戌（六年、A.D.一一六六年）年十九才で親元を辞して崑崙山に止住した道者（王重陽）によって修道した云々」とあるを勘案するに、「長春は金朝皇統八年戊辰に誕生して、そこで始めて王重陽に師事したのが大定六年丙戌だった」由〕。應現於咸陽大魏村、又云、有登州棲霞縣邱哥者、幼亡父母未嘗讀書、來禮先生使掌文翰、自後日記千言、亦善吟咏、訓名處機、號長春眞人子者是也。陳大任磻溪集序、長春子邱公、世居登之棲霞、未冠一年、游崑崙山、遇重陽子王害風、一言而道合、遂師事之、案輟耕録、長春生於金皇統戊辰、則始事重陽在大定六年（A.D.一一六六）。

E.Bretschneider : Mediaeval Reserches from Eastern Asiatic Sources, vol, I PartⅢ. SI YU KI

：以下（ブレッドシュナイダー氏）訳注、とす。邱處機の西方旅行記「西遊記」序の解説。

處機（その姓は邱）は道教僧であり、その叡智と浄行のため非常に有名であった。彼は金、皇統八年、南宋、紹興十八年（A.D.一一四八）に山東省登州府の管轄に置かれた町、棲霞に生れた。十三世紀の初頭に、金と南宋の宮廷に大変重んぜられていた。（注79、金ないし女眞〔蒙古人とペルシア著作家の Churche〕は当時北部中国を領有し、一方中国人の王朝宋は淮河の南を占有し、金、宋両朝はやがてジンギス汗の後継者たちにより滅ぼされてしまった）ジンギス汗は北部中国を征服してしまった後、この偉大な賢人についての噂を聞き、自分の宮廷に来るよう彼に招待状を発した。また一方、蒙古の首長は西アジアに遠征隊を派遣し、處機は高令であったにも不拘、山東の山岳帯における隠遁生活をやめるのを余儀なくされ、中央アジアを通り、ペルシアさらにインドの辺彊域への長途の旅行の危険に、身自らを曝さなければならなくなった。そしてインドの辺彊域で偉大な征服者に面会した。その旅行とその帰途は一二二一年から二四年に及んだ。この「西遊記」は處機によって自ら書かれたものではなく、弟子の一人であって、その旅行記を保存し、尚且つ同行した李志常により書かれたものである。哲人たちの讃美者である孫錫がこれを刊行し、序文を書き、その年次は一二二八年（南宋、紹定元年、元、太宗元年、金・正大五年）である。

この「西遊記」は道教文献の偉大な集成、「道藏揖要」に収められている。北京の知識人楊氏によって一八四八年（清、道光二八年）「連筠簃叢書」として刊行せられた〔注80全く同じこの叢書には亦玄弈による〝西域記〟が含まれていて、スタニスラス・ジュリアン師により Memoires sur les Contrées Occidentales 1858「西域の国々の覚書」として訳されている。〕長春による旅行記は故 Archimandrites Palladius（ギリシア修道院長パッラディウス）によってロシア語にさらに自在に訳されて、一八六六年に北京のキリスト教会伝道団公刊、第四冊として出版せられた。この「西遊記」の他の訳本はフランス語で一八六七年、故 M.Pauthier によってなされた

ことがある。併しながらこのパウティエ氏の訳本は簡略粗笨で西域地方を扱った中国地誌「海國圖紀(?)」〔清朝宣宗道光二四年（A.D.一八四四年）に公刊された〕によっている。こうしたことの他、パウティエ氏の訳本は残念ながら多くの誤りが含まれていて、全体の取扱いが知性的ではなくなっている程である。

わたくしが以下の頁で試みた「西遊記」の翻訳は Arch. Palladius の試みたもの程の完璧さはないのである。長春の旅行中にそれぞれ異った機会を捉えての数多くの詩賦をわたくしは省略した。丁度道教事象についての幾つかの会話を省略したように。或る場合に、わたくしはわずかな興味しかない場合に、その話の抜粋（レジュメ）をのみ記しておいた。併し、歴史や地理に関聯する全ては忠実に取扱い、許される限りのわたくしに興味のある主題を注記や略解の形式で取り次いでみるつもりである。

こうした長春眞人の主題に入る前に、此処で興味深い古代の資料を記述させて欲しい。―輟耕録のなかに保存せられた―十四世紀の中頃に著述されたもので〔郎案：桂五十郎著「漢籍解題」によれば、輟耕録三十巻（作者題名）明の陶宗儀撰す、宗儀の傳は説郛の條に出す、宗儀松南に田あり、時々耕を輟め樹蔭に憩ひ、枕膝鼓腹して以て歌ひ、事の冒緻に遇へば則ち葉を摘みて之に書し、遂に巻を累ぬるに至れり、依って名づく。（體裁傳来）記する所の元代の法制及び至正末の東南兵乱は頗る詳なり、又考訂する所の書画文藝も、亦考證に資するに足るものあり、凡て二百九十六條あり、我國にては承應年間校刊せり〕それに成吉思汗と長春眞人の間に意志の疎通のあったことを示している。即ち輟耕録は十四世紀の中頃に著わされた随筆集で第十巻丘眞人、として以下の如く云う。

「大宗師、長春眞人、姓丘氏名處機、字通密、號長春子、登州棲霞縣濱都里人也。祖父業農、世稱善門、金皇統戊辰正月十九日生、生而聰敏、有日者相之曰、此子當爲神仙宗伯、大定丙戌年十九、辭親居崑崙山、依道者修眞、丁亥謁重陽全眞開化王眞君嘉（マヽ）於海寧、請爲弟子、戊申召見闕下、隨還終南山、貞祐乙亥太祖平燕城、金

主奔汴、丙子復召不起、己卯居莱州時、魯齊入宋、宋遣使来召亦不起、是年五月、太祖自乃蠻國、遣近侍劉仲禄、持一手詔致聘、十一月至隱処詔文云、制曰、天厭中原驕華大極之性、朕居北野、嗜欲莫生之情、反朴還淳、去奢從儉、每一衣一食、與牛豎馬圉共弊同饗、視民如赤子、養士若兄弟、謀素和恩素蓄、練萬衆、以身人之先、臨百陣無念我之後、七載之中成大業、六合之内爲一統。非朕之行有德、盖金之政無恒、是以受天之佑、獲承至尊、南連趙宋、北接回紇、東夏西戎、悉稱臣佐。念我單于國、千載百世以来、未之有也。然而任太守、重治平、猶懼有闕、且夫刳船剡楫、將欲濟江河也。聘賢選佐、將以安天下也。朕踐祚巳來、勤心庶政、而三九之位、未見其人、訪聞丘師先生、體眞履規、博物洽聞、探頤窮理、道沖德著、懷古君子之肅風。抱真上人之雅操、久棲巖谷、藏身隱形、闡祖宗之遺化、坐致有道之士、雲集仙逕、莫可稱數、自干戈而後、伏知先生猶隱山東舊境、朕心仰懷無巳、豈不聞渭水同車、茅廬三顧之事。奈何山川懸濶、有失躬迎之禮。朕但避位側身齋戒沐浴、選差近侍官劉仲禄、備輕騎素車、不遠千里、謹邀先生暫屈仙歩、不以沙漠悠遠爲念、或以憂民常世之務、或以恤朕保身之術、朕親侍仙座、欽惟先生將咳唾之餘、但授一言斯可矣。今者聊發朕之微意萬一、明於詔章、誠望先生既著大道之端要、善無不應、亦豈違衆生之願哉。故茲詔示、惟宜知悉、五月初一日筆。庚辰正月北行、二月至燕欲候駕回朝謁、仲禄今從官曷剌馳奏。真人進表陳情、表曰、登州棲霞縣、志道丘處機、近奉宣旨、遠召不才、海上居民、心皆恍惚。處機自念、謀生太拙、学道無成、辛苦萬端、老而不死。名雖播於諸國、道不加於衆人、内顧自傷、衷情誰測、前者南京及宋國屢召不從。今者龍庭一呼即至何也、伏聞皇帝天賜勇智、今古絶倫、道協威霊、華夷率服。是故便欲投山竄海、不忍相違、且當冒雪衝霜、圖其一見、盖聞車駕只在桓撫之北。及到燕京、聽得車駕遙遠、不知其幾千里、風塵湏洞、天氣蒼黄、老弱不堪、切恐中途不能到得、假之皇帝所、則軍國之事、非己所能。道德之心、令人戒欲、悉爲難事。遂與宣差劉仲録商議、不若且在燕京德興府等處、盤桓住坐、先令人前去奏知、其劉仲録不從、故不免自納奏帖。念處機肯來歸命、遂冒風霜。伏望皇帝早下寛大之詔、詳其可否。

兼同時四人出家、三人得道。惟處機虛得其名、顏色樵顇、形容枯槁。伏望聖裁、龍児年三月日奏、十月曷剌回、復奉勅旨曰、成吉思皇帝勅眞人丘師、省所奏應召而來者、具悉、惟師道踰三子、德重多方、命臣奉厥玄纁、馳傳訪諸滄海。時與願適、天不人違、兩朝屢召而弗行、單使一邀而肯起。謂朕天啓、所以身歸、不辭暴露於風霜。自願、跋涉於沙磧。書章來上、喜慰何言、軍國之事、非朕之所期、道德之心、誠云可尚、朕以彼酋不遜、我伐用張、單旅試臨、邊陲底定、來從去背、實力率之故、然久逸暫勞、冀心服而後已。於是載揚威德、略駐車徒、重念雲軒、既發於蓬萊、鶴馭可遊於天竺、達磨東邁、元印法以傳心、老氏西行、或化胡而成道、顧川途之雖濶、瞻几杖以非遥、爰荅來章、可明朕之意。秋暑、師比平安好、旨不多及。十四日辛巳十一月、至邪述思干城、壬午三月、過鐵門關、四月達行在所。時上在雪山之陽、舍館定入見、上勞曰、他國徵聘皆不應、今遠踰萬里而來、朕甚嘉焉。賜坐就、食設二帳於御幄之東、以居之。約日問道、以回紇叛親征不果、至九月、設庭燎虛前席、延問至道、眞人太略答以節欲保躬、天道好生惡殺、治向無爲清爭之理、上説、命左史書諸策、癸未乞東還、賜號神仙、爵太宗師、掌管天下道教。甲申三月至燕。八月奉旨居太極宮。丁亥五月、特改太極爲長春。七月九日、留頌而逝、年八十。至元己巳正月、旨詔贈五祖七眞徽號、而曰、長春演道主教眞人。已上見磻溪集、鳴道集、西遊記、風雲慶會録、七真年譜等書、初真人自行在歸、道由宣德日、一富家新居落成、禮致下顧、將冀一言以爲福、既入其室、默然無語、輒以所持鐵柱杖、於窓戸墻壁上、頗毀數所而出、主人再拜希解悟、曰、爾屋完矣美矣、完而必毀、理執然也、吾不爾毀、爾將無以圖厥終、今毀矣。爾宜思其毀而欲完、克保全之、則爾與爾子、子孫孫、庶幾歌斯哭斯、永終弗替、主人説服。吁真人真知道哉。」

〔口訳〕、大宗師長春真人姓は丘、名は處機、字は通密、長春子と号す。登州棲霞縣濱都里の人である。祖父は農業を營み、世間では善門と評判された。金朝皇統戊辰（A.D.一一四八年）正月十九日に誕生、生れながらに聰敏（あたまがよく）、或る日觀相人（にんそうみ）が彼を見て、この子はきっと神仙（せんにんのおおだてもの）宗伯に為（な）る筈と云った。大定丙戌（六年、A.D.一一六

六）年十九才で親許を離れ崑崙山に止住し、道者に従って眞道を修行した。丁亥（翌七年）王重陽全眞開化王眞君嘉を海寧〔郎案「中國歴代地名要覧」によると、「海寧府（元）江蘇省〔徐海道〕東海縣、20、江南、進安府海州」とある〕に請うて弟子となった。戊申（A.D.一二〇八年）召されて闕下に参内し、随って終南山に還った。貞祐乙亥（A.D.一二一五年）に太祖は燕城〔郎案「中國歴代地名要覧」に「燕京（遼～金）。河北省（京兆）北平市内域西南部、外域西半部ヨリ域外西南ニ及ベリ（高瀬博士還暦記念支那学論叢、遼金南京燕京故域彊域攷）11、直隷、順天府」とある〕を平定し、金主（宣宗）は汴京に逃奔した。丙子（A.D.一二一六年）復お召があったが赴かなかった。己卯（A.D.一二一九年）莱州〔郎案「中國歴代地名要覧」に、莱州（隋・唐、宋―明初）山東省（膠東海）掖縣、36、山東莱州府」とある〕に居る時、魯と齊の国が宋になり、宋の遣使が来て召命したが亦應じなかった。是の年太祖が乃蠻国〔郎案「諸橋漢和」に曰く、「乃蠻、部落の名、外蒙古西部の地を據有していたが、太陽汗に至って、元の太祖に滅された〔元史、太祖紀〕「汪罕出走、路逢乃蠻部將、遂爲其處殺」尚太祖の乃蠻征伐の詳細は那珂世譯注「成吉思汗實録」昭和十八年九月、「筑摩書房刊」二二六～二三三、二三七－二五一頁に見える。この巳卯歳に蠻國に在りしは實録は見えず、亦、百衲本「元史」巻一、太祖紀、十四年己卯の歳の記事中にも見えない、未考〕より近侍劉仲録を遣わして一手の詔を以て招聘させ、十一月に隠居處に至った。その詔文に云うに、勅命を伝える文に曰く、「天は中原の驕華を厭い、太極の性は朕が北の荒野に居て欲を嗜むことのない生活を思い、素朴淳情に還って、奢侈を去り倹約に従って常に一衣一食して、牛馬を飼畜して弊を共にし饗を同じくした。民を視ること赤子の如く、士を養うに兄弟同様だった。謀は和を元として、恩を与えるに素畜の如くし、萬衆を調練するに身は人の先頭に立ち、百陣に臨んで自分の後陣を思わなかったので、七年の内に大業を成遂げたし、六合の内統一することができた。朕の行為が徳がなかったとしたら、蓋金の政情が変転して是で天佑を受け至尊の稱号を承た

であろうか。南の方は趙宋が連り北方は回紇に接し、東夏西夷悉く臣佐を稱している。思うに吾が單于国は百千年以来未だかってなかったことだ。然して太守に任命して治平を重視しているが、猶その不足がありはしないかと懼れている。且つ夫舟を造り楫を操って、將に黄河揚子江を渡ろうと思っている。賢者を招聘し補佐を選ぶのは將に天下を安泰ならしめようためである。朕が踐祚して以来心を庶政に致して、三槐九棘（外朝・禁庭を指す）の廷臣に未だ適わしい人物が居ない。伝え聞く所によると、丘處機先生こそ眞理を体得し規矩を履み博物洽聞、身近に理を窮め道を融和し徳を著し古君子の肅風を懐せる由。真正上人の雅操を抱いて久しく巖谷に棲み、身形を藏隠し祖宗の遺化を闡き、坐して有道の士と成り、雲の如く仙人たちを集め逕にその数が算えられない程だ。干戈の後より潜伏して、先生が猶山東の舊境に隠れて居られるのを知ったので、朕の心は仰懐の念が止むことがない。どうして渭水に同車して茅廬三顧の事を聞かないことがありましょうか。遺憾ながら山川が懸離れて親しくお迎えする禮を欠いて居りました。朕は唯玉座を避け身自ら齋戒沐浴して、近侍の官劉仲禄を選び、輕騎と素車を用意して千里を遠しとせずに謹んで先生をお迎えし、暫く仙人の立場と離れてお歩き頂き、沙漠の悠遠の地を懸念下さいますな。或は民の当世を憂うる政務を、或は朕の保身の術を施して頂きたい。朕も親しく仙座に侍ましょう。どうぞ將に咳唾の余を以て唯一言の助言を賜われば宜しいのであります。今は聊か朕の微意から発して心の一端を明すので、誠に望むらくは、先生既に大道の道筋を著ておられ、應じられないことはありますまい。どうして衆生の願に違られましょうや。そこでこの詔を示したわけで、どうか御理解下さい。五月初一日執筆す。」とあった。庚辰（A.D.一二二〇年）正月北行して、二月に燕京に到った。車駕に伺候して朝謁しようと欲した。仲禄は從官曷剌をして馳せ奏上させた。眞人は表を進め詳に情を奏して曰く。登州棲霞縣志道丘處機が近く宣旨を奉じて見るに、遠く不才を召す由、山東の居民が皆恍惚としております。處機自ら思うに、謀生太だ学道に拙く成功の覚束ない辛苦万

端の老翁です。而して死せざるの名が諸国に拡がっていても、道を衆人に施せず内に顧て自ら傷ます。こうした衷情を誰れが御存知でしょうか。前に南京(金国)及び宋国が屢々召があったのですが従いませんでした。今は龍庭が一呼されてすぐに参ったのは何だと思召します。伏して聞くに、皇帝は天賜の智勇が今古絶倫で道も威霊に協て、華夷が率く推服して居ります。この故にすぐに山に隠れ海に逃れようと欲したのですが、違反するに忍びずに且雪を冒し霜を衝て拜謁しようと決意いたしました。蓋聞く所によると車駕は只今桓撫の北に在る由、燕京に到るに及んで車駕が遙か遠く幾千里も知れない程だと聴き得ました。風塵が天空を傾け天気も蒼黄として老弱者に堪えられぬとのこと。痛切に恐れるのは中途で倒れて到達できないことであります。皇帝の御所存が假りに軍事の相談とするなら、わたしくの出来ることでありません。道徳の心得ならば人をして欲望を戒め悉く非難する事が出来る筈と、遂に宣老劉仲禄と商議いたしました。そうでなければ燕京徳興府などの處に在り盤桓として住坐して、人前を避けてその旨を知しめましたものを。ところが劉仲禄は納得せず、そこで自ら奏帖を納得しないわけにゆかなかったのです。思うに處機は納得いたしまして命令に従い、遠く風霜を冒すに至りました。伏して願望いたしますのは、皇帝が早く寛大な詔を下してその可否を詳述下さい。兼て同時に四人が僧として出家し、三人が道士となりました。考えてみますと處機は虚名を得たのみで、顔色は焦衰し形容は枯槁ています。伏してお願いいたします。聖裁庚辰（A.D.一二二〇年）三月日奏上す。」とあった。十月に曷剌が復戻って来て勅旨を奉じて云うに、成吉思皇帝が真人丘師の住所に勅して奏す。召に應じて来ること具に知悉した。思うに丘師の道は三子〔郎案、道教の老子、呂洞賓、王重陽の三人を指すか〕を踰え、徳は諸方に重じられている。そこで臣下に命じてその玄纁〔郎案：諸橋漢和に曰く、「玄纁・黒い色の布帛、転じて幣帛を謂う」とある。〕を奉持して馳せ伝え諸滄海を訪問させた。時と願が天に適て人の選定に誤りなく、金と宋両朝が屢々召せども行かず、吾が單使が一度迎えると納得して起ってくれた。朕が

思うに天が身の帰する所以を啓(ひらい)たのだと。風霜に身を曝すのを嫌わず、自ら沙磧を跋渉するを願い、書章を持ち来って喜慰してくれる。どうして軍國の事を相談するなど朕の希望することではない。道徳の心こそ誠に尊ぶべきと思う。朕は寒外の酋長らが不遜なので、我が征伐に張幕を用い單旅して試みに邊陲の地に臨み、敵を平定し、降伏し来る者離反しつ去る者、実に力の及ぶ限なのだ。然も人材を逸して暫く心勞し、心服して後やむのみ。そこで威徳を宣揚して略(ほぼ)車駕を駐(とど)め、重ねて思う様既に蓬莱を発した鶴に馭して天竺(インド)に遊び、達磨大師が中国に帰化して法を印(しるし)として心を伝えた。老子も西行して或は胡を教化して仏として成道した。川途(すじみち)を顧るに遠いけれども老人用の肘掛けと杖を瞻(み)ると遙かでない。爰(ここ)に来章に答え朕の意を明察すべきだ。」とあった。秋暑の候で師は平安好旨多からず、辛巳（A.D.一二二一年）十一月十四日に邪迷思干城(サマンカンド)に至った。壬午（A.D.一二二二年）三月鉄門関を過ぎて、四月に行在所に達した。その時皇帝は雪山（葱嶺）の陽(みなみ)に在り舍館が定って謁見した。皇帝が勞を慰(ねぎら)って曰うに、「遠い他国に微聘しても誰れも應じないのに、今遠く万里を踰(こえ)て来駕されたので朕(わたくし)は大変喜ばしいことに思うぞ」とあった。席を賜い食事を饗應して、二帳の天幕を御幄(みかどのすまい)の東に設營して居住させた。日時を約(きめ)て道を聞かれることになった。回紇(ウイグル)が叛乱したので親征されたので約束は果されず、九月に至って庭燎を設け、席を空けて至道について質問された。真人の答うるに大略は節欲保身、天道の生すことを好み殺すことを悪(にく)み、治向無爲（自然のままに逆わず）、清淨の理(ことわり)を申し上げた。皇帝はその説を左史(しょき)に命じて諸策に書かしめられた。癸未（A.D.一二二三年）に東に還帰することを乞うた所、号を神仙、爵は大宗師と賜い、天下の道教を管掌させた。甲申（A.D.一二二四年）三月燕京に帰った。八月旨を奉じて大極宮に止住、丁亥（A.D.一二二七年）五月に特に大極の号を改めて長春とした。七月九日頌(ゆいごん)を留めて逝去したが年八十才だった。至元己巳（六年A.D.一二六九年）旨詔して五祖七眞の徽号を贈り、而して長春演道主教真人と云った。以上のことは磻溪集、鳴道集、西遊記、風雲慶会録、七真年譜等の書に見えている。初め真人が自行して帰途、宣徳の道を

辿りその日一富豪の新居が落成したので、礼を盡して検分して貰い、一言の偈を頂戴して福徳にあやかろうとした。師はその室に入ると黙然として一語も語らずに、輒(やにわ)に持っていた鉄柱杖をもって窓辺墻壁上に多くの破損を加えて出て来た。主人は再拜してその理由を理解しようと願ったので、云うことに、「お前の家屋は完全美麗である。が完全は必ず毀損すると規まっているのじゃ。私が破毀しないとお前はその結末が判らんではないか。そこで今毀損したのじゃ。お前はどうか思ってみるが宜い、その毀損を元通り保全することじゃ。それはお前とその子子孫孫迠何代もこうして歌い、こうした哭(な)くわけで、永久に衰替をするのじゃ、」と。主人はその説に服した由、あゝ真人こそ眞の道を知る者だわい。」

これら書册の翻訳は、これらの卓越した人びとの思想を組立てた在り方や、人格性を判断することを読者に可能ならしめている。成吉思汗のもつ直朴な性格は、人びとを統治するこうした闊達な原理を裏書きしているし、また丘處機の言葉はこうした深甚な眞理を表現しているので、ヨーロッパにおける吾々の国々にとって、さらに今の時代においても着実真率なものとなるだろう。他方において、長春真人は彼の上品さ虚心坦懐さ真面目さによる共感を喚んでいる。彼は自分の生きている時代と人間性をよく熟知していて、高度な知性を賦与されていたように思われる。こうしたことが理由となって、略元朝が北部中国を平定しようとした頃、成吉思汗が長春の助言に大きな関心を寄せたわけであった。併しながら元朝の主長が真人の助言に満足し切れなかった未だ他の理由があるのである。Palladiusパッラディウスによると、長春は北方道教部派「黄金蓮結社」に属していて、その道士は自ら藏眞、即ち完全、眞、聖者を意味する稱号を稱していた。彼ら真人は精神的な錬丹術に通暁していたのであり、例えば彼らは精神世界のなかに丹、すなわち形而上学を学ぶ者の丹石不死性の秘密といったものを探し求めていた。こうした不老不死の神秘を分析した錬金術士たちにより、數世紀に渉り無益にも追究せられてきたのではあったが、成吉思汗が長春に最初の謁見の際に発した質問の一つは「汝は不老不死の薬を持っているか」

であった。成吉思汗と長春眞人が同年同月に死んだ、一二二七年の七月のことだったのだが、そういった奇妙な事実がある。

長春に宛てた成吉思汗の書簡に関聯して、その手紙が成吉思汗自身によって書かれたものでなかったことは云う迄もあるまい。というのは成吉思汗は如何なる言語でも書くことはできなかったから。明らかにこの征服者の考え方のひらめきは一人の中国人、彼の大臣となった耶律楚材といった人で代表されるように、適材適所に配置された人たちで構成されていたのである。

古典的な中国語で書かれていた此の詔勅書簡は次のように読まれる。――即ち

「天は中国をその不遜ごう慢さや途方もない贅沢によって見放し給うた。しかし、予は北方寒外の地に住して中国人のような過度法外な欲望に災いされて居らぬ。予は贅沢を憎み、亦節度中庸を心掛けている。予は一枚の上衣と一碗の食事しかとっていない。予は全く同じ食事を攝り、わたくしの哀れむべき遊牧民と同じく衣服をまとっているに過ぎない。（注81 Palladius は中国の古典のなかに次のような陳述を見いだしたとしている。即ち「成吉思汗の上衣（ガウン）は單純な素材から造られていて、彼の後継者たちすなわち中国の蒙古皇帝たちが聖遺物として保存していた由」）予は人民を予が子供と見做し、吾が兄弟であるかの如く才能ある人々に関心興味を懐いて居る。吾々は常に予らの立てたる原理を踏襲し、また吾々は常に相互の愛情できづなが結ばれて居る。戦闘体験には予は常に最前線に在り、白兵戦に当っては決して尻ごみして後陣にいるようなことはなかった。八年間に予は大業を完成すべく努力を重ねてきたし、全世界を一つの帝国に統合しようとしてきた。予は自ら他の異った本質性格を持っているものではない。併し、金王朝は盛衰ま、ならず、このためもあって天帝は予に金国の王座に即くことを示唆せられている。南方には宋が（注82、注74を参照のこと）。北部には回紇が（注83これらの国々に比定した位置について、多少の混乱がある）そして東方には夏（注46を参照のこと、タングート人、西夏を指し

ている）そして西方には西域が蟠居し、これらの全ては吾が宗主権を認めている。予には單于の遼遠の時代以来（注84この單于の稱号は紀元前二世紀以後、蒙古地方において古代の匈奴の汗が帯びていた稱号であった）こうした広大な帝国はみたことがないと信じて居る。併し、予の意図するものは高大であり、予の双肩にかゝれる義務は亦重くのしかかっている。それ故に予は吾が統治に際して欠落しているところがあるかも知れないことを惶れている。河を渡るに際して吾々は小船を造り梯子を架けると同じ様に勇猛な人びとを招き、また帝国を安寧秩序の元に統轄するために賛助者たちを選出する。予が登極して以後、常に予が人民を統治することを念頭に置いていた。併し乍ら予はかの三公、九帝に比すべき位を占むに価する賢者たちを見出し得ぬのである。（注85周王朝（B.C.一一二二～一二四九年）後に三公が中国王朝の最高代表責任者であった。九王は政治、統治の各々の部局を占めていた）予が要請したようなかかる政治上の雰囲気に関聯して、予が聞いた所によると師は眞理を貫き、正義の道を踏み歩んだ由、されば師の深甚なる知慧と多くの体験とに照して、法律を多く宣言し解釈したと云う。聖なるものは益々華々しく顕在せられた。こうして汝長春眞人は古代の聖人たちの厳格なる規定を賦与せられた方である。長期間汝（なれ）は岩窟の洞中に住いて俗世間より隠遁し居られた。されども汝に対して、修行して仙に入らんことを果そうとする人びとが、不老不死の途に到ろうとして雲の如く無數聚つてきた。予は戰後に、山東の全く同じ場処に住み続け居るを知つた。そして予は常に汝を想起して居たのである。予は亦正に同じ二輪馬車にて渭水より帰還せるの譚と、三度茅屋に召請のため訪いし譚を知つている（注86こうした事象は中国史からのこゝの故事に由来していて、聖者は帝王たちにより高位高官を集めるよう召請せられたのだった。周王朝の有徳の創始者文王〔紀元前十二世紀〕は渭水の畔りで釣りをしている老翁を見出し、その会話した結果聖なる人であることがわかったので、大臣として入内してくれるように呂尚に要請した程であったと云う。そして二輪馬車に乗せて伴い帰ったという。他の故事は諸葛亮に関しての譚である。諸葛亮は蜀漢の創設者劉備により探し求められた

軍師で、亮の名聲はその智略の故に知れ渡っていたのである。亮は茅舎に居住することを好んだし、また自らの隠遁生活を断念するよう口説かれて、その理想を懐くのに困難となったといわれている）併し乍ら予は何をなすべきか。吾らは広大な領域に拡がれる山岳や平原により別け隔てられ、予は斯かる賢者たちに逢うことが叶はぬ。予は今や王座より降り得るのみにして傍に立佇するのみ。（注87成吉思汗は長春眞人に、元朝の宮廷において政治に参画すべきことを求めたのであった）予は速やかな実現を欲するのみ。（注88、虔讓に振舞うことを中国語彙では、主人が客を受け入れるべく自ら厚くもてなすことを意味した言句を用いる。）予は副官たる劉仲祿に命じて護衛兵と車馬を汝のために準備し置いた、（注89、中国においては、古代に帝王は賢者を召す場合に、聖者に馬車を派遣するのが常であった）それ故何千里遠しといえども心配するなかれ。予は涙ながらに懇願する。汝や聖なる歩みもて来たらんことを。その間に横臥る流沙の大きさを思い患うことなかれ。事柄の示す現状に照らして人民を不愍に思い給われば、乃至は予に対し哀れと思し召せば、不老長寿についての方策を予に教えて給わらんことを。予は自ら汝がために報いんと欲す。すくなくとも、汝れこそ、汝の聊かなる智慧もて予に給ふらんことを欲す。一言をだに予に洩しくれなば幸いなるべし。この書簡中に予は自らの考えを主として述べきたれり。そして汝、予が意図を理解しくれんことを希望す。亦予は、汝が大道の原理を悟得され、正しきもの全てに通暁し、人びとの欲するところに違はざらんことを。

〔本文〕既而住磻溪龍門十有三年

〔口訳〕既にして磻溪龍門に住すること十三年〔郎案：「諸橋漢和」磻溪、川の名一名璜河、陝西省寶溪縣の東南、源は南山、成道宮水と合して渭水に注ぐ。太公望呂尚、漁釣の跡と傳ふ。〔水經、渭水注〕磻溪水注之、水出南山茲谷、乘高激流注於溪谿中、谿中有泉、謂之茲泉、泉水潭積、自成淵渚、即呂氏春秋所謂太公釣茲泉也。今人謂之丸谷、石壁深高、幽隍邃密、林障秀阻、人跡罕交。東南隅有一石室、蓋太公所居也。水次平石釣處、

即太公垂釣之處、其投竿跽餌、兩隣遺跡猶存、是有磻溪窄之稱也。〕

と。〔郎案、太公望釣処として有名の地と龍門に十三年間遊びたる由長春の仙なることを云う一証なるべし。〕

〔王観堂先生注〕遺山先生文集三十五、清眞観記、大定初、邱自東莱西入関、隠於磻溪十數年不出、陳大任、磻溪集序、惟公樂秦隴之風、居磻溪廟六年、龍門山七年、案序系此於重陽子服除後、重陽之歿在大定十年〔郎案「橋漢和」王喜（ワウテツ）、金の道士、咸陽の人、字知明、號重陽子、妻子を捨てて鄠、杜、終南の間に遊んで修道す。道教、全眞派を創始し北宗の祖となる。元の世祖の時、重陽全眞開元眞君の號を贈らる（尚友録九）（陝西通志）既に王害風として紹介した。〕則此十三年、當目大定十三年後起算。

〔口訳〕元遺山先生文集〔郎案：「中國叢書綜録」2、子目、集部別集類、「遺山集、四十巻附録一巻（金）元好問撰、四庫全書、集部別集類、擒藻堂四庫全書薈要集部、遺山先生文集四十巻附録一巻、四部叢刊（初次印本、二次印本、縮印二次印本）集部」掲す〕巻三十五「清真觀記」に大定の初（A.D.一一六一年）邱は東莱より西の方関に入り磻溪に隠れて十數年世間に出なかった。陳大任の「磻溪集」の序に、「惟（おもう）に邱公は秦隴の風景を楽しみ磻溪廟に居ること六年、龍門山に居ること七年」とあり。序を勘案するに重陽子の服除（どうしとなる）後、重陽の歿が大定十年（A.D.一一七〇）であるので、この十三年間の数字は當に大定十三年から起算したものである。

〔本文〕眞積力久學道、乃成暮年還海上

〔口訳〕長春眞人は力を盡して久しい間道教の本質を学び、そこで晩年になったので、海上（みなみ）に浮んで故郷山東に還った。

〔王国維先生注〕磻溪集巻三の世宗挽詞に引くところによると、「臣處機、大定戊申（二十八年）春二月に終南山より召されて世宗の闕下（宮居）に赴いた。中秋の季節に他の事柄にかこつけて許旨を得て終南山に帰還することができた。己酉（大定二十九年）春その帰途陝州を経た頃に遽（にわか）に哀詔〔郎案「諸橋漢和」に云う「天子の崩御を嗣

君が国内に発表する詔、悲痛な詔勅（清通禮）」を承わり、是において長春は乙の年（金、大定五年、一一六五）また関中（今の陝西省の他）に入った。又、巻一途中で序を作った。〔郎案：磻溪集巻一（「正統道蔵」第四十三冊、新文豊出版公司刊本。）福山縣黄籙雕感應并序に云う「明昌甲寅（五年A.D.一一九四）秋九月、建黄籙を福山縣に建て、二十八日午後將に符を伝え戒を受く、鶴十一羽があって平壇上を翔んで終夕さらなかった云々」と。〕明昌二年（A.D.一一九一）十月ごろに棲霞山に到り、三年五月蓬莱に居住する同じ道士仲間と相逢うて夏季を送った。後數年たっての間このようなことを恒例として、五月にお互い相邀えるのみ。そこで長春眞人は海上山東に帰還して、明昌二年棲霞山に戻ったわけである。時に年四十四歳。

〔本文〕戊寅之歳前、在登州河南、屢欲遣使徴聘、事有齟齬遂已。明年住莱州昊天観

〔口訳〕蒙古、太祖（チンギスカン）法天啓運聖武帝十三年戊寅（A.D.一二一八年）以前までは登州の河南地方に在って、元朝は屢々使を派遣して召聘しようと欲していたが、どうもその間事情があって齟齬し遂に沙汰止みとなってしまった。明る年（A.D.一二一九年）莱州の昊天観に居住していた。

〔王観堂先生注記〕輟耕録巻十によると、丙子年（A.D.一二一六年）に復（また）召されたけれど、應じなかった。己卯の年（A.D.一二一九）は莱州に居住していた。

〔本文〕夏四月、阿南提控邊鄙部使至、邀師同往、師不可使者攜所書詩頌歸、既而復有使、自大梁來、道聞山東爲宋人所據及還

〔口訳〕夏四月、河南提控邊鄙使〔郎案「諸橋漢和」提空、正して禦御することを掌る職の名、元に提控案牘の官がある（續文献通考、職官考、戸部）金戸部、尚書一人、云々主事五人、女直司二人、通掌戸度金倉等事、漢人司三人、同員外郎、分掌曹事、兼提控編附條格管句架閣等事（元史・百官志）都提挙萬億寶源庫、云々、都提挙一員正四品云々、提控案牘一員」とあり。この提控邊鄙使は、地方監察使の一種なるべし〕がやって来

て長春を師傅として迎えようとした。同行していったが、その提控邊鄙使の使者たる資格がないと見てとり、書いた詩頌を破り捨ててしまった。故郷莱州に歸ってみると、復使者が大梁からやって来ていた。やって来た道程を聞くと、山東半島地域は宋人の占據するところとなっているのを聞いて、やはりこれも召に應じないで帰って来た。

〔王観堂先生注〕宋史、李全傳によると嘉定十二年（A.D.一二一九己卯）六月に、金国の元師張林が青、莒、密、登、莱、濰、淄、濱、棣、寧、海、濟南十二州を、降伏来帰させた」とある。〔郎案：百衲本宋史四百七十六・列傳巻二百三十五叛臣中、李全伝に見えている〕

其年（嘉定十二年）八月に江南大師李公全、彭公義斌來りて、邱真人を請召したが赴かなかった。藏本には李公、彭公二人の名前がみられない。

〔王観堂先生注〕彭義斌の事は宋史李全傳上には附記されている。〔郎案、李全、彭義斌は宋の叛臣で金朝に附庸して邱真人を招請しようとした〕

〔本文訳〕その後、處に隨って居住していると、往々莱州の州知事が招請して邀（なか）えの使者を寄こしてきた。そして應召の事が難しいと非難したので、長春師の曰うには「わたくしが行動するのは天に止まることを理想としているのであり、若輩の連中が一知半解及ぶところではないのだ。當然のことだが留滞することがあっても、そこに居住したくない場合は去ることにしている。居住地なぞ何でないことがあろうか。」と。成吉思汗皇帝が侍臣劉仲禄を派遣してきたのもこうした折であった。

〔王観堂先生注〕劉仲禄の名前は他の書物にはまだ見出さない。惟うに、元史河渠志に太宗七年歳乙未（A.D.一二三五年）八月敕して劉沖禄を近づけて云う。水工二百余人を率いて、すでに期間を定めて盧溝河元を築いて閉じたところが、牙梳口が破壊した云々と。そこですぐにこのことを劉沖禄に記録させたという〔郎案：百衲本

「元史」六十四、志巻第十六、河渠志一の盧溝河の條に以下の如くある。「盧溝河のその源は代地に出て、名づけて小黄河と云う。流れが浊っているからである。奉聖州〔「中國歴代地名要覧」によると、奉聖州（遼元）＝永興縣、ハルピン省涿鹿縣西南四十里17、直隷保安州」とあり〕の界より流れて、宛平縣〔「中國歴代地名要覧」に燕平縣（五代唐）河北省（京兆）昌平縣東八里、一説二同省（保安道）完縣東二十里トモ云フ、11、直隷順天府昌平州昌平廃縣）とあり〕境に至り、都城に至る四十里、東麻谷で分れて二流となる。太宗七年歳乙未（A.D.一二三五年）八月、近侍劉仲禄に勅して云う。「水工二百余人を率いて、已に期によって盧溝河の元を築閉して牙梳口が破れた。若し堤を修理固護しないと、恐らく時ならず水が漲れて衝き壊すであろうと思われる。或は貧利の人が漑灌を決盗するようなことがあれば、請う禁令せよ。」劉仲禄がその主領に就任して、衝堌・盗次を致すことなかれ、犯す者は制例に違反するを以て徒二年、杖七十に決すべし。修築の場合が起ったなら、入用の役夫刀丁、器具は應に必要があれば調達せよ。その元来水汲人夫五十人があって、官庁で老留存在するのを妨げない。管領に委託して常にしきりに巡視の体制をとれ。歳一年交代・番所の司が應じない場合、副所長之を還す。」とある。この記事を指す。〕。足本西游録によると「昔劉姓にして名を温という者、醫術をもって渠を進めて謂うて曰く、邱長春公、行年三百にして保養長生の秘術を有している。そこで奏上して朝廷に挙げ召さんとした。」とある。至元の辨偽録巻三に「道士邱處機が全眞教を継唱しているが、元来道術ではなかった。劉温、字は仲禄なる者がそこで鳴鏑を作り、太祖成吉思汗をはじめ僻説を信じているのに乗じて、意におもねり甘言をもって醫薬を進上して言上した。邱處機公は行年三百余歳であります。保養長生の術を持っております。奏して朝廷に召し挙げたならよろしかろうと存じますと云っている。」是れ劉仲禄、名は温、字は仲禄をもってするものの献言である。

〔本文訳〕虎頭金牌を懸けたがその文にいう、「朕が親しく往くように、宜しく便宜を計るべきこと。」と。

〔王観堂先生注〕「蒙韃備録」第一によると、等しく両虎が相向き合った金牌で、虎闘金牌とも呼び、漢字を銘に用いて、「天賜成吉伊皇帝聖旨、まさに便宜に通行すべし」とある。その次に位するのは銘文、文様のない素金牌、その次に銀牌が位するが、蒙古金牌の意匠を取り案じてみると上部に虎の頭を造形し、両虎が相向い合っている姿を造っていない。蒙韃備録に云うところの虎の闘争文を意匠した金牌は、どうやら虎頭金牌の（頭と闘と）の音に訛ったもので、因って両虎が向い合って闘争するといった説が生じたに過ぎない。関漢卿作るところの「拜月亭」という雑劇に関聯して云えば、虎頭児金牌は腰のうちに懸け吊るものとある。〔郎案：関漢卿の「拜月亭」と云う元曲雑劇を引いた王国維先生は、元曲雑劇について論著があるからである。青木正兒先生の「元人雑劇序説」（「青木正児全集」第四巻、所収〔昭和四十八年五月、春秋社刊〕第四章、初期の本色派㈠關漢卿に「關漢卿は雑劇創始の中心作家で、本色派の第一人者である。其の作る處の雑劇の知り得べきもの六十三種の多きに達し、多作の點でも元代第一である」としてそのなかに「閨怨佳人拜見亭」「元刊」本、○旦本○「閨怨雑劇」を挙げ、更に骨子と特色に言及して居られる。（前掲書三八四～三八五頁〕〕汪元量の「水雲集」によると〔郎案：「中國叢書綜録」2、子目集部、別集類に「水雲集一巻（宋）汪元量撰、四庫全書、集部別集類、湖山類稿附、水雲集一巻附録三巻、武林往哲遺著」として收む。〕湖州歌、文武官僚二品多く郷に還帰するにことごとく虎頭牌を帯びていた由。金・元二史はこれを金虎符と云っているが、實際のところは符ではないのである。〔郎案：王国維先生の虎頭符虎闘符につきて文学作品中に例證を求められたが、虎牌、虎符について研究詳述されたのは、吾が箭井亙先生と羽田亨先生である。箭井先生には「元朝驛符考」（「蒙古史研究」昭和五年十月、刀江書院刊、所收）があって、元代迄の歴朝の符牌の沿革を述べ、元朝の牌符に及び「太祖の時既に金虎符・金符・銀符の三種あり、金虎符は太祖の七年（A.D.一二一二）鎮海に賜うて闍里必となしたるを始とし、同年劉伯林に、十年移剌捏兒、史天倪、耶律留哥に、十二年王珣に、十四年董俊に、十八

年史天祥に之を賜ひ、（中略）金虎符、金符、銀符の名は元史を通じて常用の字面なるが、元初の文獻必ずしもこの字面を用ひず。即ち蒙韃備録に、「所佩金牌第一等貴臣帶、兩虎相向、曰虎闘金牌、用漢字曰、「天賜成吉思皇帝聖旨當便宜行事」、其次素金牌、曰「天賜成吉思皇帝聖旨疾」又其次乃銀牌、文與前同」徐霆の黒韃事略疏證に、「韃人止有虎頭金牌、平金牌、平銀牌、或有勞、自出金銀、請於韃主、許其自打牌、上鐫回回字、亦不出於〝長生天底氣力〟等語爾」西遊記に「成吉思皇帝遣侍臣劉仲禄、懸虎頭金牌、其文曰、如朕親行便宜行事」とあり、即ち金虎符は一に虎闘金牌又は虎頭牌ともいひしなり。備録に「兩虎相向」とあれば、金製板状の牌面に兩虎頭相向ふの形を刻せしもの即ち虎闘金牌なるべきも、而も羅振玉氏の歴代符牌圖録收むる所の元國書牌の拓本を見るに、兩面共に單虎頭を上部に刻し、その下に國書、即ち八思巴文字を刻す。之れ即ち虎頭金牌なり。然るに元史巻九八、兵志に「萬戸佩金虎符、符跌爲伏虎形、首為明珠、而有三珠、二珠、一珠之別」と記す。趺は「螭首亀趺」の趺なれば符の臺が伏虎の形を為せるをいふものにして、前代虎符の全形を趺としたる金牌なるが如し。果して然らば、同じ虎符といふも、其の形状の一様ならざりしを知るべく、随って其の大小必ずしも一定せざりしを察すべし。羅氏所蔵の國書牌を以て露國 Duieper 河畔出土の國書牌に比較するに、前者は上圓下方の長牌にして一個正面の虎頭を刻し、後者は上下共に圓形をなせる長牌にして虎頭の繪が著しく紋様化せられたり。さて茲に注意すべきは、元代に所謂金虎符は名は符なれども、前代の所謂虎符の如く剖半して勘合すべき性質のものにはあらず、全然單獨に用ひらるるものなるが故に、元史には終始殆んど一貫して金虎符亦は虎符といふは、實に金虎牌又は虎牌といふべきものなり。」（前掲書八六九～八七二頁）と。これに、尚、羽田亨先生は「元朝驛傳雜考」（〝羽田博士史学論文集、歴史篇〟、昭和三十二年十一月、東洋史研究会刊所収）に現存遺品によって論及せられている。〕

〔本文口訳〕蒙古人の二十人からなる輩に帝の聖旨を傳え、あつく招請することとした。

〔王観堂先生注〕輟耕録十に詔書の文を載せて次の様に曰っている。即ち「天厭中原驕華大極之性、〔郎案、諸橋漢和に云う「天厭、天が憎みすること（左氏、隠十一）天而既厭周徳矣（論語雍也）子見南子、子路不説、夫子矢之曰、予所否者、天厭之（集注）厭棄捨也、〕わたくしは北方の荒野に蕃居していて、嗜欲をほしいままにすると生活が維持できないと思っているので、かえって朴とつにして淳に還り、奢移を去り、儉約に従っている。一たび衣を着て一たび食事をするごとに、牛豎〔郎案：「諸橋漢和」に曰く、「うしかひの子供、牛童、牧童（六韜、龍韜、將戒）賞及牛豎馬洗既養之徒（王安石、有感詩）牛豎歌我傍聽之爲久留」〕牛飼いの子供や馬圉（バギョ）、〔郎案：諸橋漢和、「うまかひ（左氏、昭七）馬有圉、牛有牧（楚辞、九歎）鳥獣戚于驂乗兮、燕公操于馬圉（淮南子、人間訓）子貢注説之、卑辞而不能得也、乃使馬圉往説之、」〕馬飼いの連中ともに汚らしい着物を着、同じ食事をとってきた。人民を視ること自分の赤ん坊のように親愛し、士・大夫を養うにあたっては兄弟のように遇している。だから元来親和と恩愛をほどこすことを謀り、国力を蓄えるのに萬の大衆を練武訓練して、身を以て戰闘に臨む時には人の先頭に立って百戰に臨んできた。自分の身の安全など念ってみたこともない。七年の苦勞の甲斐あって、帝国を樹立するのに成功し、六合の内を統一することもできた。これはわたくしに徳行があったからではなくて、思ってみると金王国の政治が道に外れたためである。そのために天の佑助を得て至尊の加護を継承したのである。南は趙宋に連なり、北は回紇（ウイグル）と境を接し、東部は夏、西には夷が居り、これらの諸国は全部臣従している。我が祖匈奴の單于の統治する国を考えてみるのに、千載百世以来未だ曾ってなかった盛況を示している。それだからして太守を任命して地平を重んじているのだが、猶ほその闕（かけ）るところがあるのではないかと懼れていて、それに尚且つ刳舟（くりぶね）を造り、楫（かい）を削りだして、將に江河を渡ろうと欲している程である。そのためには賢人を聘し、將軍を選び出してもって天下を安んじようと考えている。朕（わたくし）は皇帝の位に践祚して以来、心を衆庶のための政治に勵もうと思い努力しているが、尚、三公九帝の位で

補佐して貴える人を得ていない。邱先生のことを伝聞して、眞実を体して規矩を履み行い博物を洽く聞き探り、窮理の道を探賾し、徳のいたれば君子の肅風を懐古し、眞人としての雅操をもって居られる由。久しい間巖谷に棲んで身を岩窟に藏して形を隠して居られる。先人たちの遺化を闡き、坐して有道の士が雲のように集って居られるようだ。仙人の踏み行う道がどれ程あるのか云うことができない程である。干戈の後にわかたのでありますが、先生が猶山東の舊境に隠棲している由を知り、朕の心は仰ぎ懐うてやむことがないのです。どうして渭水に同車し、茅廬を三たび顧みるの事蹟を考えて、お聞き届け下さらないのですか。山川が間を隔て阻んでいるのをどうしたらよいでしょうか。わたくし躬からお迎えする礼義を失しておりますが、朕といたしましては但だできるだけ齋戒沐浴し、近侍の官の劉仲録を選んで派遣し、輕騎と素車を用意して千里を遠しとせずに行きまして、謹んで先生お迎えしたいのであります。暫くの間は御窮屈と存じますが、沙漠の悠遠を思いにならず、むしろ民の苦悩を憂えることで当世の務とお考えいたゞけないでしょうか。或はわたくしの保身の術を教導していたゞき、わたくしも親しく邱先生の仙座に侍り、先生の身近にあって咳唾の餘暇を楽しませていたゞきたいと思うものであります。但、一言の教をお授け下さればよろしいのであります。今こそ聊かではありますがわたくしの微意をお汲みとり下さいまして、萬一にも詔章を明らかにして、先生がかって著わされた大道の一端でも望めますならば、こんなに有難いことは亦とありますまい。亦どうして蒼生たちの願いをお聞き届けにならないことが御座居ましようや。その故に此処に詔書を示してその宜しくすべの事情をお知り下さるよう願っているのであります。五月初一日　執筆〔郎案：この輟畊録巻十の文章はすでに再三紹介したが、夫々、訳文を故意に異にしてある〕

〔本文〕長春邱師がそうした招請に躊躇している間に、劉仲録がいうことに、先生の御名前は四海あまねく重んじられて居られ、皇帝成吉思汗は特にわたくし仲録に詔を賜い、遠い山海を踰越え、歳月の期限にとらわれる

ことなく、必ずお連れすることを期待すると申された。ところが邱師のいわれるのに「革命がおこり戦乱が収まったとは云っても、それ以来此うした彊域や彼の世界など冒険しないと旅もできない有様で、まことに煩勞が多い筈じゃ、」とあった。そこで仲禄が申し上げることには、「欽(よろこ)んで君命を奉じてどうして力を竭(つく)らないで居られましょうか。わたくしは今年の五月に、乃蠻國兀里朶に居るのであります、」と。

〔王観堂先生注〕乃蠻國兀里朶、普通には斡耳朶に作っている。〔郎案「諸橋漢和」に曰く、「斡耳朶(オルト)、蒙古語、番士に守られた宮殿、營舎、營幕の類、元史には行帳、行宮と訳す」と〕。遼史の國語解にいう、斡魯朶宮である、〔郎案：「諸橋漢和」に曰く「斡魯朶(オルタ)、蒙古の人、元の太祖の孫、朮赤の子、太宗の時、その弟拔都の西征に從ひ、欧洲諸国侯王の联合軍を撃ち破り、後に中央亜細亜阿拉海の東北を領有し、白帳汗と稱し、子孫世々其の地を治め白帳汗といふ（新元史、巻一百六）と」。乃蠻國兀里朶は、之れ乃蠻太陽可汗の故宮、〔郎案：「諸橋漢和」に曰く、「乃蠻(ナイマン)、部落の名、外蒙古西部の地に據有していたが、太陽汗に至って、元の太祖に滅された（元史、太祖紀）〕當さに金山の左右に存在する筈という。是歳帝は西域地方を親しく征伐された。その到達した所は也兒的石河〔郎案「諸橋漢和」に曰く、「也兒的(イルチン)石河、西シベリア西部を北流する大河、額爾齊斯河の別名、額兒的、葉兒的石、也里的失等と書く。（元史、太祖紀）〕〔郎案、百衲本「元史、巻一、太祖本紀一、「元年丙寅（A.D.一二〇六）…太陽罕の子、屈出律罕、脱脱とともに奪逃す。也兒的石河上で帝始めて金を伐つを議す」また三年戊辰「也児的石河に至り蔑里乞部を討ち之を滅す、脱脱は流矢に当って死す。屈出律は契丹に脱逃した。」とある。〕、に夏季に居住した。故に五月初にその地に居たことになる。乃蠻國兀里朶がそれである。耶律楚材の「湛然居士文集」九巻の「張敏之学士と七十韻西征の事に和す」に云う。「仲春に北を辞して初夏に望んで西涼を過ぐ」と。邱師の招請に応じたのが尚二月であることを知ることができる。

〔本文〕さて勅旨を得て六月に白登の北、威寧に到達したのです。〔郎案：「諸橋漢和」に曰く、「白登、縣名。

金に置く、白登堡、山西省陽高縣の南（讀史方輿紀要、山西、大同府、大同縣）白登城、府東北百十里、因故白登臺、而名、遼置長青縣、今改曰白登」）「羽客〔郎案：「諸橋漢和」に曰く、羽客、羽のはえた人、仙人をいふ（庾信、卭竹杖賦）和論人之不重、待羽客以相貽（倪璠注）羽客、羽人也、山海經、有羽人之國、不死之民（宋之問、送司馬道士遊天臺詩）羽客笙歌此地遠、離苑數處白雲飛、(二)道士を云う（輿地紀勝）縣令楊文逸嘗夢一羽衣（事物異名録、仙道、道士）大霄琅書經、人行大道號曰道士、又曰鍊師、曰羽客、又曰黄冠子（書言故事、道教類）稱道士曰、羽客、羽士（李白、王右軍）右軍本清眞、瀟洒在風塵、山陰遇羽客、要此好鵝賓、」〕仙人常真からの諭（さとし）を得ました。七月に徳興、〔郎案：「諸橋漢和」に曰く、「徳興、府名、金に置く故地は河北省涿鹿縣（讀史方輿紀要、直隷）保安州、禹貢冀州地、春秋戰國時、属燕、秦爲上谷郡地、両漢因之云々、金大定初、升徳興府、元初因之、至元初復改奉聖州、属宣徳府、尋改曰保安州、明初廃、永樂十三年、復置保安州、直隷京師」〕に到りましたが、居庸関の路を以って経過しようとしたのですが塞っていたので、燕京の士卒を発遣して来り迎えたのです。八月に京城に抵（いた）ったが、道士たちの多くが皆云っていたのに、「邱處機師のお出でになるのかならぬのかまだ必ずしも決ったわけではない。中山を過ぎ眞定を歴巡したところ、師は東莱州におられるとの風聞があった。」とありました。又益都府安撫司官呉燕、蔣元とに会って始めてのその詳報を知ったのです。

〔王観堂先生注〕金史の地理志によると、山東の東路を京東東路となしたことが見え、〔郎案：乾隆四年刊金史巻二十五地理志二「山東東路爲京東東路、治益都府二、説鎮二、防禦二、刺郡七縣五十三、鎮八十三、益都府鎮海軍國、初仍舊置軍、置南青州節度使、後陞爲總管府、置轉運使、大定八年置山東東西路統軍司、産するもの石器、玉石、沙魚皮、天南星、半夏澤、瀉紫草云々」〕治益都となした。是歳張林は宋に降り、京東安撫使となって此れを統治した。

〔本文〕兵隊五千人をもって邱處機師を歓迎しようと思いましたが、呉燕、蔣元らの云うことに「京東の人たちは、宋と元のいずれの王朝にも和議を結んだので、多くの人たちの心が稍安んじた筈」と。

〔王観堂先生注〕是歳には京東の地域は宋の領土となっていて「元朝秘史續集」によると、成吉思汗は使臣主不罕を差遣して、宋朝と通好することが罕でなく頻繁に行われたが、金国によってその通好も阻まれてしまった由である。「蒙韃備録」によると、「近いところでは我が入聘の遣宋副使速不罕はすなわち白韃靼であった」。蒙韃備録を検討してみるのに寧宗嘉定十四年辛巳（A.D.一二二一年）に作っているが、〔郎案「蒙韃備録箋證」海寧王國維、「蒙古史料四種」正中書局印行本所收、跋文に曰く、「此書題するに宋の孟珙の撰、書中亦自ら名を稱して珙となす。宋史、蒙珙の伝を案ずるに、未だ嘗って蒙古に使したことがなく、疑うに別の一人であろう。書中に云う處で、去歳庚辰年（A.D.一二二〇）今辛巳年（A.D.一二二一）是れはこの書物を辛巳の年に作ったので、宋の寧宗、嘉定十四年、蒙古太祖の十六年に当る。是歳に宋は苟夢玉を蒙古に使として派遣し、元史、太祖十六年、「宋が苟夢玉を遣わして来り和を請うた」とある。このことを指す。〕是の辛巳歳以前にすでに蒙古朝は信使を派遣して宋朝に到達している。疑ってみるとそこで此の年にそうした出来事があったのだろう。此処で所謂元、宋両朝の和議があったというのはこの事を指すのだろう。

〔本文〕「今、たちまちにして兵軍隊を提げてもって侵入すれば、きっと皆は險嶮の地に據って自衛するだろう。そうした状況を察して、邱處機師はそれを畏れて、今や桴に乗って海上を行こうとされたのである。誠に事を穏便にすまそうと欲するなら、必ずしもこうする必要もなかっただろう。」とあった。そこで呉燕らの言葉に從って自分から志願してきた者二十騎を募り、以て進発して益都にまで到った。呉燕、蔣元をしてその將軍張林に馳せ知らせたので、張林は武装した兵士一万人をもって郊外に劉仲禄を迎えたので、笑って曰うことに「此處を過経する理由は、長春眞人を訪問しようという希望のためである。なのに、どうして貴方は武装した

兵士たちなどを率いているのかね」と云った。ために將軍張林はその軍卒たちを解散させ、お互いに轡をつらねながら長春眞人の所にいたったのである。このことを聞いた人は皆、仲禄のこの言葉をもって、人に警め謀らないことはなかった。張林は復駅馬を提供し、濰州に至り、尹公に見え得たのであった。

〔王観堂先生注〕尹とは長春の大弟子の清和大師尹志平のことである。王惲秋澗先生文集五十六〔郎案、「中國叢書綜録」2、子目、集部、別集頌、「秋澗集一百巻（元）王惲撰、四庫全書、集部別集類、擒藻堂四庫全集薈要、集部、秋澗先生大全集一百巻、附録一巻、四部叢刊（初次印本、二次印本、縮印二次印本）集部」とある。〕に記載するところの「尹公道行碑」によると、大元己卯歳（A.D.一二一九）、太祖聖武皇帝は便宜劉仲禄を派遣して、長春眞人をして寧海の崑崙山に起たしめようとした。聞くところによると尹師をして其の上足となし、假りに道をとり濰州において會見しようということになった。遂に同宣詔勅の趣旨に合致し会見した。これより以前、金や宋との交聘の砌には、長春師は堅く臥して起たず。是に至って長春師に請うて曰うことに、「人心を開化し、人を済度する今その時に当っていると思われます、」と。長春眞人は承諾して、北方に朝覲する決意を堅めた。

〔本文〕冬十二月に一緒に東莱州に至った。そして皇帝の宣旨で召請している由を伝えた。ところが長春師はその由を聞いて辞退することができないで、そこでおもむろに劉仲禄に謂って曰うことに、「此中艱食、公等且往益都俟我」〔郎案、「此の頃食糧事情に悩み苦しんでいるので、貴方たちは益都に行ってわたくしを待て」艱食は飢饉を指すこともあり。食事のままならないことを指すか。未詳〕上元醮が終れば〔郎案：正月十五日当り「諸橋漢和」に曰く、「上元節、陰暦正月十五日に膏粥を作って門戸を祠る日で、或は角戯をなし、提燈を吊り、士女も夜遊する、現在も皆職を休み宴を張って楽しむことになってゐる。〔荊楚歳時記〕今州里風俗、望日祭門、先以楊枝挿門、隨楊枝所指、仍以酒舖飲食及豆粥、挿箸而祭之、其夕迎紫姑神以下〔玉燭寶典〕正

月十五日作膏粥、以祠門戸〔開元天寶遺事〕百枝燈樹韓國夫人、置百枝燈樹、高八十尺、上元夜點之、百里皆見光明奪月色也〕。正月十五日当り十五騎の兵を派遣して來れ、」とあったので十八日に出発することになった。

〔王観堂先生注〕「蒙韃備録」に彼の奉使を宣差と曰う

〔本文〕宣使の劉仲録は衆と一緒に西の方益都に入った。長春師の（藏本は都の下に師の字が有った）選択に預った門弟子は十有九人であった。

〔王観堂先生注〕下巻と附録に只、十八人の姓名を記載してある。

〔本文〕そこでその來駕を待っていると、預期の如く迎えの騎至り、彼らと俱（とも）に行き、濰、陽を経由して青社に至る。宣使劉仲録も已に去って出かけて行っていた。之を聞いて張林の言うには、正月七日。

〔王観堂先生注〕是歳太祖の十五年庚辰に当る。

〔郎案；此處に Bretschneider ; Mediaeval Research from Eastern Asiatic Sources. Si Yu. ki（長春眞人「西遊記」訳注）を訳述すべし。〕

宋史、西遊記に対する彼の序文に曰く

長春は高度に完成せる人（眞人）であった。当時予は成年に達していたが（わたくしは彼について多くのことを聞いていたが）此の卓抜な人間は長い間天上界に遊行していたに違いないと確信している。しかしまた彼の遷仙の後、この宇宙の仙界に雲と供に遊んでいたし、また彼を見るを得ないのは甚だ遺憾だった。併し乍ら南宋、嘉定十二年（A.D.一二一九）の冬季に突然噂が飛んで師が（注94、長春は常にこの物語りのなかでは師と呼ばれている）山東省の海の近くに居住している上、成吉思汗によって旅に派遣されるために招請せられた由であった。その翌年、嘉定十三年（A.D.一二二〇）の春に実際に燕京（北京）に到着していたし、玉虚観に滞留していた。そこで、わたくしは有難いことにも彼に個人的にお目に掛かり満足を得たのだった。

彼が坐を占めた時に、彼は微動だにしないで、屍を見るようだった。ところが上を向いて立ち上った時、今度は樹木を思わせ、彼の身振りは雷の如く歩きだすや迅風の如きものだった（注95これら全ての性格は、高度な神仙の達人の域を證しとしてみせる、道家によって考えられたものであり、感情を超脱している）。彼との会話からわたくしには多くを見聞した人間であることがわかった。彼長春にとって読まない本はなかったのである。日毎にわたくしは長春に対する興味深い尊敬の念を覚えたのだった。彼の榮光に魅せられた人びとの數は、日増に増加してゆき長春の弟子であることに誇りを覚えたのである。（成吉思汗によって派遣された）宣使劉仲録が第二回目に到達した時、師長春は西方に向って旅立っていた。彼の出立に際して門弟たちは何時戻ってこられるだろうかを訊ねた。長春は「三年後に」と答えたと云う。このことは嘉定十四年（A.D.一二二一）の正月のはずだった。そして実際に嘉定十七年（A.D.一二二四）の正月に、師は正に三年間の留守の後に西方から帰還したのだった。彼が先に予言したように、この西方旅行において、師長春は二万里以上も旅したわけである。彼は吾々の地図に載っていない場所を観、さらに雨にも露にも濕うことがなかった沙漠を旅したのだった。長春は到る所何處でも尊敬をかちえたのだけれども、旅行そのものは自らにとって苦痛多きものであった。にも不拘、彼は常に快活で会話を好み、そして詩文を書いた。長春は自然の種々相を愛した。彼が滞留した到る所で当時著名であった人びとの全てを訪問した。長春の生死観に関して云えば、それらを寒暖と同じく考え、しかもそれらに就いての考え方は、何ら自らの心を患すことがなかった。若しも道（眞理）に参入していなかったとしたら、こうした完璧な悟りを得ただろうか。

南宋、紹定元年（A.D.一二二八）七月二日に当るの日に記す。

「西遊記」の中国文に上に述べたような長春眞人の閲歴の簡略な記録をもって始まる。長春師は金朝や宋朝の宮廷からも招聘せられたし、それに関联したいろいろな招待を拒絶したのだった。蒙古太祖十四年（A.D.一

二二〇）皇帝成吉思は彼の侍臣劉仲禄を二十騎の蒙古護衛兵と伴に派遣した。長春は当時山東に居った。劉仲禄は皇帝からの招待を長春に告げ、金牌を送った。その金牌の上には皇帝自らが取り扱われるのと同じ待遇が、師長春に適用されるよう書かれてあった。仲禄は元朝太祖十三年（A.D.一二一九）の五月ないし六月に皇帝から長春師を探し求めるよう命令を受けていたのだったが、それを報告している。その当時皇帝は乃蠻の兀里朶に居住していた。（注97、蒙古語の Ordo（兀里朶）＝皇居の意味がある。さらに注137を参照のこと）（注98、乃蠻の種族は Rashid, eddin（d'ohsson：i 425）によると、イルティシュ河の水源地近くに居住していた。そしてアルタイ山脈の東西に分布していた。中国人歴史家は彼らに対して全く同じ国を指示している。このナイマン人たちについて言及していた当時、嘉定十三年（A.D.一二一九）には既に中国に服従していたと見え、成吉思汗はナイマン人の汗の居処（オルド）に暫くの間滞留していたことがあった。その地で成吉思汗は西域遠征の準備に怠りなかった。尚注5の終りを参照、秋季に成吉思汗は西域に進発した）師長春は仲禄と同道するのに同意して、彼と騎行を伴にする護衛兵のなかから十九騎を選びだした。嘉定十四年（A.D.一二二〇）の始め（二月頃）彼らは長春師ともども北へ向って進発した。そして第二月（四月の始め）の終り頃、燕京（北京）に到着し、そこで師長春は大変な歓待を享けた。

燕京において師長春は成吉思汗皇帝が西方に移動したことを知らされた。そして長春が長途の旅の疲労に老令のため耐えられないことを意識していた。長春は皇帝にお目通りするため成吉思汗の帰還まで待つよう要請した。そして皇帝の裁許を諮問すべく派遣せられた。長春を驚かしたのは尚他の問題があった。長上の命令をうけた仲禄は、皇帝の御奥（ハーレム）迄連れてゆくため多くの護衛兵を召集した。長春師は仲禄に云ったのだが、「斉国から魯国まで何らなすことのないままに、孔子も魯を彷徨したものだ（魯は孔子の生国であった）。わたくしは山の中の無作法者に過ぎない（注99、長春は自らについて言及する場合に、常にこうした表現を用

いた）ので、どうして少女たちの一団と一緒に旅行できようか」といった。

劉仲禄は皇帝の御前にこれらの問題点を提供するために報告書を携えた急使を派遣し、また師長春も亦皇帝に住居の件で発信した。

嘉定十四年（A.D.一二二〇）第四月十五日（五月十八日に当る）に師長春は彼の護衛兵と伴に、劉ともども燕京（北京）を進発した。そして北方に向って旅したのである。その道程は居庸関を経ていった。（注100、居庸関は北京の北部の狭路に今でも存在していて、万里の長城を訪れたヨーロッパ人旅行者に、南溝峠という名前でこの地点が知られている。この南溝は峠の南入口にある村落の名前である。ウィリィー氏の論文「居庸関にある古代仏教銘文に就いて」王立アジア協会雑誌、一八七〇年刊を参照のこと。〔郎案「諸橋漢和」に曰く、「居庸、関の名、軍都関、納款関、薊門関ともいふ。河北省昌平縣の西北、延慶縣の南、両山が夾侍して絶險をなす。呂氏春秋の所謂九関塞の一つ。明の徐達が関の南口に城を作って京師の北面を固めたのを世に呼んで南口といふ。関の壁内に漢、満、蒙、回、女眞の五種の文字を刻んでいるので名高い。今平綏線が通過している。〔呂覽、有始〕何謂九塞、大汾、冥阨、荊阮、方城、殽、井陘、令疵、句注、居庸〔漢書、地理志〕上谷郡縣十五、居庸縣（注）有関〔後漢書、光武紀〕建武十五年、徒雁門、代郡、上谷三郡民・置常山、居庸関以東〔讀史方輿紀要、直隷、重險、居庸〕居庸関・在順天府昌平州西北二十四里、延慶州東南五十里、関門南北、相距四十里、兩山夾侍、下有巨澗懸涯峭壁、稱爲絶險、地理志、居庸塞、東連盧龍、碣石、西属太行常山、實天下之險、有鉄門関、呂氏春秋、淮南子皆曰、天下九塞、居庸其一也。亦謂之軍都関、地記太行八陘、其第八陘爲軍都、酈道元曰、居庸関在上谷沮陽城東南六十里、軍都在居庸関南、絶谷纍石、崇墉峻壁、山岫層深、側道偏狭、林部邃嶮、路戈谷軌、唐志、幽州昌平縣北十五里有軍都、陘縣西北三十五里、爲居庸関、亦謂之軍都関、又居庸関亦名納款縣、又名薊門関、而居庸軍都其他通稱也、」〕一夜（そ

の峠の）北部に留っていたところ、吾々は盗賊の過ぐるに逢うた。併し彼らは会釈をして「吾々は師長春に危害を加えるものでない」と告げた。

嘉慶十四年（A.D.一二二〇）冬季の始めに阿里鮮が到着し、そこで王子斡展により護衛の任を帯びて派遣されたのだった。そして間もなく他の護衛隊がやって来た。（注102、此処で王子斡展というのは成吉思汗の弟を意味しているらしい。元史のなかに彼の名前は屢々言及せられていて彼の名前は O-ch'i-ghin（斡赤斤）と綴られている。恐らく彼の名前は Tie-mu-go（鉄木哥）その O-ch'i-ghin は姓名である。蒙古語における udjughen は「小さい」といった意味である。元史巻百七世系表を参照のこと〔郎案：百衲本「元史」一百七、表第二、宋室世系表に「烈祖神元皇帝五子、長太祖皇帝次二搠只哈兒王、次三哈赤温大王、次四鐵不哥斡赤斤、所謂皇太弟、國王斡嗔那顔者也」〕。rashid ラシッド氏は彼を Temugu Udjukin（d'Ohsson, i. 212. 426）と呼んでもいる。その当時、成吉思汗は西域に戰爭していたので、彼の弟の Udjukin は蒙古帝国の政治をあづかり司っていた。彼はラシッドによると（d'ohsson, ii, 7）〔郎案、ドーソンの蒙古史の原文、巻二七頁の注一、のなかにテムゲ・オトチギンが見えて居り佐口透氏の訳注本「モンゴル帝国史」2、一九六八年十二月、平凡社刊、東洋文庫⑱第二篇第一章、原注㈠の末尾に「一二六〇年に筆を執った歴史家アラー、ウッディーン〔ジュワィニー〕は、チンギス汗の子孫は当時一万人を数えたと伝えている。テムゲ・オトチギンとカチウン諸子の遊牧領地（ユルト）はモンゴリアの東部に位置し、女眞族地方に最も接し、カラアルジン・エレトとウルクイ河に近く、イキラス氏族の故土であった」（前掲書、六〇頁）〕彼は蒙古地域の北東隅に居住地と領土を持っていた。その地は Olkui 河と Calaltchin alt の近くに位置していた。Olkui 河はロシア製作地図の Ulgui に当るらしい）

彼らは成吉思皇帝の処迄案内するに当って、師長春をその王子に託すべく招待したのだった。王子は叩頭の

儀礼挨拶をなした。と同月に、急使は成吉思皇帝の帰還について派遣された。そして皇帝から師長春へ宛てた手紙を持参した。その書簡のなかに師長春は再び最も懇切な言辞で招待された。仲禄は亦一通の手紙を受け取り、その聖者を最大限の注意を払って待遇するようにとの、皇帝の命令が含まれていた。そこで師長春は仲禄に確認するために次の様に云った。即ち「今や冬季が始まったので、砂漠を越える路は寒冷であり、遙か遠い。そのために吾々同行者たちは、こうした長い旅行に要求される全ての品物を整え準備できる筈がない。若しも居庸関において冬季を越すのが好いと思われるので、春になって出発したら如何がものだろうか。」とあった。仲禄も同意して、そこで彼らは居庸関で冬を越したのだった。

南宋嘉定十四年（A.D.一二二一）正月元旦（第一月八日に当る）吾々は再び出発した。その日は天気晴朗だった。師長春の友人たちは贈り物を携え、師の馬の前に立ち並び離別の涙を流し、そして彼の師に訊ねた。「師よ、何万里の遙けき旅をなさるわけですが、何時の時か再び吾々は師の前に額付く幸福が得られるでありましょうや。」と。師長春は答えて、「若しも皆々方が信仰心を強く懐いておりさえすれば、わたくしは皆々方と再会できると思うておるのじゃ」と。友人たちが更に強いて質問を投げかけると長春は回避的な答えをして、「吾々が滞留しようとまた旅立ちしようと、自らの意志で行えるものではない」と答えた。併し友人たちはそれに満足しないではっきりした返答を要求したのだった。そこで師長春は次の様に答えた。「わたくしは三年経ったら戻って来よう。―三年経ったらな。」と二度繰り返されたのだった。

第一月の十日（蒙古太祖十七年一月三日に当る）吾々は翠崿口に一夜を過した（注103、中国の大彊域地図によると、この地は張家（カルガン）口の西約三十里の処にある狭い峪間の名である。〔郎案：「諸橋漢和」に曰く「翠屏山、山西省渾源県の南（清一統志）翠屏山、亦名高氏山、亦作高是、山海經、高是之山、滱水出焉（讀史方輿紀要、山西、大同府、渾源州）翠屏山、在州南四十里、志云、在恒山之南、以秀麗如屏而名。山西省蒲縣の西

南、（讀史方輿紀要、山西平陽府蒲県）翠屏山、在縣治西南一里、山勢聳秀、巖下有湧泉」このいずれかならむ。翠屏口の名、読史方輿紀要中に見えず。〕次の日吾々は荒蕪の峡野狐嶺を通過した。（注104、嶺は中国語の意味では「峠」であり、また「山の峡間」を意味する。野狐峡、また野狐山峡、嶺は万里の長城の門口の一つ、山防堡口、張家口関門の西隣りに位置する。予が「北京考古歴史研究の注記190を参照のこと。〔郎案：尚、「諸橋漢和」に曰く、「山名、山西省大同縣の西北〔遼史・興宗紀〕重熙六年夏四月、獵野狐嶺〔元史、木華黎傳〕木華黎從太祖伐金、金兵四十萬陣野狐嶺北」とある。〕、さて南の方に大行山脈をそして他の山々を望んだ。（注105、北京の北と西を周って連る山の名）〔注104の続き、十三世紀の半ば頃に中国人の旅行家張徳輝が北京からカラコルムに赴いたことがある。保存されていた彼の旅行記は Archim. Palladuis によってロシア語に翻訳されて“Mémoirs of the Siberian Section of the Geogr. Soc.”一八六七年に収められた、その英訳版はSchuylerによるもので「地理学雑誌」一八七五年版にみられる。〔郎案「中國叢書綜録」2、子目、史部、地理類、邊堠紀行一巻、（元）張徳輝撰、説郛續弓二十六、塞北紀行、一巻、漸学廬叢書第一集、皇朝藩屬輿地叢書第二集、元張參議輝卿紀行地理攷證、一巻、（清）丁謙撰、浙江圖書館叢書、第二集」とあり、余が架蔵せる「説郛」には常徳輝の邊堠紀行を載せず。〕この長春眞人と全く同じ道を辿った旅行の前半部で張徳輝はこの峡谷を O-hu-ling と呼んでいる。Ye-hu, O-hu といった言い廻しは蒙古語を表現したものだろうと思われる。Yeke は蒙古語で「大きい」と云う意味である。）山嶺の気は爽快であり、北の方には唯寒冷な沙漠があり、乾燥し切った草原が続いている。此處こそは、正に中国自然の息吹きの感じられる限界である。（注106、北京から Kiakhta へ抜けてゆく旅行者たちは張家口の北を通らなくてはならない。〔長春や張徳輝によって辿られた古代通路の僅か許り東に当る〕峻險な山の頂きを越え、そして自ら蒙古平原の上にいるのを見出すのである。実際、天候や植生などの変化は此処では全く突然に惹る。わた

くしの友人である Bushell ブッシェル博士は、興味深い「外長城帯紀行の覚書」Notes of a journy Outside the Great Wall.（J.R.G.S. vol. xliii）のなかで、略六五〇年以前旅行したことのある中国作家として、正に全く同じ観察注記をなし、蒙古草原に入った時に気候の激変に逢ったことがあったと云っている。亦 Przwalsky〔Mongolia, s. i. 33（「蒙古草原」巻一、三十三頁）〕の記述と比較参照されたい。「長城が連なっている軸線に沿うたそうした放牧場と、張家口の北にあって、中国の温暖な平原と蒙古の高い冷え冷えする高原とを非常にはっきり切分する所でもあった。」…〔プルジュワルスキー氏、蒙古草原第一巻、一三一頁参照〕「五月六日に再び蒙古の辺彊地帯軸線のそうした地点に立っていたが、その地が張家口に向って下降しているのが確められた。その山岳景観が示す大きな展望は、吾々の足許に拡がっていて、遙か彼方に、エメラルドのように輝く中国の明緑色の平原がみられたわけである。此処ではその平原が温和で春を思わせるが、自然は長い冬季の眠りから丁度醒めつつあった所である。」と。）吾々は風雨に曝された人骨で覆われた古戦場を目睹した。（注107、成吉思汗が一二一一年に金軍を撃破した場所であった。この（野狐嶺）の戦闘は元史のなかに記録されている。〔郎案：百衲本「元史」、第一、本紀第一、太祖六年、辛未、「二月、帝自ら南山方を伐つ、金將定薛を野狐嶺に破り、大水濼豊利等の縣を取った」とある〕

更に北方に向って旅して、吾々は撫州を通過した。（注108長城帯の北、蒙古平原の南部、そして此処で言及せられている地域なのだが、巨大な平原で樹木もなく、唯併し夏季には豊かに草が生い繁り、水も豊富である。此の大草原で帝国の放牧地は東西に渉り巨大なまでに拡がっている。その北方に丘陵の低い連なりが荒蕪なゴビ沙漠から区画している。此の古代の「草原の国」にある多くの守衛堅固な地域は、蒙古の中国への野生溢れる騎馬族の侵入に対して防禦するために造立せられたものだった。この撫州こそこうした防衛地のなかで最も重要なものの一つであった。〔郎案：歴代地名要覧「撫州（金）＝高原縣、18、直隷萬全都指揮

使司　附見開平故衛城、興和城〔讀史方輿紀要、巻十八、直隷九〕野狐嶺、衛北三十里、勢極高峻、風力猛烈、雁飛遇風轍墜地、宋景祐四年（A.D.一〇三七）契丹主宗眞獵于野狐嶺、又北有獾児嘴、嘉定四年（A.D.一二一一年）、蒙古破金撫州、將南下、金將完顔九斤駐兵野狐嶺以備之、蒙古進至獾児嘴、金人遁走、至元十九年（A.D.一二八二）如野狐嶺、明洪武三年、李文忠北伐出野狐嶺、敗元兵於察罕脳児、景泰初〔A.D.一四五〇年〕上皇自北還也、先遣兵送至野狐嶺、撫州即今癈縣、興和所察罕脳児、見開平衛。」とある〕

〔郎案〕王観堂先生校注「長春眞人西遊記」の本文をブレットシュナイダー氏は多く記載を省略せり、以下その欠文を補綴せんと欲す、即ち、王先生の校注文をも併せ抄記す。

〔本文〕有騎四百軍於臨淄（りんし）、青民大駭、宣使逆而止之、今未聞所在師、尋過長山及鄒平

〔口訳〕騎兵四百が張林から来て臨淄に宿營したので、所の民衆は大変駭（おどろ）いた。劉仲録（宣使）は逆行して之を制止させたが、今のところ未だ師長春の居場所が判らない有様だった。師は長山と鄒平を相次いで通過された。

〔郎案：青山編「中国歴代地名要覧」に「鄒平縣（宋景德鎮以後）山東省済南道鄒平縣、31山東済南府鄒平縣〔讀史方輿紀要、巻卅一、山東二、鄒平縣、府東北百七十里東至長山縣二十里、漢置鄒縣、属済南郡後漢曰鄒平、晉復曰、鄒縣属樂安國（カ）後癈、北齊置平原縣、隋開皇十八年、復日鄒平属齊州、唐初属譚州、尋置鄒州於此領鄒平長山二縣、貞観初州癈縣、属淄州宋因之改属濟南路、今編戸五十七里。〕

〔本文〕二月初届濟陽、士庶奉香火迎拜於其邑南、羽客長吟前導、飯於養素庵、衆僉曰、先月十八日、有鶴十餘、自西北来飛、鳴雲間俱東南去。翌日辰巳間、又有數鶴來自西南継而千百焉。或頡或頏、獨一鶴拂庵盤桓乃去。今乃知鶴見之日、即師啓行之辰也。皆以手加額。留數日。二月上旬宣使遣騎來報、已駐軍將陵、艤舟以待明日遂行、十三日宣使以軍來迎、師曰來何暮、對以道路榛梗特往燕京、會兵東備信安、西備常山。

〔口訳〕二月の初濟陽に到達した所、役人も市民も香火を奉じてその町の南にお迎え申し上げた。道士たちが詩

を吟じながら先導して、養素の庵で食事した。多くの人たちが皆云うことに、「先月十八日に鶴が十羽余り西北の方から飛来して、雲の間を鳴きながら全部東南に去りました。翌日辰巳の時刻（午前八時から十時）の間に、又數羽の鶴が西南の方から来て、続いて千羽も百羽も後を追って来たのです。或る鶴は高く或るものは低く飛びましたが、唯一羽の鶴だけは庵の上をぐるぐる旋回した上で飛去りました。今となって判ったことですが鶴の見えた日に、すなわち長春師の出発された目出度い時だったわけです。」と。皆は手を額に当てて敬礼したのだった。二月上旬に劉忠禄が騎兵を派遣して来り報じ、すでに軍隊を将陵に駐め〔郎案「中國歴代地名要覧」に曰う「將陵縣（隋－金、明初）山東省（東臨道）德縣東、31、山東濟南府德州」〕舟を艤装して明日を期して進発するのを待っている由だった。十三日に仲禄は軍隊を率いて長春師を迎えにやって来た。師が申されるには「どうして来るのが遅くなったのじゃ」と。その返答に「道路が塞がって通じなかったので燕京迫行き、軍隊に会って東は信安に備え〔郎案「中國歴代地名要覧」に「新安縣（元・明）河北省（保定道）安新縣、東ノ新安鎮、12、直隷、保定府安州新安縣」〕西は常山に備えたのです、」とあった。〔郎案、「中國歴代地名要覧」に「常山、河北省（保定道）曲陽縣西北百四十里、10、直隷恆山、亦、常山、山東省（膠東道）諸城縣西南三十里、35、山東、青州府渚域縣」と。この常山を出すも前者か〕）

〔王観堂先生注記〕劉因静修先生文集十六、懐孟萬戸劉公先塋碑銘、當金主貞祐棄河朔徒都汴、時有張甫者、據信安、武仙者據真定易定之間、大爲所擾、時武仙雖失真定、尚據西山、抱犢諸砦、故以兵防之。

〔口訳〕〔郎案「中國叢書綜録」2、子目、集部、別集類に「静修先生文集、十二巻、（元）劉因撰、畿輔叢書、叢書集成初篇、文学類、静修先生文集、二十二巻、（元）劉因撰、四部叢書初次印本、二次印本、縮印二次印本。）集部」とあり、巻十六とあれば後者二十二巻本を指す〕劉因撰の静修先生文集巻十六所收の懐孟萬戸劉公先碑銘によると、金朝の主宣宗が貞祐年間（A.D.一二一三～一七年）に黄河以北の地を棄て汴京に遷都した

折、張甫なる者が在って信安に據居した〔郎案、「中國歷代地名要覧」に「信安縣（金—元）信安城、河北省（京兆）覇縣東五十里、11、直隷、順不府覇州」〕武仙なる者は真定と易定の間に據った〔郎案「中國歷代地名要覧」に云う、「眞定府（五代唐漢、宋—金、明）河北省（保定道）正定縣、14、直隷、眞定府、易定、同上書に易縣（隋—明）として、「河北省（保定道）易縣、12、直隷、保定府易縣」とあって易定の地が挙げられていない〕大いに擾騒する所があった時、武仙は真定の地を失ったが尚西山に據って、諸の城砦を擁して兵を出し防禦したことを云っているが、それだろう。」

〔本文〕仲禄親提軍、取深州下武邑以辟（藏本作闢）路、構橋於滹沱、括舟於將陵、是以遲。師曰此事非公、不克辨、次日絶滹沱而北、二十二日至盧（藏本作謳）溝、京官士庶僧道郊迎、是日由麗澤門入。

〔口訳〕仲禄は親しく軍隊を率いて深州を取り〔郎案「中國歷代地名要覧」に「深州（五代周—明初）河北省（保定道）深縣南四十五里、14、直隷、眞定府深州」〕武邑を降伏させ〔郎案「中國歷代地名要覧」「武邑縣（隋以後）河北省（大名道）武邑縣、14、直隷、眞定府冀州武邑縣」〕道路を開き橋を滹沱（こだ）河〔郎案「中國歷代地名要覧」に「滹沱河、山西省（雁門道）繁縣ニ發源、東南察哈爾省南郊ヲ經テ、河北省（津海道）天津市附近ニ至リ衛河ニ合ス、10、直隷大川滹沱河、12、直隷保定府祁州東鹿縣、13、直隷河間府河間縣」〕に架けて、舟を將陵〔郎案「中國歷代地名要覧」に「將陵縣（隋—金、明初）山東省（東臨道）德縣東、31、山東濟南府德州」〕に用意いたしたりしましたので、それで遅れたのであります。」と。長春師の曰（いわ）れるには「このことは卿（そなた）でなければ出来ないことじゃ」とあった。次の日に滹沱河を渡って北に進んだ。二十二日に盧溝に到着し都の役人を始め、民衆・道士・僧侶が郊外に出迎えた。この日麗澤門から京に入った。

〔王観堂先生注〕金史地理志、中都府城門十三、西曰麗澤、曰顥華、曰彰義

〔口訳〕金史の地理志の中に都府城門が十三あって、西側から麗澤門と云い、顥華門、彰義門がある由。

〔本文〕道士具威儀長吟、其前行省石抹公

〔口訳〕道士たちは威儀を正して詩賦を吟じながら先導し、次いで行省の石抹公が。

〔王観堂先生注〕元史、石抹明安傳、丙子以疾卒。子咸得不襲職、爲燕京行省、彭大雅黑韃事略、明安契丹人、今燕京大哥行省、憨塔卜其子也。憨塔卜、即咸得不。

〔口訳〕元史の石抹明安傳に丙子（A.D.一二一六年）疾をもって卒った。子の咸得は父の食を襲わずに燕京行省となったとある。彭大雅の「黑韃事略」に明安を契丹人、今燕京大哥行省憨塔卜は其子也とある。憨塔卜は即ち咸得にあらず。〔郎案、観堂先生引く所の石抹明安は、百衲本「元史」第一百五十列傳卷第三十七、石抹明安列傳あり、以下、抄訳する「石抹明安は桓州人〔郎案「中國歷代地名要覧」に「桓州城（金虎）○獨石口東北一百八十六里ノ庫爾圖巴爾哈孫城、即チ四郎城ナリ、18、直隷、萬全都指揮使司、附見聞平故衛」とある〕性質は寛厚で小節に拘泥しない（中略）壬申（A.D.一二一二年）太祖師を率いて攻め、金の撫州を攻撃し破ったが南方に逃げようとした金の帝は反撃して元を討つため紇石烈九斤を召した。來援の時に明安はその麾下に在った。九斤の明安に云うことに、汝はかつて北方に使して、蒙古国主を識っている筈だ。その陣に往き臨み問うに挙兵の由をもってし、そうでなければ即ち詬れと。明安は初めはその教える通りにしたが、俄に馬に鞭打って来降した。太祖は縛る様に命じて戦の終るのを待った。金丘が敗北したので明安に鞠問して申された。汝は何で余を罵ってその後投降したのじゃ、と。明安の答えて云うに臣には元来降参する志を以て居りましたが、九斤がその志を見破るのを恐れてあの様に申しました。どうしてそれ以外天顔を拜見いたしましょうや、と。帝はその言を嘉して彼を釈放した（中略）明安は早くから軍旅に従い、敵の勝算を量って策略に遺漏がなかった。厳しい寒さ、酷しい暑さでも、未だ嘗て士卒と苦楽を供にし、甘苦を供にしないことはなかった。金朝の府庫を得て収蔵するその珠玉錦綺の財宝を、明安は逐一その數を上進して、未だ一度もその僅かなものも自分

の所有にすることがなかった。すでに中都にあって、太傅邵国公兼管蒙古漢軍兵馬都元帥を加附された。丙子（A.D.一二一六年）疾病で亡った。燕京に於てで年五十三才。子は二人あって長子咸得で父の職を継がず、燕京行省となった。次子は忽得華云々」とある此の行省の石抹公とは咸得のことである。〕

〔本文〕館師於玉虚観、自爾求頌乞名者、日盈門。凡士馬所至奉道弟子、以師與之名、往往脱欲兵之禍、師之道蔭及人如此。

〔口訳〕咸得は師を玉虚観に宿泊させた。それから以後に頌文を求め名号を乞う人たちが日々門前に満ち溢れた。凡そ戰士騎馬の者で何処へ行っても道を遵守する弟子で、師がその者に名号を与えた者たちは、欲に眼のくらんだ兵士の禍害から免れたので、師の道の御蔭が人に及した影響はこのようなものであった。

〔王観堂先生注〕姚燧牧庵集十一、長春宮碑、癸未至燕年七十六矣、而河之北南、已殘而首鼠未平。鼎魚方亟、乃大辟元門、遣人招求俘殺於戰伐之際、或一、戴黄冠而持其署牒、奴者必民、死頼以生者、無慮二三鉅萬人云云。據此記、則長春於庚辰入燕、已爲此事、不待癸巳也。孫錫序、己卯之冬日、流聞師在海上、被安車之徵、明年春果次於燕、（中略）由是日益敬其風、而願執弟子、禮者不可數計。自二三遺老、且樂與之遊、其餘可知也。此記中欲兵之禍、用伯夷事、蓋亦謂諸遺老也。

〔口訳〕姚燧の牧庵集巻十一、〔郎案：「中國叢書綜録」2、子目、集部別集類、「牧庵文集三十六巻、（元）姚燧撰、四庫全書、集部別集類、牧庵集三十六巻武營殿聚珍版書（武營殿木活字本、福建本、廣雅書局本）集部四部叢刊（初次印本、二次印本、縮印二次印本）集部、叢書集成初篇、文学類〕の長春宮碑によると、癸未（A.D.一二八三年、世祖、至元二十年）は燕京に至った折長春の年七十六才である。而して黄河の南北も残党が居り金主も未だ平定するに至っていない。鼎のなかの魚が方に慎しむ様にそこで大いに元朝を避けていた。人を派遣して俘を招求し、戰伐の際に殺害した者は僅か一人に過ぎない。道教者となって署牒を持てば、奴隷も

必ず正民となり、死が生に変った者が無慮二・三万人に及んだ云々。此の記事によると、長春師が庚辰（A.D.一二二〇年）に燕京に入って已にこの事を実行していて、癸未の歳を待たずにこのように振舞っていた。孫錫の序に己卯（A.D.一二一九年）の冬季噂によると長春師は海上に在って、車駕の召を蒙ったが、明年庚辰春に果して燕京に赴いた。（中略）このことで日益にその風姿を敬慕して弟子になりたい者、敬礼する者が算え切れない程であった。二・三の遺老たちからして師との遊を楽しんだのでその他は押して知るべきだ。この記録の欲兵の禍は伯夷の故事を用いて、避けること諸の遺老の云う通りである。

〔本文〕宣撫王巨川、楫上詩

〔口訳〕宣撫使の王巨川が敬意を拂って詩を長春師に差し上げた。

〔王観堂先生注〕元史本傳、王檝字巨川、鳳翔虢縣人、甲戌授宣撫使。

〔口訳〕元史の列伝に王檝、字は巨川、鳳翔虢縣の人、甲戌（A.D.一二一四年）宣撫使を授けらる、〔郎案、百衲本「元史、」一百五十三、列傳巻第四十、「王檝は字が巨川、鳳翔虢縣の人（「中國歴代地名要覧」に、鳳翔路（元）陝西省（關中道）鳳翔縣、8、州域形勢、金また、虢域（唐―金）陝西省（關中道）鳳翔縣南三十五里。55、陝西、鳳翔府鳳翔縣）父は霆、金の武節將軍麟游主簿、檝は性格が人並優れ、弱冠にして、進士に挙げられたが、及第せず、すぐに終南山に入り讀書渉獵、孫子呉子を研究した。（中略）太祖の將兵が南下して、檝が必死の戦をすること三日、敗れて捕われて殺されようとした。所が泰然自若として顔色が変らなかったので、太祖が問うに、「汝は敢えて我軍に抵抗して、独り死を恐れなかったのは何故か」とあった。返答して云うのに「わたくしは布衣の身で君恩を受けたので、誓って國のために身を捨てて報いることにした。既に敗戦して死場所を得たのを幸福に思って居る」とあったので、太祖がその忠義を賞して釈放し、都統を拜命され、金符を佩びさせた。（中略）雄州節度使孫呉が堅く守って降伏しなかった。檝は城に入り喩すに禍福の理を説いたの

で、孫呉は遂に明渡して降伏した。甲戌（A.D.一二一四年）宣撫使を授けられ、行尚書六部を兼ねた。」とある。〕

〔本文〕師答云、旌旗獵獵馬蕭蕭、北望燕師（藏本作山）渡石橋、萬里欲行沙漠外、三春遽別海山遙、良朋出塞同歸雁、破帽輕霜更續貂、一自玄元西去後、到今無似北庭招、師聞行宮漸西、春秋已高。

〔口訳〕長春師は之（これ）に答えられた詩に云う

旌旗獵獵馬蕭蕭　絢爛たる旗は飜（ひるがえ）り馬も蕭然たり
北望燕師渡石橋　北は燕師の石橋を渡るを望む
萬里欲行沙漠外　万里を踏破して沙漠の外に行こうと思う
三春遽別海山遙　春三月急に離別して海山遙かなり
良朋出塞同帰雁　良い友が塞の外に出て帰雁のようである
破帽軽霜更続貂　破れ帽子に霜が下り加えて粗悪なみなり
一自玄元西去後　一度（ひとたび）老子様が西方に去った後、
到今無似北庭招　今に到る迨北狄の招請にあづかったことはなかった

長春師は太祖（ジンギスカン）の行宮（かりみや）が更に西に動いたのを聞かれたが、師の寿命はすでに老の坂にあった。

〔王観堂先生注記〕是歳長春年七十三

〔口訳〕この歳長春の年は七十三歳だった

〔本文〕倦冒風沙、欲待駕回朝謁、又仲禄欲以選處女偕行、師難之曰、齊人獻女樂、孔子去魯、余雖山野、豈與處女（藏本作子）同行哉。仲禄乃令曷剌、

〔口訳〕そこで師は風沙を冒して行くのを厭われて、太祖の車駕が回帰するのを待って、拜謁しようと欲した。又仲禄は處女を選んで一緒に同行させようと欲したが、師はこのことを非難して曰うに、「齊人が女樂を献じ

たため孔子は魯を去られたことがある。〔郎案、「論語」微子第十八に「齊人歸女樂、李桓子受之、三日不朝、孔子行（宮崎市定先生の新訳「齊の國から魯の国へ、女子の音樂隊を贈って来た。家老の李桓子がそれを受けて、三日間、政治を見ることを怠った。孔子が見切りをつけて魯から立去った」〔「論語の新研究、一九七四年六月岩波書店刊、三六三頁」の故事を云う〕余（わたくし）は山野（やはてん）であるがどうして處女と同行しようか」とあった。仲禄はそこで曷刺に命じて、

〔王観堂先生注〕附録、特旨蒙古四人、從師護持、中有曷刺、八海、即此曷刺也

〔口訳〕西遊記附録にある「特旨、蒙古人四人が師に從って護持した。蒙古打、喝刺、八海、宣老阿里鮮」がそれでこの喝刺が曷刺に相当する。

〔本文〕馳奏、師亦遣人奉表

〔口訳〕馬を馳（はしら）せて帝に申し上げたし、長春師もまた人を帝の許に派遣して表を奉った。

〔王観堂先生注記〕輟耕録十、載陳情表云、登州棲霞縣志道邱處機、近奉宣旨、遠召不才、海上居民心皆恍惚、處機自念、謀生太拙、學道無成、辛苦萬端、老而不死、名雖播於諸國、道不如於衆人、内顧自傷裏情誰惻、前者南京及宋國屢召不從、今者龍庭一呼、即至何也、伏聞皇帝、天賜勇智今古絶倫、道協威霊華夷率服、是故便欲投山竄海、不忍相違、且當冒雪衝霜劃其一見、蓋聞車駕只在桓撫之北、及到燕京、聽得車駕遙遠、不知其幾千里、風塵須洞、天氣蒼黄、老弱不堪、竊恐中途不能到得、假之皇帝所則軍國之事、非已所能、道德之心、令人戒欲殊爲難事、遂與宣差劉仲禄商議、不若且在燕京德興府等處、盤桓住坐、先令人前去奏知其、劉仲禄不從、故不免自納奏帖、念處機肯來歸命、遠冒風霜、伏望皇帝、早下寛大之詔、許其可否、兼同時四人出家三人得道、惟處機虚得其名、顔色憔悴、形容枯槁、伏望聖裁、龍児念三月　日、奏。〔郎案、この綴耕録、巻十に載せた陳情の表は、すでに前掲一四～一五頁に口訳してあるので参照のこと〕

〔本文〕一日有人求跋、閻立本太上過関圖、題蜀郡西遊日、函關東別時、羣胡皆稽首、大道復開基、又以二偈示衆、其一云、離（藏本作雜）亂朝還暮、輕狂古到今、空華空寂念、若有若無心。其二云、觸情常決烈、非道莫參差、忍辱調猿馬、安閒度歳時。四月上旬、會衆請望日齋醮於天長、師以行辭、衆請益力曰、今茲兵革未息、遺民有幸、得一覩真人、蒙道廕者多矣。獨死者冥冥長夜、未沐薦拔、遺恨不無耳、師許之。時方大旱十有四日、既啓醮事雨大降、衆且以行禮爲憂、師於午後赴壇將事、俄而開齊霽、衆喜而歎曰、一雨一晴隨人所欲、非道高德厚者能（本無能字）感應若是乎。明日師登寶玄堂、傳戒時、有數鶴自西北來、人皆仰之、焚簡之際、一簡飛空而滅、且有五鶴翔舞其上、士大夫咸謂、師之至誠動天地。南塘老人張天度子眞作賦、美其事、諸公皆有詩。

〔口訳〕一日（あるひ）人が閻立本画く太上過関図の跋文を師に求めた。〔郎案：閻立本については、張彦遠撰の「歴代名画記」巻九の歴代の能画の人名を叙ぶ、唐朝上に閻立徳、閻立本の伝がある。長廣敏雄氏の訳注本「歴代名画記」二冊の二冊目、一五四～一七八頁に詳細に論及されている（昭和五十二年七月、平凡社刊、東洋文庫31）その一部を抄すると「立徳の弟立本、上品の下顕慶の初（六五六年）立徳に代りて工部尚書となる。總章元年（A.D.六六八）右相に拜せられ、博陵縣公に封ぜらる。應格の才あり、兼ねて書画を能くす、朝廷号して丹青の神課となす、初め太宗の秦王の庫道となる武德九年（A.D.六二六）命ぜられて秦府十八学士を写し、褚亮は讃を爲（つく）る。（中略）貞観十七年（A.D.六四三）又た詔して陵雲閣に切臣二十四人の図を画かしめ、上自ら讃を爲（つく）る。（中略）時に天下定まり、異国来朝の折立本に詔して外国の図を画かしむ、（中略）咸亨元年（A.D.六七〇）復た中書舍となる。四年（A.D.六七三）に薨ず、諡して文貞と曰う」唐初人物画を良くした閻立本画が元初に伝世して長春師に題跋を乞うたこの記事は、絵画史の点でも注目して好かろう。〕太上過関図〔郎案、老子が西に赴くため函谷関を越えた様子を画いたものと思われ、当時太祖ジンギス汗の西征に扈従すべき長春師に、この画図は種々の点で興味深いものがあったろうと思われる。〕の題詩に云う、

蜀郡西游曰　漢の蜀郡から西方に赴くの日
函関東別時　函谷関で東方と別るるの時
群胡皆稽首　多くの胡人たちが皆敬礼し
大道復開基　道教の大道が復た基礎を開いた

又二首の偈詩をもって衆に示したが、その一首に次の如く云っている。

離亂朝還暮　放れ乱るるの世朝夕となく
輕狂古到今　軽はずみな世も古今となく
空華空寂念　華美も静寂も超越した思い
若有若無心　有るような無いような心持

その第二の偈詩に云う

觸情常決烈　感情に溺れて常に心乱れ
非道莫參差　道を辿るに長い短いがあるもの
忍辱調猿馬　我慢こそ猿馬の心を調和し
安閒度歲時　安閑の心で歳月を送れる

四月上旬衆が集って、滿月の齋に天長観で酒を供えて祭ることを師に要請したが、旅行に出発するので辞退した。衆は強いてお願いして云うのに、「現在こうした戦乱がまだ止みませんが、遺民は幸いなことに一度真人にお逢いできましたので、道教のお蔭げを蒙る者が多数であります。独り死する者は暗澹とした長い夜にあって、未だ師の福祝をいただいて居りませんで、恨みを飲んで残念に思って居る筈です」と。そこで長春師はこのことを許可されたのだった。丁度その時旱魃がひどくて十四日にも及でいたが、既に酒を供えて祭りを

執行すると、雨が大降りになって且つ祭礼を行なうのに困ったことになったと思っていた。師は午後に祭壇に赴いて行事を執行しようとされると、俄かに空が晴れ渡ったので、衆が喜び歎賞して云うに、「一度雨降り亦晴れる現象が人の思い通りになるなど、道が高く徳の厚い人でなくてはこのように感應することはできまい」とあった。翌日師が宝玄堂に登壇して戒を伝えた時に、数羽の鶴が西北より飛来してきたので、人びと皆が鶴を仰ぎ見た。符簡を焚焼している際に、一枚の簡が空に舞上って見えなくなったが、五羽の鶴がその上に翔舞したので、士大夫が謂うに、師の至誠が天地を感動されたのだ」と云い合った。南塘老人張天度子真が詩賦を作ってその事を賞美したが、諸公も夫々皆詩を賦した。

〔王観堂先生注〕湛然居士文集六、寄南塘老人張子眞詩、知來何假霊亀兆、作賦能陳瑞鶴祥、謂此賦也。又寄巨川宣撫詩序云。今観瑞應鶴詩、巨川首唱焉。又有観瑞鶴詩巻、獨子進治書無詩、詩云、只貪殢酒長安市、不肯題詩瑞應圖。蓋長春有瑞鶴圖巻。燕京士大夫皆有題詠、後攜至西域、故文正見之、文正素不喜全真、目爲老氏之邪。故於王巨川首唱、則譏之、於李子進無詩則美之、後此巻仍藏長春宮、文正子鑄有長春宮瑞應鶴詩七律二首。

〔口訳〕湛然居士文集巻六〔郎案「湛然居士文集」と観堂先生は云うが、余が架蔵する光緒乙未（二十一年A.D.一八五九）琱版木版本十四巻、四冊本は、「湛然居士集」と題している。金・元二朝に仕えた偉才耶律楚材の文集であり、飯田利行翁の「宋本湛然居士文集譯」（昭和六十年八月、国書刊行会印行）によって容易に読むことができるようになった。〕南塘老人張子真に寄する詩のなかに、「知り来たる何ぞ霊亀の兆を仮りんや、賦を作って能く瑞鶴の祥（よいしるし）を陳（のべ）ん」の詩賦を云っているのである。〔郎案、飯田翁の訳文に云う。「南塘老人張子真（金の人、玄素、遼に仕え興平節度使となる。後に戸部尚書となる）に寄せた詩。張子真が歓待してくれた時の奥ゆかしい人柄は、どうして忘れることができようか。（中略）真理に通達した君が、のちにこの世をのが

れ、南の堤で魚を釣って自適された。君は未来のことを予知して居られたかのように。霊妙な色の兆を仮りて己の明徳に喩ることなどを託そうとしなかった。ただ賦を作って折りに應じて善き験があらわれることを詠あげた」と訳して居られるが、原文の「目出度い鶴の飛来を吉祥の験として陳述するのみ」が、長春師の宝玄堂登壇の日の鶴の飛来とよく適合している。〕又巨川宣撫に寄する詩の序にも云う。今観瑞應鶴詩のこと巨川が首唱したもの、と。〔郎案、湛然居士集巻六に收む、飯田翁の訳文に曰う「巨川宣撫使（王檝、漢人、金の泰和年中の進士、金兵敗るるや元の太祖は帰し、宣撫御史大夫、兼行尚六部事なる）この王巨川についてはこの前四五～六頁の處に詳述した。」は文武を兼ねそなえ、詩文ともに絶妙。陰陽五行、天文暦数にいたるまで精通しないものはなかった。以前に「法界観序」を提示していう。これ宗門の理を究むる捷径であると。また観瑞應鶴詩（南塘老人の賦するあり）は巨川がはじめていいだした。私はその多藝さに感心しこの詩を作って美めてみた次第」（前掲書、三〇八頁）と。〕又観瑞鶴詩巻がある。独李子進の治書無詩の詩に云う。

只貪殢酒長安市　唯長安の街で酒を貪り倦れ
不肯題詩瑞應図　瑞應図に題詩するを承知せず

蓋し長春に瑞鶴図巻があれば燕京の士大夫たち皆の題詠があった筈で、後に携えて西域に至ったので、文正公楚材もこの図巻を見たらしい。耶律楚材は元来から全真教を喜ばずして老子の邪教と見做していたので、王巨川が全真教を首唱するのを非難していた。李子進の無詩でのことを褒めた、此の図巻は長春宮に收蔵されて、楚材の子の耶律鑄に「長春宮瑞應鶴詩に題する」の七律詩二首がある。

〔本文〕醮竟、宣使劉公、從師北行、道出居庸、夜遇羣盗於其北、皆稽顙以退且曰、無驚父師、五月師至徳興龍陽観、度夏、以詩寄燕京士大夫、曰、登真何在泛靈槎（藏本作槎）、南北東西自有嘉、碧落雲峯（原作封藏本作峯）天景致、滄波海市雨生涯、神遊八極空雖遠、道合三清路不差、弱水縦過三十萬、騰身頃刻到仙家。時京城

吾道孫周楚卿、

〔口訳〕醮祭を終ったので、宣使劉仲禄は師に随従して北に向い、道は居庸関を出た。夜群盗と関の北で遭遇した所、群盗の全員首額を垂れて退却し且つ云うのに「長春師父を驚ろかすつもりは御座居ませぬ。」と。五月に師は徳興〔郎案「中國歴代地名要覧」に、徳興府（金～元初）察哈爾者涿鹿縣、西南四十里、17、直隷保安州永興廃縣〕の龍陽観に到って夏を過された。詩を燕京士大夫に寄せて次の様に賦した。

登真何在泛霊槎　真に登達するにどうして霊妙な筏に乗って遊ぼうや。
南北東西自有嘉　東西南北何処でも嘉所であるから
碧落雲峯天景致　青空に雲峰が聳えて絶景の極み
滄波海市雨生涯　海を思わせる蜃気楼が地の果に雨づって生ず
神游八極空雖遠　神霊が八方到る所に遊んで空が遠く見ゆるが
道合三清路不差　路は三仙の居所に通じて旅路も同じ
弱水縦過三十萬　崑崙の弱水縦（ほしいまま）に流れること三十万
騰身頃刻到仙家　勇躍して進めばやがて仙人の居所に到らん

時に当って燕京の吾が道友孫周楚卿と、

〔王観堂先生注〕湛然居士文集八寄趙元帥書、京城楚卿、子進、秀玉輩、此數君子皆端人也。

〔口訳〕孫周楚卿については「湛然居士文集」巻八所収の「趙元帥に寄せるの書」〔郎案、趙元帥のこと、飯翁の訳文に「金東平の人、書、詩・文・詞極に巧み」とある。その書の内容のなかに「いったい心の正しい人〔端人〕は友をえらぶにも必ずきちんとして居られます。都におられる孫周楚卿（長春真人の道友）李士謙子進（金の遺巨）陳時可秀玉（清溪居士、金朝翰学士、元朝の燕京課税所官）等、これらの人たちは、みな心の正

しい人ばかりでございます。」とあるのによる。〕京城の楚卿・子進・秀玉などこれら數人の君子は皆心の正しい人たちだ。」

〔本文〕楊彪仲文

〔王観堂先生注〕蒙韃備録、又有楊彪者、爲吏部尚書。

〔口訳〕蒙韃備録のなかに、又楊彪なる者が見えて、吏部尚書の官となっていた。〔郎案、王観堂先生の編著「蒙古史料四種」所收の「蒙韃備録箋證」の任相の條に「又楊彪なる者あり、吏部尚書となる」とあり。〕

〔本文〕師誦才卿、李子謙子進、劉中用之、〔郎案、これら端人の仲間の名である〕

〔王観堂先生注〕元史、太宗紀二年冬十一月、始置十路徵収課税使、以劉中劉桓使、宣德九年秋八月、命求虎乃劉中試諸路儒士。

〔口訳〕元史太宗紀二年冬十一月の條に「始めて十路徵收課税使を置く。劉仲・劉桓をもって使とす。〔郎案、百衲本「元史」二、本紀巻第二、太宗、二年庚寅（中略）冬十一月、始めて十路徵收課税使を置く。陳時可、趙肪をもって燕京路の使となし、劉仲、劉桓をもって宣德路の使となし、周立和、王貞を西京路の使となし、呂振、劉子振をもって太原路の使となす云々…」〕同じく九年秋八月の條に、求虎に命じて劉仲をして諸路の儒士の考試に当られた、とある。〔郎案、百衲本「元史」二、本紀第二、太宗九年丁酉八月の條に右の文あり。続いて「選に中者は本貫を除いて議事官となす。四千三十人を得た」とある〕

〔本文〕陳時可秀玉

〔王観堂先生注〕鮮于樞、困学齋雜録、通寂老人、陳時可、字秀玉、燕人、金翰林學士、仕國朝爲燕京路課税所官。

〔口訳〕鮮于樞撰の「困学齋雜録」のなかに、通寂老人、陳時可字は秀玉、燕人にして金朝の翰林学士、元朝に

仕えて燕京路課税所の官吏となる由。〔郎案、「中國叢書綜録」2、子目、子部、雑学類に、元、困学齋雑録一巻、(元) 鮮于樞撰、四庫全書、子部雑家類、知不足齋叢書 (乾隆至道光本、景乾隆至道光本) 第二十九集、畿輔叢書、叢書集成初編、文学類」とある。余が架蔵する中文出版社刊の活字本「知不足齋叢書」第十二冊に、「困学齋雑録」が収載されて、「中原士夫出處」として寂通老人・陳時可・字は秀玉・燕人、金の翰林学士、国朝 (先) に仕えて燕京路課税所官となる」とあり、先に引いた元史・太宗紀二年冬十一月、陳時可、趙肪を以って燕京路徴收課税使となしたことが見えているのに相当する。〕

〔本文〕呉章徳明

〔王観堂先生注〕李庭寓庵集二、挽呉徳明詩注云、公太原石州人、承安初、中乙科、崇慶末、始赴召南渡、丙午春捐館。

〔口訳〕李庭の「寓案集」二〔郎案「中國叢書綜録」2、子目、集部別集類に「寓案集八巻、(元) 李庭撰、藕香零拾」とある。〕のなかで呉徳明の詩を引用して注記に云う。「公は太原石州の人〔郎案「中國歴代地名要覧」に「石州 (唐、宋—金) 山西省 (冀寧路) 離石縣、42山西汾州府寧州」とある〕承安の初 (A.D.一一九六年ごろ) に乙科に選せられ、〔郎案「諸橋漢和」に曰う「乙科、試験の成績での第二等級合格者、又試験の課目の名、後世は俗に挙人を云う」「文献通考」選挙考、学士に「秀才の科久しく廃す、而して明經に甲、乙、丙、丁四科ありと雖も進士は則甲、乙二科」とある。〕崇慶末年 (A.D.一二一六年) 始めて召請されて南の汴京に渡った。丙午 (A.D.一二四六年) 春に逝去した。」とある。

〔本文〕趙中立正卿、王鋭威卿、趙肪徳輝

〔王観堂先生注〕金史宣宗紀上、決意南遷、詔告國内太學生趙肪等。上章極論和害、元史太宗紀、置十路課税使、以陳時可趙肪使、燕京張瑜王鋭使、東平耶律楚材傳、奏立燕京等十路徴収課税使、凡長貳悉用士人、如陳時可

趙昉等、皆寛厚長者、極天下之選。

〔口訳〕金史宣宗紀上によると〔郎案、「欽定金史」巻十四、本紀第十四、宣宗上、二年（至寧）A.D.一二一四年五月乙亥「朝拜を輟て、帝は、南遷を決意された。詔して、国内太学趙昉等に告ぐ。帝は極論和害を章した。大計がすでに定まったので中止することが出来ないとし、皆慰諭して之を原廟に詣でて理由を書いて奉呈した」とある。趙昉がそれである。〕元史太宗紀二年冬十一月に十路課税使を置いた折、陳時可と趙昉を燕京路の徴収課税使となし、張瑜王鋭をして東平路の徴収課税使となした〔郎案「中國歴代地名要覧」に「東平路（元）＝須城縣、山東省東臨路東平縣、33、山東、兗州府東平州」〕耶律楚材伝〔郎案、百衲本「元史」一百四十六、列傳巻三三、耶律楚材列傳中に以下の如くある。「太宗ら蒙古人が中原の地を牧草地にしようと計った折り、楚材の申し上げるのに「陛下は將に南に金を討伐しようと軍需費に事欠きますまい。誠に中原の地を平定いたしますと、地税、商税、塩酒の税、鉄治山澤の利益として歳に銀五十萬両・帛八萬匹、栗四十餘萬石を得ることが出来ます。それで供給が足りるので、どうして不足することがありましょうや、」と。帝の云われるのに「貴方が朕に代って試みに実行してみよ」とあった。そこで奏上して、燕京など十路徴収課税使を置いた。凡そ長となく次となく悉く士人を用いること陳時可、趙昉らの如くであって、これらの人たちが皆、寛厚の長者であって、天下の選択の最上であった」と。

〔本文〕孫錫、天錫、此數君子、師寅玉虚日、所與唱和者也。王覯逢辰、王直哉清甫、亦與其遊。

〔口訳〕孫錫・天錫などこれらの數人の君子は長春師が玉虚観に居住して居られる頃に、一緒に詩賦を唱和した人たちだったのである。王観逢辰や王直哉清甫らもまたその清遊を共にした人である。

〔王観堂先生注〕湛然居士文集六、西域寄中州禪老、士大夫一十五首中、有観瑞鶴詩巻、獨子進治書無詩一首、寄徳明一首、才卿外郎五年止恵一書一首、寄清溪居士秀玉一首。戲秀玉一首、寄用之侍郎一首、和正卿待制一

首、寄仲文尚書一首、謝王清甫一首、均辛巳年、長春抵西域後所作、蓋長春西行時、燕京士大夫、多託其致書於湛然、或湛然見瑞鶴卷中、有其人題詩、故作詩寄之耳。諸題中、除仲文尚書外、如子進治書、卿外郎、用之侍郎、正卿侍制、皆稱其金時故官、黒韃事略、爾外有亡金之大夫、混於雜役、堕於屠沽、去爲黄冠、皆尚稱舊官、王宣撫家、有推車数人、呼運使、呼侍郎、長春宮多有亡金朝士、既免跋焦、免賦役、又得衣食、真令人慘傷也。

〔口訳〕湛然居士文集巻六西域にて中州禪老・士大夫に寄すの詩から始めて十五首のうち、「瑞鶴詩巻を観て子進独りが書を呈して詩を賦さなかった故事の一首。〔郎案、飯田翁の「湛然居士文集譯」によると、「瑞鶴詩巻（「雙溪醉隠集」巻四は「題長春宮瑞應鶴詩」二首あり）を観て、燕京の士大夫は皆詩を題したが、李子進（金の遺臣、長春真人の智友、治書侍御史）だけ詩を題しなかった。私が満二十才で尚書省の属官であったとき君を始めて識った。君は珂を鳴らしながら大様な態度で中都（燕京）を活歩していた。（中略）ただ二日醉を中都の市中に貪り求めていただけで、あえて瑞應鶴図（長春真人の所蔵）に詩を題しようとはしなかった。私が李子進のそのものずばりの意中をおしはかってみるに、何事にあれ、すべて好いことは、ないにこしたことはないと意識していた故ではなかったか。の詩〕徳明に寄すの一首〔郎案、これも飯田翁の訳文を載す。「呉徳明（太原石州の人、碩儒呉大卿長春真人の智友）は大燕京において詩を作り、自分で他と絶縁しようとした。そのうえこのようにいった。ただ吾が志を高潔に保つことができさえすれば、たとえ飽食して死んでしまっても満足じゃ、と。士大夫たちはこの語を聞いて不憫に思った。徳明の詩の末句に次のごとく記してある。世の功名や拍手喝采などというものは、人に笑いとばされるが落ちである。わたくしの四十八年の生涯は唯一この夢のようにはかないものである。いつも以上の両句を愛している。近ごろ、「彌勒下生の賦」（徳明が近頃作ったものだが）を観たので、よって詩を作って之に寄せてみた」談玄能節虎狼仁、幸然不作飽恵死、可惜空吟矣

殺人、彌勒下生何太早、莫随邪見説無因とあるもの〕本卿外郎五年唯一書のみを恵む詩一首、〔郎案、飯田翁の「五年に唯一書の題を得たり、路遠く山長く、夢もまた迷う、睡老黒甜して順北を楽しみ、冷官清談して遼西に泊る。美人志を得て能く虎の如く、我が乏しい才能が粗にして雑に傚うと笑う。佇看す天兵の北闕を旋るを、今より玉門関の泥を用いざるを」才卿外郎〔金、遼東の人、翰林侍制戸部侍郎、詩、書画を善くす、長春真人の智者〕音信途絶すること五年にして、漸く一書の題記を恵まれることができた。両者の間の路は遠く（ただ山も長くつゞいて拒んでいるので、みる夢も方向を誤るのではあるまいか、居睡り老人の私には昼寝ばかりしていて北闕の命に従うことを楽しんでおり、閑職にある私は、あっさりと西遼の地（遼は金は滅ぼされると太祖八世の孫耶律大石は衆を率いて西に走り、河中府に国を建てた）に留まっている。賢人は己が志を達成すると虎の如く勇ましい振舞をなすが、我が乏しい才能は粗雑であって、群鶏のような凡庸の衆に等しいのを笑うであろう。我が天子の軍隊が宮城に凱旋し、今後は玉門関の泥を用立てないですむようになることを唯切望するのみ」〕清溪居士秀玉に寄する詩一首〔郎案「清溪居士秀玉（陳時可、字は秀玉、寂通老人とも云う。燕の人、楚材をして万松老人の門に参ずることを誘めさせた。太宗の時の十路徴收課税使の一人）「秋の蝉は一本の枝に棲むことを欠くがごとく、この私も故郷の燕山に半分程土中に入ったきりの、犁のように行かぬ程彷徨しているが、時に復た琴を取り出して碧玉の曲を歌うこともある。この年ごろ、夢が清溪居士を駈け巡ることもなくなっている。貴方からの數行の文字も私の眼を遮って了い、半紙ほどの薄っぺらな功名に苦く臍を噛む思いで後悔している。想い起してみると貴方は健在なりや否や。私の余生も老に甘んじて燕京の西郊碧雲棚引く香山寺辺りで送り度いもの。」〕秀玉に戯るの詩一首〔郎案、この詩に序あり、云う「書牘を頂戴して、秀玉の油房が索莫として居り、馬の溺に衛士が死し、田畝に水害があったりして、感歎にたえない程だ。清溪の達士たる貴方の胸中にもわだかまり不快であろうとお察しするのだが、そのため詩を作って戯謔することと

する」その詩は、「清溪よ、そなたの油部屋で燭台を投げ出し、五服（王畿を去る二千五百里の所）を守護する官が凋落して、故山の三徑も荒れ果てている。寒翁が馬の故事なぞ信じられぬ。列子でも亡羊の感を免れなかったことを知る必要があろう。東湖（北京域外廣寧門内の東偏門の近くにある）の菡萏（はすのはな）は君の歎賞するのにまかせるが、西域の葡萄はわたくしの賞美におまかせあれ、お互い天夫々天涯に在って何日お逢いできようか。西風を望んだら、このお髯爺をお忘れなく（清溪居士は常にわたくしを戯れに呼んで髯郎（おひげさん）と云う）」用之侍郎に寄すの一首〔郎案、これも「湛然居士文集」巻六のなかに收載された詩で、ここにも序文がついて仏、道、儒三教の特質を挙げているので、繁を嫌わず全文を訳出する。「用之侍郎が書簡を送って来て、誡めて孔子の教を忘れては不可いと云って来た。そこでわたくしは理を窮め性の本質を知り盡すには仏法より尊いものはないとし、世を救い民を安んずるのは孔子の教の如きに勝るものはない。吾を任用して下さるのなら孔子様の常道を実行するし、吾を見捨るなら仏陀の眞如を自ら楽しむのであって、どうしてわたくしのこの態度を不可いとするのか。そこで詩を作って自分の意見を述べてみよう。蓬莱（ひがしのせんにん）吾を憐み芳牋（よいたより）を寄す。吾に勧めて、仁義の道を先にすることを忘れてはならぬと。これらの文句のすぐれているのは蜜を嘗めるのに似ている。數行の温い言葉は綿入の衣服のよう。これまで誰が亀毛の払子など知って居ようか、到底琴柱に膠しては絃の音を調整できないものだ。わたくしを登用するなら、周公孔子の教を実行しよう。わたくしを見捨るなら、萬松軒の教に背きはいたしませぬ。」この用之侍郎は劉用之のことで、すでに元史、太宗紀二年冬十一月の十路徵收課税使に任ぜられた一人である点、触れた。〕正卿待制に和す一首〔郎案、これも前詩に続いて「湛然居士文集」巻六のなかに掲げられて、「劉正卿待制の韻に和す」とあり、飯田翁はこの正卿待制に注して、「楚材の長兄辨才の長子鏞、字は正卿、官は待制」とする。劉正卿待制の劉氏を名のるは別人か、未詳。詩文は「布袖の龍鍾、両眼の塵、丹誠舊の如く白頭新たなり、暮雲の西畔にあって猶漠土を懐う。暁の日のある東辺は秦の

あたりだろうか。酒が佳良でなくても毎夜の醉に妨げることもない。花が沢山長いこと咲く四時の春に、花の爛慢と咲くのに賤しい酒ではよい考えも浮かばぬ。故郷の誰れが西遊万里にいる人を思い出して呉れようか。」仲文尚書に寄する一首〔郎案、この詩も前詩の次に記載されて居るもの。短かい序文が附いていて、「知文尚書が老を投じて帰郷するを知り、彼の人柄の清高を歎賞して詩を作り、寄せたもの」とある。飯田翁は仲文尚書を注して云う。「金城の人、蘭光庭仲文、尚書郎中、儒生、詩文を善くす」と。詩に云う。「仲文は曾て黒頭公となった。〔郎案：「諸橋漢和」に云う。「少継にして三公の位に登るものをいう」と〕輔弼の任で活躍する折美風をひいた。経済を正す銭泉を冀州の北部（河北省）に流布させ、提点刑獄を司る按察使の姦悪な行跡を山東省膠県の東方に屏息させた。桃李の友人達に加えられた新たな恩義が、行き亙っているのを笑って見て居り、自分の墓地の松楸を掃除しながら、老年を完（まっと）うするを計り、それを聞いて西域にいる友人たるわたくしの喜びが増すと云うもの。万全の良策は計画しても同じと云うわけはゆかぬもの」〕王清甫に謝すの一首〔郎案、この詩は「湛然居士文集」巻六の一联の上掲詩中にあって、原文に「王清甫の恵書に謝す」とあり、王清甫については飯田翁の注に「王道哉、長春真人と相識の人」とある。詩は「西征する万里の天子の輿に扈従したが、都の高閣に置かれた文章は唯道端の石の渠に束ねられたようなもの。唯云えるのは、昔、荘周の胡蝶の夢ばかりである。省みて今日、わたくしが蝶の代りに魚となったのを疑うのみ（飯田翁云う「ところで私は、今日、夢から覚めてみると、調理された魚のようなつまらぬものになったのを不審に思っている。つまり昔の魚（鯤）は化して大鵬となったが今日の魚は」）一本の簪も華やいだ髪に挿せぬ衰残の老人となり、両眼にも世俗の塵がたまって事々にうとくなって了うた。大変有難いことに貴方のような方が、この遠方の旅人を憐れんで下って、東方からの風に乗って時に書簡を下さるのみ。」〕これらの詩は均（ひと）しく辛巳年（A.D.一二二一）に長春が西域に往った後に作ったもので、恐らく長春が西遊した時に燕京在住の士大夫が多くその書簡詩文を湛然

耶律楚材に託したか、それとも或は湛然居士が瑞鶴詩図巻をみて中にそれらの人たちの題詩があったので、そのために詩を作って寄せた詩が文集のものだったのみか。詩題中仲文尚書を除いた他の子進治書、才卿外郎、用之侍郎、正卿待制ら皆金朝の官位を稱していた。黒韃事略〔郎案、王観堂編著「蒙古史料四種」に收める「黒韃事略箋證」の中に、「その官或いは国主と僭稱し、或は皇帝を借り、郡王、宣撫と名のった。諸国の亡命した俘虜らは、或は中書丞相、或は將軍、侍郎、宣撫運使と云って、その随所に自分勝手にその名稱を盗用した」とあり、徐霆の疏證〔「中國叢書綜録」2、子目、史部雑史類に、「黒韃事略一巻、附考記一巻、（宋）彭大雅撰、（宋）徐霆疏證、校記（民国）章鈺撰、六經堪叢書、初集」とある）によるに、「徐霆がかって之を考究するに、韃人は初め未だかつて除授及び諸俸の制度がなかった。韃主も亦官稱の意義に通暁しなかった。それは何のためだったのだろうか。韃人は虎頭金牌、平金牌、平銀牌あるに止って、或いは功勞があると、自分で金銀を出して、韃王に請うて許可を得てをその牌上に回回文字を鐫打した。亦、長生、天底、気力などの語を表示しなかった。その他に、金の亡命士大夫らが居て、種々の役目に就いた上に、賤業者に堕落した。仕官をしないものは道士となって尚舊の官王、宣撫の稱名を唱え、家に車を運転する者が数人も居ると、運搬使と呼び侍郎と自稱する。こうして長春宮には沢山の金朝亡命の士があって、既に跋焦〔郎案「諸橋漢和」に曰く「羊を用いて占う方法」とあり、（卜法による賦課を云うか）〕を免れ、賦役を免除されて衣食を滿喫していて、最も人をし「憂れ痛ましめた。」とある。此処ではその末尾の文章を引いている〕

〔本文〕観居禪房山之陽

〔口訳〕この龍陽観は禪房山の南にあって

〔王観堂先生注〕元史劉敏傳、年十二、從父母避地德興禪房山

〔口訳〕元史劉敏伝に、年十二の折父母に從って土地を避難した所が德興府の禪房山だったとある。〔郎案：百衲

本「元史」百五十三、列傳巻第四十、劉敏列傳に曰う、「劉敏、字は有功、宣德青魯の人〔郎案「中國歷代地名要覧」に「宣德府（元）察哈爾省宣化縣、18、直隷萬全都指揮使司」〕歳壬申（A.D.一二一二年）太祖の師軍が山西に侵入、劉敏年十二にして、父母に從って避難して德興の禪房山に到った。〔郎案：「中國歷代地名要覧」德興府（金－元初）察哈爾省涿鹿縣西南四十里、17、直隷保安州永興廢縣」とあり、「讀史方興紀要」巻十七、直隷八に保安州あり、その州中に禪房山の記事なし、されども、保寧山が州の西北六十里の所に在って、旧名を白貼山と云い、その中に洞穴穹窿があり、石が仰ぐが如く湧泉があって、一斗程の水を群飲しても盡きることがない。地志の云う所によると、元の至元の初（A.D.一二六四年頃）その地が常に震動したので、その名を保寧山と改めた」とある。次の禪房山についての本文記事に、その山に洞穴が多いとあるに符号するも、未詳〕

〔本文〕其山多洞、府常有學道修真之士棲焉。師因契衆以遊、初入峽門、有詩曰、入峽清遊分外嘉、群峯列岫戟査牙、蓬萊未到神仙境、洞府先観道士家、松塔倒懸秋雨露、石樓斜照晩雲霞、郤思舊日終南地、夢斷西山不見涯。其地爽塏、勢傾東南、一望三百餘里、観之東數里平地、有涌泉清泠（藏本作冷）可愛、師往来其間、有詩云、午後迎風背日行、遙山極目亂雲横、萬家酷暑熏腸熱、一派寒泉入骨清、北地往来時有信、東皐游戯俗無爭、（耕夫牧豎堤陰讓坐）、溪邊浴罷林間坐、散髪披襟暘道情。中元日本観醮、午後授符傳戒（藏本作符）老幼露坐、熱甚悉苦之、須臾有雲覆其上、状如圓蓋、移時不散、衆皆喜躍讃歎、又観中井水可給百衆、至是踰千人、執事者謀他汲、前後三日井泉忽溢、用之不竭、是皆善縁天助之也。醮後題詩云、太上弘慈救萬靈、衆生薦福籍群經、三田保護精神氣、萬象欽崇日月星、自揣肉身潛有漏、難逃科教入無形、且遵北斗齋儀法、（南斗北斗皆論齋醮）漸陟南宮火鍊庭。八月初、應宣德州元帥移剌公請、

〔口訳〕その山には洞穴が多く、德興府では常に学道修真の士があると棲居させた。そこで長春師は衆（ひとびと）を連れてそこに遊行され、初めて峽に入られた。詩を作られて曰う。

入峡清游分外嘉　峡に入って清遊すると外界を分ける佳境がある
群峰列岫戟査牙　峰が群がり崖が列び枯木が戟のようにごつごつ見える
蓬莱未到神仙境　蓬莱のような神仙境にはまだ及びもつかぬが
洞府先観道士家　これらの洞穴が先づ修行の道士の家のよう
松塔倒懸秋雨露　聳え立つ松林に秋の雨露が降りしきる
石樓斜照晩雲霞　石の樓閣に雲か霞か夕映に照り映える
郤思舊日終南山　こうしてみると昔日の終南山を思い出す
夢断西山不見涯　西山の涯のない景色を夢みることもあるまい。

禪房山の南龍陽観の地は、高燥爽快で地形が東南に傾斜して、一望すると三百余里が見渡せ、東の数里は平地で泉が湧き、水が清冷であって愛飲できる。師はその境間を往来して詩を作られて曰う。

午後迎風背日行　午後風に向い日を背にして行くと
遙山極目乱雲横　遙かな山並に目の及ぶ限り乱雲が棚引いている
萬家酷暑熏腸熱　全ての家が酷暑にいぶられ腸まで熱気を帯たよう。
一派寒泉入骨清　一の湧泉が骨に沁入るように冷く清烈
北地往来時有信　北の涯を旅した折に偶々書信があったが
東皐遊戯俗無爭　東方の豊かな山沢に遊べば何の俗事の爭いがあろう。
（耕夫牧竪提陰讓坐）、（農夫も牧童も堤の樹蔭で讓りあって坐って楽しんでいる）
溪辺浴罷林間坐　谷川の辺で沐浴を終えて林のなかに坐っていると
散髪披襟暢道情　洗い髪に襟をくつろげば道士の思いがのびのびする。

中元の（七月十五日）龍陽観で道教の祭りを行って、午後に咒符を授け戒を伝えたが、老人も子供たちも陽（ひ）なたに坐っていたので、暑熱が甚だしかったため全員が苦しんでいた。暫くすると雲がその人たちの上を覆って、その雲の様子が円い天蓋のように見え、時刻が経っても霧散しなかったので涼しくなり、衆は誰れもが喜び小踊りして師の徳を讃歎した。又龍陽観の中の井戸の水は、百人位の人びとに供給できる程だったが、この時には千人を超えていたので、執事が他の井戸を汲んで供給することを謀ったが、祭の前後三日間その井戸水が忽ち満溢れて、供給しても盡きることがなかった。これらの事柄は皆善縁と天助の賜であった。道教祭儀の後、題詩に云う。

太上弘慈救万霊　太上老君の遍（あまね）き慈愛は万人を救われ
衆生薦福藉群經　多くの人に福徳を推（すす）めるため沢山の経文を草し
三田保護精神気　道士の三の位は精神の気力を保護し
万象欽崇日月星　日月や星の運行辰羅万象を喜び尊崇すれば
自揣肉身潜有漏　自ら考え巡らすにこの肉身も有漏あることを免れない
難逃科教入無形　罪科は免れがたく教えは虚無に入る。
且遵北斗齋儀法　かつ北斗星を祀る祭儀の法に遵（したが）うと
（南斗、北斗皆論齋醮　南極星と北極星はいずれも酒を供えての齋儀に問題となるが、）
漸陟南宮火鍊庭　漸く朱鳥星が蝎座のなかに渡る筈。

八月の初めに宣徳州元帥移剌公の請待に師が應じられた。

〔王観堂先生注〕移剌公、謂耶律禿花也、黒韃事略、禿花即阿海之弟、元在宣徳州宋子貞中書令耶律公神道碑、宣徳路長官太傅禿花、失陥官糧萬餘石、元史本傳失載其駐宣徳事。

〔口訳〕移剌公とは耶律禿花を指すのである。黒韃事略によると禿花は即ち阿海の弟で元来宣徳州は居たとある。〔郎案、王観堂先生編著の「蒙古資料四種」所收の「黒韃事略箋證」に「その軍馬の將帥、舊これを十七頭項となす。忒或没眞、即ち成吉思汗の死後、その軍馬は兀窟觧の母が今自ら之を領す（中略）阿海、契丹人で元徳興府に在り、禿花、即ち阿海の弟、元と宣徳州に在り」とあるを指す〕宋子貞中書令耶律公神道碑によると、宣徳路長官太傅禿花が官の糧食万余石を損失した由を云う。元史本伝に禿花が宣徳路に駐在した事蹟を載せていない。〔郎案、百衲本「元史」百四十九、列傳巻第三十六、耶律禿花列傳に云う「耶律禿花、契丹の人、世々桓州に居住した。〔郎案：「中國歴代地名要覧」に「桓州城（金、元）○獨石口東北一百八十里ノ庫爾圖巴爾孫城、即チ四郎城ナリ、18、直隷、萬全都指揮使司、附見、開平故衛」とある〕太祖の時衆を率いて来帰した。大軍が金境に侵入した折、嚮導を勤めて捕獲した牧馬が大変多かった、後太祖に侍して飲食を共にした（中略）功績があって太傅惣領を拜した。也可那延が濮國公に封ぜられた時、虎符銀印、歳給錦幣三百六十疋を賜わり、萬戸を統治した。（中略）西河州において卒した。〔郎案「中國歴代地名要覧」に「西河縣（唐－明初）山西省（冀寧道）汾陽縣、42、山西、汾州府汾陽縣」とあって、観堂先生御指摘の如く、宣徳路の長官であったことは触れていない。〕

〔本文〕遂居朝元観、中秋（藏本秋下有夜字）有賀聖朝二曲、其一云、斷雲歸岫、長空凝翠、寶鑑初圓、大光明宏照、亘流沙外、直過西天、人間是處、夢魂沈醉、歌舞華筵、道家門別是、一般清朗、開悟心田。其二云、洞天深處、良朋高會、逸興無邊、上丹霄飛至、廣寒宮悄、擲下金錢、靈虚晃耀、睡魔奔迸、玉兎嬋妍、坐忘機観、透本來真性、法界周旋。

〔口訳〕遂に朝元観に請うままに居り、中秋・（蔵本に秋の下に夜の字あり）に元の聖朝を祝賀する二曲を作った。その一曲は次の様なものである。

断雲歸岫　千切れ雲が峯にかかり
長空凝翠　広い空は碧澄みわたり
宝鑑初円　太陽が初めて円く見え
大光明宏　陽光が広々と明るく
照亘流沙外　照らして流沙の外に及び
直過西天　直ちに西域の地を過ぎる。
人間是處　人間世界のこの有様は
夢魂沈醉　魂が夢のなかで醉い痴て
歌舞華筵　華やかな宴席に歌い舞うよう
道家門別是　道家の面目はこれまた別で
一般清朗　おおむね清朗であって
開悟心田　心の底から悟りを開く。

その第二曲に云う。

洞天深處　突き抜けた天空の奥底に
良明高会　高々と良知と明敏が結び
逸興無辺　限りない感興を語り会う
上丹霄飛至　朱い夕焼空に飛んで登ると
広寒宮悄　広い寒空が静まり返っている
擲下金銭　金銭などの欲望を投げ捨てると

霊虚晃曜　神霊が空(むな)しく光り輝き
睡魔奔迸　睡眠が遽(にわか)に襲って来て
玉兎嬋妬　月の兎の貴(あで)やか姿に
坐忘機観　坐ったままに禪桟を忘失しても
透本来真性　道本来の性質を見透して
法界周旋　法の世界を経巡りたいもの。

〔王観堂先生注〕遺山先生文集三十一、紫虚大師于公墓碑、全真家禁睡眠、謂之煉陰魔向上、諸人有脇不沾席數十年者、秋澗先生文集五十六、尹公道行碑、師誨人曰、修行之害食睡色三欲、爲重多食、即多睡、睡情欲所由生人、莫不知少能行之者、必欲制之、先減睡欲、日就月、將則清明在躬、昏濁之氣、自將不生云云、此詞云、睡魔奔迸、後有詩云、夜半三更強不眠、又云、身間無俗念鳥宿、至鶏鳴一眼不能睡、寸心何所縈並足、證元王二家之説。

〔口訳〕遺山先生文集巻三十一〔郎案「中國叢書總録」2、子目、集部、別集類に「遺山先生文集、四十巻、附録一巻、(金)元好問撰、四部叢刊(初次印本、二字印本、縮印二次印本)集部、四庫全書、集部別集類、擒藻堂四庫全書薈要、集部)〕所收の紫虚大師于公墓碑の文に「全真教の道士は睡眠を禁止する。その理由は睡魔が襲ってくるのを煉固(ねりかため)るのに、多くの人は脅えて道に励んで数十年でも達しない者がある。」とある。秋澗先生文集巻五十六〔郎案、「中國叢書綜録」2、子目、集部、別集類に「秋澗集一百巻、(元)王惲撰、四庫全書、集部別集類、擒藻堂四庫全書薈要、集部、秋澗先生大全集一百巻、附録一巻、四部叢刊(初次印本、二次印本)集部〕尹公道行碑に、師が人に教えて云うに、道教修行の害は食欲、睡欲、色欲の三欲が最大で、多食は即ち睡眠を催すこと多く、睡眠が多いと情欲が生じてくるもので、少くとも能く修行する者の知らないことではな

い筈。必ず欲を制するに先ず睡欲を減し日夜励めば、清明の気が身体に満ちて昏浊の気は自ら生じなくなる筈、云々と。この言葉は睡魔奔迸の句に当る。後に詩に云う。「夜半三更〔郎案、午前零時から午前二時迄を云う〕強いて眠らず。」又云う。「身辺に俗念なければ鳥宿(とや)で鶏が鳴くまで一寸でも睡ることができぬ筈、僅かな心の隙に何で執心することがあろうか。」これらの詩句は元好問、王惲二家の説で證明できる。

〔本文〕是後天氣清肅、靜夜安間、復作二絶云、長河耿耿夜深深、寂莫寒窗萬慮沈、天下是非俱不到、安間一片道人心。其二云、清夜沈沈月向高、山河大地絶纖豪、惟餘道德渾淪性、上下三天一萬遭（藏本遭下有朝元二字）。觀據州之乾隅、功德主元帥移剌公、因師欲北行、剏構堂殿、奉安置尊像、前後雲房洞室、皆一新之。十月間方繪祖師堂壁畫、史以其寒將止之、師不許曰、鄒律尚且回春、況聖賢陰有所扶持耶、是月果天氣和如春、絶無風沙、由是畫史得畢其功。有詩云、季秋邊朔苦寒同、走石吹沙振大風、旅雁羽翅南去急、行人心倦北途窮、我來十月霜猶薄、人訝千山水尚通、不是小春和氣暖、天教成就畫堂功。會（藏本作尋）阿里鮮。

〔口訳〕この後天気が晴れて清肅で、夜も静かで閑寂だったので、師は又二絶を作られて云う。

長河耿耿夜深深　天の河は耿々として流れ夜は深く静まりかえっている
寂莫寒窓万慮沈　寂しい窓辺で千々の思いに耽ると
天下是非得不到　世の中の是と非なぞどうでも好い
安間一片道人心　僅かな道士の心でも安心立命できるもの。

その第二絶に云う。

清夜沈沈月向高　清夜が静まりかえり月が高く昇って行く
山河大地絶纖豪　山河も大地も身じろぎもしない
惟余道德渾論性　一寸思ってみるに道德は混屯としたもの

上下三天一万遭　宇宙の三天も皆それに同じさ。

朝元観はこの州の乾（北西）の隅にあって、この道観の施主は元帥移刺公であって長春師が北に旅行されるので、堂殿を建立して尊像を安置し、前後の雲房と洞室を全部一新した。十月の間に祖師堂の壁画を描かせるに当り、画家たちが寒気が強いので仕事を中止しようとした。長春師はこれを許可せず次の様に去った。「鄒の音楽でも春を呼び戻したではないか。まして聖人君子の像が陰にあって援助しているではないか。」〔郎案、鄒律について、「諸橋漢和」の鄒衍の項に云う「戦国、齊の臨淄の人、史記に騶衍に作る、燕の昭王、碣石宮を築いて之に師事す。昭王崩じ、悪王、讒を信じて獄に下す。夏日之が爲に霜を降ろす。北方の地にあり、美なれど寒にして、五穀生ぜず、衍律を吹いて之を暖め、禾禿滋る」とあるの故事を指す〕十月に果して天気が和順で春のようであった。風の吹き沙を飛ばすことがなく、こうして画家たちは壁画の仕事を終えることができた。そこで詩あり、

秋季邊朔苦寒同　秋の朔北の辺土は同じく寒さが厳しい
走石吹沙振大風　風が吹きつのって石を飛ばし砂塵を捲上げる
旅雁羽翅南去急　渡り鳥の雁も羽根をすぼめて南に早く帰ろうとする
行人心倦北途窮　これから北へ行こうとする者の心はその難儀の途を思い倦み疲れている
我来十月霜猶薄　わたしのやって来た十月は猶霜がひどくないのに
人訝千山水尚通　人は幾多の山河の路が通じているのを訝しがる
不是小春和気暖　處が思いがけず小春日和の天気で暖かく
天教成就画堂功　天が祖師堂壁画の完成できるのを教えてくれたわい。

阿里鮮が尋ねて会いに来た。

〔王観堂先生注〕巻下作通事阿里鮮、又注曰、河西人、即金史宣宗紀之乙里只、元朝秘史續集二之阿剌淺也。近人屠敬山（寄）撰蒙兀兒史記、以元史札八兒火者、及邱處機傳、並有命札八児、聘處機事、遂以阿里鮮與札八児爲一人。又以札八児傳、有飲班朱尼河水事、乃又并秘史六之回回人阿三爲一人、膠州柯學士、新元史亦從其説、其實非也。案金史宣宗紀貞祐元年九月、大元遣乙里只來、十月辛丑、大元乙里只來、二年二月丙申朔大元乙里只八札來、壬戌大元乙里只復來、三月甲申、大元乙里只札八來、六月癸丑大元乙里只來、凡四稱乙里只、兩稱乙里只札八、明四次乙里只一人奉使、其兩次則乙里只與札八兩人奉使也。元史太祖紀十年秋七月、遣乙職里往、諭金主以河北山東未下諸城來獻、乙職里疑亦乙里職之倒誤。要之乙里只、乙里職者即秘史之阿剌淺、此記之阿里鮮札八者、元史之札八児火者、黒韃事略之箚八、此記之宣差箚八相公也。此記阿里鮮與宣差箚八相公、截然二人、黒韃事略、作於太祖辛巳云、次曰箚八者回回人已老、亦在燕京、同任事與札八児、傳言、卒年一百一十八歳可相參證。而阿里鮮則於癸未、自西域送長春東歸、七月十三日至雲中、九月二十四日、亦於行在面奉聖旨、以百歳、左右之人、兩月之中奔馳萬里、殆非人情、此亦阿剌鮮非箚八之一證。

〔口訳〕巻下に通事阿里鮮と出るがその注記に河西の人とある。金史宣宗紀の乙里只〔郎案、百衲本「金史」十四、本紀第十四、宣宗上に「大元乙里只を遣わし来る（中略）十月丁酉朔、辛丑（五日）、大元の乙里只来る（中略）二年二月丙申朔壬子（十七日）、大元、乙里只、札八来。壬戌（二十七日）大元乙里只復た来る」など、元軍の侵寇と呼應して乙里只が屢々金朝に使者として往来していた。〕元朝秘史續集巻二に出る阿剌淺である。〔郎案、道潤捗歩著「新訳簡注「蒙古秘史」」一九八〇年香港、三朕書店観の続集巻二に「輸司站をして馬を営理させ、夫々所定の地に站を置いて、阿剌淺、脱忽察八二人をして管理させた。」（前掲書四一七頁）に見えている。〕最近の屠敬山氏の撰する「蒙兀児史記」のなかに「元史の札八児火なる者と、邱處機傳にも札八児に命じて處機を招聘する記事から、遂に阿里鮮と札八児とを同一人とする。〔郎案、余の架蔵する屠寄撰の「蒙兀児史記」（一九八四年十二

月、北京市中図書店刊）巻三、本紀第二下、八年癸酉（A.D.一二一三）閏九月汗は阿剌淺の策略を用う（注、阿剌淺名は秘史に見ゆる札八児火なる者）客台、蒲察の二將をして兵を居庸関北口外に駐兵させた云々」とある〕元史の札八児伝に〔郎案、百衲本「元史」百二十列傳巻十七、札八児火列傳に次の如く云う、「札八児火は賽夷人で、賽夷とは西域部族の酋長を云う。そこで氏に火姓とあるがそれは官の稱号である。札八児は長身、美髯、四角い眼と広い額、勇猛で騎射に巧みであった。初めて太祖に軍中に謁見して一見異常の人の印象を与えた。太祖は克烈汪罕と反目仲違いをしていたが、或る晩汪罕の潜伏してきた兵士が急に攻撃して来て、備えをして居なかったので、太祖の軍が大敗して、遽かに退去したが従う者が僅か十九人に過ぎなかった。そのなかに札八児が一緒に居た。班朱尼河に辿り著いた時に食糧が全く欠亡しており、荒野で食物を得ることが出来なかった。偶然に一疋の野馬が北からやって来たので、諸王のうち哈礼児が馬を射殺し遂に皮を剥いでそれを釜にし、火打石で火をおこし、河水を汲んでそれで煮て喰うに到った。太祖は手を挙げ天を仰いで誓って云うことに、余をして勝利を收め大業を成就できるのも、こうして諸人と同じく甘辛を共にする故で、苟しくも此の言の変らないのも河水の様なものと宣言された。聞いた將士も感泣しない者がなかった。そして汪罕もすでに滅びた云々」とある故事〕班朱尼河の水で飲食を供にした故事の札八児である。そこで又「蒙古秘史」巻六の回教徒である阿三も同一人としている。〔郎案、那珂通世先生譯注「成吉思汗實録全」（昭和十八年九月筑摩書房刊）の巻六のなかに「汪古惕（親征録・王孤部、元史、汪古部）の阿剌忽失的吉惕忽哩（親征録・阿剌忽思的乞火里、元史、阿剌兀思剔吉忽里）の處より阿三撤児塔黒台（阿三と云う撤児塔黒人）白き駱駝ある千の羯羊（千の羯羊に白駱駝一匹まじれる）を趕ひて額児古捏河に沿い、貂鼠、青鼠を買ひて取り来る時〔成吉思合罕に〕巴勒主納に水飲みに入る處に遇へり（この水飲みは名高き巴勒主納の濁水の誓なり）〕膠州の柯学士の撰せる「新元史」も亦その説に從っているが、その実際は否である。金史宣宗紀貞祐元年（A.D.一二一

三）九月に大元が乙里只を遣わし来る。十月辛丑大元の乙里只来る。二年二月丙申朔大元乙里只札八来る。壬戌、大元乙里只復(また)来る。三月甲申大元の乙里只札八来る。六月癸丑大元の乙里只来る。凡(おと)そ四つの記事にて里只を稱し、両つの記事に乙里只札八を稱し、四次目は明らかに乙里只一人の奉使で、その両つにて里只と札八両人の奉使としている。元史太祖紀十年秋七月、乙職里を遣わし行かせ金主に河北・山東の未だ降伏しない諸城の来献降伏を諭した。この乙職里は疑うに乙里職の倒誤なのではないか。要するに乙里只、乙里職は蒙古秘史の阿剌淺であって、此の西遊記の阿里鮮札八なる者は元史の札八児火なる者で、黒韃事略の割八がこの西遊記の宣差割八相公である筈。この西遊記の阿里鮮と宣差割八相公とは截然と別の二人である。黒韃事略に太祖辛巳（A.D.一二二一年）に作る〔郎案、王観堂先生編著の「蒙古史料四種」所收の「黒韃事略箋證」の本文に、太祖辛巳の記事なし、未詳〕次で曰(い)う、割八なる者乃ち回鶻人、已に老いて亦燕京に在って同じく留守の任にあった。元史の札八児伝の言うに卒する年一百一十八歳と。〔郎案、「蒙韃備録箋證」（前掲の「蒙古史料四種」所收本）の諸將功臣の項に、「次に割八と云う者が居り、すなわち回鶻(ウイグル)人で已に老令であって亦燕京の留守の任にあった。（注、割八は即ち長春真人西遊記の宣差割八相公、元史の札八児火なる者で、その卒する時年一百一八歳だったわけで、此の時已に老令だったことが判る筈だ。」百衲本「元史」一百二十、列傳巻第七、札八児火者列傳の一部を先に引用したが、晩年の記事として、「当に丘真人なる者があって、有道の士であった。崑崙山中に隠居して居た。太祖はその名を聞召して札八児に命じて召聘に住かせた。丘真人が札八児に語って云うに、わたくしは貴公のことを嘗て識って居ました。」と。札八児の云うに「わたくしも貴方のことをお見掛けしたことがあります」と。他日偶々真人と同座した時に札八児に次の様に質問された。「貴方は一身が貴顕の位に登り極めることをお望みか、子孫の繁榮をお望みかどちらですか。」と。札八児の答えて云うに、「もう百歳ともなった後は富貴の願望なぞ何もありません。子孫が恙なく先祖の祀りを継承して呉れれば満足です。」

とあった。そこで丘真人は太祖の召聘の命を承知した由。後果して願通りに卒年一百十八歳であった。」〕これらの記事を供に参証すべきである。阿里鮮がそこで癸未（A.D.一二二三年）に西域から送って長春師の東方帰還を果し、七月十三日に雲中〔郎案「中國歴代地名要覧」に「雲中城、山西省（雁門道）大同縣西北四百餘里、14、山西大同府大同縣」〕に到著した。九月二十四日に又行在所において太祖に拜謁し聖旨を遂行した由具申した。左右の人たちは二ヶ月間に万里を奔馳したことを知り、人間技ではないと歎賞した由。このことからも阿里鮮が劄八でないことの證據の一つである。

〔本文〕至自斡辰大王帳下

〔口訳〕オッチギン大王の天幕から阿里鮮が下ってやって来た。

〔王観堂先生注〕元史宗室世系表烈祖神元皇帝五子、次四鐵木哥斡赤斤、所謂皇太弟國王斡嗔那顔者也。秘史續集一、兎児年太祖去征回回、命弟斡陽赤斤居守。

〔口訳〕元史の宗室世系表に烈祖神元皇帝五子として、四子鉄木哥斡赤斤、謂う處の皇太弟国王斡嗔那顔なる者がある。〔郎案、百衲本「元史」一百七、表巻第二宗堂世系表に「烈祖神元皇帝五子、長太祖皇帝、次二、棚只哈児王、次三哈赤温大王、次四鐵木哥斡赤斤、所謂皇太弟國王斡嗔那顔者也。次五別里古台王」とある。〕秘史続集巻一に兎児年に太祖が回回征伐に出発し、弟斡惕赤斤に命じて留守に居らせた。〔郎案、既に引用せる道潤梯歩著「蒙古秘史」續集巻一に、「卯年（注、卯年、即ち己卯年、西紀一二一九年、紀十四年、成吉思可汗五十八歳）に撤八塔兀勒（さるたうる）の百姓を征伐のため出撃し、阿剌亦嶺（あらい）を越えて進軍した。成吉思可汗は妃子のうち忽蘭妃（くらんかとん）を携えて行った。弟たちの内斡惕赤斤那顔（おつちぎんのやん）をして大營を守護させて去った。」（前掲書三一七頁）とある斡惕赤斤那顔がそれである。那珂通世譯注、「或吉思汗實録」（昭和十八年九月筑摩書房刊）巻の十一、四二頁にも訳注文がある〕

〔本文〕使來請師、繼而宣撫王公巨川亦至曰、承大王鈞旨、如師西行請過我、師首肯之。是月北游望山、曷剌進表回、有詔曰、成吉思皇帝敕真人邱處機師、又曰、惟師道踰三子、德重多方。

〔口訳〕使が来たのに続いて、宣撫王公巨川がやって来て師に請うて云うに、「太祖陛下の宣旨を承りますと、貴方様が西方に御出なさるなら、どうか自分の軍隊の所に寄って頂きたい由」とあったので、師は承諾なされた。この月北に進んで望山に来ていると、曷剌が上表文を皇帝に奉って返って来た。その詔勅に云うに、成吉思皇帝より真人邱師に勅す（みことのり）」とあったし、又、「思うに師の道は三子〔郎案、岩村忍訳「長春真人西遊記（昭和二十三年三月、筑摩書房刊）の注記に「王重陽の四高弟中の三人即ち、馬丹陽、譚處端、劉處玄」とある。王重陽害風については露伴学人の「論仙」中の「活死人王害風」に詳述されている。又、馬丹陽・譚王處端・劉長生處玄らの事蹟も、この文の後半（「全集第十六巻、四七一～四九四頁に）在り、参照〕に越え徳は多方に重んぜらる」と。

〔王観堂先生注〕長春表曰、兼同時四人出家三人得道、惟處機虚得其名。此云道踰三子、即答表語三子者、馬鈺（丹陽）、譚王處端、劉長生處玄。密國公璹全真教祖碑云、此四子者、世所謂邱、劉、譚、馬、也。

〔口訳〕長春表に云う。「兼ねて同時に四人が出家し道士となった。三人が道を得たが、思うに處機は空しくその名を得たるのみ。」と。この勅文に云う道三子に踰（こ）えとあるのは、即ち表に答えるに語ある三子で、馬鈺（丹陽）、譚全處端、劉長生處玄である。密国公璹撰の全真教祖碑のなかに云うこの四子は、世の所謂邱・劉・譚・馬である。

〔本文〕其終曰、雲軒既發於蓬莱、鶴馭可游於天竺、達磨東邁、元印法以傳心、老子（藏本作氏）西行、或化胡而成道、顧川途之雖闊、瞻几杖以非遙、爰答來章可明朕意。秋暑、師比平好、指不多及。其見重如此。

〔口訳〕その末尾に云う。「貴方の車駕は既に蓬莱を出発されたので、鶴に乗られて天竺まで行くことが出来ましょ

う。達磨大師は東に来られて、真理の悟り心肝に在りとされ、老子は西に行き胡人を教化して道を成就された。顧ると山野河川の広濶であっても、老人である貴方にお目にかかるのも遠いことでありますまい。そこで来書にお答えして朕（わたくし）の思う所を明かにいたします。秋暑ですので師はこの頃平安にお過しでしょうか。好んで多言にも及びますまいと存じます。」とあった。その皇帝の師を重視することこの様であった。

〔王観堂先生注〕詔書全文、載附録中、案此詔耶律文正筆也。西游録丘公表、既上朝廷以丘公憚於北行命僕草、詔温言答之、欲其速致也。至元辨偽録三云、戊寅中邱公應詔北行、倦於跋渉聞、上西征表求待回使、中書湛然温詔召之。邱公遂行。蒙韃備録、燕京現有移剌晉卿者、契丹人、登第現爲内翰掌文書、足證此詔出文正手。

〔口訳〕詔書の全文は巻末附録の中に収載した。（後に掲げるを以て省略する）この詔を勘案するに耶律楚材文正公の執筆であることが判る。西遊録の邱公の表文に、既に朝廷に差上げた文章に、邱公が北行の召命を憚かつて肯定しなかった。詔文は穏かな調子で表に答えて速かに来るようにとのことであった。至元辨偽録巻三に云う、戊寅（A.D.一二一八年）中、邱公が詔に應じて北行した所が、途中跋渉に倦み疲れ、皇帝の西征を聞き表を呈し使いが戻って来るのを待っていた。中書省の湛然耶律楚材は穏かに諭した詔書で邱公を召したので、邱公が遂に旅行することになった由。蒙韃備録にある、「燕京に現在居る移剌晉卿なる者が契丹人で宮中に登第して、現に内翰掌文書となっていた」の文からして、此の詔文が正に耶律文正公の筆になることを證明するのに充分である。

〔本文〕又敕劉仲禄云、無使眞人飢且勞、可扶持緩緩來。師與宣使議曰、前去已寒、沙路緜遠、道衆所須未備、可往龍陽、乘春地發、宣使從之。十八日南往龍陽、道友送別多泣下、師以詩示衆曰、生前暫別猶然可、死後長離更不堪、天下是非心不定、輪回生死苦難甘。翌日到龍陽観過冬、十一月十有四日、赴龍巖寺齋。

〔口訳〕また劉仲録に勅（みことのり）して云うに、「長春真人をして飢えたり疲勞させてはならぬ。介護を充分にして緩（ゆる）か来

るがよい」とあった。師と宣使の劉とが協議して云うのに、「すでに寒波が過ぎ去ったとは云うものの、沙漠の道は遙か遠く道程(みちのり)も多いので、まだ準備も整っていないこともあり、龍陽観に往くのがよいだろう。」とあった。宣使たちもこの意見に従った。十八日南に向い龍陽観に出発しようとして、見送りに来た道友たちが送別の涙を流したので、師は詩を衆に示して次の様に賦した。

生前暫別猶然可　生きている内に暫らく別れるのはあり勝ちじゃ
死後長離更不堪　死んで永久に別れてしまうのは更に堪えられぬもの
天下是非心不定　世の中は誠にままならぬもの定めがたいもの
輪回生死苦難甘　生死は流転するものと観ずれば苦難も何でもあるまい。

翌日龍陽観に到って冬季を過した。十一月十四日龍巖寺の齋式に赴かれた。

〔王観堂先生注〕耶律鑄雙溪醉隠集巻三、有遊奉聖州龍巖寺一律、又巻五有游龍巖寺二絶、案元史世祖紀、至元四年冬十月降徳興府爲奉聖州、則雙溪所游、即此寺也。

〔口訳〕耶律鑄の詩集「雙溪醉隠集」巻三遊奉聖州龍巖寺〔郎案、雙溪醉隠集六巻は、余の架蔵にかかる「遼海叢書」(一九八四年、遼瀋書社、影印本五冊)第三冊の巻三に收められている。「奉聖州龍巖寺に遊ぶ」の一律「中國歴代地名要覧」に「奉聖州(遼、元)＝永興縣、察哈爾省啄鹿縣西南四十里、17、直隷、保安州」とある。その詩に云う「臥龍高臥幾黄昏(伏した竜のように聳えた丘に夕暮が迫る)依約霊巖隠伏痕(命運によって霊巖が隠居していた趾)霊磴屈蟠侵鳥道(臼のような雲がわだかまり曲折して鳥の飛ぶ道を遮っている)翠屏環合掩山門(青色の屏風を張り巡らして山門を隠すかのよう)淨名花界開中葉(茶の木が花咲き覆って香りがたゞよう)興聖蓮宮庇上尊(元来興聖寺と稱した本堂の庇の尊さよ)不就卜居殊勝地(隠居に殊勝の地これに過ぐるはなく)忍衝煙霞下孤村(ひそかに煙霞が寂しい村にかかっている)〕の一律があり、又巻五に「龍

巖寺に遊ぶ」の七言絶句二百がある。〔郎案、巻五に「遊龍巖寺」二絶があり、一絶は「上方鐘磬隔花聞（上の方から鐘の音が花を隔てて聞えてくる）便覺仙凡勢自分（そこで仙界と凡界とが自然に分けれるように思われる）爭信草霊堂也笑（どうして粗末な霊堂と云って笑えよう）笑他猿鶴戀松雲（笑うなら猿や鶴が松雲に馴れ親しむことを）」二絶は「錯落巖花是醉菌（落ち去った岩の花は醉菌（きのこ）のよう）景因人勝畫難眞（景色こそ人により画に勝るとも眞実から遠い）林泉盛迹幽棲地（林泉の活動した趾で幽棲の地に適わしい）誰分松雲不戀人（誰れが林泉と松雲とを狐独の人として分けられよう）」元史の世祖紀、至元四年冬十月の條に、「徳興府を降して奉聖州となしたとある。〔郎案、百衲本「元史」六、本紀巻第六、世祖三、「至元三年冬十月庚申朔、徳興府を降して奉聖州となす」とあり、王観堂先生の云う至元四年は至元三年（A.D.一二六六）の誤り〕そこで雙溪耶律鑄の遊べる奉聖州龍巖寺はこの寺である。

〔本文〕以詩題殿西廡云、杖藜欲訪山中客、清夜（藏本清夜作空山）沈沈淡無色、夜來飛雪映巖阿、今日山光映天白、天高日下松風清、神游八極騰虛明、欲寫山家本來面、道人活計無能名。十二月、以詩寄燕京道友云、此行真不易、此別話應長、北蹈野狐嶺、西窮天馬鄉、陰山無海市、白草有沙場、自歎非元聖、如何歷大荒。又云、京都若有餞行詩、早寄龍陽出塞時、昔有上牀鞋履別、今無發軫夢魂思。復寄燕京道友云、十年兵火萬民愁、千萬中無一二留、去歲幸逢慈詔下、今年須合冒寒游、不辭嶺北三千里、（皇帝舊兀里多）仍念山東二百州、窮急漏誅殘喘在、早教身命得消憂。辛巳之上元、醮於宣徳州朝元觀、以頌示衆云、生下一團腥臭物、種成三界是非魔、連枝帶葉無窮勢、跨古騰今不奈何。以二月八日啓行、時天氣晴霽、道友餞行於西郊、遮馬首以泣曰、父師去萬里外、何時復獲瞻禮、師曰、但若輩道心堅固、會有日矣。衆復泣請果何時耶。師曰、行止非人所能爲也、兼遠涉異域、其道合與不合未可必也。衆曰、師豈不知願預告弟子（藏本子下有等字）度不獲已、乃重言曰、三載歸、三載歸。十日宿翠憐（藏本作帙）口

〔口訳〕詩を以て龍巌寺本堂の西廊下に題して云う。

杖藜欲訪山中客　藜(あかざ)の杖を引いて山中の客を訪問すると
清夜沈沈淡無色　静かな夜が深く鎮り返って淡々として無色のよう
夜来飛雪映巌阿　夜来の雪が飛ぶように降り巌壁に映っている
今日山光映天白　今朝の山の光景は天空に映えて白一色
天高日下松風清　高天の元に照る太陽に松風も清雅に思え
神遊八極騰虚明　神気は八方に拡がり虚空に明朗さが昂まる
欲寫山家本来面　この龍巌山の本来の面目を写し出そうと願っても
道人活計無能名　道士の知恵を巡らしても何と名付けてよいか判らぬ程。

十二月に詩を以て燕京の道友たちに寄せ云う。

此行真不易　今度の旅は全く容易ならぬ。
此別話應長　この離別の話は長かろう筈
北蹈野狐嶺　北の方野狐嶺を踏破し
西窮天馬鄉　西の方天馬の故郷に到る
陰山無海市　陰山山脈には蜃気楼無く
白草有沙場　白けた草が沙漠にある許り
自歎非元聖　自分は聖人道者でもないと歎(なげ)き
如何歴大荒　どの様に大荒野を歩もうか。

又七言絶句に云う。

京都若有餞行詩　燕京で若し旅行餞別の詩があったら
早寄龍陽出塞時　早く龍陽観での塞外旅行出発の折に寄せて欲しい
昔有上牀鞋履別　昔から云うではないか牀に上るにも履物の別があると
今無発軫夢魂思　今は出発に先立って夢魂の動く気配もないわい。
復た燕京の道友に詩を寄せて云う。
十年兵火万民愁　十年に渉る遠征で万民が愁(うれい)に沈んでいる
千万中無一二留　千人万人のなかで一人二人も殘留するなし
去歳幸逢慈詔下　昨年幸運にも陛下の慈悲深い詔勅の下されたに逢い
今年須合冒寒遊　今年は丁度寒気を冒しての旅行に出ようとする
不辞北嶺三千里　北方の山々を巡っての三千里の旅も否まずに（皇帝は元来兀里多に在り）
仍念山東二百州　そこで山東の二百州のことを念い浮べる
窮急漏誅殘喘在　誅を免れ余喘を保つ窮急の人たちが尚在ることを
早教身命得消憂　早く身命の道を教えてその憂悶を消すことが出来ようもの
辛巳（A.D.一二二一年）の上元（一月十五日）に宣徳州の朝元観において祭儀を行い、頌詩を以て衆に示して云う。
生下一團腥臭物　人は生きても一塊の腥臭物(なまぐさいもの)
種成三界是非魔　三界にあれこれ魔性の種が生えるもの
連枝帯葉無窮勢　枝を連ね葉を繁らせるような無限の勢いあり
跨古騰今不奈何　昔も今も蔓(はび)って一体どうしたらよいのやら。
二月八日を以て旅行に赴いた。時に天気が晴れ渡って、道友たちが西郊外迄餞別に同道し、師の馬の首を押遮っ

て泣きながら次の様に云った。「父師が万里の外にお立ちになる。何時になったら亦再び挨拶の機会が得られましょうや。」と。師の申されるに、「若し貴方たち道心を堅固にして励めば、復逢う日もあろう。」と。衆は再び泣いてその日が何時ですかと質問したので、師の云われるに「行くも止まるも人の思い通りにはゆかぬものじゃ。それに遠く異域を跋渉するので、その道程が合うか合わぬか未だはっきりとして居らぬ筈。」と。衆の云うのに「師である貴方に知らぬ筈はありません。弟子たちに預告して下さいませ。」と。仕方なく止むを得ずにそこで重ねて申された。「三年経ったら戻って来るよ。三年経ったら戻って来るよ。」と。二月十日に翠憐口に泊った。〔郎案「中國歴代地名要覧」に翠屏山の項目十二ヶ所を挙ぐ、山西省二ヶ所、山東、陝西、四川、湖北、雲南に夫々一ヶ所、貴衆、福建に二ヶ所ずつある。尚、「察哈爾省、萬全縣内、18、直隷萬全都指揮使司、萬全石衡」がこの翠憐山に当る、次の「王観堂先生注」を参照〕

〔王観堂先生注〕方輿紀要翠屏山在、萬全右衛北三里、兩峽高百餘、又望之如屏。

〔口訳〕読史方輿要の中に翠屏山あり、「萬全右衛北三里の所で、両側に峡谷があり高さ百余丈に達し、これを望見すると屏風のようだ」とある所。〔郎案、余の架蔵する「讀史方輿紀要」（光緒己卯、蜀南桐学書屋、薛氏家塾修補校正足本、敷文閣蔵板）巻十八、直隷九、萬千都指揮使司、萬全右衛に翠屏山の記事あり。「衛北三里、峡谷の両側は高さ百余丈、これを望見すると屏風のようである。宋の嘉定四年（A.D.一二一一）蒙古が金の西京を攻撃したが、金の將軍胡沙虎は城を捨てて逃走した。蒙古主太祖が追撃して金軍を翠屏山に於て敗北させた。遂に西京を占領したが、その西京とは大同府のことである」と見えている。〕

〔本文〕明日北度野狐嶺、登高南望、俯視太行諸山、晴嵐可愛、北顧但寒烟衰草、中原之風、自此隔絶矣。

〔口訳〕その明る日北に向い野狐嶺を越えたが、その頂上に登って南を俯瞰展望すると、太行山脈の多くの山々が見え、晴れながら雲気を催して賞美することができた。北方を顧望すると唯寒々と煙り、荒れた草原が見ら

れて、南の中原の風景とこの野狐嶺で隔絶しているのが判る。
〔郎案、此の條文において、ブレットシュナイダー氏の Mediaeval Reserches（長春真人西遊記の訳文補注）との合致せるを見る。以上抄記したる長春真人の西遊記全文の複雑なる経緯は、文章の難しき故か、詩賦多きためか多く省略せり。此の項目より併記対照せんと欲す。〕
〔プレットシュナイダー訳文〕、第一月の十日（一二二一年蒙古、元、太祖皇帝十六年二月三日に当る）吾々は夜間に翠屏口を通過した。（注103翠屏口は中国の大きな地図によると張家口カルガンの西約30里に位置する所の名前である。）
翌日予らは野狐嶺と呼ばれている隘路を通過した。（注104、野狐嶺、嶺は中国語で〝峠〟嶺はまた「山間の縁」を意味している。野狐隘路、すなわち山嶺は長城の城門の一つ、張家口の門の西隣りに当る山防堡口の北五里の所に位置している。わたくしの小著「北京に関する考古、歴史研究」の注190を参看のこと。十三世紀の略半ば頃、一人の中国人旅行家張徳輝は北京からカラコルムに旅立った。保存されている限りの張の旅行記の語るところによれば Archim, Palladius パラディウスによってロシア語に訳されて「地理学協会、シベリア支部の覚書」にのせられてある。全く同じ紀行文が Schuyler スキュイラー氏によって英訳版が「地理学雑誌」一八七五年刊のなかにもみられる。この張徳輝の旅行の最初の部分に、長春眞人と全く同一の道筋を辿って行ったが、この野狐嶺の狭い渓谷を偶狐と呼んでいる。野狐ないし偶狐は恐らくは蒙古語を宛てたのだろうと思われる。蒙古語 yeke ＝大きいという意味である。）さらに南に吾々は大行嶺を見た。（注105この太行山脈は北京の北部と西部を囲んでいるその名前である）そして他の山脈も眼に入って来る。山嶺の空気は誠に素晴しいものであった。北の方に向うと、そこには寒冷な沙漠と貧弱な草が生えているに過ぎない。此処は亦中国的な自然環境の生きづく所との境界でもあった。（注106北京から Kiakhta 迄を進む旅行家は張家口（カルガン）〔長春と張徳輝ら

によって辿られた古代路の多少東に位置している）の北部、聳え立った山脈の頂辺を越えなくてはならなかった。そしてそこで蒙古の卓状平原に居る自らを見出すであろう。事実、気候の変化は、その植生分布などと供に此処では全く突然に変化している。吾が友人 Bushell ブッシェル氏は「外長城帯の小旅行記覚書」（J.R.G.S. vol. xl iii）に彼の興味のあるところを記して、略六五〇年以前に旅した中国旅行者が、蒙古平原に入った途端に突然の気候の変化を体験した、と全く同じ注記を施している。亦プレジュワルスキー氏（"Mongolia" Sc. i. 33）（「蒙古誌」巻一、一三三頁）も「長城が続いている。その軸に沿うて、その縁辺と中国の温い平原と極度にひどく寒い蒙古平原との間を区劃するものが、（張家口の北部で）非常にはっきりしているのがみられる」とも云っている……同書巻一、一三一頁に「さらに五月の六日に吾々は再び蒙古草原の彊域を区劃する点上に立った。そこそ張家口になる処に落ち込んだ処にあたる。山脈の疊々たる光景の大きな拡がりが、再び吾が足元に見下せ、遙か彼方遠くにエメラルド状に輝く明るい中国の草原がみられる。その中国の平原は温かく、春の様でもあり、一方此処の平原は、長い冬の眠りから今や正に醒めようとしていた。」と記録している。）吾々は人骨の散乱して覆っている古戦場をみたのであった。（注107ここは成吉思汗が一二一一年（太祖六年辛末、二月）に金軍を敗った場所であったし、野狐嶺でのこの戰闘は元史のなかに記録されている）

〔郎案、百衲本「元史」一、本紀巻第一、太祖六年辛未二月の條に、「帝自ら率いて南方征伐に赴き、金將定薛を野狐嶺に於いて敗り、大水濼・豊利などの縣を略取した。」とある記事がそれである〕

〔王観堂先生注〕張德輝紀行、至宣德州、復西北行、過沙嶺子口及宣平縣驛、出得勝口、抵捩胡嶺、由嶺而上則東北行、始見毳幕氈車、逐水草畜牧、非復中原風土、案野狐捩胡一聲之轉

〔口訳〕張德輝の旅行記「邊堠紀行」によると「宣德州に至り、復北西に進み沙嶺子口及び宣平縣駅を過ぎた。

〔郎案「中國歴代地名要覧」に「沙嶺、察哈爾省宣化縣西二十里、18、直隷、萬全都指揮使司宣府左衛」とあ

り「読史方輿紀要」巻十八・直隷九、萬全都指揮使司、宣府左衛の項に「唐、文徳縣を置く、契丹之に因る金の大定二十九年（A.D.一一八九）改めて宣徳と云い、元は宣徳府治とした」とある。子口は未詳、宣平縣についても同書に「宣平縣（金－明初）○察哈爾省懐安縣東北、18、直隷、萬全都指揮使司、萬金左衛」「讀史方輿紀要」巻十八、直隷九、萬全左衛「司の西六十里、西懐来衛に至る六十里、西南、山西蔚州に至る二百五十里、唐初嬀州地となし、後に武州地とす、契丹歸化州に属せしめ、金は宣徳州に属させ、元に宣徳府地となした」、得勝口を出て捩胡嶺に到達した。その嶺に登ってみてそこで東北に進むと、始めて毛皮で覆った天幕とフェルトを垂げた車をもち、水草を追って畜牧移動の生活をしているのを見た。中国本土の風土還境と違っているわけだ。野狐嶺を勘案してみると捩胡の発音が同一で、その転訛だと云うことが判る。」〔郎案「讀史方輿紀要」巻十八、直隷九、萬全左衛に野狐嶺の項がある「衛北三十里、地勢が極めて高峻で、風力が猛烈で雁がこの風に遇うとたちまち地に墜落する。宋、景祐四年（A.D.一〇三七）に契丹主宗真が野狐嶺で狩獵した由、又北に獲児嘴がある。嘉定四年（A.D.一二一一）に蒙古が金を撫州に敗って南下しようとした。金將完顔九斤は兵を野狐嶺に駐屯させて攻撃に備えた。蒙古軍は獲児嘴に到著したので、金人は遁走していった」とある。〕

〔本文〕道人之心無所（藏本作適）不可、宋徳方輩（輩字據藏本増）指戰場白骨曰、我歸當薦以金籙、此亦余北行中因縁一端（藏本作一端因縁）耳。

〔口訳〕道を志す人にとって之は心を動かされる程の所でもない。宋徳方らは、この古戰場に散乱している白骨を指差して云った。「わたくしたちが帰還する際に金籙〔郎案「諸橋漢和」に云う「金籙（キンロク）・道家の語、天帝の詔書を云う。（隋書、經籍志に、道家潔斎の法、黄籙、王籙、金籙、塗炭等の齋あり。唐六典に道士の修行、齋七あり、七は金籙大齋を云うと、）岩村忍氏の訳注に「ここでは金籙大齋即ち七日間の祭りのことであろう」（前掲書、六三頁）としている。亡者供養のための七日間の金籙大齋を指すこと間違いあるまい。」で供養いた

しましょう。」と、この事件も亦わたくしの北行の旅の因縁の一端であった。

〔王観堂先生注〕元史木華黎傳、金兵四十萬陳野狐嶺北、木華黎率敢死士、策馬横戈、大呼陷陣、帝麾諸軍並進、大敗金軍、追至澮河、僵屍百里

〔口訳〕元史の木華黎列伝に「金軍の兵四十萬が野狐嶺の北に陣を敷いたので、本華黎は決死の兵を率いて馬に鞭打ち武器を手にして、大呼して云うに敵の陣は陥落したぞ、と。帝の麾下の諸軍が並び進んで敵を大敗させた。金軍を追撃して澮河に到ったが、戦死者の屍(かばね)が百里に満ちた。」とある。〔郎案、百衲本「元史」一百一十九、列傳巻第六、木華黎列傳に云う「木華黎は札剌児氏の出で、阿難水の東に居住した。父は孔温窟哇で戚里を以ての故に太祖の麾下に在り、平蔑里吉に従って乃蠻部を征伐して数々の功を立てた。（中略）木華黎はその第三子であった。（中略）壬申（A.D.一二一二年）雲中、九原の諸郡を攻撃して之を占領した。進んで撫州を圍んだ時、金の軍兵が四十万人と号して野狐嶺の北に布陣した。木華黎の云うのに、「彼の軍は多数で吾が軍は少ない。併し死力を盡して奮戦したならば、敗北させられないことはない筈じゃ」とあった。決死の士卒を率いて馬に鞭打ち、武器を手にして大いに叫んだ、「陣地を陥落させたぞ」と。帝の麾下の諸軍並びに進撃金の軍を大敗させた。追撃して澮河〔「中國歴代地名要覧」に云う。「澮水、澮河トモ云ヒ山西省（河東道）冀城縣東ニ発源し、縣南ヲ經ヲ西流シ新絳縣ニ至リ汾水ニ合ス。41、山西平陽府、極沃縣、冀城縣、絳州を遍流す」読史方輿紀要の澮河の條いずれも、元が金を野狐嶺に破り、追撃して澮河での大量殺戮について触れていない。〕

〔本文〕北過撫州、十五日、東北過蓋里泊、盡邱垤鹹歯地、始見人烟二十餘家、南有鹽地、池（藏本無作池字）迤灑東北去。

〔口訳〕北進して撫州を通り過ぎた。十五日東北に道を執り蓋里泊を通過した。到る所の岡や平地が辛い塩の湧出たもので覆われていた。始めて人家が二十余軒ほどあるのを見た。南に塩湖の枯れた所があって、ずっと東

北に連なり続いている。

〔ブレットシュナイダー訳文〕さらに北方に向って旅して行くと、吾々は撫州を過ぎた。（注108、長城帯の北部で、蒙古草原の南部に当り、そして此処で言及せられている地域では、巨大な平野の一木もない所である。しかし、夏季には繁茂した草叢と水に恵まれた平野になる処が拡がっている。この大草原は帝室保護田園領でもあったが、東西に拡がっている。その北部は丘陵の低頂が荒涼たるゴビ沙漠とを区劃している。こうした古代の「草原の地」には、多くの城塞地が蒙古の野蛮な遊牧民の中国への侵入を防ぐために構築せられた。撫州はこの地域の最も重要な地点の一つであった。〔郎案、「歴代地名要覧」、撫州＝高原縣、18、直隷萬全都指揮使司、附見開平府故衛興和城（讀史方輿紀要、巻十八、直隷九）開平故衛、東至大寧廃衛四百三十里、東南至古北口四百里、西南至宣府鎮七百里、北至沙漠四百七十里、自衛至京師六百三十里、興和城衛西南四百餘里、去宣府三百餘里、後魏桑遠鎮地、唐新州地、契丹建爲撫州、金爲桑遠鎮、明昌三年（A.D.一一一九二）復置撫州、尋升爲隆興路、亦曰興和路、明洪武三年李文忠克、……以下略……〕Palladius パラティウスによって記録された彼長春眞人の詩の一つに、長春はこの地を小燕と呼んでいる。併し撫州は繁榮していた、乃至はその結果として破壊せられてしまった。というのは張徳輝はその後二十七年経って撫州を通過したのであったが、撫州寨の城壁のみが残っているに過ぎなかったことに言及している。古代の撫州は Archim として見做されていた。パラディウスは始めに自ら自身の地方的な観察から決定して、現在の蒙古人によって Khara balgasun と呼ばれた遺跡のなかに撫州を宛てた。この Khara balgasun は北京から Kiakhta への道筋に存在していて、張家口から約三〇英マイルの位置にある。亦、拙稿 "Rech. Arch. et Hist. s Peking" 注記191を比較参照のこと）此の地で吾々は始めて住民の定住地－約二十軒ほどの家からなる－を見た。その南に多くの湾曲部をもつ塩湖があった。（注110その湖沼が何を意味しているのか云うのは難しい。というのは蒙古の地は塩湖に非常に恵ま

れている。けれども併し、これらの湖沼は屡々その大きさが変化したり、また見えなくなったりする。一方他の場所では新しい塩湖が出現したりする）その塩湖は北東部に延びている。

〔王國維先生注〕金史地理志、撫州豊利縣、有蓋里泊。黒韃事略、霆出居庸關過野狐嶺、更千餘里入草地、曰界里泊、其水暮沃、而夜成鹽、客人以米來易、歳至數千石。據徐霆説、泊與鹽池爲一、據此記、則泊與鹽池爲一、案蓋里泊在撫州東北、當即今太僕寺牧場東之克勒湖、其南郤無迤邐〔郎案、「諸橋漢和」に曰く、「迤邐、つらなり、つゞくさま、又、ななめに歩行する〔爾雅釋訓〕迤邐帝行也〔正韻〕連接也」〕東北去之、鹽池疑此説誤也。自出塞至此始見人烟、則撫州無人可知、張徳輝紀行、亦云、北過撫州惟荒城在焉。

〔口訳〕金史地理志の撫州に四縣あり、その一つが豊利縣で明昌四年（A.D.一一九三）伝傑に蓋里泊を設置した由が見えている。黒韃事略箋證に徐霆の注記があって云う。「居庸関を出て野狐嶺を通過して、更に千余里程行くと草原の地に入った。界里泊と云うが、その水が夕方まで十分だが夜になると塩に変るとある。旅行者は米を持って来て交易すること歳に數千石に達する。徐霆の説によると泊と塩池と同一であるとするが、この記述の塩池は泊と別になっている。考えてみると蓋里泊は撫州の東北に在るので、当然現在の太僕寺牧場の東克勒湖に当る。その南には反って相連なっていない。東北之を去ると塩池とあるが、これは誤記かと疑われる。塞を出て蓋里泊に到って始めて人家の煙を見たとあるが、撫州に人気がないことがよく判る。張徳輝の旅行記も亦次の様に云っている。「北に向って撫州を通過したが、唯荒れ果てた城があるだけだった。」と。

〔郎案、ブレットシュナイダー氏の注記、王観堂先生に記する処と同じ。黒韃事略箋證の徐霆の注に「居庸関を出発して野狐嶺を通過更に千余里して草原に入る。界里濼と云う。その水は夕方にまで充分湧くか夜に塩となる。旅行者は米を持って来て交換するが一年に數千石に及ぶと云う。更によく検べてみると、蒙古人が攝る塩はその色が白雪のようで、形状は大きく牙のように見えその底が柄杓のように平らなので、斗塩と云い精製

された優れた塩である。」とある。〕

〔本文〕自此無河、多鑿沙井以汲、南北數千里、亦無大山、馬行五日、出明昌界

〔口訳〕ここからは河がなくて、多く沙中に井戸を掘って水を汲む。南北數千里の間に大きな山がなく、馬で騎行すること五日にして、明昌の国境に出た。

〔ブレッドシュナイダー訳注〕この地から北方に向ってゆくと河川に出逢うことがない。そのため水は沙漠中に掘った井戸によってのみ得られるに過ぎない。さらに北に向って數千里の間目立った山脈はない。馬の背に揺られて五日間の騎行の後に、吾々は明昌と呼ばれる国境線をはなれた。（注111この明昌は南蒙古にある城壁のある所で、金王朝の時代に皇帝 Madaku （章宗）の治世下に構築せられたもので、明昌の年号（A.D.一一九〇～九六年）に因で明昌と呼ばれていた。明昌は南蒙古にある城壘であり、この名から長城の名稱も由来している。張德輝の旅行記（以下、注114）。）

〔王観堂先生注〕謂金章宗明昌中所築堡障也。張德輝紀行、昌州之北行百里有故壘、隠然連亘山谷、南有小廢城問之居者、云此前朝所築堡障也。城有戍者之所居。王惲秋澗先生文集中堂事記、新桓州西南十里外、南北界壕尚宛然也。距舊桓州三十里、案長春、自蓋里泊北行、則所經界壕當在桓州之西、昌明之東北、與張王二人所見正爲一物。此記目之爲明昌界、則張氏所記魚児濼西北四驛之外堡、當是世宗大定中所築也

〔口訳〕金の章宗明昌年（A.D.一一九〇～九六年）中に築いた堡壘を謂っているのである。張德輝の紀行のなかに、「昌州の北行くこと百里にしてかつての城壘がある。隠然として山谷が連なり亘って、その南に小さな廢城が有った。それを問うてみるとその地に居る者は、この廢城壘は前の王朝の時に築いた堡壘だと云う。その城は護衛する者たちの居住していた跡だと云う」。王惲秋澗先生文集の中堂事記に「新桓州の西南十里外、南北は濠をもって区画界をなし、尚宛てとして城壘を髣髴とする。舊の桓州を距ること三十里の所にある」とある。

長春の西遊記を勘案するのに、蓋里泊から北に行くと、則ち経過するその城壘の界濠は當に桓州の西で、昌州の東北に存在し、張、王二人の見た所がまさにこの一物であったことがわかる。だから「西遊記」がこれを目標として明昌界と云っているのは、張徳輝氏が旅行記に記載した魚兒濼西北四驛之外にある堡壘で、當然ながら是れは世宗大定中に築造したところのものであった。

〔本文〕以詩紀實云。坡陀折疊路彎環、到處鹽場死水灣、盡日不逢人過往、經年惟有馬回還、地無木植惟荒草、天産邱陵没大山、五穀不成資乳酪、皮裘氈帳亦開顔。又行六七日、忽入大沙陀。

〔口訳〕詩を以て実景を賦して云う。

坡陀折疊路彎環　凸凹して折り疊んだ道が曲りくねって
到處塩場死水湾　到る所塩ばかりで水一つ溜っていない
盡日不逢人過往　一日中誰れにも遇わないで旅して行くと
経年惟有馬回還　年が経ったら馬の首を廻らしての帰還を思うのみ
地無水植惟荒草　大地に樹木なく唯野草が生えているだけ
天産邱陵没大山　天は丘陵を置くのみで大きな山脈は見当らない
五穀不成資乳酪　五穀は実らないので馬乳牛酪に頼るだけ
皮裘氈帳亦開顔　毛皮の衣にフェルトの天幕が顔をきかせている。

又行くこと六・七日で、忽ち大沙漠に入った。

〔王観堂先生注曰〕雙溪醉隠集一涿邪山詩注、即今華夏、猶呼沙漠爲沙陀、

〔口訳〕耶律鑄の雙溪醉隠集巻一〔郎案、余の架蔵する「遼海叢書」所収の「雙溪醉隠集」巻一を検するも、涿邪山の詩なし。巻二、後凱歌詞九首の内六首目に「涿邪山」在り。以下、詩と注記の一部を抄す。「鼓譟謹山

憾涿邪（軍鼓の響が山に木霊し涿邪山を揺がす）飛龍彦翼掩螣蛇（飛龍の大きな翼が蛇を覆い隠すよう）露営罷繚神鋒弩（夜営して神鋒、神弩の武器を収め）雲陳猶轟霹靂車（雲は尚湧いて雷鳴を轟かす）注に云う。我が軍が涿邪山で敵を敗った。わたくしが嘗て「処目説粋」にそのあらましを載せたことがある云々（中略）即ち現在の華夏の人は猶沙漠を呼んで沙陀としている」と。〕即ち現在の華夏の間では猶沙漠を呼んで沙陀と云っている、と。

〔郎案：青山「歴代地名要覧」曰、涿邪山ハ外蒙古ノ抗愛山脈ノ南支沙漠中ニ突起セル山（史七－一一、弱水考）45山西外夷附考蒙古涿、〔「讀史方輿紀要」巻四十五、山西七、涿涂山、在漠外、涂讀邪、山在高闕塞北千餘里、漢天漢二年（B.C.九九）、遣公孫放路博徳等、討匈奴、會帥涿邪山、高闕坐不至涿邪山、初建初元年（A.D.一一四）南單于與邊郡乃鳥桓之兵、擊破北匈奴於涿邪山、又元和二年、南匈奴與北部温寓犢王、戰於涿邪山忻獲而還、永元初年（A.D.九〇）討北匈奴、賈憲出鶏鹿塞、鄧鴻出梱陽塞、南單于出滿夷谷、皆會涿邪山、晉太元十六年（A.D.三九一）、拓跋珪擊柔然、遣長孫肥追柔然、匹侯跋至涿邪山、降其衆、又魏主燾神麚二年（A.D.四二九）擊柔然、循溺水西行、到涿邪山而還。太延四年（A.D.四三八）自五原伐柔然、至浚稽山、分遣拓跋崇、從大澤向涿邪山、不見柔然而還。太平真君十年（A.D.四四九）復伐柔然、出涿邪山行數千里、柔然遠遁是也」〕

〔本文〕其磧有矮榆、大者合抱、東北行千里、外無沙處絶無樹木。

〔口訳〕その石の河原に小さな揄があったが、大きい揄は人が抱える程だった、東北に行くこと千里、周囲は全くの砂地ばかりで、樹木と云うものが絶えてない有様だった。

〔郎案ブレットシュナイダー氏の長春「西遊記」の訳注は、放恣に省略して訳の困難なるを省略す。〕

〔ブレットシュナイダー訳注〕

六・七日間進むと、吾々は大きな沙礫沙漠（本文に沙陀とあり）大沙陀に入る。（注112大沙陀、この沙陀とい

う名稱は、中国人が蒙古沙漠の或る種の部分を名指したものである。沙＝砂、陀＝危險極りのない、荒蕪な、高低のあるを意味している。こうして沙陀といった名稱は、砂礫のたまった窪地と訳され得るだろう。その沙陀がこの沙漠の性格を言い表わしている完全な回答となろう。長春と全く同じ道を辿ったプルゼワルスキーは（Mongolia sc. i, P.106）のなかで、「ドロンノールを越えて二十七マイルゆくと、Keshiktenのaimak に到達する。道路のこの地点から沙丘の連続した、土着の人たちが guchin gurbu と呼んでいる丘陵帯が、ダライ・ノールの彼方に拡がっている」等々と報告している。プルゼワルスキーはこれらの沙丘についての詳細な記述を開陳している。十四世紀のマリグノリ Marignolli はこの Cyollos kagon すなわち風によって吹きためられた沙丘が、蒙古沙漠の北方端にあることに注目している。この点、ユール大佐の「キャセイへの道」。三三九頁を参照のこと。〔郎案、ユール大佐の「キャセイへの道」Henly Yule; Cathay and the way thither の旧版、東京の其益商社複製本（二冊本）の第二冊目、三三五頁に「ジョン・デ・マリグノリ John De' Marignolli. の「東方への旅行についての編集本」の記述がある。併し、ユールにアンリ・コルディエ教授の補注した四冊本が一九一四年にハックルート協会叢書に收められて、その第三巻、第五章に「ジョン・デ・マリグノリと彼の東方紀行の編集本」として一七七～二六九頁に收められている。このクヨロス・カゴン Cyollos kagon はその二一三頁に次の如く述べられている。「教王の府から吾々の出掛けた後第三年目の終り頃に、アルマリクからクヨルス・カゴン迄やってた。それは風によって堆積した砂丘のことなのだ（注、彼の云うクヨロス・カゴン〔又はカガン〕が砂丘を意味しているのかどうか判然としない）。（中略）その位置たるや、明らかにゴビ沙漠の北端に見出すことができる。このゴビ沙漠はマリグノリの所謂 Torrid Zone（乾燥した地帯）であってカムル Kamul の東北迄その範囲内にある。実際にこの辺りは、トルキスタンに関する中国人の著作のなかに、吾々は繰り返し、沙山（砂の山脈）の言及を見出せる。その沙山からカミル Kamil の北にあるバルクル・

ヌル Barkul Nur の水源に流れ込む。（ジュリアン氏の「旅行集成、一八四六年刊第三巻三七～四四頁　参照）「中央アジアにおけるロシア人」（一八六五年、ロンドン刊、一一一頁）のなかに訳された報告の一つに沙漠に言及して次の様に云う。「（ヤールカンドの近くの）この地域から東方に向って漸時拡がって居り、そこでゴビ大沙漠になつて、全ての草木が見られない…そこで、砂は住民たちがガク Gag（山）の名前を与えている、こうした荒々しい堆積に吹き上げられている。」若しこのガグが誤植でないとすると、吾々此処で恐らくマリグノリによって用いられた名前の一要素を持つことになり、トルコ語とペルシア語のチュル Chūl 沙漠を意味する詞が、ヴァムベリィVamberyによって綴られた Tchöl, Tchöle に当る。唯吾々は恐らく他に証據を持つであろうが。」」十七～十八世紀になると、西突厥（トルコ族）の一氏族がこの地を沙陀と呼んでおり、突厥人たちはこの沙陀の名を、彼らが生活している（アルタイ山脈と、天山山脈との間の沙漠帯に居住していた）処に受容して用いている。唐書巻二百五十七、〔郎案、ブレットシュナイダー氏の注に、唐書巻二五七とあるも、旧唐書、新唐書いずれも二百五十七巻は存在せず、誤記、誤植なるべし、百衲本「旧唐書」に沙陀の文字を探るに未詳〕亦この本文注記151を比較参照のこと）この沙陀は蒙古沙漠に宛てた中国風な名稱に関する多少の言葉で、述べる絶好の場所であるように思われる。蒙古人たちは、その沙陀をよく知られているものとして、ゴビ沙漠と呼び、近代の中国輿地図にこのゴビ沙漠が Gobi とよって表記せられている。この沙漠に対する古代の中国名は依然としてこの時代の元朝期迄使用され続けて来たが、併し、沙漠（沙＝砂、漠＝荒蕪地、砂地の平原）である。ゴビ沙漠に対する他の古代名は砂漠（北方の沙漠を指しているのだが）であった。甘州から東はオルドスの地域に拡がっている沙漠帯を名指していて、一方において甘州の西方に拡がる水の全くない孤高の地は、かっても現在も尚大磧、ないし沙磧の名前の元に知られている。磧は恐らく岩礫を意味していると思われる。亦沙漠瀚海に関する注9を比較参照のこと）低地（本文には磧と表現す）矮小な姿をした楡樹が見

出される。これら楡樹のあるものはかなり密集囲遶した状態にある。（注113隔離して繁茂する楡木（Ulmus pumila）は、わたくし自身の観察から得た知識の限りでは、蒙古草原に稀れにみるところのものではない、楡木は沙漠の湧沼に自生していて、時として大きな育ち方をしたりする。）

〔王観堂先生注〕張徳輝紀行、自保障西行四驛、始入沙陀、際陀所及無塊石寸壊、遠而望之、若岡嶺邱阜、既至則積皆沙也、所宜之本楡柳而已、又皆樗散而叢生。

〔口訳〕張徳輝の紀行文によると、「保障から西の方へ行くこと四駅を経て、始めて沙陀（沙漠）のなかに入る、沙漠の境界の目の及ぶ限り、石塊とわづかな土地もなく、遙か遠くそれを望見すると岡が連なり、高い所は盛り上げた高塚のように思われる。既にその処に至ってみると、そこは沙の積った所である。こうした処こそ楡や柳、タマリスクの木々が自生するのに宜しい所で、すでに又皆樗は散っていて、しかも草叢が生え出している。」とある

〔本文〕三月朔出沙陀、至魚兒濼

〔口訳〕三月朔（ついたち）、沙陀を出て魚児濼に至る。

〔ブレットシュナイダー氏訳注〕

併して、此処から北東方向に尚一萬里(!)以上進んでも見るべき樹々は存しない。

吾々は一二二一年、三月廿五日に相当する三月一日に沙漠地をはなれ、そして魚児濼（ユルリ）と呼ばれる場所に到達した。（注114　此処でわたくしは張徳輝（注104を参照）の旅日記を引用したい。彼張徳輝は長春眞人と全く同じ道を辿って、この湖まで遙々やって来たのだった。その旅行記に「撫州（注108を参照）から北へ向ってわたくしは昌州迄来た〔Palladius の調査研究によればこの遺跡は蒙古人たちによって Tsagan balgasun と呼ばれて、Khara balgasun の北西八マイルに位置してこの場所のように、Kiakhta までの街道沿いにあるという〕

……そしてその町の東方に塩湖があって、周囲は約百里、狗湖 Dog's lake とも呼ばれているが、その由縁は、犬の形姿にその湖の形が似ているところから名付けられたものらしく〔恐らくは長春の旅行記に述べられた、湾曲の多い地形をもった湖と全く同じものだろうと思われる〕考えられる。都市の北方百里以上隔ったところに、わたくしは山岳や谿谷の上に拡がった古い城塞の遺跡に注目した。その廃墟の町の南に接続して城塞があり、その城塞には辺疆地防禦の目的があったのである。〔この城塞こそ、長春の西遊記のなかに表現された明昌という防禦線上の一城塞であったのである。〕この城塞からさらに四駅程更に進んで、そしてそこで沙礫沙漠にやってきたのだった。その沙陀は見渡す限り石礫で大地を覆う草もなかった。所謂見渡す限り、遙か彼方に低い丘陵と丘の岩肌の連鎖がみられるに過ぎない。けれども貴方が若しその丘に近付いてみると、それは沙磧の堆積であるに過ぎない。この地に繁茂し得る樹木は唯楡や楊柳だけで、それらも倭小でみすぼらしく、処々にばらばらと散在するだけで、叢をなしている。水は到る所で塩分を含んでいる。わたくしはこの沙漠のなかでさらに六駅を過ぎ、そして沙漠から脱出することができた。その後更に、わたくしは北西方向に道をとり魚児泊湖迄一駅を通った。そこには実際には二つの湖があり、そのいずれもが周囲百里以上にも及んでいる。その二つの湖の間には北から南に乾燥した通路がある。湖の南西部には仮に造立した女王の宮殿がある。」と。〔王観堂先生注〕紀行凡經六驛、而出陀復西北行一驛、始過魚児泊・泊有二焉。周廣百餘里、中有陸道達於南北、泊之東涯有公主離宮。案魚児泊即今達里泊、張氏謂泊有二、正與今達里泊及岡愛泊形勢同、又中有陸道達於南北、正與今驛路出二泊之間者、同又謂泊之東涯、有公主離宮。考元史特薛禪傳、甲戌太祖在迭蔑可児、諭案陳曰、可木児温都児・答児・腦児・迭蔑可児之地、汝則居之。又至元七年斡羅陳萬戸及其妃囊加真公主、請於朝曰、本藩所受農土在上都東北三百里、答児海子、是實本藩駐夏之地、可建城邑以居、帝從之。遂名其地爲應昌云云。案答児腦児・答児海子即達里泊。太祖以之封弘吉利氏、弘吉利氏世尚公主、故泊之東涯有公主離宮、是

魚児濼即今達里泊、更不容疑。近人乃或以秘史之捕魚児海子、今之貝爾湖當之、度以地望殊不然也

〔口訳〕張徳輝の紀行文によると、大略六驛を経過して沙陀を脱出して、復西北の方向に進み一驛を過ぎると、始めて魚児泊という沼湖を過ぎた。〔郎案、「歴代地名要覧」、魚児濼、○察哈爾省多倫縣東北ノ達里泊、18直隷萬全都指揮使司、附見開平故衛、」「讀史方輿紀要」巻十八、直隷九、開平故衛、東至大寧廃衛四百三十里、東南至古北口四百里、西南至宜鎮府七百里、北至沙漠四百七十里、自衛至京師六百三十里、禹貢冀州北境、秦漢時爲上谷郡地、唐爲奚契丹地、金滅契丹爲桓州地、蒙古主蒙哥使其弟忽必烈、鎮漠南漸置城郭、中統初（A.D.一二六〇）建開平故府、五年（A.D.一二六八）號爲上都、至元五年曰上都路、明初改置開平故衛、宣徳五年（A.D.一四三〇）以餽餉艱遠移衛于獨石、而開平故衛遂廃。」また「魚児濼、在興和西、金志柔遠縣、有大漁濼、即魚児濼矣。宋嘉定八年（A.D.一二一五）、蒙古鐵木眞屯撫州。既而駐軍魚児濼、遣三哥拔都帥萬騎、自西夏趣京兆、攻金潼関是也。又安同泊在開平北境、元元貞二年（A.D.一二九六）駐安同泊、以誕節受朝賀即此」〕泊に二個處あって、周囲の廣さは百餘里、その間に陸道があって南北に走り泊の東涯に達するようになっている。公主の離宮があって、考えてみると魚児泊は即ち今の達里泊に当る。張徳輝の云う泊に二ヵ所あって、正に今の達里泊と岡愛泊がそれである。岡愛泊の地勢形状は同一であって、又その中間に陸道があって南北に通達している。正に今の駅路を出発して二つの湖の間を出て行くと、湖の東端に公主の離宮が有るといわれている。元史の特薛禪傳を考案するのに、甲戌（A.D.一二一四）の歳に太祖は迭蔑可児にあって諭旨を作り述べて曰く、「可木児、温都児、答児、脳児、迭蔑可児の地、汝則ち之に居れ、」と。又至元七年に幹羅陳萬戸及び其妃囊加眞公主、朝廷に請うて曰うことに、本藩受くる所の農土は上都東北三百里に在り、答鬼海子、これは実に本藩駐夏之地である、域邑を建てる可きの地で以て皇帝の居る所に適わしい」と。この進言に從って遂に其地を名付けて應昌となした由云々と。答児、脳児の答児を勘案するのに海子であって即ち達里泊のことで、太祖はこ

の都邑をもって弘吉氏に封じた。弘吉氏は世々公主であって、故に湖の東端に公主の離宮があって是の地を魚児濼と名付けた。即ち今の達里湖に当る。更に疑問を受け入れる余地がない。近代の人たちはそこで或いは元朝秘史を以って、是れを、捕魚児海子、すなわち現在の具爾湖に之れを概当せしめているが、此の地に渡って地形と顧望研究してみるのに全く適合していない。

（ブレットシュナイダー氏訳注）

長春の魚児濼と張徳輝の魚児泊とは同一の場所である。濼と泊とも「湖沼」を意味し、yü は魚に当たる。この湖は二度に渉って元史に言及され、最初として中国名魚児濼としてである。〔郎案、百衲本「元史」一、本紀巻第一、太祖九年（A.D.一二一四）六月、「帝魚児濼に避暑せらる」とある。ブレットシュナイダー氏は一二一五年、乙亥の條とするが一二一四年、九年甲戌の誤り。〕そこで記述されているのは成吉思汗が中国への遠征から帰還した後、魚児濼近くに避暑した由である。特薛禪伝（「元史」巻百十八）のなかにこの湖が再び言及され、そこで綴られた名は荅児淖児（ノールは蒙古語で沼湖）または荅児海子（海子は中国語で小海を意味する）であった。〔郎案、百衲本「元史」一百一十八、列傳巻第五、特薛禪列傳に「至元七年（A.D.一二七〇）に至り、斡羅陳萬戸及び其の妃豪加真公主が朝庭に請求されるのに、『本藩受くる所の農土が上都東北三百里の荅児海子で、まことにそこは本藩の避暑地であります。城邑を建設して居住なされるのが良いと存じます、』とあった。帝はこの進言に従って、遂にその城の名を應昌府とした。」とある。荅児海子かそれである。〕その位置はこの元史の文に上都の東北三百里の距離の所としている。世祖クブライ汗の夏の避暑地とある。一二七〇年（世祖、至元七年）にこの湖の畔りに昭應の町を築いた。〔郎案、百衲本「元史」七、本紀巻第七、世祖紀四、至元七年二月辛未朔甲戌（四日）昭應宮を高梁河に築く（「中國歴代地名要覧」に、高梁河として「大通河ノ上流、河北省（京兆）昌平縣ヨリ東南流シ北平市に到ル、11、直隷順天府、昌平州」）を指すが」、皇朝一統輿図

に同じ湖が南東モンゴリアに在って、捕魚児海（その意味は魚釣の湖）と呼ばれている。この名は北東モンゴリアにある湖、Buyürと混同してはならない。中国輿地図が言明するには、この捕魚児海の（現代の）蒙古語はPalıである。元の時代にそこは、この地点で幾多の駅遞路の分岐点であった。張徳輝がカラコルムに赴いた折此処で西方に路を換えた。長春は王子オッチェギンの幕營地迄随行したが、北東方向の道を辿った。

問題になっているこの湖を最初に訪れたヨーロッパ人は神父ゲルビロン Gerbillon であった。北京（ペキン）からニプチュ Nipchu（ネルチンスク）迄の旅行譚、デュ・ハルデの「中国誌」第四巻所收を参照。彼ゲルビロンはこの湖を一六八九年（清、康熙二十五年）六月二十七日に目睹して、その詳細な記述を施している。彼はその湖をタール・ノールと呼んでその周囲が略十五里との意見を陳べている。神父によると魚が沢山いた由。湖から半里の距離に彼は廃墟となった仏塔（パゴダ）を望見し、元朝からの年紀を中国銘文で記した大理石版を見たと云っている。

同じ湖とその周辺地帯は、約十六年前にプルゼワルスキーによって科学的に調査発掘された。その彼の報告はゲルビロンのそれと一致しているが、彼は誤ってダライ・ノールと呼んでいる。この湖の本当の名前は、わたくしが北京にいて報知された限り、この地域からやって来た蒙古人によってなのだがタール・ノールで、ジェスイット派の神父の書いている名前である。タールは蒙古語で平原を意味し、ノールは湖を指す。プルゼワルスキーによると（「蒙古誌」巻一、一〇八頁）この湖は南東モンゴリアで最大のものと云う。その形だが偏平楕円形で北東から南西に軸線をとっている。周囲は約四十哩、海抜四千二百フィート上にある。そのため風土環境は蒙古草原と同じように荒蕪である。四月中旬に湖岸は尚凍っている。五月の前半まで全く融けない。湖には魚が沢山いる……早春の頃何百人と云う中国人が魚を取るために岸辺に姿を見せ、そして晩秋まで留っている。

〔本文〕始有人烟聚落、多以耕釣爲業

〔口訳〕始めて人が住んでいた。聚落は多く耕釣（田を耕す農業と魚を取る漁撈）〔元来、作釣と據っていたのを藏本で耕釣と改めた〕を生業となしている。

〔王観堂先生注〕蒙古游牧記、達里諾爾産魚最盛、諾爾乃利蓋克什克騰、阿巴噶、阿巴哈納爾三部、蒙古只共享之、所産滑子魚、毎三・四月間自達里諾爾溯流而進、塡塞河渠殆無空隙、人馬皆不能渡、然則魚児泊之名、蓋本於此。

〔口訳〕蒙古游牧記〔郎案「蒙古游牧記」は「中國叢書綜録」2、子目、史部、地理類、内蒙古、蒙古游牧記、十六巻（清）張穆撰、（清）何秋濤補　皇朝藩属輿地叢鈔、第二帙、尚、人人文庫（臺湾商務院書館、民国六十年十二月刊）になかに一冊本として收められている。その巻四、「内蒙古錫林部勒盟游牧所在、〔阿巴哈納爾部〕（中略）牧地に達里岡愛諾爾有り」と出で、その下に割注として張穆、何秋濤両氏の注記がある。すなわち「勘案するに達里諾爾は即ち、達爾泊、蒙古名で捕魚児海子である。元史に云う荅児海子がそれである。岡愛は亦岡噶、岡垓に作り、達爾諾爾と相関朕している。太宗崇徳二年（A.D.一六三七）二月、札薩古圖汗が吾が歸化域を掠奪するのを聞いて、親征し興安嶺を過ぎて達勒諾爾に駐營したことがある。已に復達勤諾爾に行獵すること四度とあるのが、即ち此処である。康熙二十九年（A.D.一六九〇）六月、散漢奈曼諸部の兵を派遣して達爾諾児を備え、七月裕親王等奏して言う。「噶爾丹は十二日に和爾洪河に至り、十三日河に沿って下ること何百里程で岳洛巖に赴いて居り、その行軍する方向を見るに、今や達爾腦児の地に行こうとして居り、岳洛巖を距る約六日の行程である」と。亦此の地について謂っているのである。多倫諾爾が同じだと知ることが出来る。清の査冊に云う。多倫諾爾の眞北に行くこと三百五十余里に池が二ヶ所あり、河が三筋流れている。その最大の池は達爾諾爾で周囲の広さが二百余里、中に島があって、水禽が沢山集まって来る所である。それから

東南に四十里行くと、岡蕩諾爾と云う広さ四・五十里の湖があって、中に細流があって、達爾諾爾に通じている。西北に嵩頼河、東北に公古爾河・西南に舒爾噶河の四つの河水が分流して達爾諾爾に到る。魚が沢山居てこの諾爾の收益は克什克騰・阿巴噶、阿巴哈納爾の三部の蒙古人が共に享受する。滑子魚がその産物で、毎年三・四月の間達里諾爾より遡ってやって来て、河渠を塞いでいて殆んど隙間もない位充満するので、人も馬も渡ることができない程だ。内地及び喀喇沁翁牛特等の處に人びとが植民しているが、その利益を見て、往々池魚を盗み取り、哈雅諾爾地方に居住して房屋を造って冬を過したりする。雍正、乾隆の間（A.D.一七二二～一七九五年）屢々禁令を出してその利を貪ること留めさせたが、服従する者がなかった程だ。」とある〕によると、達里諾爾は魚を産することが最も盛んで、諾爾の得る利益は、蓋し克什克騰、阿巴噶、阿巴哈納爾の三部の蒙古人達の間に之を享受するものだが、産する所の滑子魚〔郎案「李時珍撰「本草綱目」（余が架蔵するは上海鴻寶齋書局刊本の「校正本草綱目」巻四十四鱗之三、魚類三十一種のなかに鱣魚〔釋名〕黄魚、蝋魚、玉版魚、時珍曰く、鱣は肥えて遊泳するのに不便で遭＝這うの形象から由来する。黄と云い蝋と云うのは脂の色からで、玉版と云うのは肉の色からくる。「異物志」は含光魚と云うが、その脂肉が夜光るからである。「飲膳正要」に曰う。遼人は阿八児忽魚と云っている。」「飲膳正要」（四部叢刊續篇、子部）巻第三、阿八児忽魚の條に図を掲げ「その魚で大きなものは一、二丈の長さがあって、一名鱘魚、又は鱣魚、遼陽の東北海河中に棲む。魚味は甘平、無毒、五臓を肥安する効果あり、美人多く食して肥り過ぎない。その胞は浮袋に作られ、膠（にかわ）に非常に粘り気があって、その胞を酒に浸けて飲むと破傷風に効く」とある。滑子魚と云う名は見えずと雖も、この阿八児忽魚か亦乞里麻魚、これも飲膳正要巻三に図と共に載せ、「乞里麻魚、味は甘平、無毒にして五臓を利し、美人を肥えさせる。胞亦浮袋に利用される。この魚の大きなものは五、六尺の長さがあって遼陽東北海河中に棲む」と注記するが滑子魚の名は見えない。〕は三月、四月の間に自から里諾爾湖に達し、さらに遡流して進

み河を塞いでしまう程充満する。そのため河は水が見えなくて、人馬共に皆渡河することができない。そこで魚児泊といった名前はこうしたことに基く。

〔ブレットシュナイダー氏訳注〕その当時にあって季節は清明（春分点後の十五日）節であったが、併し、春の気配すらなく、氷は未だ融けずにあった。

三月第五日（三月廿九日）に再び進発して、北東方向に旅行を始めた。吾々は周辺到る所で居住民たちを目睹したのだが、彼らの住居は黒い車と白色の天幕とからなっていた。（注115恐らく大きな車輛にはフェルトの覆いがしてあって、一云ってみれば車輛に取りつけた天幕車で―マルコ・ポーロやリュブルク、イブン・バトゥータ、その他の中世旅行者が記述しているようなものであった。ユール著「マルコ・ポーロ旅行記研究第一巻、二四四～二四六頁を参照のこと。〔郎案、ブレットシュナイダー氏の引用したユール氏注訳「マルコ・ポーロ紀行」は旧版のもので、ユール・コルディエ校注本 London, John Murray, 1929 の第一巻では第三章タルタル人の風俗習慣について、天幕のこと、移動車輛のことは二五二頁本文及び注記の図解が見られる。此処では、ムール・ベリオ校本、A. C. Moule & Paul Pelliot; Marco Polo, the Description of the world vol. I George Routledge & sons. 1938. p. 168～169 岩村忍著「マルコ・ポーロの研究」上巻、（昭和二十三年五月、筑摩書房刊）の訳文を次に掲げる。「そしてタルタル人について既に（語りPB）始めたので、次に彼等に關して多くのことを語らう。タルタル人は（普通に牡牛、牝牛、そして羊の多くの群を飼ひ、それ故に彼等はP）（決して一箇所に止らずにR）冬には草が（多くR）生じそして彼等の家畜の放牧によい平原で暑いところに住む（ために退くV）そして夏には彼等は彼等の家畜（を養ふL）のために水と樹木と（よいR）牧地のある山脈と谷の寒い地に住む（ために移動するL）（そしてまたそれは寒い地には彼等とその家畜とを悩ます蠅や小さい蟲やそのやうなものが居ないからである。そして彼等はその澤山の家畜に對して常に一箇所で飼ふには

充分な草が見つからないので、常に放牧しながら二、三箇月の間絶えず登って行く。R）（そしてV）彼等は木の（竿のV）（天幕のやうな彼等のV）（小さいP）家を有し、そしてそれを毛氈で覆ふ。そしてそれは圓形である。そして彼等はその行く處にどこでも（四つの車輪のついた車の上へのせてR）それを（常にVB）運ぶ。即ち彼等は（それを包のやうに一まとめにし、R）よくそしてきちんとその木の竿を結びつけ（そしてR）（それを擴げ、車に載せ、置き、そしてP）（好きなところにVB）それを（非常にR）造作なく運んで行く。そして彼等がその家を張り、そして立てる時にはいつでも（彼等はそれを次のやうにするVB）。即ち扉が常に日中方に〔郎案、これ南向き〕（向ってVB）ある。彼等は（その毛氈の下のVA）車の中にあるものが、終日（車の上にVA）雨が降っても濡れないほど（さらに完全に、そしてVA）こうもよく（こしらへられたV）黒い毛氈で覆っている。（ただ二つの車輪のついたR）車を（この非常に美しい車のほかにR）持ってゐる。（そしてVB）これらの車を彼等は（馬とFB）牛と、そして（時にはL）（よいVA）駱駝によって牽かせてゐる。そしてそれらによって彼等は妻たちと子供たち（とそして必要とするあらゆるものと食糧とR）を運ぶ。（そしてこのやうにして彼等はその欲するところにはどこにでも行き、そしてその必要とするあらゆるものを運ぶのであるLT）」（前掲書、二四一～二四三頁）〕

またPotanin（"Mongolia" ii, P.108）ポターニン氏の「蒙古紀行第二巻」一〇八頁に據ると、こうした車輛の上にフェルト製天幕をのせたやり方は、今日全く蒙古草原において廃れている由。〔郎案、ポターニン著の「蒙古誌」の翻訳の一部が、東亜研究所譯「西北蒙古誌・第二巻民俗慣習篇」（昭和二十年五月、龍文書局刊）として刊行された。その第三章宗教生活、生活の外的環境、家庭内及び社會的慣習に關する覺書、第二節生活の外的環境、2、天幕と什器として、次の様に天幕生活について触れている。「蒙古人の天幕はキルギス人のそれと同様に、木製の骨組とフェルトの覆とから成る。木製の骨組は下部の格子、テルメ（キルギス語ではケ

レゲ）と支柱クニン（キルギス語でオク）と支柱の上端がはいる穴をつけた上部の箍とから成ってゐる。この箍はハラチ又はトン（キルギス語ではチャガラク）と稱せられてゐる。このトンは圓枠と二對の横木、即ち交叉した横木とから成る。箍それ自體はツアグリク、横木はツァムフィクと呼ばれてゐる。天幕の下部を蔽ってゐるフェルトは、蒙古語でデビル（キルギス語でウジュク）、支柱の上に横はれる上部の薄地のフェルトはトゥウルグ（キルギス語でトゥウルデュク）最後に上部の圓枠を覆ってゐるフェルトはウルケ（キルギス語でトュンドュク）と稱する。蒙古の天幕がキルギスのそれと異るところは、先づその支柱である。即ち蒙古の天幕においては、それは直線であるが、キルギスの天幕にあっては、それは下端に近く弧状に彎曲し、抛物線の形をなしてゐる。この差異は蒙古式天幕（キルギス語でトルゴゥトリウィ）をして、キルギス人自らの認識に從へば、キルギス式天幕より堅牢で、風當りにより堪へるものたらしめてゐる。そればかりではなく蒙古式天幕は、扉の造りがキルギス式のそれよりもすぐれてゐる點が異る。キルギスにおいては、それは上からたらしたフェルトの一枚布で、チィで編んだ蓙裏をつけたものである。蒙古式の天幕においては、このフェルトの帳のほか、常に、木造観音開きの扉が更に一つある。キルギス式の天幕は周圍をチィの蓙で圍ってゐるが、蒙古人はかう云った蓙を全然作らない。蒙古人の天幕では、扉は常に南向きになってゐる。

ウリャンハイ人やオリョート人の中の貧乏人はハトグルの中に住んでゐる。ハトグルとは支柱を上部の箍とだけ組立てられた掘立小屋のことである。これは下部の格子がないだけで、同じく天幕であるこのハトグルといふのは、時に中にゐる二人の人間が殆んど坐れもしない位に狭く、且つ立てないで天幕の天井に手が届く程低いことがある。

南蒙古へ行くと、獨特の形をしたスィルフィヌィクといふ天幕に出逢う。これは西北蒙古へはたゞ偶然に持ちこまれただけである。この天幕において、支柱が蝶番によって上部の箍に固定されてゐる。從って、天幕は

組立てて荷馬車の上に積まれるのである。私自身これを見たことがなかった。マルコ・ポーロ、プラノ・カルピニ、長春眞人及びゼマルコスの旅行記に記述されてゐる車輪付きの小屋は、現代の蒙古においては見られない。しかし、普通の荷馬車の上においたものを、今でも蒙古ではツァンガラと呼んでゐることは注目すべきである。」（前掲書二一四～二一六頁）と。」此處の住民たちは遊牧民であって、水や草を追って彼らの住居地を変えているのである。樹木はみられ得ないし、また吾々は唯黄色の雲（黄塵からなるもの）と荒蕪な草叢をみるのみである。

遂に二十日餘の旅程の後に、たゞひたすら方向を変えることなしに進むと、河床に到達し、その河は北西に向って流れており、陸局河に流入している。（注116古代中国史のなかには Kerulun 河と見えていて、北東蒙古部においては、陸局と呼ばれている。元史のなかで、この河は一般に臚朐河と名付けられていて、蒙古名の Kerulun を文字に写したものである。この長春眞人によって渡河された河床は、恐らくは Khalga gol であったらしく、このカルガ・ゴルはそれにも不拘ケルルン河に直接に流入しているのではない。亦注記127を参照のこと－〔郎案　注127を引用しおくべし－、「此処で張徳輝の旅行記を引用しようと思う。（注記104を参照）ケルルン河の堤から西方に向って、長春と全く同じ道筋を辿っていったように思われる。この張徳輝の旅行そのものも魚児泊という湖を離れた後に、北西部へ二十駅程進んだ。そしてそこで河畔に達したのだが（蒙古草原の）北部の住民たちは、怯綠連（Kerulun）河と呼んでいる。さて張の報告書は次のように続いている……「この河の両岸に楊柳が沢山繁茂していて、河は東に向って流れ、しかも非常に流れが早い。その原住民の地は三～四フィートの大きさの魚がおり、併しながら、春季、夏季、秋季にこれらの魚を捕獲することは不可能である。だが併し、冬季には氷に孔を開けて魚を獲ることができる。この河沿いに蒙古人たちや中国人たちが雑居している。そこには亦泥の屋根をもった見苦しい小屋がある。土地の多くは農耕のため耕作されているが、彼らは

大地に大麻と麦を播くに過ぎない。河の北岸に、ku-su-wa と呼ばれる〝黒い山脈〟と云う意味なのだがその山脈が河の北辺に聳えている。若しもその山を或るはなれた距離から見ると、その頂上に厚い霜が覆うているように見えたりする。併し若しより近くで見ると、この様相は暗灰色の岩肌であるように変ってみえる。この暗灰色の岩肌は、山脈の上に常時ある霧からこうした色をうけとるわけである。

Palladius パラディウスは今日でも Tono と呼ばれている山と、これとを同一のものとするのが正当だとしている。その附近からケルルン河が北部から端を発し、東方に湾曲して半円形なりに流れている。Gerbillon ゲルビロン師は一六九六年にトノ河を目撃していた。吾々の扱っている張徳輝の旅行記は次のように続いている。即ち「山脈の南側からわたくしは南西に向って九駅を経て進んだ。そして他の河に行き当った。その河巾と深さは怯緑連河の三分の一の規模に等しい。此処には亦大きな魚が棲んでいて、あの河の場合と全く同じ方法で獲れる。河は西に向って流れ、しかも極度に流れが早くて、渡ることが不可能な位である。蒙古人の北部言語はそれを Hun Dul La 即ち〝野うさぎ〟と呼んでいる。蒙古語における Tulai は〝野うさぎ〟という意味である。疑いもなく此処では、Tola 河は南からウルガへと赴く隊商（キャラヴァン）が越えなければならない、河の位置を占めて意味があるのである。旅行者が明らかにその山を越えなかった場合には、そこで北に向きを変えなくてはならない。T'u-la 及至 T'u-wu-la 河は元史のなかに屢々言及されている。」と。ラシッド・エッディンはその河を Tula そして時として Tura と呼んでいる。匈奴に関して云えば、河の名前に接尾語が附き、それについては注308を参照のこと。張徳輝の旅行記は更に続けて云う。「わたくしはトラ河を下ってゆき、一駅を過ぎて古代の町（Schuyler スキュイラー氏が繰り返し翻訳した〝森の町〟ではなくて）契丹人たちによって築かれた町だった。この町の周囲は約三里程ありその背景に山脈が聳えている。そして前面に河をひかえている。この場所から河は北に向って流れている」と。その後、張は北西方向に進んで、U-u-gie-nao-rh（これは現代

の蒙古地図に見えるUgei norである）と呼ばれている湖に達した。その湖から車の通れる道でHa-lin和林（Karakurum、注記304を参看のこと）に通い、約百里ほど隔った湖の南西方向に位置していた。張德輝がカラコルムを訪れたとは考えられないように思われる。併し、彼張德輝はこの河を渡った筈で、そこに現代の蒙古の主都が營まれていた処である。張は更に先に続けて云う―。

「湖（Ugei nor）から直接眞南には小規模ながら古代都市遺跡があり、亦契丹人により營まれたままである。その都市の西に広い溪谷が開いていて周囲が百里程もある。しかも四周は山脈に取り囲まれている。……」と。その中央部をオルコン河、和林河が流れている。この場所から張德輝はクビライ汗の夏の住居に赴いた。その場所はタミル河を越えた所にあり、幾分カンガイ山脈に寄った所にある。

こうした脇道に外れた後、長春眞人の旅行記に戻ってみよう。長春が渡った河が何処にあって、その河の向う岸に平野が拡がっているのだが、絵の様に美しい山並みが取り囲んでいて、しかも契丹人の建てた廃都市が立っているというが、何処なのだろうか。これらの特殊な道具立てが、和林河（オルコン）が流れている平野について、張德輝が記述している処と驚く程よく類似していることは否定できない。そして、彼の注記するところによれば契丹の都市であったと云う。併し、長春は亦トーラ河の畔りに契丹の都市遺蹟があることに言及し、パラディウスは長春がこの河を渡ったと考えている。併し乍ら、その当時長春が二回目に河を渡ることを余儀なくされた、だろうと考える可能性はないと思われるのだけれども。Wylie（注124を参照）とPaderinとは契丹の問題の都市をKaruha河畔で見たと云い、このカルハ河はトーラ河に流入合しているというのである。このように長春眞人の辿った道筋を跡付けるのは、厳密に云うと困難である。此処で繰り返し、言及されている地域は、最近三十年間にロシアの官吏らによって繰り返し踏査されてきた。というのは、ウルガからUliansutaiウリアンスタイ峠までの、上に述べたウゲイノール湖の傍を通る直線路は、オルコン河を渡り、

セレンガの他の地帯を経由している。一八七三年にM.Paderin パデラン氏が、古代のカラコルムの遺跡であろうと信じている場所を発見した。彼パデラン氏の報告の英訳版はユール大佐によって注目され、一八七四年の「地理学雑誌」に収載されてついて見ることができる。今から約十年前のこと、Pozdneyjeff ポズトニェフ教授がオルコン渓谷迄踏破したことがあった。それは“Mongol annals Erdeniin”（蒙古地誌年報）一八八三年刊にみられる。一八七九年にPevtsoff ペヴツォフ大佐がウルガからウリアンスタイ迄行ったことがあった。一八八三年にペヴツォフは蒙古草原における旅行に関する興味深い書物を公刊した。そして現存する最良の蒙古地方の詳密地図をそれに附け加えた。

さて契丹については注22を参照のこと。パラディウスはこの主題について次のように述べている。即ち、第十世紀から第十一世紀の契丹国は、北方において中国と接する全ての国々を、支配下に置いた痕跡を残している。契丹の城塞と町の遺跡は、トーラ河に沿ってのみならず、ケルルン河畔にも満洲地区にも残されていて出逢う。長春によって言及せられた契丹文字は、中国文字を基礎に構成されたものであった。それら契丹文字の例は、「書史會要」のなかに保存されている。〔郎案：「中国叢書綜録」2、子目、史部、傳記類、藝術書畫、書史會要九巻補一巻、續編一巻、㈥陶宗儀撰、續編㈹朱謀垔撰、四庫全書、子部藝術類」〕

〔本文〕時已清明、春色渺然、凝冰未泮、有詩云、北陸祁寒自古稱、沙陀三月尚凝冰、更尋若士爲黄鵠、要識修鯤化大鵬、蘇武北遷愁欲死　李陵南望去無憑、我今返學盧敖志、六合窮觀最上乘。

〔口訳〕時節はすでに清明節〔郎案（「諸橋漢和辞典」に曰く）清明、二十四節の一、陰暦三月の節春分から十五日目で、四月五日或は六日に當る、寒食後二日に当る。（淮南子、天文訓）春分後十五日、斗指乙爲清明（後漢書律暦志）清明、節氣名（荊楚歳時記）去冬節一百五日、即有疾風甚雨、謂之寒食焚火三日、造餳大麥粥（注）據暦合在清明前二日、亦有去冬至、一百六日者云々、按周書司烜氏、仲春以木鐸、循火於禁于國中、注

云爲季春將出火也。今寒食準節氣、是仲春之末、清明是三月之初、然前禁火、蓋周之旧制、陸翽鄴中記曰、寒食三日爲醴酪、又煮粳米及麥爲酪、搗杏仁煮作粥、玉燭寶典曰、今人制爲大麥粥、研杏仁爲酪、引餳沃之、孫楚祭子推文云　黍飯一盤、醴酪一盂、是其事也」と。宗懍撰、守屋美都雄訳注、布目潮風・中村裕一補記「荊楚歳時期」（昭和53年2目、平凡社刊、東洋文庫324）㈢ 寒食節とその由来、に次の様に記す。「冬節（冬至）を去ること一百五日、即ち疾風甚雨（注2、寒食及びその次の清明の節のころは気候穏和で一年中の好季節であった）あり、之を寒食と謂う。火を禁ずること三日、餳と大麦の粥を造る。㈠暦を按ずるに、合に清明の前二日に在るべし。亦た冬至を去ること一百六日なるものあり、（中略）『周礼』司烜氏に、仲春、木鐸を以て火禁を国中に修むと。注に云く。季春、將に火を出さんとするが爲なりと。今、寒食、節気に準ずるに、是れ仲春の末なり。清明（注15、寒食のあとに来る清明節は三日に当り、『周礼』夏官、司爟に「季春、火を出す、民、咸な之に従う」とあるのと季節が合致する。出火の前提としての禁火寒食も出火の記事も『周礼』に見える故に周の旧制というのである）は是れ三日の初めなり。然らば即ち禁火は蓋し周の旧制なり。」とあって、諸橋漢和」の陸翽の『鄴中記』以下の文は、（中略）とした前文のなかに含まれて引用文に顚倒があることが判る。「陸翽の『鄴中記』に曰く。寒食三日醴酪（注5、ここにいう醴は餳湯（アメユ）のことであり、醴酒（アマザケ）ではない。酪は杏酪（キョウニンガユ）のことであり、乳酪（ニュウガユ）のことでない）を爲る。又た糯米及び麦を煮て酪を爲り、杏仁を擣き煮て粥を作ると。『玉燭宝典』に曰く、今人、悉く大麦粥を爲り、杏仁を研きて酪を爲り、餳を引いて之に沃ぐと、孫楚が子推を祭る、又に曰う。黍飯一盤、醴酪一盂、清泉の甘水、君の厨に充つと、今の寒食、杏酪、麦粥あるは、即ち其事なり。」（前掲書九七～一〇三頁）」に當り、春色は渺然としてみなぎっているが、河の凝結した氷はまだ融けずにいる。詩を賦して云う。

北陸祁寒自古稱　北陸の厳しい寒さは昔から云い伝えているのではないか

沙陀三月尚凝冰　三月の沙陀河はなお凍ったまま
更尋若士爲黄鵠　ままよ黄の鵠に化身した遷人若士を尋ねようか
要識修鯤化大鵬　まてよ、大魚が大鳥に化ると云うではないか。
蘇武北遷愁欲死　匈奴に虜囚となった蘇武すら悲しみの余り死を望んだ
李陵南望去無憑　同じく李陵も故郷を憶うて寄る辺なきを歎じた
我今返學盧敖志　私も若士に逢た盧敖の志にあやかりたいもの
六合窮觀最上乘　天地四方を見極め盡したいもの

〔郎案、この詩句に仙人の名若士、盧敖あり。「諸橋漢和」に曰う。「若士、仙人の名、秦の時盧敖が北海に遊び濛谷の山にて會うた道士。淮南子、道應訓に、若士はからからと哄笑して云うた。「あゝ、あなたは中州の民なのにむしろ謙遜して、此の遠く迄来られた」とある仙人の名。鯤も同書に「大魚の名（集韻）鯤、大魚也、鯤が化して鵬となること。〔荘子、逍遙遊〕北海に魚あり、その名を鯤となす。鯤の大なること幾千里を知らぬ程大きい。その鯤が化身して鳥となるが、その名は鵬・鵬の大きいこと千里あるか判らぬ程だ」と。〕

〔王観堂先生注〕湛然居士文集五、過閭居河四律、即用此詩韻、文正辛壬間、處造作也。

〔口訳〕湛然居士文集の巻五閭居河を過ぎるの四律があるが、即座に此の詩韻文を用いて、辛壬の間辛酉・壬戌（A.D.一一四一～一一四二）に作ったものである。〔郎案、余が架蔵する漸西村舎本四冊一帙、巻五に閭居河を過ぐ。四首、案ずるに亦邱長春に和す。河冰春盡水無聲（河の凍っていたのが春迄に融けて静かに流れ出す）「靠岸釣魚羨擊冰。（岸辺に倚って釣人が糸を垂れ、氷の塊を遠去ける）乍遠南州如夢蝶（たちまち南方の地を遠去って蝶が夢見ているよう）暫游北海若飛鵬。（しばらく北海に鯤を求めて遊び、それが大鵬になったよう）隋堤柳絮風何處（運河の堤の柳の芽生えに風が吹いてさすらっている）越嶺梅花信莫憑。（南方の梅が咲いたと

の報せもままならない）試暫停鞭望西北（今しばらく馬を留めて西北の方を望むと）迎風羸馬不堪乗（風に向っていななく馬をみると、騎乗するに忍びない）。勘案するに、長春真人の「西遊記」のなかの詩に「沙陀を出て魚児濼に至る時作る詩、「北陸祁寒自古稱、沙陀三月尚凝冰、更尋若士爲黄鵠、要識修鯤化大鵬、蘇武北遷愁欲死　李陵南望去無憑、我今返学盧敖志、六合窮觀最上乗」と対をなす。」

〔本文〕三月五日起之東北、四旁遠有人烟、皆黒車白帳、随水草放牧、盡原濕之地、復無寸木、四望惟黄雲白草、行不改塗（蔵本作途）、又二十餘日、方見一沙河、西北流入陸局河

〔口訳〕三月五日出発して東北に赴いた。四方を見渡すと遠く人烟が望まれ、近付いてみると、皆黒い車に白色の包帳（バオ）をのせている。水草に隨って放牧の生活を營んでいる。到る所湿原の地で、また一寸程の倭小の樹木もなく、四周を眺め渡してみても、唯黄色い雲と白く輝く草原がみられるだけであり、（藏本は途に作ってある）、そのまゝ途を改めずに辿ってゆくと、又二十餘日の後に、方に一つの沙河が見られ西北に向って流れ、陸局河に合流している。

〔王観堂先生注曰〕遼史作臚朐河、金史作龍駒河、或作龍居河、元史作臚朐河、或怯緑連河、湛然居士集作閭居河、張耀卿紀行云、自外堡行一十五驛、抵一河、深廣約什　滹沱之三、北語云、翕陸連、漢言驢駒河也、金史地理志龍駒河、　國言曰喝必剌、必剌之言水也、喝即翕陸連之略。

〔口訳〕遼史を見ると臚朐河に作っており、金史を見ると、龍駒河に作り、或いは龍居河に作ってある。元史には臚朐河、或いは怯緑連河とも表現してある。湛然居士集を見ると、閭居河と作っており、張輝卿紀行に云う所を見ると「外堡寨から行くこと一十五驛、一つの河に到達する。深さも広さも略十倍程あって、滹沱河の三倍ある。北方の言語で云うと翕陸連、漢字で表現すると驢駒河となっているのである。金史の地理志には龍駒河と見え、蒙古國の言葉で喝必剌といい、必剌という言葉は水を意味しているし、喝は翕陸連の略字である。

〔郎案、王観堂先生は陸局河の名の多様な呼び方を史書、文集、紀行文から探っている。百衲本「遼史」三十七、志第七、地理志一、「皮坡河の域地北辺を控えて兵五百を此の防禦に置いた。皮坡河は回紇の北東を出て南羽厥を經て臚朐河に入る。河は董城の東北に沿って沱漉河に合流して海に入る」亦、百衲本「金史」二十四、志第五、地理志一北京路府、臨潢府の堡三十七の内「長泰、立列只山があり、その北千余里に龍駒山あり、国言で喝必刺と云う」とある。百衲本「元史」一、本紀巻一、太祖紀、「六年辛未春、帝が怯緑連河に居られた」との記事があり、亦「十一年丙子、春、盧駒河行宮に遷る」とあって、臚朐河、怯緑連河の名前が見える。耶律楚材の「湛然居士文集」巻五の閭居何を過ぐの詩は、前に引用した。張徳輝の旅行記がこの河に触れて、滹沱河の三倍の大きさがあると云っている滹沱河について「諸橋漢和」に讀史方輿紀要、直隷、大川」の項を引いている。〕

（ブレットシュナイダー氏訳注）

遂に二十日以上進んで、方向を変えずに進んでゆくと、吾々は河床に到達した。この河は北西に流れていて、陸局河に合流している。吾々は更に河床を渡ったのだが、その水深は馬の腹帯のところ迄来る深さである。この河の両岸は楊柳の木々が生い繁っていた。北方に向ってさらに三日旅を続けた後、吾々は小沙陀（小さな沙漠を意味して、注112を参照のこと）に入った。

〔本文〕水濡馬腹、旁多叢柳、渡河北行三日、入小沙陀。四月朔至斡辰大王帳下、冰始泮、水微萌矣。時有婚嫁之會、五百里内首領、皆載馬湩助之、皁車氈帳成列數千。七日見大王、問以延生事。師謂須齋戒而後可聞、約以望日授受、（原脱受字據蔵本補）至日雪大作遂已。大王復曰、上遣使萬里請師問道、我曷敢先焉。且諭阿里鮮、見畢東還、須奉師過此。十七日、大王以牛馬百數、車十乗送行、馬首西北。二十二日抵陸局河、積水成海周數百里

〔口訳〕その河水は馬の腹を濡らし、河岸辺りには叢だった柳樹が覆っていた。河を渡り北方に向って行くこと三日、小沙陀に入った。四月朔、斡辰大王の包帳下に到達した。そこで始めて氷が融泮して水になる徴候が見られたのであった。丁度そこで結婚嫁取りの儀式があった。五百里以内の遊牧民の首領たちが皆、〔郎案「諸橋漢和」に曰く、「湩　ちじる、乳汁（説文）湩、乳汁也、从水重聲（碑蒼）湩馬酪也（穆天子傳四）具牛羊之湩、以洗天子之足（注）湩、乳也、今江南人亦呼乳爲湩」〕馬乳の酪をのせた車と、氈帳が、列を數千に及ぶ程造り成していた。七日、大王に謁見した。その質問のなかに生命を延長する不老長寿の事があった。長春眞人師はどうか精進潔齋した後にわたくしの言を聞くべきであると謂い、その日を望月、滿月の日に授受しようと約束した。〔原本は受字が脱漏していたのだが、藏本によって補った〕その滿月の日が来たのだったが、雪が大層降って遂にその授受の式は沙汰止みとなった。大王は復、「可汗が使を遣わして萬里を遠しとしないで師を請待して道を問うたのであるから、わたくしとてどうして先にこの問題を、授受していただけようか」と申してきた。且つ阿里鮮に諭して、「謁見をおわり東に還ってくる帰路に亦、師長春眞人を招待したいものだ」と云った。此れは十七日のことであって、大王は牛馬數百頭と、車、十輛を贈って師の行を盛んならしめた。馬首は西北に向って旅をしたのだったが、二十二日に陸局河に到達した。河の水かさが増して海のようになり、周囲数百里にも及んでいた。

（王観堂先生注）沈子敦垚以此海爲杜勒鄂謨、則前流入陸局河之沙河、乃鄂爾順河也。近仁和丁謙、以此海爲呼倫湖、則前沙河乃海、剌爾河也。以上文自魚児濼東北行二十餘日、至沙河及此周數百里之文、觀之、則丁氏之説近之。斡辰大王卓帳之地、亦可由此推矣。

張德輝紀行、自魚児泊西北行四驛、有長城頽址、望之緜延不盡、亦前朝所築之外堡也。自外堡行一十五驛、抵一河、深廣約什、滹沱之三、北語云翕陸連、漢言驢駒河也。張氏自魚児泊抵驢駒河、凡行十九驛、此行二十

餘日、里數殆相等、但張氏自魚児河西北行、此東北行、固不能視爲一途耳。

〔口訳〕沈子敦垚〔郎案、沈垚字は子敦、「中國叢書書綜綠」2、子目、史部、地理類、「西遊記金山以東釋一巻、(清)沈垚撰、指海（道光本、景道光本）第十三集、長春眞人西遊記附、漸学廬叢書、第一集、皇朝藩属輿地叢書第二集」は此の海を以って、杜勒鄂謨としている。則ち前流は陸局河の沙河（河床）に合流し、その河は乃ち鄂爾順河である。ラシッド・ウッディンはこの海を以って呼倫河としている。則ち、前に触れた河床は乃ち海で刺爾河であるという。以上の文章は魚児濼から東北に向って行くこと二十餘日の旅程で、この沙河（河床）に到達するのである。この河が氾濫して海のようになったその周囲が、數百里にも及んだとする文章は、之を実際に目睹経験したところと思われる。則ち丁謙（ウッディン）氏の説くところが実況に近いのではあるまいか。斡辰（オトチギン）大王が包帳を營んだ地も亦、こうしたことに由って推察知見できようというものである。

〔郎案、次の王観堂先生注記の文は、先生編著の「蒙古史料四種」（正中書局印行本）の長春眞人西遊記のなかに、見えず、王観堂先生全集本、巻十二の『西遊記』のなかに見られる〕

張徳輝の紀行文によると、魚児泊（濼）から西北に向って四駅を過ぎると、長城の頽廃した遺跡がある。これを顧望すると、木綿の布を拡げ伸したように盡きることがなく続いている。亦これらの長城址は金朝が構築した外堡である。この外堡から行くこと十五駅を経過すると一つの河に到達する。その河の深さも廣い巾も約十倍で滹沱河の三倍あり、北狄の言葉で云う翕陸連であり、漢字で驢駒河と言い現わしている。張徳輝氏はその紀行中に次のように云っている。「魚児泊から驢駒河に抵（いた）る迄おおよそ十九駅を経過し、この行程は二十餘日かかっている、」と。里數は長春、張氏、殆んど相等しい。但し張氏は魚児河から西北に向うとあるのに対して、長春の西遊記には東北方面に行くとあるが、固より視て道筋が一筋途だけと見ることはできない筈である。

〔郎案、この蒙古の貴人の結婚式に長春師が偶然逢って、車馬の數千を目睹したが、ポターニン氏の「蒙古誌」

にも彼らの婚儀について言及しているので先に引用した、東亜研究所訳になる「西北蒙古の神話と傳説」第三章、第三節家庭及び社會生活、I婚儀と制約、の一部を引用する。「定めの日に、花嫁の家へは、新郎自身、その母親及び更にもう一人の女、フ・ベルゲン（花嫁の側もやはりフゥヒュン・ベルゲンといふのがゐる）など澤山の人々がやって来る。花婿はこの来場に弓・矢及び小銃を携へて來る。なほ又、經驗のあるラマを招聘する。これをサンギン＝ラマと稱する。當日は又も丸煮の羊を持參してブルハンに供へ、花嫁の親戚にはハタグ、酸乳及び火酒を出し、それから酒宴を張る。ラマは祈祷をあげはじめる。この時、天幕の外では火を起して、盛んに煙を立たせるために、その中に杜松（まつ）の枝を投げこむのである。天幕の内部の扉の前には、花嫁のすわるフェルトが敷いてある。ベルゲンと稱する二人の女が彼女を扉の方へつれてゆく。花嫁の頭には、顔の見えないやうにダバ（支那の下等木綿）で包まれてゐる。ベルゲン等は花嫁の左右にすわる。この三人は何れも天幕の内側に顔を向けて座してゐる。この時の花嫁をベリと稱する。ベルゲンは花嫁の帶をほどいて、これを彼女の父親に渡す。又辨髪と、その中に編み込まれてゐる絲とをほぐして、花嫁の母親に渡す。次にベルゲンは花嫁の後頭部をつかまへてかう云う「ブルフィントゥ・モルグバ Burkhyntu morguba!」即ち神様に禮拜せよ、と。ベルゲンは彼女の頭を下げさせると、彼女に叩頭する。さうしてから、彼女等は「ガルトゥ・モルグバ galtu morguba!」即ち火に禮拜せよ、と云ふ。また改めて叩頭しなければならない。それからベルゲンは「アブダ・モルグバ abuda morguba」父に叩頭せよ、と云ふ。娘が三度目の叩頭をしてから、彼女の父親は次のやうに云ふ、「アムィルヤブィヂ、アシ、ジルガ aumyryabydzi! aśsi dśirga」達者で幸福で行けよ、と。その時人々は一齊にヂィヤー dza と長く發音する。次いでベルゲンは花嫁を連れて去る。彼女の親類の一人が馬にまたがり、同じ馬の彼の前に泣き濡れる花嫁を乗せて、彼は彼女をつかまへてやる。ベルゲン達は両脇から彼女を支へてやる。人には悉く天幕の外へどっと出る。馬に乘ってゐる者たちは、ラマがその上で祈祷

をあげてゐる杜松の薫煙の周りを三度乗り廻す。最初花婿が、次に花嫁とベルゲン達、次に群衆がいずれも馬に乗って廻るのである。花婿の天幕へ向ふ路の半程へ來ると、花婿とその親類は一足さきに迅速に駈け去る。花婿の天幕の扉の前には、内側からフェルトを敷き、その上に連れて来た花嫁を下す。それから彼女を天幕の中に招じ入れ、扉の側のフェルトの上に坐らせて、髪を梳って膠を塗り、その上に珊瑚の付いたボルトゥィをのせ、花嫁に膨らみのある外套を著せる。次に花婿の父親がその男側の親戚全體に挨拶させる。挨拶がすむと、彼女を花嫁の親類や花婿の坐ってゐる天幕の東半分に坐らせる。その時花婿の母親が、牛の酸乳をなみなみと滿した木椀を花嫁に出す。再び御馳走が始まる。その際花嫁の母親は臨席するが父親はゐない。花婿の親類は花嫁の親類に絹布を贈る。が貧乏人においては茶を贈る、ベルゲン達にもやはり贈物をする。大きな鍋で小麥（ブタ）とチーズ（アルル）を煮る。この料理をタトゥインと稱する。臨席の人々は皆これを食して後、退出するのである。三日の間はこの家に、ベルゲン以外のものは誰一人出入りしないことになってゐる。」（前掲書、二二八～二三〇頁）〕

（ブレッドシュナイダー氏訳注）

四月朔日（一二二一年の四月二十三日に当る）、吾々は斡辰親王（オトチギンプリンス）の幕營地に到着した。その当時、凍結していた氷が漸く融け始めたし、また初めて大地に緑が萌え始めるのを見た。そこでは結婚式が挙げられている所であって、しかも多くの蒙古人の首長たちが馬乳を携えて到着したところだったのだ。吾々は何千という車輛の黒いのやフェルト製の天幕が、長蛇の列をなして建てられているのを見た。第七日目（四月廿九日に当る）長春師は斡辰親王に謁見され、彼は長春眞人に不老長寿の秘訣を問い質した。けれども長春が可汗皇帝に見ゆる以前に、師の教訓を聞こうとするのはよろしくないと考えたので、可汗謁見の終った帰途に、親王が師を再び召出すべきだと同意したのだった。第十七日に親王は百頭の馬と去勢した牛を、長春師に役立つように贈り与

えるべく命令を発した。そして吾々は五月九日に再び出発した。

吾々の旅程は北西方向にとり、四月二十二日（五月十四日に当る）に吾々は陸局河（Kerulun）に達した。その河は此処で周囲が何百里にも渉る湖の様相を呈していた。風によって波濤が起ると、大きな魚が跳ね上り、そこで蒙古人たちは容易にこれらを捕獲する。（注118パラディウスはこの湖がBuyürを意味していると考えている。わたくしはこのBuyür湖がケルルン河と直接に結び合流しているのではなくて、Orshun河によって大きな湖Kulon, or Dalai norとがつながっていて、そこにケルルン河が合流していると見たいのだけれども。この紀行文のなかに言及せられた大湖こそ、Kulon湖なのだろうとわたくしには思われる。ゲルビロン神父は一六九八年にこれらの湖を訪問していた（Du Halde's "China", Ⅳ）、すでに前世紀にはPallasパラス氏がクロン湖を目睹していた。パラス氏はその湖に魚が沢山居たことを語っている。ゲルビロン神父はブユル湖に関して全く同じことを述べている。このブユル湖は屢々ラシッド・ウッディンにより蒙古古代史に関聯して言及されている。（d'Ohsson : i, 62, 75, 428.sc.）その七五頁の処でブユル湖と一緒に言及せられた湖なるものは、恐らくクロン湖だろうと思われる）〔郎案、このドーソンの「モンゴル帝国史」巻一、第二章七五頁の記事は佐口透訳注本、第一冊六五～六六頁に次の様に訳されている。「私は鷹のようにチュルクマン山（注一二、ドーソン原文ではチュルトメン山と記すが、チウルクマン山と読む。「親征録」には赤忽児黒（チェルク）山と記す）の上を飛び、ブイル湖上を越えてなんじのために、足が青色で羽毛が灰色の鶴を捕えた。すなわちドルベンとタタルの諸部族がそれである。次にクレ湖に飛び移って、私はまたもなんじのために足の青色の鶴を捕らえたが、これ、すなわち、カタキン、サルジュト、コンギラトの諸部族である」とあるブイル湖とクレ湖を指す〕

〔本文〕風浪漂出大魚　蒙古人各得數尾、並河南岸西行、時有野鼐得食、五月朔亭午、日有食之、既衆星乃見、

須臾復明。時在河南岸（蝕自西南、生自東北）其地朝涼而暮熱、草多黄花、水流東北兩岸多高柳、蒙古人取之以造廬帳。

〔口訳〕風が強く吹き波浪が漂出して荒れ、大魚が現われて、蒙古人各々はその數尾を得たりした。河の南岸を並行して西に向って進行すると、時偶野韆を得て食べた。〔郎案：諸橋漢和に「韆、おほにら、らっきょう、韮に似た一種の葷菜、とある」〕五月朔日停午〔郎案「諸橋漢和」に曰く「亭午、正午の時、亭は至る、午は日中、又日の午にあるを亭と云ふ、停午（正字通）亭又、亭午、孫綽遊天台山賦、養和亭午、遊氣高褰、注、亭至也、午、日中也、云々、一曰、亭、直也、亭午即直午之義」〕正午に日蝕が有った。その結果、既に衆くの星が暗くなった空に見えたが、しばらくして復、明るくなった。その時に河の南岸にあったのだが、（日蝕は西南から始まり東北に復した）其の地は朝が涼しく、夕暮には暑熱が激しい。草は多く黄色の花が見られる。水流の東岸と北岸の両岸は高く繁った柳楊樹が多く、蒙古の人たちはこの楊柳をとって天幕の廬帳の骨組を造るのに用いる。

〔王観堂先生注〕黒韃事略、穹廬有二様、草地之制、以柳木織成硬圈經用、氈撻定不可卷舒

〔口訳〕黒韃事略をみると天幕の穹廬に二種類あって草地の場合には、柳の木を編み組み合わせ織成し、フェルトを用いて周りを固定し、巻き上げたりできない仕組みになっている。〔郎案、王観堂先生編著「蒙古史料四種」所収の「黒韃事略箋證」のなかに「其の居る所は穹廬（まるいテント）すなわち氈帳、城壁も棟宇もなく水草を追うて移動するのが普通である。タルタル人の王も氈帳で移動し狩獵の際も同じ」霆注に云う、「その制は草地中に大きな氈帳で造り、上下何れも氈を用いて覆い、その骨組に柳を利用する。編んで窓を明け透けてみえる様にし、千余の條索を用いて結び合わせ柱と入口を造る。（中略）然るに穹廬には二種類あって、燕京の制度では、柳木を用いて骨組とし、南方を大凡開いて入口とし、フェルトを巻き上げて入口を開閉する。上部は傘の骨の様

になって天井一ヶ所を開けていて、これを天窓と云っている。皆いずれもフェルト氈を覆いかぶせてある。馬車の上に載せる穹廬は草原の制度で、柳木をもって組み編げて堅固に固定し、周囲をフェルトでぐるぐる巻きに固定して、巻き上げられないようになって車上に載せて移動する。水草がなくなると、そこで移動して終始きまっていない。」とある。王観堂先生はこの文章を抄出するに当って省略する所があって、上掲注記に較や文意不明の個処があって、口訳に際して困惑した。併し原文を見れば釈然とする。平地の天幕と車上天幕の二種のうち、移動用車上天幕をのみ言及しているからである。〕

〔ブレットシュナイダー氏訳注〕さて吾々はケルルン河の南岸に沿って進んだ。そこで到る所、沢山の野生の韮（らっきょう）をみた。（注119この韮は一種の栽培植樹したAlliumであり、この野生種は蒙古草原にある數多いAlliumの一つとされている。駱駝がこれらの草を非常に好んでいる）

五月朔日（五月廿三日に当る）の正午に日蝕が惹った。その間、吾々は河の南岸にいたのだったが、空が全く暗くなったので多くの星がみられた。併し間もなく再び明るくなった。（注120この陳述は全ての旅行記に信頼するに足る刻印を与えている。わたくしの著作「中国中世の旅行家たち」の初版において、長春眞人により観察された日蝕についての長い興味深い記述をなしたWylieワイリー氏は、一二二一年五月廿三日〔旧い暦での計算による〕ロンドンに於いても、三時間四十五分に渉る日蝕のあったことを計算によって発見した。上記の條々やさらに敷衍されて、長春眞人による全ての天文学的事象の詳細が報告されているが、こうした天空現象に関聯して云えば、このウォレー氏の計算推知と一般的に一致しているのである。この全く同じ日蝕は亦中国正史の暦法天文志のなかにも記述されているし、〔郎案、この五月朔の日蝕について、「百衲本、金史二十志第一、天文上、「宣宗、興定五年、五月甲申朔、日食の記事があり、百衲本宋史五十二、志第五、天文志五、嘉定十四年五月甲申朔、日食于畢」とある。百衲本「元史」四十八、志第一、天文志一に日薄食暈珥及日變と

して日食の記事を掲げるが、世祖中統二年（A.D.一二六一）三月壬戌朔の日食記事から始まり、太祖の日食記事なし。〕また長春による全く同じ資料として記されてもいる。これについてはGaubil's' Traite's de l'Astoromonie Chinoise と Souciet's "Observ. Math. Astron. Sc.' iii, 354を参照のこと）この地方では朝には寒冷が激しくて、夕暮時には温暖である。吾々は黄花が沢山咲いているのを見た。（注121中国に於いて黄花の名前は黄色の百合の花に宛てられていて、学名は Hemerocallis fulra であり、この種の花は北方蒙古草原には野生の状態で殆んど見られない。そのために中国の著作家たちは Hemerocallis graminea or H. flava といった種類を見ていたらしく思われる）この河は北東に向って流れている。この河の両岸には多くの高く生い繁った楊柳樹があり、蒙古の人たちはそれを天幕の骨組に使用している。

〔本文〕行十有六日、河勢繞西北山去、不得窮其源

〔口訳〕行くこと十六日間、河流は西北の山脈を周つて流れ去っているのだけれども、其の源流は窮められない。

〔王観堂先生注〕水道提綱、克魯倫河、自源西南流四百餘数十里、折而東南流　長春自東來至河曲、距河源尚四百餘里、故云然。

〔口訳〕水道提綱〔郎案、「中國叢書綜錄」2子目、史部、地理類、水總記、水道提網二十八巻　(清)齊召南撰、四庫全書、史部地理類〕という書物によると、克魯倫河は源から西南方向に流れること四百餘數十里で折れ曲り、東南方向に向って流れていると云う。長春眞人は東方からやって来たので、河の曲り角に到達した折りに、河の源を距ること尚四百餘里あるので、その源流が確かめられないと云ったのも当然だろう。

〔本文〕其西南、接魚児濼驛路

〔口訳〕その西南の個処で魚児濼の駅路に接している。

〔王観堂先生注〕沈子敦曰、驛路本由魚児濼西北行逕、抵臚朐河曲、當黒山之陽、張參議所行是也。真人以赴斡

辰之請改向東北行、由王帳下西至臚朐河曲、方與魚児濼驛路合、故記云、然自河曲以西、與參議行程合矣。

〔口訳〕沈子敦の「西遊記金山以東釋」云うのには、この長春眞人の云う駅路は、元来魚児濼に沿うて西北に行くと、臚朐河の曲り角に到達する。丁度黒山の陽の当る処（東）に当っている。張徳輝参議が旅行した所も此處であった。長春眞人の場合は斡辰、すなわちオッチギン大王の請聘するところに從って赴き、改めて東北の方向に進行して、オッチギン王の包頭帳盧の許を経由して、西方に向い臚朐河に到達している。その河の曲り角がまさに魚児濼の駅路と合致しているわけである。そのために記して「河の曲り角より西方に進んで行く」と。張徳輝参議の旅程と合っているわけである。

〔本文〕蒙古人喜曰、前年已聞父師來、因獻黍米石有五斗、師以斗棗酬之、渠喜曰、未嘗見此物、因舞謝而去。又行十日、夏至、量日影三尺六七寸。漸見大山峭拔。

〔口訳〕その駅路にいた蒙古人たちは喜んで、「去年既に長春父師がやって来て居られることを聞いておりました、」といってそこで黍（きび）と米を一石五斗許り長春に献上したりした。そこで長春師はその返礼として一斗ほどの棗（なつめ）を与えてこれに酬いた。そうすると渠らは喜んで、まだかつてこのような果実を見たことがないと云って、手の舞い足の踏むを知らないかの如くに、喜び謝してそうして去っていった。又行進すること十日にして、夏至の季節がやって来た。そこで日影の長さを地上で測量したところ、三尺六・七寸許りあった。この頃になって漸く大山が聳えて峻峭卓抜な姿をみせていた。

〔王観堂先生注〕沈子敦曰、紀行言西南行九驛抵渾獨剌河、記言、驛路行十日、夏至、量日影三尺六・七寸、漸見大山峭拔、而不言、有河董方立跋推校日影、而斷其地、在土拉河之南、喀魯哈河之東、近今喀爾喀土謝圖汗中右旗地、語最精確、蓋真人與參議所行、實是一涂、語有詳略耳。大山峭拔者即土拉河南岸、喀魯哈河東岸之山也。

〔口訳〕沈垚の「西遊記金山以東釋」の云うところによると、「長春師の紀行文に、西南に向って行くこと九駅、渾獨剌河に到達した」と云っているが、駅路から十日の行程の処で、夏至の現象を捉えて日影を測って、三尺六寸もあったし、漸く大山が峭抜に聳えているのが見られた由を西遊記に云っている。併し河があって方向を正し、尺棒を立てて、日影を推し測るのにその地を、土拉河の南喀魯哈河の東に決定したことを、今で云えば喀爾喀土謝圖の汗中右旗の地に当る地点であることには言及していない。だが語っているところは最も精確であって、まことに長春眞人と張参議と旅行したところが實際に同じであって、そこに記述された言葉に詳細な所と簡略の差があるだけである。旅行記中の「大山峭抜」と云う文字は、即ち土拉河の南岸で喀魯喀河東岸に聳えている山である。

〔郎案：今羽田亨「蒙古驛傳考」附蒙古和林と支那との驛路、を次に引用する。

「今張徳輝の邊堠紀行によりて先づ之を求めんとす、蓋し徳輝は一二四七年丁未の年、忽必烈（世祖）の潛邸に招かれて、支那より漠北の地に至りしものにして、その潛邸の何れの地なるやは明らかに定めかたきも、唐古河、即ちTan-gu河の西方にして和林（カラコルム）の附近を通過して至りしことは彼の明記する處なり、今先づ茲にその原文を引かんか。

『「居旬日（燕京に居ること）而行、北過雙塔堡新店驛、入南口、度居庸關、出關之北口則西行、經榆林驛雷家店、及於懐來縣、縣之東有橋、横木而上下皆石、橋之西有居人聚落、而縣郭燕没、西過鶏鳴山之陽、有邸店曰平輿、其巔建僧舍焉、循山之西而北、沿桑乾河以上、河有石橋、由橋而西、乃徳興府道也、北過一邸曰定防水、經石梯子、至宣徳州、復西北行、過沙嶺子口及宣平縣驛、出得勝口、抵扼胡嶺下、有驛曰孛落、自是以北諸驛、皆蒙古部族所分主也、毎驛各以主者之名名之、由嶺而上則東北行……非復中原之風俗也、尋過撫州、惟荒城在焉、北入昌州、居民僅百家…州之東有鹽池、周廣可百里、土人謂之狗泊、以其形似故也、州之北行百餘里、有

故壘隠然、連亘山谷、壘南有小癈城、問之居者云此前朝所築壘堡障也、城有戍之居所、自堡障行四驛、始入沙陀際……凡經六驛而出陀、復西北行一驛、過魚兒泊、……自泊之西北行四驛、有長城頽址……亦前朝所築之外堡也、自外堡行一十五驛、抵一河深廣約什濟沱之三、北語云翕陸連、漢言驢駒河也……河之北有大山、曰窟速吾、漢言黒山也、…自黒山之陽、西南行九驛、復臨一河、深廣皆翕陸連之比……北語云渾獨剌、漢言兎兒也、遵河而西、行一驛、有契丹所築故城……自是水北流矣、由故城而西北行三驛、過畢里紇都、乃弓匠積養之地、又經一驛、過大澤泊、周廣約六七十里、水極澄澈、北語謂吾悞竭脳児、自泊之南而西、分道入和林城、相去百餘里』と。これを大清一統輿圖に見るに、燕京を出てより宣化府に至る迄は現今北京より庫倫に至る道と全く相合するものにして、少しも疑点の存するものなし、即ち桑乾河に沿うて上ると云ふものは桑乾河の上流（支流）洋河にして、宣徳府の今の宣化府なることは明らかなり、歴代地理沿革表にも、『唐曰武州、遼爲歸化州…屬雲中府、金天眷初改宣徳州、屬大同府、大定七年又改宣化州、八年改曰宣徳州、治宣徳……元中統四年改宣徳府、隷上都路……明洪武…二十五年稱宣府……在雲州所東五百五十里境外』と記せり、現今の道路は茲より直ちに張家口に向ふと雖も、徳輝の道は尚ほ西方によりて河に沿ひたるものなること、砂嶺子に出たりと云ふを以て知るを得べく、此地は圖示せるが如く拜察河の洋河に注ぐ地の東方にあり、得勝口の何つれの地たるやは明らかならずと雖も、之を出でて直ちに扼胡嶺即ち野狐嶺に出たりと云へば、或は今の膳房堡にはあらざるなきや、これさきに長春眞人が彼と同じく宣徳府を經て野狐嶺を通過し、北行したる間に膳房堡の關口翠屏口に宿して其の翌日野狐嶺を度るといふより見るも、亦現今の道路の翠屏口の東隣なる張家口を出るものか野狐嶺を通過せざるより見るも、誤らさる所ならんか（翠屏口は方輿紀要にも翠屏山口として『在渾原州南』といへり）野狐嶺はよく知らるる處にして、方輿紀要によれば、在萬全縣東北といひ、口北三廳志には膳房堡の北方五里なりといふ、撫州は今蒙古にて Karabalgasun と云ひ張家口より庫倫に到る途上殆んど三十哩の處に

ありて『撫州金置、元爲興和路、明廢、故城今在張家口外、鑲黄旗牧廠西南』と記せり。昌州はパラヂウス Palladius の Chaganbalgassun と比定する處にして、恐くは誤りなかるべし、徳輝は茲に州之北行百餘里といへども、此地より北行せしものとは見るべからず、これ此の方向を保ちて沙陀を出てて、西北行して一駅を經、魚児濼に至るとなすも、魚児泊の位置は撫州昌州よりさまに東北にあたり、ここより北行しては泊に出つる能はされはなり、されは沙漠中をも大體に於て東北の方面をとりしものと認むへく、實に長春眞人は此地より東北行せしことを云へり、魚児泊は金史地理志に『柔遠縣有大魚濼』といふものにして、元史太祖本紀に魚児濼といひ、同史特薛禪傳に答児海子と云ひて、上都の東北三百里と記せり、プルツエワルスキイ Przewalsky 等の親しく踏査したる地にして、東經百十七度、北緯四十三度に位し、今蒙古に Taal-Nor と稱するものなり（Dalai-nor とも記るさるることあれと誤れりとはブレッドシュナィデル Bretschneider の云ふ處なり）Taal-nor よりはまた沙漠を斷ちて窟速吾即ち黒山に出たるものにして、黒山はパラヂウスの言へるが如く今の Tono 山に外ならさるへし、これ徳輝記載の光景とパラヂウスの目撃せる地形とか、仍細に相合するを見ても知るを得へし、されば徳輝の横斷せし沙漠中の道は、大體に於て西西北の方向を取りしものにして、彼が自泊之西北行と云へるのみにては、頗ふる解釋に苦しむ所なれとも、上述の理由よりして之を信せさるへからす、此の黒山の地よりしては翁陸連即ち kerulen 河に沿ひて渾獨刺に出てぬ、渾は hun して蒙語に濁れる意味を云ひ、獨刺は即ち今の Tola 河なり、此の河に沿ひて之か北に迂回する地より西北行四驛にして吾悰竭腦児即ち Ugeinor に出てたり、此地より彼は西行したるか、和林に入るには茲に道を分つへく、相去ること（南に）百餘里なりといへり、以上は即ち蒙古の招きに應して、張徳輝が支那より北向したる道筋にしてここに窩潤台時代に設けたる驛路なりと云はんとする所なり、之を長春の行路と比するに、魚児濼即ち Taal-nor に至るの間は殆んど全く之に合するを知る、只張徳輝は桑乾河の上流に沿ひて北行し、『由橋而西、乃徳興府道也、北過

一邸……』といひて徳興府即ち今の保安州には至らざりし如きも、長春は五月師至徳興と記して茲より書を燕京に送りたること見ゆ、されど徳興に至るものは直路には非るか如く、長春は茲に暫らく休息する爲めに、特に道を曲けしものならん、また昌州のことは記せされとも、撫州をすきて東北蓋里泊に至り、其南に鹽池あるを云ふものは、徳輝の州の東に鹽池ありといふものなるへく、両者の行路全く符節を合するか如し、然かもTaal-nor 以北の道に至りては、長春は北方斡赤斤の居を指せしを以て、沙漠を横斷せし張徳輝の道とは異れとも、Kerulen 河を下りて Tola 河畔を經 Ugeinor 邊に到るまでの道は、ブレットシュナイデルの考證せるか如く、またよく相合するを見る、而して兩者ともに蒙古の招請によりて北向せるものなれは、此等の人々の通過する最も普通の道は、支那より魚児泊に至るの間、及び黒山より吾悞竭腦児に達するの間、共に兩者の經たる所のものなるへし、而して魚児泊より黒山に出る普通の道も、もとよりまた徳輝の經たる所のものなるへきや論なきのみ、果して然らは徳輝經由の道は、支那と蒙古の都とを通する公道なるとともに、曾て長春が通過せる時に、野狐嶺以北撫州に至る迄人煙を見すと云ひ、また沙陀中にても人を見すとなし、魚児濼に至りて始めて人煙を認むと記せし道を、彼は明らかに住民驛舎あるを云ひて『野狐嶺以北諸驛、皆蒙古部族所分主也、毎驛各以主者之名名之』と記し、また漠中にも驛の存したるを記するより見れは之を窩潤台時代一二三五年に設けられたる驛路なりといふも、或は誤りなからんか、もとより燕都と上都の間の如きは、世祖時代に至りては、尚此の外に二路の存在せしを見る、一は居庸關より延慶、赤城を經て獨石口に出て白塔児より桓州を經て上都に達するもの、二は古北口より北上するもの之れなり、周伯琦の扈從北行前記、同後記、王惲の中堂事記等によりて是等を求むへしと雖、世祖の時以前に是等の道によりしものを認むへからす、併せて當代驛路を知るの助けとなすを得んか。」（東洋協會調査部学術報告第一冊、明治四十二年七月）〔「羽田博士史学論文集、歴史篇」二六～三一頁〕

〔ブレットシュナイダー氏訳注〕（ケルルン河の南岸沿いに遡って）十六日行程の旅を続けた後に、吾々は河が方向を変えた曲り角に到着した。その丘陵の周囲は北西の風が吹き荒れていた。吾々はその河の源流について何も確めることができなかった。（注122キアフタ Kiakhta から張家口までの隊商路は、ケルルン河の場所近く、Kentei 山脈が隆起する近くを通っている。しかもロシア領辺疆に近く、南東方向の流れが北東に向を変えている地点に当ってもいる。長春の西遊記の記者は河の流れの方向について誤っていた。一六九八年にゲルビロン神父も亦長春の行程と略全く同じ道を辿り、ケルルン河を遡り、クーロン湖から、さらにオルホン河迄到っている。その際に、ゲルビロン神父はこの河畔に豊かな田園風景が展開していると述べている。今から略三十年前に、このケルルン渓谷はロシアの風土地理学者たちによって調査せられた。それについては新版アジア地図（ロシア製）を参照のこと。亦注記127を参看のこと）さらに南西方向に旅を続けると、吾々はあの魚児濼に通ずる駅路に達した。（注123この路は魚児濼からカラコルムへ張徳輝〔注104を参照〕よって辿られた道でもあった）此の地で蒙古人たちは長春師に逢って大変歓んだ。蒙古人たちは師に黍米を献上贈与して、一年間師のお出をお待ち申し上げていたと言上したのだった。そこで長春師はこれら蒙古人たちに棗（なつめ）の実を返礼として贈ったところが、彼らは以前にこの果実をまだかって見たことがなかった。

この魚児泊の駅遞から吾々は十日の旅をしたのだった。丁度夏至の時に当っていたので、（晷針（ししん）―日時計の柱―）の影を計測したところが三フィート、六・七インチ（93.3 cm）あった。（注124ワイリー氏はこれらの日時計の柱の影の長さの表示から、長春師ら旅行者の位置の決定を試みた。ワイリー氏は言明するのだが、〔まだ記憶の定かでない時代から中国で標準に用いた尺度によると〕八フィートの日時計の蔭として三フィート六・五インチの計測を得ており、吾々は六六度七分の太陽の高度を得たわけで、四七度二十一分の緯度にあたっている筈である。〔郎案、この長春師の夏至の正午にノーモン（Gnomon Shadow template）中国人の所謂土圭

による影の測定で、八尺の土圭に対して三尺六寸あったと記録していることは・中国天文学史における注目すべき記録の一つと思われる。Joseph Needham and Wang Ling, Science and Civilisation in China, vol. Ⅲ. Part 2. The Science of The Heaven, 邦訳、「中國の科学と文明」第五巻天の科学、（一九七六年七月思索社刊、）(g)天文器具の發達、(i)ノーモンとノーモン影尺の項、に次の如き記述がある。「あらゆる天文器具の中で最古のものは、少くとも中国では、簡單な垂直棒であった。これによって、昼は太陽の影の長さを測って、夏至、冬至の二至（商の時代から現在まで「至」と呼ばれる）を決定し、夜は星の通過を測って恒星年の回帰を知ることができた。それは「碑」とか「表」とか呼ばれたが、「碑」は本来棒や柱を意味し、「表」は指示するものを意味している。（中略）。『淮南子』は10尺の長さのノーモンが古代に使われたという伝承を伝えているが（これはすでに述べた周時代の10進法度量衡の存在に対する強力な証拠となろう）、これは早期に、たぶんそれが直角三角形の辺に関する簡單な計算の助けには容易にならなかったために、棄てられた。A.D. 五四四年に虞鄒の9尺のノーモンのようないくつかの例外はあるが、一般に古代及び中世の文献に記されているのは8尺の長さである。元の時代、精度を高めるために大きな構造を持った時でさえ、8尺の倍数40尺が選ばれたのは、後に見る通りである完全な水平台と完全な垂直な棒が必要であることは、漢以前によく理解されていた。なぜなら『周禮』に水準器および錘を吊すひもについての記述があるからである。漢の注釈者はこれと同じ長さのひもが、台のおのおのの隅に一つづゝ固定されているという意味に取ったが、唐の賈公彦は、吊すのに4つの測鉛線を使ったと推測した。もしそうだったとすると、この器具はローマ時代の測量官が用いていたがグノマ(gnoma) と非常によく似たものであった。影の長さの最も初期の測定は、もちろん当時の物差しで行われた。しかしこれらは役人の指示と地方の習慣によって一定でないことがわかったので、標準の硬玉の板（土圭）にノーモン影尺（gnomon Shadow template）と呼べるようなものが、この目的のためにつくられた。それは

『周禮』に記されており、実物は素焼きの土製で、A.D.一六四年のものが現存している。

大司徒（高官）は（『周禮』に言う）ノーモン影尺を使って、太陽下の大地への距離を定め、正しい太陽の影（の長さ）を決める。こうして大地の中央を見出す…大地の中央は夏至の時の太陽の影が一尺五寸ある（場所）である。

至の瞬間はこうして予想された時の前後数日間・棒の根本で真北に目盛り尺を置き、影がこの長さに一致する日の正午をとることから決定できた。なぜ冬至が夏至の観測から間接的に決められたかという理由の一つは、夏至のほうがずっと短い尺で済んだからである。（中略）。至の太陽影の長さの研究は、黄道傾斜についての正しい知識をもたらす。これは恐らくB.C.四世紀石申や甘徳が天体の赤経と赤緯の測定を始めてからすぐに知られた基本的な天文学データである。しかしながら、二至における太陽の赤緯に対する正確な数値は『後漢書』以前には見られない。そこで賈逵はA.D.八九年の記述で、「冬至の時、太陽の位置は極から百十五度あり、夏至では、それが六十七度だけ隔ることになる」と言った。この差を2で割ると概数24を得る。中国における天文学者たちが、続く数世紀に行ったさらに多くの至の太陽影の長さの測定は、A.D.一七三四年ゴービル（Gaubil）が集めて計算した。」（前掲書、一二七～一三二頁）とある。長春師が八尺のノーモン影尺を持ち歩いていたと考えられる資料として、西遊記のこの記事は重要である」こうしたことにより、長春師らはTulaツラ河の南岸の北部にいたに違いないと思われるし、その位置は東経一〇七度一分の処であったらしく、さらに、河を渡って北西に四駅程行った処に位置していたとも考えられ、その河こそ、疑いなくKaruha、ロシア側の地図によるとkharukhaと出ているTula河の支流である）此処で吾々は高い山脈の頂上で注意すると、吾々が西方において横切って旅した地域は、全く峨々たる山岳帯ないしは丘陵からなっているのが判る。

人口は稠密であって、全ての住民は黒い車に、白い天幕で生活している（注記115参照のこと）人びとは家畜

を飼育したり狩猟に従事している。彼らは動物の毛皮を着ていて、乳や新鮮な肉類を攝っている。

この人たちの男や若い未婚の女性たちは頭髪を編んでいるので、両耳の上に垂れ下っている程である。既婚の女性は頭の処に樹の皮で造った飾りを刺しているが、二フィート程の高さのもので、時に彼らは木綿の布裂ないしは富裕な階層が好んでやるのだが、赤い絹物でそれを覆って飾る。この帽子ともいえるものには長い尾が附いていて、彼らはそれを gu-gu ググと呼んでいるし、また、鵝鳥やあひるの尾に頗るよく似ている。彼らは常に気を配っているので、誰れもこの帽子をうっかり見過してしまうようなことはない。そのために、天幕に入ってきた時に、彼らは頭をこゞめて、退ずさりしながら歩くのを常としている。（注125成吉思汗と同時代の中国の將軍 Meng hung（孟珙）が蒙古人に関する非常に価値高い記事を遺した。〔郎案：この記録は「蒙韃備録」である〕彼自ら蒙古地域にいたのだったが、彼自らの観察から蒙古人たちを悉っていた。彼の記録のなかに、蒙古人女性の髪飾りについて次の様に述べている。即ち、「蒙古人の重だった人たち（貴族の）妻女は彼らが gu-gu ググ（顧姑）と呼んでいる帽をかぶっている。略三フィートの高さからなる針金から造られ、外見上は竹のように見えたりする。その全体は紅赤のベルベット布で覆われている。何人かの西欧中世の旅行者たちは、蒙古女性のつけているこの特殊な髪飾りについて言及しているが、例えば Potanin ボターニンの調査記によると、（“Mongolia, II.p.23.note 27）現在のところでは蒙古地域では用いられていないという。カルピニー（615）はその主題について次の様に述べている。即ち「既婚夫人に頭に小枝が樹皮で造った高さ四尺もある丸いものをかぶる。それは上になるほど太くない先が四角、その上に細長い金銀または木の棒あるいは羽根を挿す。この帽子を肩までとゞくフェルトの頭巾の上にかぶる。彼らは男の前に出る時は、既婚婦人なることを示すために必ずこれをかぶる。未婚婦人は男と殆んど同じ服装なので識別困難である。」（妹尾韶夫訳「リュブルク、東遊記」所収フラノ・カルピニ使節一行の旅、注55、六九～七〇頁）またリュブルク東遊記二

三二頁に「それから女たちはボッカといふ頭飾をかぶりますが、これは木の皮、またはなにか輕いもので作って絹をかぶせた、両手で握り得るぐらいの太さの丸い筒で長さ一尺か二尺、先が四角になっていて、その先に長さ一尺ぐらゐの羽根の束、または輕い茎のやうなものを突きたて先端を孔雀の羽根で飾り、その根元、すなわち筒の先を眞鴨の羽根や宝石で飾ったものです。」（前掲書、六二頁）回教徒の著作家たちは、亦、蒙古人貴族の女たちの髪飾りについて知っており、それを bogtak と名付けている。尚 Quatremere クワトルメールの「ペルシアの蒙古人史」第一巻、一〇二頁の注記、またH．ユールの東域道程録一三二頁を参照のこと。

〔本文〕從此以西漸有山阜、人烟頗衆。亦皆以黒車白帳爲家、其俗牧且獵。衣以韋毳、食以肉酪、男子結髪垂兩耳。

〔口訳〕これより西に漸く山や小高い丘があって、人びとの生活住居が大変多くなって来た。全部黒い車輛と白い天幕を家屋として居て、その生活習俗は牧畜と狩猟によって居り、衣服は木の繊維と動物の毛皮からなり、肉と酪乳を食料にして、男子は結髪して両耳側に垂らしている。

〔王観堂先生注記〕蒙韃備録、上自成吉思下及國人、皆剃婆焦如中國小児、留三箰在顱門者、稍長則剪之、在兩下者摠小角垂於肩上、鄭所南心史大義略叙三搭者、環剃去頂上一彎、頭髪留當前、髪剪短散垂郤析両旁、髪垂綰兩髻、懸加左右肩衣襖上、曰不狼児、言左右垂髪礙於回視、不能狼顧、或合辮爲一、直拖垂衣背云云、余見烏程蔣氏藏元無名氏羽獵圖、人皆垂兩辮與二書合

〔口訳〕蒙韃備録によれば、上は成吉思汗皇帝から下は一般の國人に及ぶまで、皆、婆焦〔郎案「諸橋漢和辞典」に曰う、婆焦（バセウ）、蒙古人種の剃髪の俗を云ふ、孟珙の蒙韃備録の同一文を引用す〕を剃り、中国人の小供のように三箰（箰は紙一束の厚さ、三箰その三倍）頭を留めて剃り、顱門〔郎案「諸橋漢和辞典」に曰く、顱門、頭頂の前方にあって小児の時動く処、ひらめき、をどりご（方書）頂中央旋毛中爲百會、百會前一寸半爲前頂、

百會前三寸即顖門とあり〕のところは稍長くしてそこで髪を剪っている。両耳下に垂れている髪は小さな角状に束ねて、肩の上に垂れている形式である。鄭所南著す「心史大義」〔郎案「中國叢書綜録」2子目、集部別集類「心史、二巻、(宋)鄭思肖（所南）撰、明辨齋叢書二集、」とあるも「心史大義」の書目は載せていない、未詳〕に、ほゞ三箚について叙述している所によると、「頂上を去ること一彎を環(まる)く剃り、頭髪はそのまゝ留めて、前髪の部分で剪って短くし、それに連続して垂らし両側に髪に結(むすび)つけ、両髻を左右の肩衣の襖の上にかけて加える形式で、不狼児といっている。その言の意味は、左右の垂髪が邪魔をして振り向いて視るのに狼のように容易に振向けないことでそうした名前がついている。或いは辨髪を合して、一束とし、衣の背中の肩に垂らすやり方をする云々」とある。わたくし（王氏）が烏程蔣氏の藏するところの元代の無名氏「羽獵圖」をみてみると、その図中の人物は皆、両方に辨髪を垂らしていて、以上挙げた二つの書物の引く所は合致している。

〔本文〕婦人冠以樺皮、高二尺許、往往以皁褐籠之。富者以紅絹其末如鵝鴨、名曰故故、大忌人觸、出入廬帳須低徊

〔口訳〕婦人は樺の皮で造った高さ二尺程の冠をつけ、往々にして黒い麻布でなかを包んでいる。富裕な婦人は紅い絹をもってその末端を鵞鳥や鴨の尾のように垂らしていて、故故と名づけている。大変人に触われるのを嫌い、天幕帳廬に出入するのに低く頭をかがめなくてはならない。

〔王観堂先生注記〕蒙韃備録、凡諸酋之妻則有顧姑、冠用鐵絲結成形如竹夫人、長三尺許、用紅青錦繡、或珠金飾之、其上又有杖一枝、以紅青絨飾之。黒韃事略霆見故姑之製、用畫木爲骨包以紅絹金帛、頂之上用四直尺長柳枝、或鐵打成杖、包以青氈、其向上人、則用我朝翠花或五彩帛飾之、令其飛動。以下人則用野鷄毛、楊允孚灤京雜詠、香車七寶固姑枹、旋摘修翎付女曹、自注、凡車中戴固姑、其上羽毛又尺許、抜付女侍手持對坐車中、

雖后妃馭象亦然是、元末雖后妃亦用雉尾、輿事略所紀元初之制異矣。

〔口訳〕蒙韃備録に云う、「およそ諸々の酋長の妻は、則ち、顧姑と云う冠を持っている。その冠は鉄線を用いて結び合わせて成形するのであるが、竹材細工竹夫人のように見える。冠の長さが三尺許り、紅青色の錦繡を用い、或いは珠金をもってその上を装飾している。また杖状の一枝があり、紅青の絨フェルトでこれを飾っている。「黒韃事略」徐霆に云う所の注が故姑の冠帽を製する様子を見ると、木に彩画したものを用いて骨格として、周囲を包むのに青色の氈をもってしている。その上流階級の人の傾向では、我が中国朝廷の花形の翡翠か或いは五彩の帛を用いてこれを装飾するように、それを飛動させたりする。下層階級の人びとには野生の鶏の毛を用いている。楊允孚の「灤京雑詠」〔郎案「中國叢書綜録」2、子目、史部地理類「灤京雑詠」一巻、(元)楊允孚撰、四庫全書、集部別集類、元詩選初集庚集亦二巻本、知不足齋叢書、第二十三集に在り〕によると、香わしき車に七宝で飾った固姑を著け、冠の羽根をくるりと取って侍女に持たせ、の詩句の注記に「およそ車中に固姑（顧姑）を冠（かぶ）って来る際に、固姑の頂上に鳥の羽根がついていて一尺程にもなるので、抜き取って侍女の手に持たせることになって居り、車中で主人と侍女が相対坐するのを憤わしとする。后妃といえども例え象に乗って行く場合でもまたこのようであったという。このことは元朝末期に后妃といえども亦雉の尾羽根を装飾に用い「黒韃事略」が記載するところをみるに、元朝初期の制度と異っているのがわかる。〔郎案、顧姑が特殊な蒙古婦人の冠帽で、それについて王観堂先生、及びブレットシュナイダー氏らの諸文献を引いての考注を紹介したが、ここに顧姑について文献資料のみならず、語源、構造、冠使用の意義起源と流伝を考古遺物から造形作品現存民俗資料に渉って考究された論考一篇がある。江上波夫先生の「蒙古婦人の冠帽子『顧姑』について」（〝ユーラシア北方文化の研究〟一九五一年九月山川出版社刊所収・二二一～二五五頁）がそれである。その一部を抄出する。すなわち、「元代蒙古婦人の服飾の一つとして、顧姑（故姑、故故、固姑、罟罟、

姑姑）なる特異の冠帽があり、それが當時の西方の記録に bogtak,（boghthkok, bocca, boctac、〔注1、bogtak（Rashid-ud-din）boghthâk（Ibn, Batuta）bocca（Rockhill 本並びに Yule 注所引の Rubruck）boctac（Risch 本 Rubrnck）。なおペリオは（P. Pelliot）は南齋書に見ゆる魏虜の語（鮮卑語）のうちにBogtakに当る語を見出したという。（H. Yule&H. Cordier, Cathay and the way thither, BR CV. N. P. 267 参看、しかし私はそれに疑をもっている）と見えるものと同一の物であることは既に内外の学者の齊しく考定したところで何らの疑問もない。また同一の婦人帽に対して全く別個の二つの名稱の併存した理由については、前者は蒙古本来の名稱であり、後者はペルシア語による外来的な呼稱であると説かれており、即ち顧姑とは蒙古語で「美麗」「装飾」等を意味するkeke（kekel）の転音Kükü、或いは「毛髪の装飾」「頭飾」をいうkukulの音訳（注2、白鳥博士「高麗史に見えたる蒙古語の解擇」〔東洋学報第一八巻〕一九五～六頁を参照のこと〕〔郎案、この白鳥先生の論文は「白鳥庫吉全集」第三巻（昭和四十五年三月、岩波書店刊）に（『高麗史』に見えたる豪古語の解釋」20、姑姑の項目に見えている、『高麗史』第八九巻、后妃列傳淑昌院妃金氏の條に、「元皇太后遣使賜妃姑姑、姑姑蒙古婦人冠名、時王有寵於皇太后、故請之、妃載姑姑、宴元使」といふ記事がある。（中略）元代の蒙古語で婦人の冠を呼ぶ二稱の中、孛黒塔（boqta）の方は西域の記録によって、其が boqta a bogta と發音したのは知られるが、固姑などの文字で漢人の譯した原語が果たして何と發音したか、蒙古や西域に此の名を挙げたものがないので、之を詳かにすることが出来ない。已に怯仇児の條に諫べた如く、蒙古語で美しき、風雅なる、美麗・装飾をkekeとも kekelともいひ、其から轉じて元の時代には辮髪のことをkekül、現代ではkükülといふ。これによって考へると蒙古語で婦人の冠を呼ぶ故姑・姑姑・固姑・顧姑・罟古は皆kekeの轉音kükülの音譯で怯仇児（kekül, kükül）の如く、装飾の義から轉じた言と見て差支へなからう。」（前掲書、四三六～四三七頁）とあり、小林高四郎氏「元朝祕史孛黒塔考」（善隣協曾調査月報昭和十一年七月）

三三頁に「bogtak とは「タバン」或は「頭被」の意あるペルシア語 bogtâg, boghltâq 等に関係ある語（注3 M. Quatremère ; Histoire des Mongols de la Perse ecrite en Persan Par Rashid-ud-din, Tom. I P. 102, note 30 小林高四郎氏前掲論文三二頁）と解釈されている。そうしてこれら顧姑、bogtak の名稱に関する所説はいづれも信ずべきものであるが、その冠帽の実体、意義及び起源、流伝に関してはまだ論究されたものが尠く、一考を要するものがある」（前掲書二二一～二二二頁）と説き起されている。「（中略）当時の蒙古人の風俗を比較的正確に描写したものと信ぜられる、十四世紀初頭の写本なるラシッド（Rashid-ud-Din）の「集史」（Djami-El-Ténarikh）の挿画に見える元王室后妃の載く高冠が正しくその状を彷彿とせしめるからである（図版二十八・1）（中略）そしてカルピニ、ルブルックの所謂樹皮とは蒙古においては当然樺皮を指したものと考えられ、西遊記の記事と互証して顧姑の(a)部分の構成材料は樹皮、殊に樺皮の使用されたことを明確にしている。かくて(1)針金、竹、木（柳条）によって円筒形の骨組を造り、その外側に絹布類を張り周らしたものと、(2)樹皮（樺皮）によって直接円筒形をつくったものと大別して顧姑に二種類あったことが知られるが、何れが蒙古本来のものかといえば、恐らく後者であろう。（中略）顧姑の(b)の部分は一尺乃至四・五尺の細長い一本の枝、―それは柳条、羽毛、藤、金銀鉄などの材料で作られた杖状のもので、氈フェルト、野鴨の尾羽根、宝玉等で装飾されている―の先端に孔雀、野鶏、鶴等の尾羽あるいは翠花、絹布等を附飾したもので、それが「飛扇の如く」風に飛動したというのはこの部分の形容であろう。（中略）恐らくこのような顧姑の特異な装飾は北方アジア諸民族の間に古くより行われた服飾上の一特色、即ちその帽子の頂上に鳥獣の羽毛を装飾する風に起源したものであろう。（注12、北亜の狩獵遊牧民が帽子の頂上に鳥獣の羽毛を飾ったことは、既に匈奴にあり、〔ノイン・ウラ出土品〕またイエニセイ河谷キヂル・カヤ（Kizyl Kaya）の石刻には四・五世紀頃のトルコ系民族が頭上に尾羽を飾る状を現わしたものがある。なお満州の古代民族の間にもこの風があ

り、魏書巻一百勿吉国伝、周書巻四九異域伝上高勾麗の条、唐書東夷伝黒水靺鞨の条、輯安県及び平壌にある高勾麗遺蹟壁画等に見ゆ、）（中略）次に顧姑冠の着用された意義は如何。この問題に関しては夙にカトゥルメール（M. Quatormère）がそれを以って既婚婦女の表徴と解したが、恐らく正当な解釈であろう。そのことは顧姑冠の着用者が常に既婚の婦女であったという前掲諸文献の記載、殊にラシッドの「集史」に「アフメッド（Ahmed）はこの後者（Toukondjak）を彼が王位にあった時に娶り、頭上にbogtakを被せた」とあり、又同書に「彼女は頭にbogtakを載いてKhatoun（皇妃）になった」と見え、更にカルピニが「彼女（既婚婦人）等はこの冠を着用せずには人々の面前に出でず、従ってそれによって彼女等は他の女達（未婚婦人）から区別される」と述べているのによって明確である云々。」とある。〕

〔本文〕俗無文籍、或約之以言、或刻木爲契

〔口訳〕蒙古人の慣習として文字や典籍がなかったので、或いは人と約束誓約の場合には言葉を借りるか、或いは木に刻印して契約の印とした。

〔王観堂先生注記〕蒙韃備録、韃之始起並無文書、凡發命令遣使往來、止是刻指以記之、爲使者雖一字不敢増損、彼國俗也。黒韃事略、韃人本無字書、行於本國者、則止用小木長三・四寸刻之、四角且如差十馬、則刻十角、大率只刻其数

〔口訳〕「蒙韃備録」によると、靼撻人の始めて起り国家を立てるや、いずれも文書がなかった。そこでおよそ命令を発し、使節を派遣し、彼我往来する場合に、指を折り曲げてもって刻記すことにした。使者となった者は一字といえども敢えて増減したりしないのが蒙古の習慣であった。「黒韃事略」によると靼韃人たちは元来字も書法もなくて、本國に居る者は小さな木片長さ三～四寸を用いて　四角形を彫刻し、十疋の馬を指す場合には十個の角形を彫刻し、だいたいのところは、たゞその數だけの四角を刻んだという。

〔ブレットシュナイダー訳注〕これらの人びと（蒙古人たち）は読み書きのすべを知らないのである。〔注126　ウィグル人の書法が成吉思汗により導入せられ、それは長春眞人が蒙古の地を訪れた後、數年にして人びとの間にひろまった（パラディウス）〕。彼らは事柄を定めるのに口頭による約束で済ますか、木に印を刻んで契約約束を果した。しかも彼ら蒙古人決してこうした約束を達えるということはなかったし、また彼らの約束の言葉を違約することもなかった。しかも彼らは初期の頃の風俗習慣を墨守していた。

〔本文〕遇食同享、難則爭赴、有命則不辭、有言則不易、有上古之遺風焉〔郎案、この本文の一部をブレットシュナイダー氏、訳を省略し、以下の数行亦省略せり、けだし翻訳に難んずな故なるべし〕以詩敍其實云、極目山川無盡頭、風煙不斷水長流、如何造物開天地、到此令人放牛馬、飲血茹毛同上古、峨冠結髪異中州、聖賢不得垂文化、歴代縦横只自由。

〔口訳〕食事に出逢うと一緒に飲食を楽しみ、それが出来なければそこで闘爭に及ぶ。戰場に赴くのに命令されると辞退したりしないし、言葉を発すると嘘を云わない。誠に上古の遺風がある。詩でもってその実景を述べてみよう。

極目山川無盡頭　眼の及ぶ限り山川風土が無限に拡がっていて
風煙不斷水長流。　砂煙が絶えず吹き水はゆったり流れている
如何造物開天地　造物者たる神はどうしてこうした天地を開かれたのだろうか
到此令人放馬牛。　此処にやって来て人が馬や牛を放牧して
飲血茹毛同上古　その血を飲み生肉を喰うて生活すること上古に同じ
峨冠結髪異中州。　高く聳える帽子や結髪の方法など中原の風俗に違うて
聖賢不得垂文代　聖賢の教えが文化を育てることもなく

歴代縦横只自由。古今を通じて縦横無碍で唯野放図と云う許り。

〔王観堂先生注記〕湛然居士文集五、感事四首、用此詩韻

〔口訳〕湛然居士文集五に、事に感じて賦する詩四首をみると、上記の詩韻をそのまま用いている。〔郎案、湛然居士集巻五に「事に感じて、四首」に「案ずるに亦長春道人に和す」とあり、次の四首が掲げられている。(一)富貴榮華若聚漚（富貴も栄華も泡を集めたようなもの）、浮生渾似水東流。（浮世が集まり流れる様は黄河の水が東流するようなもの）仁人短命嗟顔氏（えらい人でも短命なのは顔回を見れば分るわい）君子懐疾歎伯牛（君子と云われても癩疾を病むこと孔門十哲の一人冉伯牛もその一人）、未得鳴珂遊帝闕（わたしも亦、馬の轡貝を鳴らして宮中に参内する榮に浴さぬが）何能騎鶴上揚州。（どうして鶴に乗って揚州の刺史になり得ようや）幾時擺脱閑韁鎖。（何時か身の浮世の束縛から解き放たれて）笑傲煙霞永自由。（山水の勝景をすらあざ笑って自由を満喫したいもの）この詩の末尾に「西遊記を勘案するに『陸局河南岸に到って行くこと十六日、又十日夏至に至って漸く大山を目撃した云々…義冠結髪異中州』の次に詩句二聯があって、この四首並此の韻を用う」としている。その二首目浮世の瑣事、蝸牛上のつまらぬ争いを捨て、致主澤民の素忌を懐くが、わたくしに資格なしと云い、三首目は孔門十哲の子路にも及ばぬのを歎じ、四首目は蘇東坡が弟蘇轍に贈った謙虚な詩を鑑とするを云う。〕

〔本文〕又四程西北、渡河、其旁山川皆秀麗、水草且豊美。東西有故城基址、若新街衢老陌可辨、制作類中州。歳月無碑刻可考、或云契丹所建、既而地中得古瓦、上有契丹字、蓋遼亡士馬不降者西行、所建城邑也

〔口訳〕更に四行程西北に進み河を渡った。その近傍の山川のたたづまいは全て秀麗を極め、水草も豊富で美しい。東西に連なった廃墟の都城の趾があって、新しい町並み街路のように見え、古い道路もはっきりしている。その構成は中原のものに似ている。その存在年月は碑文がないので判らないが考えてみると、或は契丹人の建

立したと云えるかも知れない。そこで地中を探ってみると古瓦を発見したが、表面に契丹文字があったので、恐らく遼朝が滅亡して士卒軍馬の降伏しない者たちが西方に移動して、建設した城邑だったのだろう。

〔王観同先生注記〕張徳輝紀行、遵渾獨剌河而西行一驛、有契丹所築故城、可方三里背山面水、自此水北流矣。由故城西北行三驛、過畢里紇都、乃弓匠積養之地、又經一驛過大澤泊、周廣約六・七十里、水極澄澈、北語謂吾悰竭腦児、自泊之南而西、分道入和林城、相去約百餘里、泊之正西有小故城、而契丹所築也。云云。案此記之契丹東西二故城、與紀行之二故城、殆未可遽視爲一。此記東西有故城一語、緊接於西北渡河之後、河者喀魯哈河、則所謂東西者、當指喀魯哈河之東西、拉特録夫蒙古圖志、喀魯哈河右有二廢城、隔河相望、殆謂是矣。至張氏所經之東故城、則尚在其東。張云遵河（渾濁剌河）而西行一驛、有契丹所築故城、背山面水、自此水北流、是張氏所經故城、在土拉河西流北折之處、殆遼時防維二州城之一、沈子敦據俗本紀行、譌遵河而西爲渡河、而西遂置此城於土拉河、及喀魯哈河之西不知、由驛路西行不必過土拉河、若既渡土拉河、則所云自此水北流者、又指何水乎。故張記之東故城、實在土拉河曲之南、而此記之東故城、則在喀魯哈河東南岸、此兩書之東故城、不能遽視爲一者也。至二西故城、則此記之西故城、以記文叙次言之、當東距喀魯哈河不遠、而紀行之西故城、則遠在鄂爾昆河岸、紀行謂吾悰竭腦児之正西、有小故城、案吾悰竭腦児即今之額歸泊、今泊西有湖、名Tsaidam者、其旁有廢城、苾伽可汗及闕特勤二碑、皆在其左右、張氏所稱殆謂是城。沈子敦并爲一談非是。

〔口訳〕張徳輝の邊堠紀行によると、「渾獨剌河に従って西の方に向うと一驛があって、契丹族が築いた古い城址だという。三里四方の規模で山を背にして水流に面している。ここから水流は北に向って流れている。この古代の城址から西北方に行くと三驛を通過し、畢里紇都すなわち弓匠積養の地であるという。さらに又一驛を經て水草の生えている大きな湖のほとりの宿營地を過ぎると、その湖沼の周囲は広さが約六、七十里ほどもあって、その水がきわめてよく澄んで透明澄徹している。北方の言語で吾悰竭脳児と謂っている。その宿營地から

南に目指し、さらに西方に向う分れ道に入ってゆくと、和林城に辿りつく。その距離は約百余里ほど相距っている。この宿營地の眞西に小さな城址があるが、これも亦契丹族の築くところであるという、云々。」の記事がある。此の張德輝の旅行記にみえる契丹が築いた東西の二つの城と、この紀行文にみえる二つの城址とを考え合わせてみると、まだ遽かに同一のものと見做すことができない。この張德輝の記す東西に城址があるといった語は、西北に向って河を渡った後に近接したものと云っている。その河は喀魯哈河に当てられるべきもので、ここで謂うところの東西は、まさに喀魯哈河の東西を指していると見做すべきだろう。ラドルフの「蒙古圖志」によると、喀魯哈河の右側に二つの廃城址があるとし、河を隔てて相互に眺望をほしいまゝにできるという。殆んどこれを指して謂っていると思われる。張氏が旅行して東の故城址に至ったというのも、やはりその東方に位していた城址のことだったのだろう。尚張氏の云う河に沿って、すなわち渾獨剌河から西方に向って行くと一驛があり、契丹族の築いた城址があると云って、山を背に負って水流に面しているという。この水流が北に向って流れているわけで、張氏が經過した故城は土拉河の、西に向って流れ北に迂曲した所で、殆んど遼の時代の防維二州の城のどちらか一つと考えられる。沈垚子敦の「西遊記金山以東釋」の紀行によると、遵河を西して渡河してゆくと、西に遂に此の城址があったと云っている。土拉河や喀魯哈河の西かどうか知る由もない。驛路を西に向って行っても、必ずしも土拉河を渡河して過ぎ行くとは限らない。もしもすでに土拉河を渡っていたとすれば、そこで此の水流を北に向って流れている河はどの川を指すのであろうか。だから、張德輝の云う東の故城址は、実際のところ土拉河の迂曲折した南の方に位置すべきであって、此の長春眞人の紀行の東の故城址は、やはり喀魯哈河の東南岸にあるのが妥当だろう。張氏と長春の両紀行文中に見える「東の故城」はどうしても遽かに同一のものと見做すことができないわけだ。二つの西故城に至るとあるが、即ちこの長春の旅行記事に見える西故城は、その記している文章敍述をもって当てゝ考えると、東は喀魯哈河を距ること遠

からず、そうして張氏の紀行文の西の故城は、やはり遠く鄂爾昆河の岸辺にあるとしている。張氏の紀行は吾悰竭脳児河の眞西に小さな故城があると云っているが、王観堂の考えるところによれば、この吾悰竭脳児河はすなわち、現在の額歸泊がそれであって、現在の宿營地の西に湖があり、その名稱は Tsaidam と呼ばれていて、その近傍に廃城址があるのに当っているとするわけだ。苾伽可汗と闕特勤の二つの碑文は両方とも皆その左右に存在するのであって、〔郎案、この苾伽可汗と闕特勤の碑文については、白鳥庫吉先生の「突厥闕特勤碑銘考」〃白鳥庫吉全集〃第五巻塞外民族史研究下、（昭和四十五年九月岩波書店刊所収）の論文がある。その所在地発見経緯、碑銘釈文を詳細に論及されている。「ヘイケル氏は（一千八百九十年）五月十五日にサンクトペテルブルグ府を發足し、トボルスク・トムスクを經て、イルクツク市に着し、此處よりバイカルを渡り、湖南の峻嶺を越へ、トロイツコサブスクに出で、南キヤフタ、マイマチンを通行してウルガに達せり。八月六日またウルガを發し、トラ、ハルハを横ぎり、オルホン河畔に着せしは同月十六日の事なりき。氏はこの河の近傍に於いて三個の古碑を發見せり。一つはオルホンの東畔ツアイダム湖の傍にあり、一つはその西南八町許にあり、一はオルホンの西畔カラバルガスンの墟址にありしもの是なり。而して碑面の文字は漢、回鶻、エニセイ文字の三様にして、中にもエニセイ文字にて鏤刻せるもの最も多しとす。余が爰に考證せんと欲するは、第一の記念物にして、ツアイダム湖の傍にありし突厥の大官闕特勤の墓碑銘なり。（中略）此碑文は唐玄宗開元二十年即ち西暦七百三十二年の撰に係る。（中略）唐史を案ずるに闕特勤は突厥の王族にして、毗伽可汗の弟なり。父骨咄祿九姓の拔曳固に殺さるゝや、闕特勤は故部落を糺合し、兄黙棘連を奉じて可汗となしぬ。毗伽可汗是なり、始め可汗位を闕特勤に譲りしかども、特勤固辭して受けざりしかば、之を左賢王に封じて、専ら兵權を握らしめたり。かくて兄弟心を合せて國家を經營せしかば、一たび衰頽に傾ける突厥も是に於て再び中興の隆盛を致せり。」（前掲書二四～二六頁）エニセイ語にて闕特勤は kül tegin。また苾伽可汗については

同論文中に「此苾伽可汗は『唐書』に毗伽可汗に作る。前に出したる『全唐文』巻四〇弔突厥可汗弟闕特勤書には、碑文の如く苾伽可汗と記せり。苾伽は突厥語bil-mak（ビルは語根マクはインフィニチーブの形）即ち知るといふ動詞より轉じたるbilgaの音譯にして、知慧の義なり。毗伽（苾伽）の釋は『舊唐書』巻一九五廻紇傳に「毗伽華言足意智」とみえたり。苾伽可汗はエニセイ文字にbilga Kaganと記せり。ブレットシュナイデル氏は此の毗伽（或は苾伽）を土耳古語bukuの音譯と解したり。ブク可汗は『元史』巻一二二、巴而木阿而忒的斤の傳に不可罕に作り、又『タリク・ジハン・グシャイ』にはBuku Khanと記せり。ブクはトルコ語強健の義と見ゆれば、毗伽とは混同すべきにあらず」（前掲書、三六頁）と見えている。〕張氏の紀行文が稱している所は殆んどこの廃城址を指しているに他ならない。沈垚子敦がこれらを併せて一つのものとしているが、論議は正しくないと思われる。

〔郎案、既に指摘したことだが、王観堂先生の西遊記考注の文は、「蒙古史料四種」（中華民國五十一年九月、台北・正中書局刊）と、「王観堂先生全集」（文華出版公司刊）第十二冊所收の文との間に異同がある。この注記は全集本に據ったのだが、この注記個所は異同が甚だしいので、「蒙古史料四種本」により異り増加した文を示す。〕「攷遼之鎮州城、正在喀魯哈河東、遼史地理志、鎮州建安軍節度使、本古可敦城、東南至上京三千餘里、領防維二州、又云河董城、本回鶻可敦城、語訛爲河董城、東南至上京一千七百里、靜邊城東南至上京一千三百里、皮被河城東南上京一千五百里、案此二條、殆有外複鎮州與河董城、同爲古可敦城、當是一城。松漠紀聞云、女眞遣故遼將余覩姑、率兵經略屯田於合董城、自注云去上京三千里合董城、即河董城、云去上京三千里、則又與遼志鎮州、去上京之道里合、則鎮州與河董城、之非二地明矣。至靜邊皮被河二城、亦當即防維二州、但雅俗名殊、故志並錄之耳。志又云、皮被河出回紇北東南經羽厥、入臚朐河、沿河河董城北東、流入沱漉河、案沱漉河即唐書之獨樂水、今土拉河東北與工拉河合者、惟喀魯哈河、但志又云、入臚朐河、則傅聞之誤也。是喀魯哈

河東南岸、有河董城、即鎮州城、此記之東故城」

〔口訳〕考えるに遼の鎮州城〔郎案、青山編「中國歴代地名要覧」に曰う、「鎮州（遼）臨黄城西北三千餘里、18、直隷附考兀良哈、「讀史方輿紀要巻十八、直隷九、河董城、臨潢西北三千餘里、本回鶻可敦城、詆爲河董城・契丹修築以防遼患。又静城在臨潢西北千五百里、本契丹二十部族水草地、北隣突厥、毎由此盗掠、因建城防禦、又皮被河城在臨潢北千五百里、亦契丹所置以控北遼」」は正に喀魯哈河の東に在る、遼史地理志に「鎮州建安軍節度使、本古可敦城、東南して上京に到る三千余里、防・維二州を領す」又云う「河董城は本回鶻可敦城で、語が訛って河董城となった。東南して上京に到る一千五百里、静邊城から東南して上京に到る一千三百里、皮被河城から東南して上京に到る一千五百里」と。この二つの文章を勘案すると、殆んど何れも重複していて、鎮州と河董城は同じく古可敦城で当然一城を指している。「松漠紀聞」〔郎案、「中國叢書綜録」2、子目、史部雑史類に「松漠紀聞二巻補遺一巻、(宋)洪皓撰、顧氏文房小説（嘉靖本、景嘉靖本）遼海叢書第一集、叢書集成初篇史地類」とある。〕に云う。「女眞も故遼將余覩姑を遣わし、兵を率いて経略し合董城に屯田させた」と。自注に云うに「上京を去ること三千里の合董城は即ち河董城である、上京を去る三千里は則ち又遼史地理志の鎮州で、上京を去る道里が合致する。則鎮州と河董城が二つの違った地でないことが明らかだ。静邊と皮被河の二城も亦當に防・維二州に相当する。ただ雅名と俗名とが異るだけである。故に地理志が並べて記録しているだけだ。志が又皮被河が回紇の北東より出で、南羽厥を経て臚朐河に入り、河董城に沿って北東して沱漉河に流入すると云う、勘案するに沱漉河は即ち唐書の獨樂水、今の土拉河であり、河の東北で土拉河と合流するのが、思うに喀魯哈河である。但志が又云うに、臚朐河に入るとするが、則伝聞の誤りであることが判る。この喀魯哈河の東南岸に河董城があり即ち鎮州城だ。この西遊記の東故城がこれに当嵌る。」

更に注記は全集本の「今泊西有湖名 Tsaidam…」とあるを「蒙古史料四種本」は「今泊西」に続き「難無

故城遺址、而西南有達拉爾、和哈剌巴爾、噶遜城、亦單稱哈剌巴爾噶遜、蓋即遼之斡窩魯朶城也。遼史肅圖玉傳、開泰元年石烈太師阿里底殺其節度使、西奔窩魯朶城、蓋古所謂龍庭單于城也。已而阻卜復叛、圍圖玉於可敦城勢甚張、圖玉使諸軍齊射却之、屯於窩魯朶城、是遼時漠北可敦城、西有窩魯朶城、窩魯朶者契丹語宮也。哈剌巴爾噶遜外、有故突厥苾伽可汗碑及回鶻可汗碑、此城當是突厥・回鶻故都、故得窩魯朶之名矣。此城遼時謂之古回鶻城〔太祖紀〕又謂之卜古罕城〔天祚紀、耶律大石遺回紇五畢勤哥書〕以回鶻始祖之名、名之也。元人謂之苾伽可汗城〔雙溪醉隱集一〕以突厥末王之名、名之也。耶律雙溪謂、和林西北七十里有苾伽可汗宮城、今此城正在額爾德尼昭〔古和林城〕西北約七十里、與張氏紀行説亦合。然在元世通謂之合剌八剌合孫、元史世祖紀丙辰冬、駐於合剌八剌合孫之地、合剌言黑、八剌合孫言城、故又謂之黑城。元史昔都思傳、至元十四年從諸王伯木児追擊、折児凹台岳不思児等於黑城、哈剌火林之地檎之、哈剌火林即和林、則黑城即哈剌八児合孫明矣。其雅言則謂之龍庭。太祖時之龍庭、自指東方駐蹕之所、而太宗紀之龍庭當即指之、雙溪醉隱其一、有取和林下龍庭二詩、自注云、龍庭和林西北地也。亦當謂此城、此城距喀魯哈河頗遠、以當此記之西故城殊覚唐突、此兩書之西故城、不能遽視爲一者也。然古書所載此地、契丹故城惟有此二城、或紀行記東故城、時有誤而此記、記西故城、則由行文之便、并叙之亦未可知、但就兩書本文言、則固不能胸合無間也。

〔口訳〕故城の遺址が無くても、その西南に達拉爾和哈剌巴爾噶遜城が在って、單に亦哈剌巴爾噶遜と稱している。蓋(けだし)即ち遼の斡窩魯朶城である。遼史の蕭圖玉伝に開泰元年（A.D.一〇一二）石烈太師阿里底がその節度使を殺し「西の方窩魯朶城に逃走した。蓋(けだし)昔の所謂龍庭單于城である。已(すで)にして阻卜復叛(またたも)いて圖玉を可敦城に包囲した。その勢力が甚だ盛んだったので、圖玉は諸軍をして一齊に射撃して撃退させた。そして窩魯朶城に駐屯した。このことは遼代漠北の可敦城の西に窩魯朶城があったことになる。窩魯朶は契丹語で宮庭である。哈剌巴爾噶遜城の城外に故突厥苾伽可汗碑及び回鶻可汗碑があって、この城が当に突厥・回鶻の故都に該当し、

故に窩魯朶の名を得たに違いない、この城は遼代に古回鶻城と謂った。〔太祖紀〕又これを卜古罕城と云った。〔天祚紀に耶律大石が回紇王畢勤哥に遺わした書〕回鶻始祖の名で之を名付けたわけである。元の人は之を苾伽可汗城と云った〔雙溪醉隠集巻一〕突厥の最後の王の名でこれを名付けたわけである。耶律雙溪は和林の西北七十里に苾伽可汗の宮城があると云ったが、今この城が正に額爾徳尼昭〔古代の和林城〕西北七十里に在る。張徳輝の邊堠紀行の説と合致する。然し元時代を通じてこれを合剌八剌合孫と云っていた。元史の世祖紀丙辰（A.D.一二五六）冬、合剌八剌合孫の地に駐留したとあるが、合剌は黒を意味し八剌合孫は城のことを云っているので、故に又黒城とも云う。元史の巻百三十三、列傳二〇昔都児列伝に、至元十四年（A.D.一二七七）諸王、伯木児に従軍して、折児凹台岳・不思児らを黒城哈剌火林の地に追撃して、彼らを擒にしたとある。哈剌火林は即ち和林、則黒城が即ち哈剌八児合孫であることが明白である。その雅言が則ち龍庭で、太祖の時の龍庭は自ら東方の駐蹕の所を指し、太宗紀に見える龍庭は当にこの雙溪醉隠集巻一に、和林下龍庭の二詩に取材した所で、自注に龍庭は和林の西北の地と云っているのを指してこの城を云っている。この城は喀魯哈河を距っていること頗ろ遠い所にある、だから当然この西遊記の西故城に当てるのは、殊に唐突のように見えるのだが。この西遊記、邊堠紀行の両書の西故城は、遽に同一と見ることが出来ない筈だ。然し古書の記載するこの地の契丹古城は、惟にこの二城があるので、紀行が東故城と記したのも誤りで、西遊記が西故城を記したのも、文章を行る綾で、叙述の本当の所は判らないと云った所か。但両書の本文に言う所は、元来吻合一致する筈のないものかも知れない。

〔ブレッドシュナイダー訳注〕

さらに進んで、四驛遞を経過した後、北西方向に吾々は一つの河を渡過すると、その向う岸に牧草が豊かに生え、水の潤沢な平原がひろがっていた。この平原は四周絵画的な美しさを示す渓谷をともなった山脈に囲まれ

ている。（その河の？）東西に古代都市の址蹟を目撃した。吾々はこの故城址の街路を確認できた程である。この都市が契丹人たちによって築造されたという伝承があるのである。事実、その地面に煉瓦〔郎案：原文には古瓦とある〕を見出した程で、契丹文字が刻まれていたのである。この都市は恐らく新しく興起した金王朝に服従することを好まないで、移住、植民してきたこれら契丹族の武人たちによって造られたものであろうと思われる。（注127此処で吾々は張徳輝の旅行記（注104を参照のこと）の記事を引用してみたい。彼張氏は Kerulun ケルルン河岸から西方に向って、長春と全く同じ道筋を通っていったと考えられる。この張氏は魚児泊（注114を参照のこと）をはなれて後に、北西方、二〇駅を経て行き、そこで一つの河に到達する。その河を北方の人びと（蒙古人）は喀魯哈河（Kerulun ケルルン河）と呼んでいる。そこで更に張氏の紀行文は次のように続いている。――即ち、「このケルルン河の両岸には楊柳がゆたかに繁っている。河は東流していて、非常に流れが早い。その地の住民たちは三～四フィートに達する大きさの魚がいると云っている。併しながら、春季も夏季、秋季にもこの魚を捕えられないと云う。唯だ冬季には河表の氷に孔を穿って、それを釣ることが出来る。この河に沿って蒙古人と中国人とが雑居している。そこには粘土を塗った屋根をもつ哀れな小屋も存在する。その地は多く耕作されていても、唯わずかに大麻と小麦とを見るばかりである。その河の北岸には黒疏悃と呼ばれる大きな山がある。若し、或る距離をはなれた処からその山を見ると、その山に稠密な森林があるように見える。併しながら近付いて見ると、この森林は灰黒の石からなっているように変貌する、というのも、こうした色は山脈にかかる常時の霧のなせる技であることがわかる。」と云っている。

Palladius パラディウスは、この山と現在において Tono トノと呼ばれている山と、同一のものであるという正しい見解に達している。北方から走っている kerulun 喀魯哈河が丁度この山脈の辺りで東流迂折しているので、半円形をなしている。Gerbillon ゲルビロンは一六九六年にこのトノ山脈を目睹していた。

吾が長春眞人の旅行記は次いで「山脈の南斜面からわたくしは南西に向い九驛を過ぎた。そして他の河の畔にやってきた。その広さや深さの点で、キルルン喀魯哈河の三分の一の規模に等しい。此処には亦大きな魚がいて、全く同じ冬季、氷に孔をあけるやり方で捕える。この河は西流し非常に流れが速いものだから、それを渡河するのが不可能な程である。北方の言語（蒙古語）では Hun Du-la 即ち〝野うさぎ〟を意味する言葉で呼ばれている」と云っている。

蒙古語で Tulai が元来「野うさぎ」を意味している。此處では疑いなく Tola トラ河がそうした野うさぎの意味を持ち、南からやってきて Urga ウルガに行こうとする隊商は、この河を越えなくてはならない。けれど長春は明らかにこの河を渡っていない。この河の南岸沿いに進んでいる。トラ河は Urga から南西方向に向ってほゞ百哩流れており、そこで北方に方向を転じている。Tu-la ないし Tu-wu-la 土拉河は屢々「元史」のなかに言及されている。Rashid-ed-din ラシッド・エッ・ディンはそれを Tula 時として Tura（土拉河）と呼んでいる。河の名前の先頭に付けられた冠字、渾に関しては注記308を参照のこと――〔郎案、此処に注記308を引用すべし、即ち、「Hun-muren 即ち渾河のこと、蒙古語の Hun は中国語の場合と同じように、泥の多い混沌した様子を意味している。他の中国人旅行家は長春とも同時代の人であるが、この土拉河を渾濁刺河と呼んでいる。（それについては注記127を参照せよ）この『西使記』の注解著者は中世の旅行家たちの云う Hum muren（渾河）を吾々の今日云う Dsapkhan 河と同一であることに同意している。一八七〇年の七月に、Matussoffsky はこの河の南岸に沿って旅行し、その中途で七〇哩以上も赴いたと云う。彼の云う処によると（Potanin ポターニンの「蒙古志」によると第一巻三六七頁に引用されている）この河は多くの支流をもっている由である。さらにその水深は一般的に深く、浅瀬はそんなに多くない。この河は急流であり時として近辺の低地に洪水をおこす。併し、渇水期であったと見えて、Dsapkhan 河水は一般にすくなく、六～七フィートの深さに達するこ

とは殆んどないと云っている。一方河中は80～140フィートの間である。ポターニンによると（b.c.222）一八七七年七月にDsapkhan河上流を渡ったが、その地域が浅瀬であったと云っている。中国の旅行家たちの云う処のHu muren渾刺河と、Dsapkhan河とが同一の河川であるとする考えは、疑いがないわけではない。と云うのは、長春はこの渾刺河を渡って數日ならずして、Ulungur河に到達したと述べているからである。この渾濁刺河とDsapkhan河との間の距離は、一直線で二三〇英哩程あって、しかも一列縦隊でなくては進めぬ困難な隘路をともなった、アルタイ山脈峠を越えなくてはならなかった。勿論長春はこの山脈のすべてについて語っていない。恐らく長春云う処の渾刺河は黒イルティシュ河を指しているのだろうが、この河がDsapkhan河よりも遙かに重要な河であるように思われる。」〕

さて亦張徳輝はつゞけて云っている。即ち「わたくしは契丹人によって造營された古城市（これは〝木造都市〟としてSchuylerスクィラー氏が繰り返して訳している名前のものでなく）のほとりの一駅遞まで、トラ河を下って行った。この故城市は四周約三里ほどあり、背後に山を背負っているし前に河を臨んでいる。そして此の処から河は北に向って迂廻している。」と、その後旅行者は北西方向に進み、吾惧竭脳児と呼ばれる湖（蒙古の現代地図に云うUgei norに当ると思われる）に到し、そこから和林（Karakorum注記304を参照）まで車道が通じている。このカラコルムの町は湖沼から南西約百里の地点に位置している。彼張徳輝がカラコルムを訪れたとは思われず、むしろ現代の蒙古の首都が建っている所で河を渡ったに違いない。張氏は更に語を継いで云っている、即ち「このUgei norの湖から直接西すると、小さな故城址があり、これも亦契丹人によって築かれた城市であった。この故市の西には広い溪谷が開けている。その四周は百里程もある。その四辺ぐるり山脈が取り囲んでいる。……この谷の中央を和林河（オルホン河）が流れている。この場から張徳輝はクビライ汗の夏の離宮に赴いた。その離宮はタミ河（タミル河）を越えた処にあって幾分Khangai山脈に

入っている。

こうした張徳輝の紀行記から本題に立ち帰って、長春の旅行に戻ろう。絵画的な山並に囲まれた平野の拡がる処で河を越えたとある、この河は何処にあるのだろうか。しかもそこには契丹人の造立したという城址があるというではないか。これらの特殊性が張徳輝の和林河（オルホン河）が流れている平野について与えている記述に、ひどく似通っていたことも否定すべくもないのであり、またその地こそ、張氏が契丹人の建てた都市として注目しているわけだ。併しながら、張氏は亦トラ河の畔りの契丹人の故城址についても言及していて、Palladius パラディウスも長春がこのトラ河を渡ったと考えているようだ。けれども亦その当時にあって旅行者が、このトラ河を二度渡るを余儀なくされていたらしいなどとは考えられなかろう。wylie ワィリー氏（注記124を参照）と Paderin パデラン氏は、契丹人の故城市に対して Karuha カルハ河にあるものと見做し、このカルハ河はトラ河の支流なのだとするのである。こうしてみると長春眞人の足跡を厳密に辿ることは困難である。

此の地域は過去二〇年間ロシア官憲らによって繰り返えし旅行せられていたことを物語っている。というのは Urga ウルガから、Uliassutai ウリアスッタイ迄の眞直な道は、上に言及した Ugei nor ウゲイ湖の傍を通り、オルホン河とセレンガ河の他の支流とを渡っている。一八七三年、M.Paderin パデラン氏は、古代カラコルムの遺跡であろうと信じてきた処を発見した。パデラン氏の報告の英訳版はユール大佐によって注解されたが一八七四年に「地理学雑誌、Geographical Magazine」に見出される。今から略十年程前に、Pozdoneyeff ポズドニエフ教授はオルホン河溪谷を訪ねてもいた。それは彼の "Mongol annals Erdeniin" 一八八三年版を参照されたい。一八七九年に Pevtsoff ペヴツオフ大佐は Urga ウルガから Uliassutai ウリアスッタイ迄旅行していた。そして一八八三年に蒙古旅行についての興味深い本を刊行した。そして現存する限り最上の蒙古

地方のすぐれた地図をそれに添附したのだった。

契丹に関しては注記22を参照のこと。Palladius パラディウスはこの問題について次のように云っている。即ち「十、十一世紀の契丹人たちは、北部において中国が接する全ての地方に支配権の痕を残していた。契丹人の建てた都市や城塞の遺構は、トラ河の畔りのみならず、ケルルン河、さらには満洲域に迄及んで目睹できる。長春によって触れられた契丹文字について、漢字を基礎に造られたものであった。契丹文字の用例が「書史會要」のなかに見えている。

〔本文〕又言、西南至尋思干城（原無城字據蔵本増）、萬里外、回紇國最佳處、契丹都焉。歴七帝。

〔口訳〕また言う。西南に向って尋思干（サマルカンド）城に到達するのであると。（原本に城の字がなかったが、蔵本によって加えた）。一万里以上もあって、ウイグル人たちの国のなかで最も佳麗な所であり、契丹の都でもあって七人の皇帝の居所でもあった。

〔王観堂先生注〕此因契丹故城而旁記之。舊史不記西遼都尋思干事、然下文云、邪迷思干大城　大石有國、時名爲河中府、湛然居士文集四、再用韻紀西游事詩、注、西域尋思干城、西遼目爲河中府、攷契丹舊制、惟五京始有府名、尋斯干稱河中府、則大石未都虎思斡耳朶時、必先都尋斯干、後因建爲陪都耳。又遼史天祚紀大石傳、子至孫而亡。加以兩女主而僅五帝。此云歴七帝、乃傳聞之誤。

〔口訳〕この契丹の故城址に因なんで、そうしてかたがた尋思干（サマルカンド）城を記入したのであろう。舊史による限りでは、西遼の都で尋思干のことは記載していない。けれども下に引用する文によると、邪迷思干大城は耶律大石が西遼を建てた時に名づけて河中府と云っている。湛然居士文集四巻に、再び韻紀西遊事詩の注に、西域の尋思干城とあり、西遼は目して河中府となすといっている。契丹舊制を考攷してみるのに、思うに五京始めは夫々府名が有って、尋斯干を河中府と稱していたらしい。そこで耶律大石か、まだ都を虎思斡耳朶に定めない時、必

ず先都の尋斯干があり、後首都虎思斡耳朶を造営をするによって陪都としたのでだろう。又、遼史の天祚紀の大石伝に「子より孫に至って亡び、加えるに二人の女后をもってわづかに五帝」とあるだけである。此処に云う七帝を歴(けみ)していると云うのは、やはり傳聞による誤りであろう。〔郎案、尋思干城について、百衲本「遼史」三〇、本紀第三十、天祚皇帝四、保大三年（A.D.一一二三）の條に「耶津大石は世々号して西遼大石と云い、字を重徳、太祖八代の孫に当っていた。」そして、「過ぐる所で敵には勝を収め、降伏する者を安度した。行軍万里、降伏する者数ヶ国、獲得した駞馬、牛、羊、財物勝げて計算できない程だった。軍の勢力は日に盛んとなり、鋭気は日倍に昴った。尋思干(サマルカンド)に到り、西域諸国が兵を挙げて十万騎に及んだ。忽児珊が来襲し拒いたので、両軍相対侍すること二里許‖であった。（中略）味方の三軍が同時に進撃したので、忽児珊は大敗し、死体が数十里に曝された。そこで軍勢が尋思干に駐留すること九十日に及んだ。回回(イスラーム)教の国王が来降し方物を貢献した。又西して起児漫に至り、文武百官が大石を冊立して皇帝とした。甲辰年（保大四年、A.D.一一二四年）二月五日即位した。年三十八葛児罕と号し、天祐皇帝と申し上げる。改元して延慶元年とした。（中略）延慶三年（A.D.一一二七）師軍を従えて東帰し、馬行二十日にして善地を得たので、遂に都城を建てて、虎思斡耳朶と名付け、延慶を改元して康国元年とした。」とある。尋思干城は戦略上の重要據点として、遼史の天祚紀末尾に二度に渉って記述されて居るが、首都は虎思斡耳朶としている。湛然居士文集巻四に「再び韻を用いて「西遊記」に記すこと」とあって、「河中花木蔽春山」の河中に注記して「西域の尋思干城を西遼では河中府の名としている。考えてみるに斜米思干城（サマルカンド城）はアルタイ山脈の北に位置する」とある。この耶律楚材の詩は太祖成吉思汗に召されてサマルカンドを訪れた折の感興を詠じたもので、今、それを掲げる。「サマルカンド佳い所(とこ)、春の花盛り、風に浮かれて名馬を乗廻し、美瓜を貯え歳末まで喰(くら)い、秋の果物春まで残る。アーモンド酒を嘗めつゝ値ぶみして、葡萄酒を密造してこっそり楽しむ。何時も身の才覚なしを歎きつつ、幸

福は身近にあるものよ。こうした異域に居ながら御馳走いっぱい。」（拙訳）尚楚材の「西遊録」（余の架蔵にかかるものは昭和二年、京洛神田信暢先生の刊行による活字冊子）の尋思干城附近の記事を抄出する。「訛打利の西千里余の所に大都会がある。名は尋思干と云うが、その尋思干は西域の人たちの云う意味は肥沃である。その土地が肥饒なので名前としている。西遼ではこの城のことを河中府と云っているのは、河に臨んでいるからである由。尋思干は大変富み榮え庶民も金銅の銭貨を用い、孔が開いていない銭で、どんな物でも銭で売買している。都市の城壁は数十里あって園林からなっている。各家毎に園庭があり、湧泉流水の円い池や四角の沼をもち、柳柏が生い繁り、桃や杏の果樹が実を結んでいる。瓜も大きなものは馬の首程もあって、内容が狐が八疋も入る程だ云々」と。〕

〔ブレッドシュナイダー氏訳注〕

尋思干（samarkand 注記29を参照）の都市は南西行くこと一萬里以上の処にある由。この都城は回紇（Moham-medans 回教徒たち〔郎案：回紇はウイグル人である〕）の国のなかで最上の佳い場所に建てられていた。そして当時契丹王朝の首都でもあり、そこに七人の帝王が君臨していたと云う。（注記128　ペルシアの歴史地理学者たちによると、Karakhitai 黒契丹は屢々 Khovarezm と戦争していた。そして暫くの間サマルカンドを占有していたらしい。）〔郎案、此処にカラキタイとホワレズムとの戦いについて、W.Barthold ; Turkestan down to the Mongol Inversion, P.364～6. The Qarā khi.tāys and the khwārazm-shāhs より引用訳述すべし即ち「サマルカンドの Othmān オットマーンは、Gurgānj で Muhammad と関係するようになった。それはグルガーンジュで彼オトマーンはホワラズムの王の娘と結婚するにいたったからである。その婚礼の宴は永い間続いて、オトマーンがサマルカンドに戻ろうと欲した折りに、Turkān-Khātūn はトルコ人の習慣によって、彼の義父の家に丸一年留まるべきだと要請した。そこで余儀なく服従しなくてはならなかった。

一二一一年の春に、黒契丹人に対する戰いが布告された時、ムハマッドは唯一人サマルカンドに留っていて、間もなく汗の不在が人民たちの武装にすでに役立っており、さらにホワーラズムの王に対する信頼を昂めていることを観て取ったのだった。そうした四周の情況に従ってモハメッドは、オトマーンと若い彼の妻とがサマルカンドに派遣されるべきだと命じた。一方オトマーンは自らの身分に附せられた全てのものを受け入れて、彼の弟をホレズミアに留め残した。ムハマッドは首都に帰った。Ibn al-Athīr によるとホワーラズム王の代表者の一人が、オトマーンと一緒にサマルカンドに送られ、そして以前グールカーンの代表者がそうであったように、全く同じ権利を享受し得たのだった。

Juwaynī はこの條りの文で、この年の軍事行動について何も語っていない。そのためにサマルカンドの統治者 Burtana の裏切り行為の第一幕に与えられた記述のなかに、どれ程の眞実があるのかどうか、決定するのは難しい程である。Jūzjānī だけが四十万人(?)の軍隊の支援の元に、一二一一年ないし一二一二年にカラ・キタイ軍に対する他の勝利を得たこととともに、ムハマッドの在り方に信頼を置いている。

サマルカンドに帰還した後に、オトマーンはホレズミア解放者たちの行為に非常にいら〳〵させられたので、彼はカラ・キタイの人びととの結び付きを更に新たにしたのだった。これはさらに注目すべきことなのだが、一二一一年は全体としてグールカーンにとって運の好いわけではなかった。というのも、セミレチエの北部に、蒙古の分裂がみられ、Qūbilāy-noyon の指揮の元に、その結果としてこの国の王子がはっきりと、グールカーンの主権を再布告して、カラ・キタイの司令官、支配者を殺したのだった。それにも不拘、オトマーンは不信心者の前任王伯に代って、彼の信奉するイスラーム解放者である侯伯を交代させることに決した。その出来事の流れが示すように、彼オトマーンは彼の支配者主長と完全に同調して行動していたのである。オトマーンがホワーラズムの主長の娘に対してよからぬ振舞いをしたし、また明らかにカラキタイの王妃を好んで選んだこ

とを示す振舞をしているといった報告が、間もなくムハマッドに達したのであった。ムハマッドの娘はそのため彼女の対敵者である、カラキタイの王妃に遠慮するのを余儀なくされた。一二一二年になって、遂にサマルカンドの住民たちはオトマーンの命令に反旗をひるがえすべく立上って、しかもサルマカンドに居住していたホレズム系の人びとを、皆殺しにしたことが知られるようになった。ホワーラズム主長の娘は城塞のなかで自ら閉じこもって、またオトマーンも彼女を許すことに同意するのが難かしくなった。イブン・アル・アティールは次のように云っている。「ホレズム住民の屍体は半分に切断され、細切れにされて市場に吊り下げられ、丁度肉屋が食肉を店先に吊しているようだった」と。こうしたことから、ホレズム人たちは彼らの迫害者たちに対して、如何に大きな憎悪を懐いていたかを示しているように思われる。勿論この大虐殺の報知は、スルタンをしてサマルカンドに進撃せしめる原因となった。イブン・アル・アティールによると、ムハマッドは始めにホレズミアに住む全ての異邦人を殺そうと欲した、そして後には全サマルカンド人たちをも亦。併し、Turkān-Khātūn により説得されて思い留った。サマルカンドは間もなく降伏するを余儀なくされた。ジュワイニーは、オトマーンがホワーラズム酋長の前に、劔と（經帷子の）衣の一裂をもち、完全な恭順を身を以って示しながら姿を現わしたと云っている。他方、イブン・アル・アティールによると、彼は自ら城塞に立籠って矢を放ち、町そのものが陥落した後も尚、依然としてホレズムの住民により城塞が守られていた。ムハマッドの許しを乞う歎願も拒絶されて、その城塞が陥落した後に、ホワーラムズ主長の前に捕われて引出されたのだった。町は三日の間略奪にまかされた。たゞそのほんの一角異邦人たちの居住していた処が掠奪からまぬがれた。イブン・アル・アティールは虐殺された住民を二十万人と推定している。ジュワイニィーのより妥当と思われる數は一万人で、全て皆殺しにされたと考えている。その後、ムハッマッドは sayyids, imāms, ulāma の調定、あっせんを聴き入れて、その虐殺を減じやめるよう命じた。けれど、ホワーラズム主長はオトマーン

を恕そうと欲したのだが、併し彼の娘 Khān-sultān は彼女の夫を恕すことに同意しなかったらしい。そしてカーンは次の夜に死刑が執行せられた。一方ムハッマドはフェルガナとトルキスターンの主長たちに使節を派遣して、服従を要求した。そしてその派遣使節の一部はカラ・キタイ人たちの動静を見守るために急遽派遣され、さらに彼らが反逆することを許さなかった。サマルカンドは特にフワレーズム・シャーの首都となり、彼はその地に新しい回教寺院を造立し、また〝堂々とした大建築〟恐らくは王宮をも構築し始めた。」と。〕

〔本文〕六月十三日至長松嶺後宿、松栝森森、干雲蔽日多生山陰、澗道間山陽極少、十四日過山、渡淺河

〔口訳〕六月十三日に長松嶺に到達した後宿泊した。松や柏が折り重なって繁り、雲が太陽を覆ったので沢山の山陰（やまかげ）が生じて見えた。谷川の道は山の南側を通ることが極めて少いので暗かった。十四日に長松嶺の山並みを通過して浅瀬の河を渡った。

〔王観堂先生注〕即顎爾昆河、丁氏謙引元史國語解、顎爾昆淺也

〔口訳〕此処で云っているのはすなわち鄂爾昆河を指しているのであって、丁氏謙〔郎案、この丁氏・謙、すなわち清朝の丁謙を云うか。「中國叢書綜録」2、子目、史部地理類に「元長春眞人西游記地理攷證一巻、（清）丁謙撰、浙江圖書館叢書第二集」とある。余この浙江圖書館叢書を架藏して居ないので検索できない。「元史國語解」なる書物は「中國叢書綜録」中に著目していない。未詳〕の元史國語解を引用してみると、鄂爾昆河は浅い川だといっている。

〔ブレットシュナイダー氏の訳注〕一二二一年の六月十三日（実は吾々の暦では七月三日に当るのだが）長春らは長松嶺（高い松の簇生している山という意味）と呼ばれる山を通過し、その峠の向う側に止宿した。そこは多くの松が群生し、栝樹も生えていた。（注139を参照「この栝樹は唐朝に造られた辞書によると松柏科の針葉樹で、柏 Juniperus と同じ木である。けれども此処では恐らくから松として理解されていたと思われる」）

〔郎案「諸橋漢和辞典」によると、「栝テン　クワツ、びやくしん、檜に同じ、〔廣韻〕檜、木名、柏葉松身、栝、上同〔書、禹貢〕柂幹栝柏〔孔疎、會稽記〕松栝楓栢、摧幹竦條、栝柏（クワイバイ）、二木の名びゃくしんとこのでかしわ」とあり〕これらの松柏栃樹が雲に接するくらい高く聳え育っているので、その稠密さで陽光が地面に迄達しない程であった。とくにこれらの森は山の北面傾斜した溪谷に主として群生している。だから南面した傾斜地は僅かしか望まれない程である。（注129 Przewalsky プルゼワルスキーの「蒙古誌」第一巻七頁、Pevtsoff、ペヴツォフ、Gerbillon ゲルビロン氏らは蒙古地の山脈についてこれと全く同じ観察をしている。Kostenko コステンコ氏のトルキスタン誌第一巻九五頁に「天山山脈において森林は亦唯だ北斜面側にのみ見られ、一方その南斜面は樹木が生えていない。この注目すべき事実は亦 Elias エリアス氏（一二九頁の注）に蒙古地方の山脈の特色」として言及せられている。）十四日（七月四日）にわたくしたちは浅瀬の河を渡り、そして一夜を平地で止宿したのだった。

〔本文〕天極寒、雖壯者不可當、是夕宿平地、十五日曉起、環帳皆薄冰。十七日宿嶺西、時初伏矣。朝莫亦有冰霜已三降、河水有澌冷如嚴冬。土人云、常年五六月有雪、今歲幸晴暖。師易其名曰大寒嶺、凡遇雨多雹、山路盤曲、西北約（蔵本作且）百餘里、既而復西北、始見平地、有石河、長五十餘里。

〔口訳〕天候は極めて寒気厳しく、血気盛んな者でも耐えられない程だった。この夕暮に平地に宿営した。十五日曉に起きてみると、天幕の周りに全て薄氷が張っていた。十七日長松嶺の西側に宿泊したが、時候が夏の初であったにもかかわらず、朝暮に氷や霜がすでに三度程降りた程で、河の水も冷たくて厳冬のようであった。土地の人たちの云う所では「例年の五、六月にも雪があるのですが、今年は幸いにも晴れて暖いのです」とあった。長春師は長松嶺の名を変えて大寒嶺と名付けた程である。凡そ雨が降るかと思うと多く雹が降り、山道は曲りくねって居り、その道を西北に百余里進み、更に而西北の方向に辿って行くと、始めて平地を見た。そこ

に石河原の河があって長さが五十余里に及んだ。

〔王観堂先生注〕當即博爾哈爾台河

〔口訳〕これはまさに博爾哈爾台河（Borgartai）にあたる筈であろう。

〔ブレッドシュナイダー氏訳注〕天候はひどく寒く、翌朝には水面に薄氷が張っているのがみられた。〔郎案、この訳は原文に忠実なれば、「天幕のぐるり周辺に薄氷の張るのが見られた」とすべきなるべし。〕土着の人たちは「一般に五、六月頃にはこの地方に雪が降り始めるのですが、幸いなことに、今年は例年程寒くはありません」と云ったので、長春眞人はその山の名前を変えて大寒嶺（大変寒い山）と変更して呼んだのだった。この地の雨は常に雹をともなって降る。（注130カルピニー、旅行記六一〇、〔郎案、原文にラテン文を掲げるが、護雅夫氏沢注「カルピニ・ルブルク、中央アジア、蒙古旅行記」（昭和四十年四月桃源社刊）の第一章、タルタル人の土地、その位置、地勢、気候の條に次の如く記している。「雨は、冬には全然降りませんが、夏になるとしばしば降ります。もっとも、それとてごくわずかで、塵埃や草の根もほとんどしめらぬということもあります。また、大変な雹がしばしば降ります。皇帝がえらばれて、その即位式があげられることになっていた際に、わたくしどもはその本營（オルダ）のなかにおりましたが、そのとき猛烈な雹が降ってきて、それが急に溶けたためーわたくしどもにははっきりわかったのですがーその宿營にいた一六〇人以上もの人間が溺れ、沢山の住居、多くの財産がおし流されたほどです。それからまた、夏に急に酷暑になるかと思うと、突然嚴寒がおとずれます。」（前掲書、六頁）とある。」）さらに南西に向って約百里以上も行くと、山脈の重疊する地方を通り、それは風の強い道を辿ったわけです。そこには石のごろ〳〵した河があり、長さは五十里以上に渉っていて、その河堤はほゞ百フィートの長さからなっている。

〔本文〕岸深十餘丈、其水清冷可愛、聲如鳴玉。峭壁之間有大蔥、高三四尺、澗上有松高十餘丈、西山連延、上

有喬松鬱然。行五六日、峯回路轉、林巒秀茂、下有溪水注焉。平地皆松樺雜木、若有人烟状、尋登高嶺、勢若長虹、壁立千仞、俯視海子、淵深恐人。

〔口訳〕河岸の深さは十余丈（約四メートル）あって、その水は冷たく澄んで居り、見て佳し飲んで良しの風情があった。河の流れの響は玉を転すようである。高い絶壁の間に大きな韮が高さ三・四尺（約一メートル）程のものが生えて居て、谷川の頂上に松が高さ十余丈程聳えている。西側の山脈が連綿として延び、頂上に聳え立つ松が鬱蒼と繁っている。こうして行くこと五・六日、峯を回る道があちこち転廻し、緑なす林が生い繁っている。その叢の下に谷川の水が流れ注いでいる。平地は松や樺の樹々が他の雜木と共に繁っているので、人家が密集しているように思われる程だ。次いで高い嶺に登ってみると、千仞の切り立った壁に懸った長い虹のようだし、下を向いて海子（こすい）を見ると、深い渕が臨まれて人を恐ろしがらせる。

〔王観堂先生注〕此海子、疑即集爾瑪台河相連之察罕泊也、雙溪醉隱集五、金蓮花甸詩注、和林西百餘里、有金蓮花甸金河、界其中東滙爲龍渦、陰嵓千尺、松石鬰疊、俯視龍渦環繞平野、是僕平時游息漁獵之所也。按金河疑指集爾馬台河上源。龍渦疑即海子。

〔口訳〕此の海子とあるを疑ってみると、すなわち集爾瑪台河が合流して相連っている、察罕泊がそれだろうと思われる。耶律鑄の雙溪醉隱集巻五にある金蓮花甸詩の注によると、「和林の西のかた百餘里にあたる所に、金蓮花甸、金河があり、そのうち東の水の集る所を龍渦と云っている。陰になった岩崖が千尺ほどあり、松や巖石の高く聳って重疊としていて、龍渦の地点から俯瞰すると、平野部をゆたかに環流していて、この平野こそわたくしが平和な折に遊行休息したり漁獵を楽しんだ所である。」とある。〔郎案、耶律鑄撰の「雙溪醉隱集」巻五（余の架藏する遼海叢書、第三册所収）「金蓮花甸（注、文田案ずるに、張徳輝の邊堠紀行に云っている。吾誤（悞）竭惱児は即ち大澤花泊で廣さ六・七十里、泊の南より而して西すると道が分れて和林に入る。大澤

を相去ること約百余里、此れを勘案するのに金蓮花甸であろう。）「金蓮花甸は涌いて金河となる。金沙の畔りを流れ巡って錦を織り成した波がくだける。かつての榮華の時の遊宴の地を思うてみれば、兵乱に抗して来り龍渦を俯瞰しようとは。」その注記全文を王観堂先生が引用している。」金河を考がえてみるのに集爾馬台河の上源の地を指しているのではないかと疑われるが、龍渦こそこの文中の「海子」に当るのではないかと思っている。

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕

その河の水は清冽でまた冷たい。そして河の響が玉をさら〳〵鳴らすような音を発していた。そのそばだった崖に長春らは大きな種類の葱韮の類をみたのだが、三～四フィートの大きさに達している（注131ポターニンの報告するところによると、この大葱は Allium fistulosum であるらしい）。この溪谷には亦大きな松樹が生えており、高さは百フィートを越えるものがある。連なる山脈は西の方に向って連鎖状にのび拡がっていて、その全てにたけの高い松樹が覆っている。こうした山中を吾々長春らは五～六日の間旅をしたわけだが、その山道はその尾根をぐる〳〵迂曲している。その眺めはすばらしく雄大で、岩からなる斜面は神々しい森林により、また覆われてい、眼下に深渕をたゝえた河が流れている。平坦な場処には松と樺の木が一緒に群生している。そこで長春らは大きな虹にも見まごう高い山を登り、何千フィートの深さのある溪間を俯瞰する。それは深々と湖沼を俯瞰していると錯覚する程であった。（注132長春が Kerulun ケルルン河の河床をはなれた後に辿って行った道筋を、確めることは不可能であるけれども、併しながら、オルコン河やタルミ河で潤された山岳地方を渡って行ったことは疑いないようである。そのなかにはセレンガ河の他の支流も含まれている。恐らく長春は Urga ウルガから Ulassutai ウリアスッタイ迄、前に言及した眞直な道によりその一部分を進行していったらしい。そしてこれらの諸河を渡って行ったと考えられる。その幾分か後に長春は亦、北西から南東にかけ

て伸びている山岳帯の高峰を越していったらしい。Dsabkhan 河の盆地と、アルタイの東にある湖沼とセレンガ河盆地とを区分する、水源地をなしている処などを越えたらしい。この連鎖峰は蒙古人に Khangai といった名前で知られている。中国人旅行家によりこの過酷な山脈についての記述は、蒙古人の云うカンガイに充分よく適合するし、この山は或る所では可成りの高さに達している。一八六八年の七月の終りに Uliassutai を訪れた Shishmareff シシュマレフは、この山脈の西斜面で五、四〇〇フィートの海抜標高に位置していたことを知り、その頂上の一つが雪に覆われているのを目睹した（Peterm. Geogr, mitth. 1870, p.116）、ウリアスッタイ山の北東側で一〇、〇〇〇フィートに近い標高の狭い谷道があると、ポターニンの地図に注記されている。この著名な西蒙古地帯の探検家は、カンガイ山を越えて長春の旅行の足跡を辿ろうと試みたのだった。（Potanin's "Mongolia", p.235 以下）そして中国人旅行家長春が現在のウリアスッタイ山の近く迄、そこから来ていたのだとする結論に到達したのだった。

この Khangai は古代名である。沆海山は「元史」、（A.D. 一二〇四年）、即位前紀の処に、成吉思汗と Noiman（乃蠻）族との戰斗に関聯して言及せられている。〔郎案、百衲本「元史」一、本紀巻第一、太祖、甲子（A.D. 一二〇四年）、「帝は帖麥該川に大會を催して、乃蠻を討伐することを議した。群臣たちは現在春に当り馬が瘦せているので、秋を待って出陣するのが宜しかろうと言上した。皇帝の弟斡赤斤の云うに、事を処するに当って早く断行すべきで馬が瘦せているなど論外と主張した。（中略）帝が悦んで云うに、こうした軍勢で戰ったなら敗ける筈はないとあった。遂に兵を進めて乃蠻を伐つこととした。兵を建忒該山に駐留させ、先ず虎必来・哲別二人を先鋒とした。大陽罕は按臺から沆海山に天幕を張った。云々」とある沆海山がそれである。」この同じ名の山は元朝、世祖至元二十六年（一二八九年）の元史にクビライ汗と Kaidu（海都）との戰いがあった所として出ている〔郎案、百衲本、「元史」十五、本紀巻第十五、世祖十二、至元二十六年「秋七月戊寅朔、

海都の兵邊境を侵犯した。帝親しく征伐した。」とあり、沆海山の地名は検出されない。未詳〕。全く同じ機会にRasbid-edldinが（ドーソの「蒙古史」巻二海都四六一頁）にクビライとカイドゥの主権がヤンガイ（沆海）山脈とゴビ沙漠とで領地が区分されている由を注記している。〔郎案、ドーソン著、佐口透訳注「モンゴル帝国史」3、第三篇、第三章、將軍バヤン、カイドゥに向う、に「カイドゥはなおもクビライにとって恐るべき敵であった。杭海山（ヤンガイ）〔郎案、佐口氏は沆の代りに杭の字を用いる〕とゴビ沙漠とは両帝王の領土を分ち、この沙漠の西辺にはクビライの七部隊の軍隊が配置されていて、しばしばカイドゥの軍隊と戰闘を交えた。（注1、「ジャミ・ウツ・タワーリーフ」）皇帝はカイドゥの敵対行爲に絶えずさらされている辺境上の安全を図るために、バヤンをカラコルムの總督（知枢密院事）に任命し、全権を授けた。〔郎案、百衲本「元史」十五、本紀巻第十五、世祖至元二十六年二月辛亥朔、丁卯（十七日）「上都に行幸して、中書右丞相伯顔に知樞密院事に任じ、北邊諸軍成都管軍萬戸とした」とあるのに当る〕バヤンが軍に到着するに先立ち前進部隊を指揮していたジンギムの子の〔晋王〕カンマラは、カイドゥが杭海山の境界を越えるのを妨げようとして、敗北を喫し、そのうち、セレンガ河の付近で敵に囲まれ、トトカが部下のキプチャク部隊を率いて奮戰して、血路を開いたおかげで辛うじて助かることができた。〔郎案、百衲本「元史」一百二十八列傳巻第十五、土土哈列傳に「（至元）二十六年、皇孫の晋王に從って海都征討に赴き、杭海嶺に到ったが、敵軍は先に険固な所に據って抵抗したので、諸軍は利を失って、唯、土土哈のみがその軍隊を全滅直前に発して晋王を補翼し、敵の追撃が大変だったので、そこで精鋭の兵を選んで待伏せした。そのため海都の攻撃はそれ以上に及ばなかった。秋七月世祖が北邊を巡幸された折、土土哈を召見し慰諭して云われるのに、昔太祖がその臣下と同じ様な災難に遭い、班求河の水を一緒に飲んでその功労を謝した故事があった。今日の事も昔人と同じく愧じるに及ばない。汝の功の賜じやとあった。京師に還幸されて大宴曾のあった時、復群臣らが土土哈に次の様に云った。朔北の

人がやって来て、海都の言を聞いた由で、杭海の戰役で、彼の辺土土哈のような者だったら、吾らはどうして安々と勝利を得られようか、とあった。」〕皇帝は高齢にもかかわらず、カイドゥを親征することが必要だと考えた。皇帝はトトカを入京させ、皇帝の下で指揮をとらせることになり、武動を賞せられた。クビライは一二八九年（至元二十六年）七月上都を出発して西方の国境に向ったが、敵を発見せず、道を引返えした。すなわち、カイドゥは遠く去っていたのである。」（前掲書、一一七頁）〕現代の中国側の地図ではこの山は Hangai と綴られている。

ポターニンは亦、長春云うところの「長松嶺」を蒙古人呼ぶところの Undur shana（高い松の意味）カンガイ山の東部支支脈にあたるものと同一であるとしていて、―また長春の云う「石河」はセレンガ河の南支流 chilotu〔蒙古語で石の多いという意味〕とを同一のものとしている。Undur shana は Chilotu 河の東側に横臥っている。この山の下にある湖沼は虹によく似ていて、中国的な記載でそう書かれているが、ポターニンによると、Chagan nor に当り、そこから Chilotu 河が流れ出している）

〔本文〕二十八日泊窩里朶之東、宣使先往、奏禀皇后、奉旨請師、渡河其水東北流、瀰漫沒軸、絶流以濟。

〔口訳〕二十八日窩里朶（オルダ）の東に宿泊した。劉仲録宣使が先に往って皇后に奏上した所、長春師を請待する旨の命を受けた。河を渡ったがその河水は東北に向って流れ、溢れる水は車軸を沒する深さがあったが、流れの絶えた所で渡河し了えた。

〔王観堂先生注〕此河疑即察罕鄂倫河也、張徳輝紀行、自和林川之西北行一驛、過馬頭山復西南行、過忽蘭赤斤、東北又經一驛過石堠、自堠之西南行三驛過一河、曰唐古以其源出於西夏故也。其水亦西北流、水之西有峻嶺、嶺之石皆鉄如也。嶺之陰多松林、嶺之陽帳殿在焉。乃避夏之所也。今案此記、窩里朶正與張記避夏之所地、望道里相合、蓋定宗時避夏之所。與太祖時略同矣。惟張云此河名唐古、又云源出西夏、皆非事實。

〔口訳〕この河こそ即ち察罕鄂倫河と考えられる。張徳輝の紀行文によると、「和林川の西北から行くこと一駅で馬頭山を越える」とあり、「復西南の方向に行くと、忽蘭赤斤を過ぎる。東北に向えば亦一駅を経て、石堠を過ぎる。この堠〔郎案、「諸橋漢和辞典」に曰く、「堠、黒標を標示する塚〔集韻〕堠、記里堡〔正字通〕堠、封土為臺、以記里也、十里雙塚堠、五里隻堠、ものみ、のろし台〔柳惲・贈呉均詩〕關堠日遼絶〔盧綸送張郎中詩〕塞口雲生火堠連〕より西南に向って行くこと三駅、一つの河を渡過する。」それについて云うことに、唐の昔よりその水源地を西夏に出すと云っている。その河水は亦西北方向に流れるが、さらに西方に峻しい嶺があって、しかもこの山嶺の巖石は全部鉄鉱からなっている様に見える。しかも山嶺の北陰になった部分には松林が多く簇生し、他方南の陽の当る部分には、天幕造りの建物が在るといった塩梅である。この帳廬は夏季の避暑のためのものである。」こうして張徳輝の旅行記の記述を勘案してみると、窩里朶はまさに張の記述している避夏の所と、地勢眺望、道里程が相ともに合致していると考えられる。ただし、元朝の定宗の時の避暑地と、太祖の時の避暑地とがほゞ同じであることがわかる。〔郎案、百衲本「元史」二、本紀巻第二、定宗紀「二年丁未、夏暑を曲律准黒哈速之地に避く」とあり、「三年戊申春三月、帝は横相乙児の地で崩御した」とある。清の洪鈞撰の「元史譯文證補」巻二の定宗三年戊申の條に「疾を以って西に巡幸し、葉密爾河を潜邸とし時に湯沐地となす〔注、西書に云う、定宗自ら云う所によると、此処の水土が自分の体に宜しいと。〕」とあり、避暑地の曲律准黒哈速と異った保養地、葉密爾河畔にあったことが知られる、一方、「元史」の太宗紀二年に「夏、暑さを塔密児河に避けた」と云っている。〕唯張の云うところを考えてみると、彼の云う此の河の名前が唐の昔からだといっているし、またその水源が西夏の地から出ているなど、いずれ皆事実ではない。〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕六月二十八日（七月十八日に当る）長春ら一行は皇后の居られる窩里朶（オルド）の東側に止宿した。（この窩里朶については注記137を参照のこと。―行宮、中国語の行＝移動する、宮は宮殿で、

行宮は移動できる宮殿を指す。この窩里朶から、蒙古語であるOrdoに関联していることがわかる。カルピニーもオルドと書いていて、その言及している処で言葉の正しい解釈を与えている六〇九頁を参照のこと。リュブルクも二六七頁のところで、このオルド（帳殿）を宮廷と訳している。―〔郎案、護雅夫氏訳「カルピニ、ルブルク、中央アジア、蒙古旅行記」（前掲）の第一章に「皇帝と要人たちの宿営はオルダと呼ばれておりますが、わたくしどもがその本営（オルダ）の前にいましたとき、風の勢いがあまりきついのですから、地面に腹ばいになり、もうもうと立ちこめる大層な砂塵で、ほとんど何も見えぬという有様でした」（前掲書、六頁）に窩里朶、即ち本営（オルダ）について記している。亦「ルブルクのウィリアム修道士の旅行記」（同書）の第二章タルタル人とその住居の所で、「バアトウの夫人は二六人いて、その一人一人が、一軒の大きい家のほかに、その背後にたてられた小さな家を幾軒か持っています。この小さい方の家々は、まあ部屋といってよく、そこには夫人の従者どもが住んでいます。これらの家々に、それぞれ、たっぷり二百台はある車が附属しているのです。家を張るときには第一夫人が一番西の端にその住居をたて、ほかの夫人たちは序列に順って、そのあと順々にたててゆくので、最後の夫人は一番東の端に来るということになります。或る夫人の幕営からつぎの夫人のそれとのあいだには、石を投げたらとどくくらいの間隔があります。こんな具合で、富裕な一モンゴル人の本営（オルダ）はまるで大きな町のように見えるかもしれませんが、おそらくそのなかには男はごく僅かしかいないと思われます。」（前掲書、一四〇頁）とあるルブルクの記述は、長春師の六月二十八日の窩里朶を髣髴とする。〕また（注記133長春の旅行記を注解した中国人の訳注者李志常が、彼らは元の支配者の主要な妻の皇后一人がいる仮りの居住＝行宮に到着したと説明している。元史巻百六、成吉思汗が四個の帳殿（オルド）を持ち、その一つ一つに彼の妻の主だった婦人を一人ずつ多くの妾たちと一緒に住まわせていたと記載している。〔郎案、百衲本「元史」一百六、表巻第一、后妃表に、太祖、孛児台旭真太皇后　忽魯渾皇后、闊里桀祖皇后、脱忽思皇后、怙木倫皇后、亦怜眞

八剌皇后、不顔渾禿皇后、忽勝海皇后、右の人たちは大斡耳朶（オルダ）に　忽蘭皇后、奴倫妃子、夘真妃子、鎖郎哈妃子、右は第四斡耳朶、八不別及妃子、この方は歳賜録を見るに、斡耳朶の所在が判らぬので附記する」とあり、第一の大斡耳朶は、三つ、第四の斡耳朶が一つ、ブレットシュナイダー氏の四つの帳殿（オルダ）は是を指している。」此処に言及している皇后の帳殿（オルド）は、ポターニンが正しく推定したように、セレンガ河の水源の一つであるEter河の畔にあったものと思われる。）そこで劉仲録（副官）が長春一行の到著を知らせるために派遣された。そして皇后は直ちに亦長春師を招待する使節を送ったのであった。長春らは北東に向って流れている浅瀬のある河を渡った。その河水は車の軸に迄達していたが、無事渡って天幕を張った。

〔本文〕入營駐車南岸

〔口訳〕この幕營に入り車を河の南岸に留め駐在した。

〔王観堂先生注〕案、既云河水東北流　則濟河之後　不得駐車南岸也　此恐有誤。

〔口訳〕この文を勘案するのに、すでに河水が東北に流れていると云っていて、そこで河を渡った後に車を駐留して天幕を張るとなると、その河の北岸でなくてはならないが、この南岸に車を駐めたとはあり得ないので、恐らく誤謬があるのだろう。

〔本文〕車帳千百、日以醍醐渾酪為供、漢夏公主皆送寒具等食、

〔口訳〕そこには車輌天幕が千百も並んでいて、日々に美味しい乳やチーズが提供された。漢人の王妃と西夏の王妃がいずれも防寒具、食料を送って下った。

〔王観堂先生注〕金史宣宗紀貞祐二年三月、奉衛紹王公主、歸於大元太祖皇帝、是爲公主皇后即此、記之漢公主也。元朝秘史續集一、成吉思自那裏征合申種、其主不児罕降、將女子名察哈的、獻與成吉思察哈、即此記之夏公主也

〔口訳〕金史の宣宗紀、貞祐二年（A.D.一二一四）三月衛の紹王公主を奉じて大元朝の太祖皇帝成吉思汗の許に到った由見えているが（乾隆四年刊、廿四史、百衲本金史巻十四、宣宗紀上、「貞祐二年三月庚寅、奉衛紹王公主、歸于大元太祖皇帝、是為公主皇后」）すなわち此処に記載されている漢族の公主がこれであったことがわかる。「元朝秘史續集巻一」によると、成吉思汗は出征して合申種（賈）を討ち、その主不児罕が降伏したのだったが、この時に娘の察哈という名の女子を献じて妃としたのであった。この察哈と云う者が此の記録のなかにある夏公主だったのだろう。〔郎案「元朝秘史續集巻一」は「蒙古秘史」と同一で、余の架藏する道潤梯歩著「新訳簡往蒙古秘史」続集巻一に「即ち此出征は合申の百姓を征したので〔注・合申即ち西夏の唐兀惕族の建てた国で、不儿（児）罕はその国王の稱〝罕〟は〝王〟に従う、同じ此の時の不児罕は是桓宗、李純佑の弟、襄宗李安全、蒙古が西夏を征伐したことは、是時を最初の時とするのではない。「元史」太祖紀の云う所によると、「歳乙丑（即ち成吉思汗即位前年、亦A.D.一二〇五年）帝西夏を征し、力吉里寨を抜き、落思城を経て大いに人民及その彙駝を掠奪して還る」又「二年丁卯秋、再び西夏を征し、斡羅孩城を克服した」又、三年戊辰春、帝は西夏から戻って来て、夏に龍庭に暑さを避け、冬再び脱脱を征した」又四年己巳春「帝は河西に侵入し、西夏の主李安全はその世子を遣わし来り戦ったので之を敗った。その副元帥高今公を獲た。兀利海城を占領し、その太傅西壁氏を俘虜とした。進んで克夷夷門に到り、復西夏の軍隊を敗った。その將の鬼名令公を虜にした。中興府に肉薄して河水を引いて水攻にしたが、堤防が決壊して外に溢れて了ったので、遂に囲みを解いて撤退した。次いで太傅を派遣して中興府に答礼使として入城させ、夏主李安全の降伏を説諭した。夏主は娘を納れて平和に應じた」亦『西夏書事』に云う。「塔坦に黒白二種がある。時に黒塔坦王白斯波は強盛であった。諸部族を兼併し、兵を起して夏の河西州郡を攻撃した。安全は親しく兵を率いて拒ぎ戦い大敗した。そしてその公主を納れて、使を遣わして其下の礼を以って和を講じた。塔坦方に撤退したが、是より国勢益々衰え

た」とある。この黒塔坦は即ち蒙古のことで、白廝波は帖木真（成吉思汗）を指して言っている。その西夏李安全の公主を納めたとある公主は察合を献じたことを指していた。「金国志」の云うに、「大安三年辛未（A.D.一二一一）春、西夏始めて大軍に攻められているとして、使を派遣して救援を求めて来た。金主は新たに即位した許りで、救援することが出来なかった。大軍は興霊に到り帰って行った。夏の人たちは之を恨みに思い、遂に金に叛いた」察哈について那珂通世先生説をなして云う。「這れは后妃伝に載せる所で、第三宮殿に所属する察儿皇后のこと」とされた。〔郎案　これは、那珂通世先生の「成吉思汗實録」巻の十一（昭和十八年九月、筑摩書房刊）は実は「蒙古秘史」の續集一にして、その訳文は以下の様である。「かく出征したるに依り合申の民の處に去れり、指して到れば、合申の民の不児罕降らんと、爾の右の手となりて力を與へん」と云ひ、察合と云ふ女を成吉思合罕に出して獻れり。（注　不児罕は蒙古語にては神または佛の義なれども、唐兀惕の國にては國主が稱號に用ひたりと見ゆ。この時の不児罕に夏の桓宗李純佑の族弟にして・元の太祖元年に純佑を廢して纂立したる襄宗安全なり。察合は、親征録にも集史も元史も、みな名を略けり。后妃表第三斡耳朶の察児皇后は、察合の誤りかとも思はる。しかれども、喇失惕は唐吉惕の人にて名の知れざる哈屯を挙げて、自注に「速哈惕これを得んと願ひ、成吉思汗即ち贈れり」と附記したれば、后妃の列を脱したる故に、表には載せられざるならん）」を指す（前掲書、三八三頁）村上正二先生の説に、「察儿皇后、應に是れ篾儿吉惕部脱黒脱阿の女、察呵侖、是は察合にあらずとなす。これに似たことか」（前掲「新訳簡注蒙古祕史」書、二九五～二九七頁）とあって諸説のあることが知れる。〕

〔本文〕黍米斗、白金十兩、滿五十兩、可易麪八十斤、蓋麪出陰山之後、陰山古今皆謂之天山、元人獨呼陰山、而郤呼塞北之陰山為天山。

〔口訳〕黍米の一斗は白金で十両に当り、五十両もあれば麥粉八十斤で交易することができる。元来麥粉は陰山

山脈の後側から持って来ている。この陰山を昔から今まで皆天山と謂(いっ)ているのだが、蒙古人だけが独り陰山と呼んで、郤呼塞の北部の陰山を天山と呼びなしている。

〔王観堂先生注〕陰山古今皆謂之天山、元人獨呼陰山、而郤呼塞北之陰山爲天山

〔口訳〕陰山は、昔から今にいたるまで皆天山と呼んでいる。けれども蒙古人だけは独り陰山と名付け、郤呼塞(げきこさい)の陰山だけをかえって天山と呼びなしている。

〔本文〕二千餘里、西域賈胡、以橐駝負至也、中伏、帳房無蠅、窩里朶、漢言（蔵本作語）行宮也。其車輿亭帳、望之儼然、古之大單于、未有若是（蔵本作此）之盛也。七月九日同宣使西南行五六日、屢見山上有雪、山下往往有墳墓、及升高陵、又有祀神之迹、又三二日歴一山、高峰如削、松杉鬱茂。西（原誤作而從蔵本改）有海子、南出大峽、則一水西流、雜木叢映於山之陽、韮茂如芳草、夾道連數十里。北有故城、曰曷剌肖。

〔口訳〕この天山山脈は二千余里に及び、西域の異国のウイグル商人たちもこの山脈を越えて、小麥を駱駝や驢馬の背に乗せてやって来ると云う。真夏の最中なのに天幕の部屋に蠅(はえ)が一匹(ひとつの)も居ない。窩里朶(オルダ)は中国語で行宮(あんぐう)の意味であるが、その聚った車輌や天幕、假屋は一望するだけでも整然と齊っていて、昔の匈奴の大單于でも未だかってこうした盛況はなかったに違いない。七月九日に劉仲録ら宣使と同道して西南に行くこと五、六日で、屢々天山山脈の頂上に雪があるのを見たし、山裾には往々にして墳墓があって、その高い陵墓に登ってみると、そこにはかつて天神を祀った遺跡があった。又二、三日程して一つの山を越えたが、高峰が削り立ち松や杉が鬱蒼と茂っていた。西には海子(みづうみ)があって南すると大きな峡谷に出た。そこで一つの河水が西流していて雜木林が緑の蔭を落し、その山の南側には韮が茂っていて芳い香を発散していた。それが道の西側を挾むようにして数十里も連なっていた。北の方に廃城があって曷剌肖と云っている。

〔王観同先生注〕曷剌肖地、望正與烏里雅蘇台合、疑烏里雅蘇台即曷剌肖之轉語、上文所謂一水西流者、當亦指

烏里雅蘇台河也。

〔口訳〕曷剌肖、その地勢を望み考えてみると、烏里雅蘇台と合致するので、恐らくは烏里雅蘇台がすなわち曷剌肖の転語ではないかと疑われる節がある。上述の文章のなかで一つの河水が西流するといっているが、まさに烏里雅蘇台河を指している筈である。

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕

この河の南岸に一千以上もの車と天幕があった。中国の公主と夏（タングート）の公主がともに、小麦や銀を贈り物として持って来てくれた。〔郎案白金と本文にあり〕この地において小麦粉の八十斤は五十両に相当する。（注185一斤は今日の度量衡1⅓ポンド（五九〇グラム）それに銀一両は約六シリングに当ると考えられる）というのは小麦粉は陰山から越えてはるゞ搬ばれたものであろう。（注136この陰山については天山を指す〔郎案匈奴は祁連山脈と呼んで〕注4と152を参照のこと）この陰山は二千里以上もはなれていて、小麦は駱駝により西胡らの手で運ばれていたのである。夏季の暑い気候であったけれども、吾々の天幕には蠅はいなかった。蒙古語の窩里朶は中国語で行宮を意味している（注137、行は行くこと、移動することを意味し、宮は宮殿建物を指している。それ故、行宮は移動可能な軽便な宮殿を指している。蒙古語での窩里朶は原語の Ordo に由来している。カルピニーもこのオルドについて記述していて、しかも言葉の正確な意味を彼の紀行文、六〇九頁参照〔郎案、前頁に、護雅夫氏訳文をのせた〕、一方、リュブルクは三六七頁にありとし、この行宮を「禁廷＝imperial court」と訳している）この地の車輛と天幕整備は、すべて荘麗な外観を呈し、古代の匈奴の大単于のものも知らない位豪華であった。（注138注84を参照のこと）さらに七月九日（七月廿九日の暦に当る）一二二一年なのだが、長春眞人たちはこの行宮（オルド）をはなれて、南西方向に直進して五～六日の旅を重ねた。何度となく山峰にいたゞく雪を見たのだが、その麓に屡々噴丘の痕をみたのだった。この山脈の一つの峰頂に、

長春らは（山の）精霊に献げられた犠牲祭の痕跡を発見したのだった。亦二～三日の旅行の後に尖った峰の形をした山を越えたのだった。その山は松・杉の樹々に覆われていた。（注139杉は、唐代の辞書によると檜 Juniperus と同一の針葉樹である。けれども此の記事の処では、恐らく Larchi からまつ科の植物と理解されていたに違いない。）その西には湖沼があった。長春ら南につき出た長い陸路を進まねばなかったが、西の方に流れる河を確認したのだった。（注140ポターニンは前掲書の蒙古誌のなかで、この西遊記の話のなかに出てくる尖った峰は Otkhon Khairkhan であり、Uliassutai の東にある Khangai 山脈のうち、雪をいただいている頂上の一つと考えているようである。その山の麓に湖沼があるのであって、Bogdyu 川の水源地に当っている。長春が陸路を抜けてから後に見た、西に向って流れる河は、ポターニンによると Uliassutai 河であった筈といっている。此処でこの西遊記の旅行者長春自ら、カングハイ山脈の西に居ることを確認していた。）その北側に長春らは種々様々に変化する樹木の種類を見たのであって、しかも二十里以上にも渉って道傍に沿って夥しい kiu 韭（注141中国において kiu 韭は Allium odorum を指しているらしく、屡々、北京の山や亦多く栽培せられていた由〔郎案「諸橋漢和辞典」に曰く、「韭　キュウ　？にら・葷菜の名、細長い葉を有して叢生し、秋に小さい白色の花を著ける。莖及び葉は食用となる〔説文〕韭、韭菜也、一憧而久生者也、故謂之韭、象形、在一之上、地也、此與耑同意〔本草、韭〕釋菜、草鍾乳、起陽草」、〔cf.E.Bretschneieler ; Botanicom Sinicum, PartⅢ, 240韭. kiu.P. .XXⅣ, I.T., LV., comp, Classies, 359. Allium odorum., L. 別録のなかで言及されており、唯その名前と薬成分が注記されているに過ぎない。根、葉花、趣旨がそれぞれ生薬に用いられる〕という、芳香を発する草がたくさん繁茂しているのを見た。その北方に古代都市、曷剌肖という故遺跡が横たわっている。（注142この曷剌肖 Ho-la-siao は幾分 Uliassutai に似た響を帯びているように思われる。こうした名稱をもつ都市は、ほんの前世紀の中頃から年代が知られているに過ぎないのであって、ウリアッス

タイ河のすぐ近くに位置しているのだが、恐らくは今からずっと以前から、こうした命名で知られていたに違いない。このウラッス ulassu はポプラ樹を意味しているのでありUliassutai はその形容詞形なのである。）

〔本文〕西南過沙場二十里許、水草極少。始見回紇決渠灌麥、又五六日踰嶺、而南至蒙古營宿。拂盧

〔郎案、「全集本」に「拂盧」の文字なし、「蒙古史料四種本」に本文に拂盧を加え、王観堂先生の注記あり。謂穹廬也。舊唐書吐蕃傳、貴人處於大氈帳、名爲拂盧。范成大攬轡錄、至幕次黑布拂盧待班〔今本無此語、見玉堂嘉話巻四引〕河汾諸老詩集四、陳庚送孟駕之赴闕詩、横青遙指拂盧煙」

〔口訳〕拂盧は穹廬（テント）を謂うのである。舊唐書吐蕃傳〔郎案、百衲本「舊唐書」一百九十六上、列傳巻第一百四十六上、吐蕃上に「其の国都城號（なずけ）て邏些城となす、屋庇（やねひさし）皆平頭（たいら）で高いもので数十尺に到る。貴族たちは大（おおきな）氈帳（フェルト・テント）に居住し名を拂盧と云っている。」〕范成大撰「攬轡錄」〔郎案「中國叢書綜錄」2、子目、史部地理類、宋、「攬轡錄」一巻、(宋)范成大撰、續百川学海巳集、説郛（宛委山堂本）弓六十五、知不足齋叢書（乾隆至道光本、景乾隆至道光本）第三集とある。余の架藏するこの叢書第十冊（中支出版社刊）に攬轡錄一巻を收めるが、「至幕次黑布拂盧待班」の文字無し。尚「玉堂嘉語」も同目錄に「史部政書類、(元)玉堂嘉話八巻、(元)玉惲撰、四庫全書、子部雜家類、黑海金壺（嘉慶本）子部、守山閣叢書（道光本、鴻文書局景道光本、博古齋景道光本）子部、叢書集成初篇・總類」とあるも何れも余の架藏する所でない。幕に到り次いで黑布の拂盧がひかえていた。「河汾渚老詩集」〔郎案、「中國叢書綜錄」2、子目、集部總集類、郡邑之屬に「河汾諸老集、八巻(元)房祺輯、詩詞雜俎（汲古閣本、木松堂本、景汲古閣本）四庫全書、集部總集類、粤雅堂叢書初篇第二集、元人選元詩五種、叢書集成初編・文学類、金元總集）とある。その四巻目の陳庚が孟駕の宮中に赴くのを送るの詩に「遙か青く棚引いた所の穹廬の煙を目指す」とあるように、拂盧の詩文の例を挙げる。

〔本文〕西南過沙場二十里許、水草極少、始見回紇決渠灌麥、又五六日踰嶺、而南至蒙古營宿

〔口訳〕西南方向に沙漠を横切ること二十里許り、乾燥していて水草が極めて少ない。始めてウイグル人が渠溝を掘って灌漑し麥を育てているのを見た。又五、六日進んで嶺を越え、しかも南に向って蒙古人の宿營地に到着した。

〔本文〕拂旦行迤邐南山、望之有雪。因以詩紀其行。當時悉達悟空晴、發軫初来燕子城（撫州是也）

〔口訳〕早朝に連なり続く南山に進んだが、連山を望むと雪が積っているのが見えた。そこで感興が湧いて詩でこの旅行を記してみる。

當時悉達悟空晴　今こそ悟りに達したがの如く空がすっかり晴れ渡り

発軫初来燕子城　出発以来初めて燕子城に辿り着いた（撫州城がこれである）

〔王観堂先生注記〕今案　金史地理志撫州柔遠縣　倚大定十年置於燕子城

〔口訳〕今金史の地理志を勘案してみると「撫州柔遠縣、倚大定十年置燕子城」とある。〔郎案：青山、「中國歴代地名要覧」撫州（金）＝高原縣、巻18、直隷萬全都指揮使司、附見開平故衛興和城「讀史方輿紀要、巻十八」開平故城、興和城、衛西南四百餘里、去宣府三百餘里、後魏隷遠鎮地、唐新州地、契丹建爲撫州、金爲隷遠鎮、明昌三年復置撫州治隷遠縣、又升爲鎮寧軍、屬西京路、元亦曰撫州、尋升爲隆興路、亦曰興和路（以下略）〕

〔本文〕北至大河三月數、（即陸局河也、四月盡到約二千餘里）西臨積雪半年程、（謂此地也、山常有雪、東至陸局河約五千里、七月盡到）、不能隱地回風坐、（道法有回風隱地　攀斗蔵天之術）郤使彌天逐日行、行到水窮山盡處、斜陽依舊向西傾。郵人告曰、此雪山北、是田鎮海八剌喝孫也。

〔口訳〕北至大河三月數　北に旅して大河に到ったが行程三月余（あま）り〔注記　この大河は陸局河（ケルルン河）、四ヶ月で約二千余里を踏破したことになる〕

西臨積雪半年程　西方の天山に積雪を望んだが半年行程になる〔注　この土地の風景を賦したので、天山に常

に雪があって、東に行くと陸局河で約五千里になる。七ヶ月で踏破したことになる〕

不能隠地回風坐　際果ての地に旋風に遭って腹臥いになって坐っても居れず〔注　道法に回風、隠地、攀斗、藏天の術があり、その術法の語句を詩に折込んだ〕

郤使彌天逐日行　反て空一杯に輝く太陽を追って旅すれば

行到水窮山盡處　行けば河を窮め山を踏破盡ししてみても

斜陽依舊向西傾　夕日だけは相変らずに西方に沒して行くわい。

駅遞の官吏が告げて云うには、この雪山の北は田鎮海の八剌喝孫バラガスンである、と。

〔王観堂先生注〕元史鎮海傳、怯烈台氏太祖命屯田於阿魯歡、立鎮海城戍守之。

〔口訳〕元史の鎮海傳怯烈台氏によると、怯烈台氏に太祖は阿魯歡に屯田を命じ、鎮海城を立てて、併せて防御させたという。〔郎案、百衲本「元史」百二十、列傳巻第七、鎮海列傳に云う「鎮海は怯烈氏の出で、初め、軍の伍長を以って太祖と従軍し、班朱尼河の水を太祖と飲んだ関係の者だった（中略）壬申（A.D.一二一二年）に阿魯歡に屯田を命じ、鎮海城を立てて、防衛させた」と、鎮海を城將として城を守護させたとこの文を解すべきか、鎮海城を築いて之を防衛させた、と解すべきか、未詳。阿魯歡は岩村忍氏の「西遊記」訳注によると、「蒙古語　Balagasum　原文『八剌喝孫』元史鎮海傳によれば、鎮海はチンギス汗の命を受けて阿魯歡に屯田し、鎮海城を建ててこれを守ったとある。即ちこれが、チンハイ・バラガスンである」（前掲書六四頁）と。〕

〔本文〕八剌喝孫、漢語爲城、中有倉廩、故又呼曰倉頭。七月二十五日有漢民工匠、絡繹來迎、悉皆歡呼歸禮、以彩幡華蓋香花前導。又有章宗二妃、曰徒單氏、曰夾谷氏、及漢公主母、欽聖夫人袁氏、號泣相迎。

〔口訳〕この八剌喝孫は中国語で都城を云うが、城中に倉庫物置があるので亦倉頭とも呼んでいる。七月二十五日に漢族の工匠たちが大勢群れをなして歓迎にやって来て、全員悉くが歓呼し中国式の挨拶をし、五彩に彩っ

た幡蓋を掲げ香花をもって先導してくれた。又章宗の二人の王妃も居られて云われるのに、「わらわは徒單氏、もう一人は夾谷氏」とあった。更に漢公の生母であられる欽聖夫人袁氏も、感激の余り号泣されながら共に迎えなされた。

〔王観堂先生注〕金史百官志　章宗五妃位有、真妃、徒單氏、麗妃、徒單氏昭儀、夾谷氏。又撚抹盡忠傳、中都妃嬪聞盡忠出弃、皆裝束至通玄門。盡忠謂之曰、我當先出與諸妃啓塗　乃與愛妾及所親者先出、城不復顧矣。中都遂不守、後徒單吾典告盡忠謀反。上撫然曰、朕何負彖多、彼弃中都、凡祖宗御容及道陵　諸妃皆不顧　獨與其妾偕來　是固有罪、遂誅之。

伊志平葆光集中、臨江仙詞序、袁夫人住沙漠十年、後出家回都。作詞以贈之、詞云、十載飽諳沙漠景　一朝復到都門如、今一想一傷魂　休看蘇武傳、莫説漢昭君、過去未來都撥去、真師幸遇長春知　君道念日添新　皇天寧負德　后土豈虧人

〔口訳〕「金史」の百官志によると、「章宗には五人の王妃があり、それを位順に云うと、真妃、徒單氏、麗妃、徒單氏昭儀、夾谷氏」とある。「又「金史」一〇一、列傳第三十九の抹撚盡忠列傳〔郎案、王観堂先生はこの抹撚を撚抹と記しているが、百衲本「金史」に従って抹撚とする〕「抹撚盡忠は本名彖多、上京路猛安人（中略）中都危急となり秘かに腹心元帥府經歴官完顔、師姑らが謀って中都を棄てて南に弃逃した。已に戒行、李期ら五月二日夕暮に城を抜け出た。是日承暉　盡忠は尚書省で会議し、承暉、無奈、何徑、盡忠ら家に帰ったので、師姑を召して詰問して事情が判り、彼らがその夜の中に出奔しようとしていたのだった。（中略）是の日全ての妃嬪たちが盡忠の逃亡するのを傳え聞いて、皆が旅装束をして通玄門にやって来た。盡忠は彼女らに云うことに「わたくしが先づ城門を出まして、皆様方の逃げ道を開きましょう。」とあった。諸王妃らはそれを信用した。所が盡忠はそこで愛妾と近親者らと城門を出て復後を顧（かえり）みようともしなかった。中都の防衛をし

なかったのである。盡忠は中山に行って親友たちに云うのに「若し諸王妃らと一緒に落延びたりしたら、わたくしは此処に来ることが出来なかったに違いない。」と。盡忠は南京の宣宗の許に至り釈明したので、中都を放棄逃亡したことが不問に附された。（中略）徒單吾典が盡忠の謀逆の由を告げた所、宣宗は憮然として申された。「朕（わたし）は何で彖多（盡忠）に期待するものか、彼こそ中都を棄てて祖宗の御影や陵墓それに諸王妃を全て顧みず、独り妾と一緒に南京に逃げて来た。元来罪過があったわけじゃ。」と。そこで有司に命じて鞫問されて、兄の吾里也と相謀って反逆を企てたとして、吾里也共々誅殺した。」「尹志光の「葆光集」中巻に、〔郎案、「中國叢書綜録」2、子目、集部・別集類「葆光集三巻・㊀尹志光撰、道藏（正統本、景正統本）、太平部」に收む〕臨江仙の詩詞があり、袁夫人沙漠に住むこと十年の後、出家して都に戻ってこられた。詞を作って之に贈る

十歳飽諳沙漠景　十年余りの沙漠生活はその風景を飽く迄暗（そらん）じて居られましょう
一朝復到都門　今一度華の都に戻って来られましたが
如今一想一傷魂　今こそ想えば魂が一つ一つ疼く思いでしょう
休看蘇武傳　朔地に流された蘇武の伝えはおろか
莫説漢昭君　夷狄に稼した王昭君は云う迄もありますまい
過去未来都撥置（まま）　過去も未来も全て夢の亦夢
真師幸遇長春知　貴女こそ幸運にも長春師の知遇を恭けなくなされたので、
君道念日添新　貴女の情進の道は日々新たなものがありましょう
皇天寧負徳　天の神はむしろ徳を負い示し
后土豈虧人　地の神の居ます所に眞人を欠きましょうや

と沙漠生活十年を閲した欽聖夫人袁氏のことが詠われている。

〔本文〕顧謂師曰、昔日稔聞師（監本無師字）道徳高風、恨不一見、不意此地有縁也。翌日阿不罕山北、

〔口訳〕彼女たちが改めて長春師に申し上げた、「昔から盛んに師の道徳の高尚な様子をお聞きいたして居りましたが、残念ながら一度も拝顔の榮に浴して居りませんでした。所が思わぬこの土地で御目に掛れるのは何と云う御縁で御座居ましょう。」と。翌日阿不罕山の北に到った。

〔王観堂先生注〕即元史鎮海傳之阿魯歡、疑即今烏里雅蘇台西南之阿爾洪山也。〔元史食貨志、勲臣有兀里羊罕千戸、兀里羊罕亦即兀里羊歡罕、之言山也。則阿魯歡爲今阿爾洪山無疑〕闊復駙馬高唐忠獻王碑　中統初釁起闘牆愛不花　敗叛將闊不花於案檀火爾歡、獲其屬、鎮海案案檀即阿爾泰山、火爾歡即阿魯歡、鎮海據碑文雖似人名、疑亦指此鎮海城也。〔許有壬右丞相怯烈公神道碑、承命闢兀里羊歡地、爲屯田且城、之因公名、名其地曰鎮海、又曰稱海俾公守焉、局所俘萬餘口、居作後、以其半不能寒者、移弘州、此鎮海爲城名之證〕此作阿不罕山、疑是阿爾罕之譌、然秋澗先生文集五十一、衛輝路監郡塔必公神道碑、王父押脱玉倫、太祖時授阿不罕部工匠總管。記言此地有漢民工匠、則此地、自有阿不罕之名、或又名阿魯歡也。此地西距金山不遠、屠敬山以喀老哈河西之阿巴漢山當之、甚誤。

〔口訳〕そこで即座に元史の鎮海傳にある阿魯歡について考究してみると、今の烏里雅蘇台西南に位置するところの阿爾洪山に当ろうか。（注、「元史」食貨志勲臣の項に兀里羊罕千戸とある。〔郎案百納本「元史」九十五志巻四十四食貨三勲臣の條に「兀里羊哈歹千戸、五戸絲成戊午年分撥東平等處一千戸、延祐六年（A.D.一三一九）實有四百七十九戸、計絲一百九十一斤」とある。兀里羊罕とは作っていない〕この兀里羊罕はまた兀里羊歡罕にあたると考えられ、これは山の名前を云っている。そこで阿魯歡という名前は今の阿爾洪山を指していることに疑いない。）闊復駙馬高唐忠獻王碑によると、中統の初、釁起闘牆愛不花が、叛いた賊將闊不花を案檀火

爾歓に敗り、その兵隊たちを捕虜として得た。鎮海に考えてみると、この案壇は即ち阿爾泰山を指し、火爾歓は即ち阿魯歓鎮海であると考えられる。この忠献王の碑文によると、人名に似ていると考えられるところがあるが、また此の鎮海城を指しているのではないかと疑われる。〔注、許有壬右丞相怯烈公神道碑によると、命令を奉承して関闢里羊歓の地を屯田となし、且つ城を築いた。これを公の名前に因って、地の名前を鎮海と曰っている。又稱海俾公守とも云っている。そこに居るものは捕虜萬余の人口をかかえていた。そこに城塞を作った後に、その一年の半以上が寒く耐えられないので、弘州に移したと云う。此の鎮海が人名でなくて城の名であることがわかる〕。だが此れを阿不罕山に造って表現しているが、疑ってみると是れは阿爾罕という字の譌誤ではないであろうか。然して、王惲撰の「秋澗先生文集」巻五十一をみると、衛輝路監軍塔必公神道碑に王惲の父の押脱玉倫が太祖成吉思汗の時に、阿不罕部工匠總管を授けられているが、その西遊記の記述のなかで、此の地に漢民族の工匠たちがいたことを記している。とすれば此の地は元来阿不罕の名前があったことになり、或いは又、阿魯歓と名付けていたのかも知れないのである。この地から西方金山を距たることそれ程遠くない所に屠敬山があり、喀老哈河の西の阿巴漢山を当てているが、甚しい誤りと云わなくてはなるまい。

〔ブレットシュナイダー氏訳注〕

さて北西に向って進んでゆくと、ほゞ二十里程で沙砂漠を横切るが、その地は水も草も乏しい所である。そこで、長春らははじめて回紇部（ウイグル族）の人たちを見た。彼らは水路の設備で灌漑した田園に生活している。さらに五、六日旅を続けた後に一つの山に到り、その南の山腹を越えた後に蒙古人の駅亭に憩うたが、一夜を天幕で明し過したのだった。翌朝黎明昧爽に再び出発して、南山に沿うて旅を続けたのだった。その南山に雪があるのを目睹した。（注143ポターニンは長春の辿った道をKhangaiカンガイ山脈の西を通りそのまゝ行ったと誤解している。この山脈とアルタイ山脈と（さらに後にこの紀行文のなかで注記されているが）の間

にかなりの標高をもった山脈はみられない。これにともなって、この紀行作者は Dsapkhan の渡河について何も触れてはおらないのである。）長春眞人は一篇の詩を賦した（その詩は撫州の燕子城から、件の山脈迄の紀行をよみこんだものであるが）。駅逓において長春らは、この雪をいただいた山の北方に田鎮海八剌喝孫の地があるということを話して聞かされた。〔郎案、この訳文は本文の「北は大河に至るに三日以上を要し、（この大河は陸局河で四ヶ月で到達でき約二千余里の距離がある）西をみると山に積雪がある地方で半年間は雪が消えて大地を隠しおおせない〔本文注記、この記事は此の土地について云うのであって、山の方は常に雪がある。この地から東する陸局河に到るわけなのだが約五千里の距離があり、七ヶ月で到りつくせる〕回風〔本文注記に、道教の方術に、回風隠地擧斗蔵天の術あり〕「諸橋漢和辞書」に曰く、「回風、つむじ風、旋風、廻風、（禮、月令、夫𩔖風暴雨總至、注、回風爲𩔖、楚辞、九章、悲回風）悲回風之揺蕙舍、心寃結而内傷、注、回風爲飄飄（古詩）回風動地起、」〕この部分を訳し難き故か、省略す。とくに本文の「不能隠地回風坐、郤彌天逐日行、行到水窮山盡處、斜陽依蒿向西傾」は難解と思わる。〕この八剌喝孫 Ba-la-ha-sun（balgassun）は中国語でいう「衛・町市」の意味と同じである。そこには穀物の倉庫がある。そのためにこの城市は亦倉頭（すなわち倉庫の首位にあるもの）と呼ばれている。（注144田は中国語の野原、田園を意味している。鎮海は成吉思汗が置いた高官の名前である。この鎮海の伝記は元史巻百二十に見出される）

〔ブレットシュナイダー氏の訳注144の続き〕成吉思汗は阿魯歡に軍事據点を築城確立させたことが元史の鎮海伝のなかに言及されている。一城市がそこに成立されたが、鎮海はその城の守衛司令に補任された。これが、上記の鎮海の説明である。そこには三百所帯の人たちと多くの西アジアからの人たちが居て、黄金の錦を織る工匠として用いられ、また汴京（河南の開封府に当る）から木綿の織工として用いられた三百世帯もいたのである。鎮海はこの元史列伝の閲歴のなかで、成吉思汗の後継者たちであった Ogotai 窩濶台汗や Kuyuc の治世

に大臣であったと記述されている。これはラシッド・ウッ・ディーンにより言及せられたChingcai（鎮海）であるに違いない。〔郎案、ドーソン男爵の蒙古史ー田中萃一郎氏訳本。岩波文庫版、下巻、第四章定宗紀中に、「監國皇后は先ず右丞相鎮海Tehingcaiを免職したり、窩濶台（オゴタイ）のこの右丞相は畏元兒部の出身にして、〔鎮海、怯烈台氏、以軍伍長從太祖ー…尋拜中書右丞相、己丑太宗即位、扈從至西京、攻河中河南釣州、癸巳攻蓼州、以功賜恩州一千戸、先是收天下童男童女、及工匠、置局弘州、既而得西域織金綺紋工三百餘戸及汴京織毛褐工三百戸、皆分隷弘州、命鎮海世掌焉。定宗即位以鎮海爲先朝舊臣、仍拜中書右丞相、薨年八十四、子十人（元史一百二十鎮海傳）」その本任の外、別に日々皇帝の嘉言を記録するの任務を託せられたり（41に據る察合台は又、支那人を左右に置きて、その言を録しめしとぞ）これ往古より支那皇帝の朝廷に於て行はれたる慣例なり（p.127）」とある。ドーソン男は鎮海を法務大臣鎮海（元史では中書右丞相とある）と呼び做している。〔郎案佐口透訳注ドーソン著「モンゴル帝国史2、第二篇第四章グユクの項に「攝政（トレゲネ皇后）はまず中書右丞相チンカイを罷免した。ウゲデイカのこの大臣はウィグル族の出身で、その地位と職務とは別に重要な皇帝の言葉を毎日帳簿に記録する任務を委ねられていた（原注3「ジャーミ・ウッ・タワーリフ」ーチャガタイもまたその左右に中国人の書記を置き、毎日その言葉を記録させた。書記はカーティブ・ビティクチと呼ばれた）これは往古の時代から中国の皇帝の宮廷において行われていた慣例であった。」（前掲書二一五頁）〕一方カルピニー（763、764）もまた法務大臣鎮海について言及していて、Kuyucの朝廷での相談相手であったと云っている。〔郎案　護雅夫訳「カルピニルブルク中央アジア蒙古旅行記」プラノ・カルピニのジョン修道士の旅行記ーモンゴル人の歴史ー第九章通過したくにぐにその他、のなかに「わたくしどもが皇帝の前に呼びこまれたのはその場所（黄金オルダ）においてでありました。まず首席書記のチンガイ（注74チンガイーウィグル人、ネストリウス派のキリスト教徒シナ史料に鎮海と見える。モンケ・カン（憲宗）の治世に処刑された）

がわたくしどもの名前、さらにソランギ人の首長そのほかのものの名前を書きとめて、皇帝とすべての首長の前で声高に読み上げ呼びました。これが終ったとき、わたくしども一人一人は、左膝を曲げて四回跪きました。（中略）このあと皇帝はわたくしどもを呼びによこして、その首席書記のチンガイを通じて、われわれの言うべきことと任務とを書きとどめて渡すように命じられました。それで言われるとおりにして、さきに申したような以前バディに話したことを全部かれのために書きました。数日たちしました。すると皇帝はまたわたくしどもを呼びによこし、全帝国の行政長官カダクを通じて、その首席書記であるバラとチンガイおよびそのほか多くの書記どもの前で、われわれの言うべきことを残らず申すよう命ぜられました。わたくしどもは喜びすすんでその通りにいたしました。（中略）聖マルチー司教証聖者の祝日にわたくしどもはまた呼びだされました。すると、カダクと上述の書記つまりチンガイとバラとがやって来て、その手紙を一語一語翻訳してくれました。わたくしどもがそれをラテン語に書きますと、かれらはその一句一句がまとめて聞けるように翻訳させました。」（前掲書七九―八三頁）」ラシッド、ウッディーソに據れば、鎮海はウイグル人〔郎案、これ元史・鎮海傳にも見ゆ〕であり、皇帝マグ汗の命で殺されたという。ドーソン男、「蒙古史」第三篇269―田中萃一郎氏訳、岩波文庫版、蒙古史第二編「蒙哥（モッグ）皇帝は一二五二年八月を以て和林に赴き、襄に即位に反対したりし諸公子諸公主の運命を定めたり。皇后斡兀立海迷失（オグール カイミシ）は襄に、合罕の使節来りて新帝に忠節を盡すべしとの主旨を傳へたるに対して、蒙哥も亦爾余の諸公子と共に、窩闊台の子孫に非んば之を皇帝と仰がじと、誓願したるにあらずやと答へしを以て、皇帝は特に之を怒り、その雙手を一つの革嚢に收めて之を縫合して来らしめたり。その皇帝の本營に着くや、失烈門（シラムーン）の母と共に唆魯忽帖塔児（シュールクク テニ）の采地に移し、断事官忙哥撒児（マング サル）は悉くこの衣服を剥ぎて裸体となし、以て訊問を加へしより、皇后は皇帝の他何人の眼にも觸れしめざりし身体を辱かしめたり、とて憤然として詰問する所ありき。兩人共に妖術を以て蒙哥の生命を短縮せんと企てたりと判定され、毛氈に裹まれて溺

死の刑を加へたり。失烈門以下の三子は既に皇帝を承認する勿れと煽動せるは、我等が母となりと白状したりしなり。海迷失（カイミシ）の輔弼の臣のうちにありて首席を占めし喀達（カダック）児、鎮海を死刑に処したり。鎮海を刹せしは丹尼世們哈求魄 Damishmend Hadjih なりき、p.169～170」尚「ドーソンの蒙古史」の訳は、田中萃一郎氏によって、明治四十二年（A.D.一九〇九）にその前半部が刊行されて、後、昭和十一年に岩波文庫が上・下二冊で再刊したのが流布本であった。この拙稿に利用したドーソン蒙古史は田中氏の書冊で、後一八四三年の仏訳ドーソン原本を架蔵するに到った。その後佐口透氏が「モンゴル帝国史」と題して六冊本で完全な訳注本を刊行した。一九六八年三月から一九七九年十一月平凡社東洋文庫版がそれである。そこで佐口透氏の訳注を此処に追加する。第二篇第五章モンケの皇后オグル・ガイミシュの処刑の項である。「皇帝（モンケ）は一二五二年八月にカラコルムに赴き、先にその即位に反対していた諸王侯と諸王女の運命を決定した。皇后オグル・カイミシュは、新しい皇帝に忠誠を誓いに来るよう招きに来たカアンの使師に対し、モンケもその他の王侯も、ウゲディの子孫でなければ皇帝として認めないと誓約したのではないかと答えたが、モンケはとくにこの言に対して怒って、この皇后の両手を一つの革袋に入れて縫込んで、これを引き連れてこさせた。皇后が皇帝の營幕に到着すると、皇后はシレムンの母（注1カダカチ・カトンという）とともに、ソルコクタニの幕營地に移され、この地で大裁判官のモンケサルは皇后の衣服をことごとく剥いで裸とし、尋問に取りかかった。とはいえ、皇后は皇帝の外には誰れにも触れさせなかった身体を曝露させたと、憤然として彼を咎めた。両人とも妖術を使ってモンケの生命に危害を加えたとして、有罪と判決され毛氈に包まれて溺死の刑に処せられた。モンケの諸子は皇帝を承認しないようにと煽動したのは彼女たちであると明言していた。オグル・ガイミシュの顧問の中で主要な地位にあったカダクとチンカイは死刑に処せられたが、チンカイを殺したのはダーニシュマンド・ハーシブであった。」（前掲書二八八頁）」元史の鎮海傳にも暴逆死をもって刑されたことについては言及しない。

この古代中国の植民地の状況、位置に関してポターニンは、Tsastu-bogdo 山の近傍の何処かで、アルタイ河の東支流、北緯四六度四〇分の処と推定している。しかし乍らわたくしにとっても、山はさらに北方に位置しているように思われるのだけれども。）

七月廿五日（実は八月十四日に当るのだが）數多くの漢人たち、工匠や勞働者たちが、その倉頭に居住していたのだが、（注144と比較対照すべし）長春眞人らにまみえようと続々とつめかけた彼らは、ことごとく歓迎するのに有頂天となり、欣喜雀躍として出迎え、彼長春師の前に礼拝敬礼し、絢爛たる傘蓋や散花の華を供養したのだった。その地には亦金朝皇帝の二人の公主すなわち徒單（注145これらの妃公は成吉思汗によって燕京〔北京〕を囲んだ後に捕虜とせられていた人たち）、また中国人公妃の母親が、長春師に逢って感きわまり号泣した程であった。そして母なる人は長春師に次のように云うた。

〔本文〕鎮海來謁師、與之語曰、吾壽已高、以皇帝二詔丁寧、不免遠行數千里、方臨治下沙漠中、多不以耕耘、爲務喜見、此間秋稼已成。余欲於此過冬、以待鑾輿之回、何如。宣使曰、父師既有法旨、仲禄不敢可否、惟鎮海相公度之、公曰、近有敕、諸處官員如遇眞人、經過無得稽其行（監本無行字）程、蓋欲速見之也。父師若需於此、則罪在鎮海矣。願親從行、凡師之所用、敢不備。師曰、因縁如此、當卜日行。公曰、前有大山高峻、廣澤沮陷、非車行地、宜減車、從輕騎以進、用其言。留弟子宋道安輩九人、選地爲觀、人不召而至、壮者効其力、匠者効其技、富者施其財、聖堂方丈東厨西廡、左右雲房（無瓦皆土木）不一月落成。榜曰、栖霞觀。時穆黍在地、八月初霜降、居人促收麥、霜故也。大風傍北山西來、黄沙蔽天、不相物色。師以詩自嘆曰、某也東西南北人、從來失道走風塵、不堪白髪垂垂老、又踏黄沙遠遠巡、未死且令觀世界、殘生無分樂天真、四山五岳多游徧、八表飛騰後入神。八日攜門人虚静先生、趙九古輩十人、從以二車、蒙古驛騎二十餘。傍大山西行、宜使劉公鎮海相公、又百騎。李家奴鎮海從者也。因曰、前此山下、精截我脳後髪、我甚恐、鎮海亦云。乃滿國王、亦曾在

此、爲山精所惑、食以佳饌。師默而不答、西南約行三日、復東南過大山經大峽、中秋日抵金山東北、少駐復南行、其山高大深谷長坂、車不可行。三太子出軍、始闢其路。

〔口訳〕鎮海がやって来て師に拝謁されたので共に語って云われるのに、「わたくしは高令なのですが、皇帝が二度丁寧にも詔を下されたので、遠く遥に数千里を止むを得ずやって来たのです。貴方の治める所を拝見いたしますと、沙漠の中にあって多く田畑を耕せない所なのに、民が喜んで生活に精出して居るのが判ります。すでに秋の取入れも済んだようですから、わたくしも此処で冬を越したいと思いますし、皇帝の車駕が戻って来るのを待ちたいと思うがどうでしょうか」とあった。劉仲録の云うのに、「父師(あなたさま)に御考えがおありと存じますので、わたくしが敢て良悪しは申し上げられませぬ。唯鎮海様はどうお思いですか。」とあった。そこで鎮海公の云われるに、「近頃陛下の勅令がありまして、諸処の官員たちが、若し長春師の通行するのに遭ったなら、その行程を妨げるようなことがあってはならぬ。それは朕が速く師を褐見いたしたいからじゃ」との由でありました。父師(あなたさま)が若し此地の滞留をお求めになりますなら、その遅延の罪は鎮海わたくし奴にあるのです。出来ますれば御一緒に参り度いものですし、凡を師の所用とあれば何でも問合わせいたします。」と答えた。師の云われるのに、「因縁がこのようになっているのなら日を選んで進発しよう」と。鎮海公は次のように云われた。「前方に大山が高く聳え立ち、広い沼沢が泥濘となって居り、車で行けるような土地ではありませんので、車輛を減らし、軽快な馬で進むのが宜しう御座居ましょう」と。その進言を用いられた。一方弟子の宋道安ら九人を留めて、土地を選定して道観を建てることにした。土地の人を召集しないのに元気な者たちがやって来て、その体力に物を云わせて働き、職人たちはその技術を駆使し、金持ち達はその富眦を提供した。聖堂、方丈・東西の厨房、左右の多くの宿房〔注瓦がなかったので木と泥とで造った〕が一月かからずに落成した。その榜額に栖霞観と名付けた。その時分に高稜(こうりゃん)や黍が実をつけていたが、八月初めに霜が降ったので住民た

ちは急いで麥の収穫に励んだが、それも霜のためだった。大風が北山の方から西に吹起り、黄沙が天を覆って物の色が判別できない程であったので、長春師は詩でもって自ら歎げかれたが、その詩は

其也東西南北人　吾は四方を巡る流浪の人
從来失道走風塵　これ道風に吹かれてさ迷い歩き
不堪白髪垂垂老　毳毳よぼよぼ白髪で一杯
又踏黄沙遠遠巡　遥ばる黄沙の吹くなか歩き
未死且令観世界　それでも死なずに世界を樂しみ
残生無分樂天真　余生あっても樂天真理を悟るなく
四山五岳多遊編　あちこち山々経巡る度に
八表飛騰後入神　世界隈なく飛歩けばきっと遷道に這入れようよ

八日に門人の虚静先生、趙九古などの十人を連らねて、二輛の車を從えて蒙古の駅伝の馬二十餘騎をもって出発した。大山の傍を通り西方に向うと、劉仲録と鎮海の二公と百騎の從者が李家奴に率いられていた。そこで李家奴の云うのに「この前に大山下に精霊がいて、わたしの頭の後髪を切ったので大変恐ろしう御座居ました。」と。すると鎮海が亦云うことに。「乃滿国王が此の地に居られたのですが、山の精霊の爲めに惑わされたことがありました。精霊に御馳走を供養しては如何ですか。」と。所が長春師は黙殺されて答えられなかった。西南に向って行くこと約三日行程で、亦東南に向い大山を過ぎ大きな峡谷を経て、中秋の日に金山の東北に到り暫く駐留した後に、亦南に向いその金山を通った。非常に高く聳え深い谷と長い坂道があるので車は行くことができなかった。第三の太子（オゴタイ汗）が軍隊を派遣して始めてその難道を開墾修理した。

〔王観堂先生注〕元史宗室世系表　太祖皇帝六子　次三太宗皇帝　〔郎案　百納本「元史」一百七表巻第二宗室

世系表「太祖皇帝に六人の子あり、長子を朮赤太子、次の二男は察合台太子、次の三男は太宗皇帝、次の四男は施雷即ち睿宗云々」と。「元史」本記巻第二の太宗紀によると、「太宗英文皇帝諱窩闊台（オゴタイ）、太祖の第三の子、母は光獻皇后孔吉利氏、太祖が金を征伐し西域を平定した際に、攻城略地の功績に多大に貢献した。太祖が崩御すると霍博の地から戻って来て葬式に参加した」とある。」

〔口訳〕元史の宗室世系によると、太祖皇帝に六子の息子たちがいたが、そのなかの弟三子が太宗皇帝であるとある。

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕次の日に鎮海が阿不罕山の北側から到達した。〔注146明らかに元史一百二十、第七、鎮海列傳のなかにみえる阿魯歡と全く同一の山を指している。（この点注記144を併せて参照のこと。）吾々が後に見るように、この阿不罕山はイエニセイ河の南東方向約百里許りの処に位置していたことがわかる。この点注262を参照のこと、〔郎案、この(Kemken-diut)儉儉州についてのシュナイダー氏の注記262を引用すべし。即ち「この儉儉州は、ラシッド・ウッ・ディーンにより、キルギス人の支配地に隣接した処と記述されているKemkemdjutであること疑いない。（尚ドーソン蒙古史第一冊一〇三を参照＝田中萃一郎訳、蒙古史上巻p.140「成吉思汗は一二一七年に子朮赤（ジューチ）をして一軍に將として之に向って進ましめしに、朮赤は氷を踏みて倔倔助特（ケムケムデュート）河を渡り乞児吉思（キルギス）部を征服して師を班せり」と。）この倔倔助特Kemkemdjutはイエニセイ河上流に位置する支流とするのである。今日においても尚、イエニセイ河に沿うて居住している種族たちは、それをkem倔と呼んでおり、河を意味するKemをそのまゝ用いている。その本流はUlu-kem（大河）と呼ばれていて、その支流の一つがkem-chik（小河）である。小河の河口には依然として、kemkemdjikとして知られる場所がある。このkemkemdjikは元史のなかに儉州の名の元に記載せられている。〔郎案、此処に、「元史譯文證補」巻二十六、地理志西北地附録釋地下のなかの、吉利吉思撼合納謙州益蘭州等處、に出づる文を引用せん。「故水道堤綱、

作華克穆河、別作克木、亦作客木、烏魯克姆河西南行將及二百里、轉而西北行七百餘里、貝克姆河、自東北來會。提綱作貝克穆河、兩河合而西北行四百餘里、西南之克姆池克河、曲折流東北六百餘里、而來會。提綱作克穆、齊克二河會流處地、名克姆克姆池、克提綱作克穆、克穆齊克、上克姆、指東之克姆河、下爲西河之名、克字爲語尾助詞、可不讀合、音読之音似肯、肯池。元西域史備戴其地、音似肯、肯助詞、即謙、謙州之所由來也。俄羅斯、既稱哈薩克、爲乞児吉思、又稱爲肯助、特猶言謙州。特一則部名、一則水名、特爲衆之統詞。元史或省文、但曰謙州以河爲名。史言至當。此三大源、皆在中國界上、自此全河正北行、入俄羅斯界、不三百里、而河流加廣爲俄之葉尼賽河、遂無克姆之稱、曲折而北先西北、継東北千數百里…」と。〕

〔口訳〕故に水道提綱〔郎案「中國叢書綜録」2子目　史部地理類水總志　水道提綱二十八巻、（清）齊召南撰四庫全書史部地理類とある〕に華克穆河に作り、別に克木、客木に作る。烏魯克姆河西南行くこと將に二百里、転じて西北行くこと七百余里、西南の克姆池克河曲折して東北に流れること六百余里にて来り会す。提綱の克穆・齊克の二河会流する所の地名の克は克姆・克姆池、提綱の克穆に作っている。克穆、齊克、上に掲げた克姆で、東の克姆河を指す、下って西河の名となる。克字は語尾助詞で合と読むことができない。音で読むと音は肯に似て肯池である。元の西域史に備(つぶさ)にその地を載せている。音は肯、肯は助詞で、即ち謙州に当る所である。俄羅斯(ロシア)は既に哈薩克を稱して乞児吉思とする。又稱して肯助とする。特に猶謙州について云うと、一は部族名、一は河水の名で、特に物の集る統合を示す詞である。元史が或いは文章を省略して、但謙州は河をもって呼んでいる。元史の云うのは正当である。この三大水源に当る所が皆中国国境帯上にあって、此処から全部眞北に流れて、ロシア界に三百里ならずして入る。河流が広くなってロシア語のイエニセイ河で、遂に克姆の稱はなくなる。河は曲折して北に続いで先ず西北、次いで東北数百里に及ぶ…」

（ブレットシュナイダー氏の注262の項の続き）その元史巻六十三のなかにも Kilkizz（吉利吉思）人びとについ

て触れた記述があり、そのなかで、キルギス人たちの領土の南東部にを構成している謙州が、その名稱を謙河に由来していると言及されているのがみられる。〔郎案　百納本「元史」六十三　志巻第十五地理志六　吉利吉思思撼合納謙州益蘭州等處〔注記　吉利吉思は初め漢地女四十人と烏斯の男と、結婚したその義をとって名前とした。その地は大都の南去ること万余里。相伝えて云う、乃滿部が初めて此処に居住した由。元朝時代になってその民口を算えた所九千戸あり、この境は長さ一千四百里広さはその半の七百里ある。謙河がその地の中を流れ、西北に向いまた西南に行くと阿浦と云う河湖があり、東北に行くと玉須の河があって、どちらも巨大な湿地帯となっている。謙河は合流して於昴可利海に注いで、北に向って北海に入る。習俗は諸国と異なり、その語は同じ畏吾児語を話す。廬帳に生活し水草を逐って牧畜するが、また田畑耕作もよく知られている。雪に遇うと木馬（馬ぞり）に乗って猟をする。土地は名馬を産出する〕この河川については繰り返えし「元史」のなかに記載されている。その名前は特に亦 Kien 肯とも書かれている。全く同じ名前（というのは Kien は亦 kim 金と古代には発音されたらしいが）により紀元七世紀に中国人により、イエニセイ河上流域として知られていたのである。唐代の歴史はキルギス人の先祖た紇戛斯（黠戛斯）、に就いての長文に渉る記載がある。〔郎案、「新唐書」回紇伝は巻一百四十二、上下の巻に渉る記載あり、白鳥庫吉先生の「塞外民族考」の記述、（全集第四巻所收）の「塞外民族」三土耳古族、7、黠戛斯についての項目を抄記すべし。即ち「漢時代に堅昆といふ民族が、今のエニセイ河の上流に記録されている。黠戛斯はその苗裔と言はれてゐる。早くより、常に匈奴、蠕蠕、突厥、烏揭などの北方に遊牧せる民族として支那側に知れてゐた。他の史籍には結骨、契骨などと写され、唐代に於ては黠戛斯、紇扢斯、元代には乞力吉思、乞児吉思と書かれ、突厥碑文には Kirkis（勿論突厥文字で書かれたるを羅馬字に翻音したもの）と発音されてゐる。西紀第七世紀の中葉、東突厥の瓦解後、唐の羈縻州となり堅昆都護府の管轄となった。九世紀の中頃、回鶻の突厥に代ってその極盛時となるや、

その隷下に服し、八四一年回鶻の本據カラバルガズン（烏特鞬山）を衝いて、その可汗を殺して、これに代ってその地を領した。後十三世紀に蒙古大帝国の起るに及んで、西方に逐われ、今日の如く中亜の曠野に蔓延するの基に開いたものである。

『唐書』の記すところによれば、黠戛斯の面貌には、突厥、回鶻と異る点がある。即ち赤髪、皙面、緑瞳であるといふのである。クラプロート氏は、それゆゑか黠戛斯語を土耳古語で説きながら、これを土耳古種族の中に納れてゐない。却ってアーリア種の中に數へてゐる。而してこれを説明して、黠戛斯は印度ゲルマン種なれども、突厥種の中に混住したため、その本来の言語を捨てて、突厥語を用ゐたのであらうと言ってゐる。この民族に就いて、例の突厥碑文の中に Kirkis とあって、當時突厥にあっても、これを外國の中に數へてゐることは、注意すべきことであらう。然ればこそ黠戛斯は、本来の純粋の土耳古族ではないとの説も成り立ち、またこれをウラル語族のフィン種であると説く学者もある。更にまた土耳古にサモエード種、エニセイ種の混じった雑種だとする学者もある。余輩の研究によれば、フィンウグール系を骨子とする民族が、深くトルコナィズ（土耳古化）されたものであると結論して、大した間違ひはなからうと考へる。

この民族は冶金術に長じ、金・錫・鐵等を産出し、殊に製鐵術に長じ、盛に突厥に良鐵を輸入してゐたと言はれてゐる。かやうに突厥との交渉が頻繁であった為に、文化もこの影響を受けてゐたことは言ふ迄もない。近時エニセイ上流河畔より、発見されたる所謂エニセイ碑文は、七世紀頃黠戛斯人が突厥より、前掲の突厥文字を輸入して刻文したものであることが明らかである。」（p.520～521）と。〕そして元史によれば全く同じ土地に居住していたので儉（謙）河についても注記されている。また他の物産の間にあり、このキルギスの地には小麦、裸麦、大麦が産出し、住民たちはきまって税として黒狐や栗鼠の毛皮を貢献していた由を述べてゐる。ユール大佐は中国人の云う紇戛斯とラシッドの Kemkemdjut とを、マルコーポーロ紀行中に見える Chingintalas

（ユール・コルディェの「マルコ・ポーロ紀行」考注、第一巻p.214、第二巻p.538－〔郎案、このユール・コルディエ本の注記を抄記すべし、先ず第一巻、二一四頁の注一に「このチンギンタラス地方を何処に比定するかは困難である。というのは地理学的に比定することが、そもそも漠然としていて、個々に標示された名前が他の旅行者の記述のなかで辿られ得ないのであるから。北西と北との方向の間に存在するといっているが、一方 Komul は北西の方向にと述べていたりする。このマルコポーロの現在の章の最後の言葉が明らかに示しているように、この両地方についての記述は本題から外れているし、またそこでは旅行者は〝北東と東方の間に方向を定めて〟自らの旅程を普通の道に戻している。本道から外れた地点と、旅行者が元に戻った地点は沙州であり、その本道を外れた主要原因を構成した二つの地域に関して、本題を外れたのも沙州からであったと思われる。さて、Kamul が「西の方向へ」すなわち、北西に位置するとし、Chingintalas が「北北西へ向って」北北西にとったとしているが、Chingintala は、M.Pautier パウティエが置いたように Kamul の正しく西に位置して、ウルムチ地区の Saiyintala 呼ばれる漠然とした場所に比定されているようだ。更に亦、この地方は大汗の統治下にあるとも云われている。さて、今やウルムチ、即ち Bishbalik は大汗にではなくてチャガタイ窩潤台帝国に属していたらしく思われる。さらにはこの時期には Kaidu（海都）に属していたのかも知れない。Kaan（汗）と Kaidu の間の境界域に就いて言及している Rashid-ud-din ラシッド・ウッ・ディーンは次のように言っている－地点から地点に血のつながった王子たち、ないしは他の將軍の命令治下に軍隊が配置されていて、そこで彼らは屢々、カイドゥの軍隊に一撃を加えにやって来た程だった。これらの地点の五ケ所は沙漠の縁辺に駐屯させられていた。そして第六番目の地点こそ Chagan-nor（白い湖）の近くの西夏 Tangut にあった。さらに第七番目の地点はウィグル回鶻人たちの都市である。それは Kara-khoja であり、二つの联邦の間に在って中立を保持していたのである。

この名稱について中立都市 Kara-khoja はトルファンの近くにあり、ウルムチの南東部に当るので、汗 kaan の領域外にあったことになる。一方 Kamul とその北東に位置する地方は Kaan の領域内に位置しているようだ。Kamul の北方ないし北東に当るこの地方は、最近まで全く現代旅行者たちの足の踏み込まなかったままに残されていた所なので、例えばアトキンソン氏の幾分朦朧とした話に信用を置く以外何もない。併し此処でわたしくは Chingintalas に探りを入れてみよう。この Chingintalas という名前についての幾つかの可能な限りの説明は、それ自ら示唆するところがあり、乃至はわたくしに示唆するところがあるように思われる。わたくしはその二つを述べてみよう。

1 Klaproth クラプロートは、蒙古人がチベットに対して Baron-tala －右手、右側を意味する命名を与へ、云ってみれば南西ないしは南部を示し、一方において蒙古地方を Dzöhn（ないし Dzegun）－tala すなわち左手、左側、北東部を指す言葉で呼ばれていたと指摘している。そのため、恐らく Chigin-talas はそれに似た表現の Dzegun-talas を示しているらしい。Dzungaria ズンガリーの語源は、近代において吾々が言及している地域を覆う一体の名前と非常によく似ている名前である。

2 Vambery ヴァンベリィ教授は Chingin-tala は恐らく「巨大な平野部」だろうと考えている。併し乍らこの名前の適用が、歴史的な証據以外全く満足すべき場合なぞ何もないのである。

わたくしはこの Chingintalas の比定を規めることなく放置していた。併しマルコ・ポーロによって、所謂地域の一般に考えられる位置を指摘できるのだけれども、Tangnu Ola 山脈の近傍によって示される地点でもある（p.215）。道教神仙長春眞人の「西遊記」中の條りに、それは Dr.Bretschneider（Chinese Recoder and Miss. Journ. Shanghai, Sept-Oct 1874. p.258）ブレッドシュナイダー博士の訳文により Rashdi-ud-din. ラシドウッディーンの云う Kém-kém-jut がそれに当るようで、この長春眞人により儉々州と呼ばれた所こそ概然

性が強いようにわたくしに示唆されたのだった。このラシッドウッディーンはキルギスの地域を Kemkemjut と複合させていて、しかも或る確実さでそのいずれをも含包する地方だとしている。即ち「一方の側に（南東方向？）蒙古の国々が連接していて、第二の側（北東方向？）はセレンガ河と境を接していた。第三の側（それは北側なのだが）〝アンガラ河と呼ばれる大河〟により接していた。このアンガラ河は Ibir-Sibir（シベリアの）合流点に向って流れている。そして第四の側は Naimans ナイマン人の領域により接している。この偉大な地域は多く小市町村を含んでいて同じく多くの遊牧民も含んでいる」と。ブレッドシュナイダー博士による長春眞人西遊記には、その国を良鉄資源の発見された地方と云ひ、その地は（灰色の）栗鼠がたくさんいて、小麦も栽培されていたと云う。彼により注記された他の記事は、この地方がキルギス国の南東に位置していることを示し、その名前も儉（謙）、すなわち Kem（イエニセイ河上流域）から由来している。この儉々（謙々）という名前は、一般的な表示として、良鉄（鋼と Ondanique〔未詳〕の存在を示し、吾々がこうした表示から僅かしか探しだされない地点に、多くの都市村落があったのであり、「マルコ・ポーロ紀行」の本文の Chingintalas と、この地方とを同一とする全ての点を含んでいる。唯一の関联が旅行地図№Ⅳのなかに探られると、Hinkin, or Ghinghin（地理図本文のなかにそれがあるが）と綴られた地名があり、北方に非常にわづかながら偏している。（Kovalevski's Mongol Dict.NO.2134 を参照、また Baron-tala, etc. は Della Penna, Breve Notizia, del Regno del Tuibet,「チベット地域についての短い記録・書字による」Klaproth クラフロートの注記 p.6., D'Avezac p568.; Relation prefixed to D'Anville's Atlas p.11,; Alphabetum Tibetanum「チベット字彙」454; Kircher, China Illustrata, p.65等を参照のこと）

初版が刊行せられた後にNey Eliasエリアス氏が問題の地域を東から西に旅行したのだった。そのため、わたくしは彼から Kobdo コブドに於いて彼が蒙古人たちの間で、この町を最も普通な名前で呼んでいるのを知っ

た由教示された。蒙古人もカルマック人もロシア人もSANKIN-hotoであるという。彼エリアス氏はこの名前がChingin-talasと関联があるとは当時考えなかった。そのためその名前の起源について、乃至はその適用の範囲についての何らの知識も持っていなかった。併し、彼は「マルコ・ポーロの紀行」中に、北と北西の間を呼んだ名前に覚えていて、若しもそれがKamulからの方向であると理解したなら、確かにKobdoを指すだろうと考えたのだった。彼は亦、Sankin-dalai湖に注意を払い、それはUlias,taiの北東に位置して、アトキンソン氏もその地を略図で残している。この名前が非常に広い範囲にわたり、ポーロの云うChingin-talasと何らかの関联を持っているかに見える。併し乍ら吾々はつねに探査の光明が照らされるのを待たなくてはなるまい。

〔マルコ・ポーロ、コルディエ注記〕「さて、マルコ・ポーロが沙州から粛州への道すがら、この場所について記述しているのを勘案してみると、この場所がChi-Kin-Talas. すなわちChi-kin平原ないし渓谷であると考えるのは自然であろう。というのはChi-kinは湖の名であったし、今でもそう呼ばれていて、湖からその名前をとったこの湖の溢路に属しているからである。後者はKia-yü kwarm（嘉峪関）からAuri（鄂里）州の道すがらにある（パラディウス・前掲書・七頁）Chikinもっと正確に云えばChiginは、耳を意味する蒙古語であるという（前掲書）。パラディウスは八頁の所で付け加えて云う・Chi-kinについての中国人の言及は、全く同じ主題についてのマルコ・ポーロにより与えられた陳述と違っているわけではないと。併しながらその距離が考慮された場合に微妙な差異があるのである。このChi-kinは沙州から二百五、六十里はなれているというが、併し一方でマルコ・ポーロの陳述によれば、この間を横切るのには十日を要すると云っている。この不一致についての三つの以下述べる説明の一つは、考慮されなくてはならない。Chingintalesは Chi-kinでないか、またはその旅行者の記憶の誤りであるか、最後の一つは日数による旅程の数の間違いかのいずれかで

ある。最後の二つの推定にわたくしいもっとも有りうることだと考えている。似たような困難な問題はマルコ・ポーロの話のなかに度々ある程多い問題なのだ。」―アンリコルディエ注）終りに当ってわたくしはイエニセイ河上流にある森林が依然として黒貂や栗鼠か沢山生息していることを付け加えたい。」（未完）

あとがき

王國維静安先生の校訂補注本の拙訳が、こうして国際佛教学大学院大学の研究叢書の一冊として、陽の目をみることが出来たのも、誠に僥倖としか云いようがない、全訳稿の約七分の一が当るのだけれども。この訳稿を起したのもわたくしが未だ東京国立博物館の東洋考古室に勤めていた頃で、正確な年次歳月を詳にすることができないが、遙か二十年以上遡ることは間違いない。元来漢文嗜読の業は正規には東大大学中に、倉石武四郎先生の「唐詩選講読」に参加した位で、殆んど素人の域を脱していない。勿論、日本の六国史の考注に、中国の廿四史、それも百衲本を座右に、また朝鮮の「三國史記」「三國遺事」「高麗史」「高麗史節要」を嗜読していたから、門前の小僧ならぬ習わぬ経を読んで来た。それに聊かの文学趣味もあって、唐詩、宋詞、元詩詞の諸集を繙き、或いは佐藤春夫の「車塵集」の顰みに倣って邦語に訳したりしたこともあった。魯迅の弟周作人氏の著作も頗る愛唱している。これらは自らの趣味嗜好に阿るの業であるが、日々業余の暇に楽しみながら嗜読してきたことも事実である。

すでに序の所でこの「長春眞人西遊記」に注目した経緯に触れたが、わたくしの考證癖はかなり以前から萌胎して、樋口一葉女史の「たけくらべ」の語彙、吉原風俗を探ったこともあり、西鶴や柳樽の考注を志したこともある。それが昂じて、元朝の「西遊記」に及んだと云ったら、人は嗤嘲するに違いない。江上波夫先生が、このことを惻聞するや、君も到頭蒙古が面白くなったか、次は満洲族に行くに違いないと洪笑揶揄されたことがあった。既に岩村忍氏の訳注があるので参照したのも当然であるが、わたくしなりの訳文と考注を、王國維先生の底本を基に、ブレットシュナイダー氏の訳注を克明に参酌してみた。多くの誤読謬見があると思われるのでこの機会に碩学、篤学の士の吒正を切に賜りたい。頽令晩年の黄昏の期に到りて若年の砌の業が一部でも、陽の目を見ることは頗る嬉しく有難いことに思う。「一寸の光陰軽んずべからず」の一句はわたくしのこの業にとって正に

至言であり適合している。
煩雑な注記を印刷してくれた大学当局の人々にも厚く感謝の意を表したい。

合掌

辛巳歳次十月中浣
於眩人学堂識
杉山　二郎

平成十四年一月三十一日　印刷
平成十四年二月　五日　発行

王観堂静安先生　校注本
長春眞人　西遊記

著　者　杉山　二郎
発行者　原　實
発行所　〒一〇五－〇〇〇一
東京都港区虎ノ門五－二－二十三
国際仏教学大学院大学
電話（〇三）三四三四－六九五三
印刷所　〒一〇一－〇〇四七
東京都千代田区内神田二－八－二
富士リプロ株式会社

ISBN4－901758－00－4